佐伯有義校訂標注

増補 六國史 巻八

朝日新聞社藏版

装畫・・田中咄哉州

文德實錄

日本文德天皇實錄

解說

一、書名

本書は、文德天皇御一代の實錄にて、嘉祥三年三月より天安二年八月に至るまで、九箇年間の事を、前史の體に倣ひて編修せり。之を日本文德天皇實錄と名づけたることは、序文に、起レ自ニ嘉祥三年三月己亥一、訖ニ于天安二年八月乙卯一、都盧九年、勒成ニ十卷一云云、曰ニ日本文德天皇實錄一と見ゆ。日本の二字を冠らしめしは贅文なるが如く見ゆれど、日本書紀以下・續日本紀・日本後紀・續日本後紀等、いづれも日本の二字を冠らしめし故に、其の前例に據れるものにて、徒に奇を好めるにはあらず。

二、編修

本書編修の沿革を考ふるに、序文に記す所に據れば、清和天皇貞觀十三年右大臣藤原基經、中納言南淵年名、參議大江音人、大外記善淵愛成、少外記都良香、散位嶋田良臣

等に詔して、撰修せしめ給ひ、其後八年を經、元慶三年十二月功成りて上奏すとあり、然るに此に疑はしきは、十三年の三の字なり。之を十三年とすれば、撰者の官位合はざるものあり。其は基經の右大臣に任ぜられしは、十四年八月廿五日、從二位に進みしは十五年正月にて、十三年には正三位大納言なり。年名も從三位に進みしは、同じく十四年八月廿五日にて、十三年には正四位下なりき。次に都良香の舊名言道と云ひしを良香と改めしは、十四年五月なるが、版本には言道とあれど、閣本・前本・藤本等にはいづれも良香とあり。是も十五年とすれば、閣本以下古寫本のまゝにてよく合へり。又序文に據₂舊史氏₁始就₂撰修₁、三四年來、編錄疎略、適屬₂揖讓₁、刀筆暫休とあるは、淸和天皇の陽成天皇に御讓位あらせられ、御代改まりし爲に、編修の事も暫く中止せられしことを述べたるものなるが、若し十三年ならむには、三四年以來編錄とあるに合はず、必ず五六年とあるべきなり。然るに三四年とあるは、是も亦十五年なりし一證とすべし。されば、十三年とあるは恐らくは十五年の誤なるべし。斯くて陽成天皇御卽位の後、年名は其の年卽ち元慶元年四月八日に薨じ、音人も亦同年十一月三日に薨ぜしかば、翌二年更に攝政右大臣基經に勅して、參議菅原是善をして、大內記都良香、大外記嶋田良臣等と共に、編修の事に當らしめ給ひ、良香專ら編修に思を潭

め、速に成功せしめむと勉めたりしが、翌三年二月廿五日に卒去せり。因りて殘存せる人々、特に精力を盡して事に當り、三年十一月十三日功成りて上奏せり。此の上奏の年月、版本には元慶二年十二月十三日とあれど、閣本以下諸本には何れも三年十一月とあれば之に從ふべし。此の年月の異同に就きて、岡本保孝氏の攷文に、按に兩書(釋紀と拾芥抄なり)上奏差一年、未詳孰是、撿三代實錄、不載進呈之事、類聚國史載序文云元慶三年十一月十三日、與釋紀合、實錄序、與拾芥抄同、而序文載都良香卒、則三年爲是也、都良香元慶三年二月卒、見三代實錄卷卅五、可以證、とあり。此の說の如く良香卒去の事、序文に見ゆれば、當時は未だ完成せざりしこと明かにて、本史編修功成り上奏せしは、三年十一月なること疑ひなし。然るに私記に、玄道按、二年所奏蓋係草本、而翌年獻其正本也、斯類不一而足、とあれど、之を二年十二月とすれば序文と合はず、故に採らず。

三、撰者

本史の勅撰に關係せしは、

右大臣　藤原朝臣基經

中納言　南淵朝臣年名
參　議　大江朝臣音人
同　　　菅原朝臣是善
大外記　善淵朝臣愛成
大內記　都　宿禰良香
大外記　嶋田朝臣良臣

以上の人々なるが、參議以上の顯職にありし人々は、國史に傳記明かなれば、煩しく此に記さず。其の他の人々に就きて略歷を述べむに、

善淵朝臣愛成は、大學博士永貞の弟なり。本姓は六人部、火明命の後なり。善淵朝臣の姓を賜はりしことは、清和紀に、貞觀四年五月十三日庚辰、美濃國厚見郡人外從五位下行助教六人部永貞、讃岐少目從七位上六人部愛成、散位從七位下六人部行直等三人、賜姓善淵朝臣、天孫火明命後、少神積命之裔孫、與伊豫部連、次田連等同祖也と見えたり。外記補任に據るに、讃岐少目に任ぜられしは貞觀二年二月なり。同年三月大學大屬を兼ね、同四年二月少外記に轉ず。同十年正月正六位上より外從五位下に進み、同月大外記に任ず。十四年六月播磨大掾を兼ね、十六年正月山城權介に轉ず。大學

助教、圖書頭、伊豫介等を歷任し、元慶八年十一月從五位上に叙し、仁和二年正月大學博士と爲る。歿年詳ならず。貞觀十七年四月天皇群書治要を讀ませ給ふ時都講となり、元慶二年二月より同六年に亘り、愛成に勅して日本紀を讀ましめ給ひ、六年八月竟宴あり特に物を賜ふ。當時國史に於いて大に尊重せられしこと推して知るべし。

都良香、初の名は言道、祖父桑原秋成、父は貞繼といふ。弘仁中兄腹赤と共に請ひて姓を都宿禰と改む。從五位下に叙し、主計頭に任ぜらる。腹赤亦文藻あり、才名當時に著れ、正五位下に叙し、文章博士に任ず。良香は博聞强記にして文を善くし、弱冠大學に入り、對策及第聲譽益々著る。貞觀十三年十月、是より先正六位上に叙し、少內記に任ず。十四年四月掌渤海客使を命ぜられ、五月奏して姓名相配、其義乃美、若非佳令、何示遠人、望請改名良香、と言ひ、言道を改めて良香とす。十五年正月從五位下に叙し、(三代實錄に貞觀十五年正月七日癸酉菅原是善叙位の事見え、其の下に三十九人の名を略せり、蓋し此の中にありしなるべし、今推して此の時とす、尙ほ能く考ふべし)大內記と爲る、十七年二月文章博士と爲り、大內記故の如し。十八年越前守を兼ね、(月日詳ならず、蓋正月十四日棟貞王を神祇伯とせられし時なるべし)元慶元年十二月姓朝臣を賜ひ、三年二月廿五日卒す。時に年四十六。文集六卷あり、都氏文集と云ふ。良香

の本史編修に專ら力を用ひしことは、序文にてもよく知らるゝが、拾芥抄に、文德實錄十卷右大臣基經等上、實都良香撰といひ、二中歷にも、文德天皇自₂嘉祥三年₁至₂天安二年₁、右大臣基經奉勅、實都良香撰之とあるにても、主として其の事に當りしを知るべし。然るに此の書未だ完成せざるに先だちて歿したるは、實に惜しむべし。

嶋田良臣は、其の祖は神八井耳命に出づ。貞觀十五年正月、是より先加賀掾に任せられ、此に至りて少外記に任ず。時に年四十二。翌十六年正月大外記に轉じ、十八年正月從五位下に叙し、元慶五年二月加賀介と爲る。元慶二年二月都良香をして日本紀を讀ましめ給ひし時、良臣を都講と爲し給ひ、六年八月竟宴の時特に物を賜ふ。

四、異本

本書の寫本は數種あれど、いづれも永正十二年の寫本を原本とせるものにて、此より古きものは見えず。永正の寫本は、前内大臣藤原實隆公卜部家の寫本を借りて寫されしものにて、永正十二年は、實隆公六十二歲の時なり。此の以外に古寫本の存せしことは、花園院天皇宸記に、元亨二年十月十九日癸未、此日自₂院御方₁給₂續日本後紀文德實錄等₁と見え、後醍醐天皇元亨の頃には、宮中にも古寫本のありしこと明かな

るが、其の以後の動亂に紛失し或は火災などに罹りしならむ。若し永正の頃宮中に尙ほ存したらむには、必ず之を拜借して寫さるべきに、其の事なかりしに依れば、宮中の御文庫には存せざりしなるべし。諸本の奥書を撿するに、何れも永正十二年とあれば、同系の書のみなれど、此に現存する古寫本を擧ぐれば凡そ左の如し。

(一) 寫本

(一) 內閣本

慶長の寫本にて、現存する古寫本中の最良なるものなり。各卷の奥書を擧ぐれば左の如し。

卷一、永正十二年七月廿六日、以㆓兼滿朝臣本㆒書㆑之、病懶之老筆可㆑恥㆑之

卷二、抄出了　兼夏

　延文元年丙申六月日修補之　正四位上行神祇大副卜部兼豐

　永正十二年八月五日書寫了　判

卷三、本云、延文元年丙申六月日修補之　正四位上行神祇大副卜部兼豐

　本云、應長二年三月十九日抄出了　正四位下行神祇權大副卜部宿禰兼夏

永正十二年八月七日書寫了　御判

卷四、安貞三正十九書拔了

抄了　兼夏

延文元年丙申六月日修補之　正四位上行神祇大副卜部兼豐加一見了

應永十一四三　神祇大副兼敦

永正十二年八月九日書寫了　御判

卷五、本云、安貞三年二月二日於灯下書拔了　正議大夫卜　御判

正和元年三月廿一日抄出了　通請大夫卜　御判兼夏

一見了　兼敦

延文元年六月日修補之　正四位上行神祇大副卜部兼豐

永正十二年八月十三日書寫了　老槐散木　御判

卷六、延文元年丙申六月日修補之　正四位上行神祇大副卜部兼豐

永正十二年七月廿四日了

卷七、正和元年三月廿五日抄出了　通請大夫　判

延文元年六月日修補之　神祇大副卜部兼豐

永正十二年七月廿七日了

卷八、延文元年丙申六月日修補之　正四位上行神祇大副卜部兼豐

永正十三八九了

卷九、延文元年丙申六月日修補之　正四位上行神祇大副卜部兼豐

永正十二年八月十八日終功了

卷十、本云、校了

七月廿六日第一卷書了六日終一部功也

永正十二年八月十九日終書寫功了槐陰逃虚子　判

以上の奥書に據て考ふるに、實隆公が永正十二年七月二十六日より八月十九日まで二十餘日の間に謄寫せしめられしものなり。其の原本は卜部家所傳の本にて、兼夏・兼豐・兼敦等累代の奥書あるものなるが、此の永正の寫本は今三條西家に存せず。卜部本も存せずといふ。

(二) 圖書寮本　十卷三冊

書寫の年代詳ならず。卷一より二までを一冊、四より六までを一冊、七より十までを一冊とすること堀本に同じ。奥書は多少の異同あれど閣本に同じ。

(三)　尾張德川家本

奥書に據るに、內閣本と同系なり。內藤廣庭氏之を校合して專ら世に知らるゝに至れり。

(四)　前田家本　十卷二冊

書寫の年代詳ならざれど、寛永頃のものなるべし。以下中原本・谷森本・藤波本等行數(十三行)字數(廿九字詰)いづれも同一にして、極めて細字なり。三條西家の原本を見ざれど、蓋是と同型のものなるべし。先年六國史校合の際は、圖書寮にある前田家本の寫にて校合せしが、今回は侯爵家に請ひて、始めて原本を拜見し親しく之に就きて校合せり。

(五)　堀本　十卷三冊

舊堀杏菴氏の所藏に係り、毎冊の首に平安堀氏時習齋と刻せる朱印を捺せり。行數字數版本に同じ。下卷の末尾に、寛永十四年丁丑夏四月初六、於二武藏國江戸城下僑居一加二朱點一了、先レ是一紀於二洛陽一受二源亞相義直卿命一、官本加レ朱今以二官本一一校了とあり、氏名を書さゞれど、蓋堀氏の自筆なるべし。官本とは幕府慶長寫本を指せるかと思へど、之を對照するに同じからざるものあり。されば尾州家の本を指していへるか、此の

奥書に據るに、寛永十三年以前の寫本なること明かなり。井上賴圀翁の舊藏なりしが、現今無窮會の所有に歸す。

（六）中　原　本　　十卷二册

中原職忠の舊藏なりしが、谷森善臣翁の手に歸し、現今令息建男氏所藏せらる。奥書に職忠の自筆にて、此文德天皇實錄十卷兩册三條西殿前內府實條公以御所持之舊本、先年天台座主宮良恕入道親王俾寫之給、卽被遣天海大僧正之許、予亦致懇望、令書寫之畢、因爲備證本加愚言、尤至于後裔猥不可他見而已、寛永十五臘天中旬遂一校之功矣、散位大中大夫太府侍郞中原職忠誌之とあり。寛永十五年の寫本なること明かなり。

（七）谷　森　本　　十卷五册

中原本と同じく谷森善臣翁の舊藏にて、令息建男氏所藏せらる。體裁奥書等中原本と同じく、全く同一時代のものと思はる。　明治以前には堂上華族の家に所藏せしが、維新の際に書肆の手に入り、轉じて翁の所有に歸したるものなるべし。

（八）藤　波　本　　十卷二册

藤波子爵家の舊藏にて、予之を所藏す。前田本・中原本等同型の書なるが、奥書は卷六・七・八・九の四卷にのみありて、其の他にはなし。

卷五、　寛政八季六月十九日申尅再校畢苦熱難堪　季忠
卷七、　寛政八年六月廿五日再校畢　季忠
卷九、　寛政八季七月十六日再校畢　季忠
卷十、　寛政八丙辰年七月廿二日再校畢未可謂正本猶宜令改正而已　季忠
とあり。各卷共に朱を以て加筆せり。何本に據りて校合せられしか、原本の名を擧げられざるは遺憾なり。

（九）淀　本　十卷五册
舊淀藩稻葉子爵家の舊藏にて、現今神崎一作氏之を所藏せらる。所寫の年代詳ならざれど、體裁は內閣本・堀本に同じ。

（一〇）宮崎文庫本　十卷十册
舊宮崎文庫の所藏にて、現今神宮文庫の所藏に歸す。慶安四年の寫本なり。

（一一）河　村　本　十卷四册
書紀集解の著者河村秀根氏の舊藏にて、元亨利貞の四册とし、卷一より三までを元、四五の二卷を亨、六より八までを利、九十の二卷を貞とす。今名古屋市役所の所藏となる。

(三) 白雲本　十卷

狩谷校本に、寛政六年十一月以白雲書庫本一校とあり、白雲書庫は野間三竹氏の文庫なり。三竹は德川幕府の醫師なるが、禁裡附となりて京都にあり、延寶四年、六十九歲にて歿す。白雲本は同氏所藏の古鈔本なり。前田家本・谷森本等と極めてよく似たり。同種の書なるべし。

(二) 版本

(一) 寛文本　十卷

卷十の卷尾に寛文九年己酉仲春村上平樂等刊行とあり。寛文九年の出版に係る。何人の校訂せしか、跋文なければ知るに由なし。

(二) 寶永本　十卷

卷十の卷尾に、寶永六丑季春吉辰御書物屋出雲寺和泉掾とあり、寶永六年三月の出版に係る。後明和八年辛卯阿波源元寛、卷二嘉祥三年九月戊子條の缺文及己丑條の缺文三百二十字を補ひて挿入せり。

(三) 寛政本　十卷

卷十の卷尾に、天明八申歲燒失寬政八辰歲校訂新彫元章とあり、元章は林和泉掾なり。本書は寶永の版本を基礎とし、本文の上欄及其の傍に一々異同を校訂し、舊本に比すれば大に優れたり。何人が之を校訂せしかと云ふことは記されず、されど卷二元寬の識語に、文德實錄平安書林林元章家既梓之久矣、以其有脫簡、思願補刻、未能之獲、頃聞余藏有佳本、懇祈不已、因再校諸原本及菅公類聚國史等以授焉とあり。之に據れば卷二に加入せし三百二十字のみならず、全部に涉りて校訂を試みしにて、寬政本の校訂は同人の手に成りしなるべし。

(三) 校訂本

(一) 水戶本　十卷五册

元祿四年源光圀卿が校訂せられしものにて、體裁は他の國史に同じ。

(二) 狩谷望之校本　十卷五册

狩谷氏寶永六年版本を底本とし、寬政六年六月橋嘉樹藏本を以て校合し、且朱筆を以て私案を加へ、同年十一月白雲書庫本を以て更に一校し、文政六年癸未五月類聚國史を以て對讐せり。

(三)　**伴信友校本**

信友校本は、奥書に右十巻連々以二五異本一校合之、文化十二年正月廿一日於二平安官舍一伴信友書とあり。

(四)　**山崎知雄校本**

寶永六年版本を底本とし、狩谷校本の全部を轉寫し、岸本由豆流藏本を以て更に校合し、間々私案を加へたり。奥書に右奉二梅園翁命一以二狩谷氏校本一書寫(以二朱及墨一加二首書傍注一)又以二翁藏本一(以レ號二攷證閣一標二攷本一)弘化元年甲辰十二月十八日成功了山崎知雄とあり。

(五)　**黒川春村校本**

黒川校本は奥書に弘化二年乙巳三月上旬以二故細井倘阿所藏古鈔本一比校了春村とあり。

校訂標注日本文德天皇實錄

凡例

一、本書刊本には寛文本・寶永本及寛政本あり。就中寛政本稍〻勝れたるを以て、之を底本とし、左の諸本を以て校訂せり。(諸本の解題は解説の下に擧げたるを以て此には略す)

一、古寫本

		符號
一 內閣本 內閣文庫所藏	十卷	(閣本)
一 尾張本 尾張德川侯爵所藏	十卷	(尾本)
一 前田本 前田侯爵所藏	十卷	(前本)
一 堀本 無窮會神習文庫所藏	十卷	(堀本)
一 中原本 谷森建男氏所藏	十卷	(中本)
一 谷森本 同上	十卷	(谷本)

一　藤　波　本　予所藏　十卷　（藤　本）

一　淀　本　神崎一作氏所藏　十卷　（淀　本）

一　宮　崎　本　神宮文庫所藏　十卷　（宮　本）

一　白　雲　本　狩谷校本に據る　十卷　（白　本）

二、校合本

一　水　戸　校　訂　本　內閣文庫所藏　十卷　（水戸校本）

一　伴信友校合本　十卷　（伴　校　本）

一　狩谷棭齋校合本　無窮會神習文庫所藏　十卷　（狩谷校本）

一　山崎知雄校合本　同　上　十卷　（山崎校本）

一　黑川春村校合本　十卷　（黑川校本）

三、注釋書

一　文德天皇實錄私記　矢野玄道著　二卷　（私　記）

一　文德實錄成語考　足代弘訓著　二卷　（成　語　考）

二、前史及本史を通讀するに、月朔の干支は、事あれば之を擧ぐるも、事なければ擧げざるを例とす。故に原本又は諸本に見えざるものは、意を以て之を補はず。又正從上下を誤れるもの少からず、謄寫の際に誤れるもあるべく、撰者の誤れりと思はるゝものもあり。正を從とし上を下と誤れるが如きは常の事なれば、諸本に據り或は上下の文を考へて改めたれど、撰修當時より誤れりと思はるゝものは、其由を注して之を改めず。

三、本書の校訂に當りて、底本と校合し、或は參照したる諸書は、大略前史に同じ。故に此に之を略す。

昭和五年三月

佐伯有義識

【文德實錄序】此序は類史百四十七及菅家文草七に見ゆ
○因天度而叙憲章、天度は後漢書律暦志に日日行一度亦爲二天度一さ見え憲章は管子立政篇注に憲所三以察二時令一さあり因は原本用に作る諸本及類史に據て改む而は類史以に作る
○立日官而平暦數、日官は左傳桓十七年に天子有二日官一諸侯有二日御一日官居レ卿以底レ日禮也、注に底は平也さあり
○姬漢、姬は周の姓にて周さ漢さなり
○善惡呈理於掌中、善惡の理をば掌中に見るが如く明かならしむるを云
○齊梁之百所年、齊は南朝の齊にて梁も亦同じ百所年は百餘年さ云に同じ禮記檀弓下の注高四尺所の疏に所是不定之辭さあり
○昏明析云々、昏は冥也闇也さあり昏明は明暗に同じけれど此は明を主さす事の微細なる點まで眼前に明白に區別するを得るを云析は分也說文に

日本文德天皇實錄序

臣基經等、竊惟、自レ古人君王者、莫レ不下因二天度一而叙二憲章一、立二日官一而平中暦數上、故姬漢之千餘載、善惡呈二理於掌中一、齊梁之百所年、昏明析(ワカツ)二微於眼下一者也、伏惟、太上天皇、孝治有レ日、文思垂レ風、夢二想先皇之起居一、庶二幾聖主之言動一、去貞觀十三年、詔二右大臣從二位行左近衛大將臣藤原朝臣基經、中納言從三位行民部卿兼春宮坊大夫臣南淵朝臣年名、參議正四位下左大辨臣大江朝臣音人、外從五位下行大外記善淵朝臣愛成、正六位上行少内記都宿禰良香、散位正六位上嶋田朝臣良臣等數人、據二舊史氏一、始就二撰修一、三四年來、編錄疎略、適屬二揖讓一、刀筆暫休、今上陛(陽成)下、武子文

从斤破木とあり
○太上天皇、清和天皇
○孝治有日、孝經に昔者明王之以孝理天下也不敢遺小國之臣とあるに據れり有日は御卽位ありて久しきを云
○文思垂風、李善上文選注表に陛下經緯成德文思垂風とあるに據れり
○貞觀十三年、貞觀十三年紀に此事見えず此に記す基經年名等の官位及良香の氏名等を參考するに三は恐くは五の誤なるべし其理由は解說に詳述す
○從二位行左近衛大將、類史二を三に作る狩谷校本に一類史作三恐非と云り
○基經、右大臣に任ぜられしは貞觀十四年八月廿五日にて同日從三位より正三位に進み十五年正月七日從二位に進めり
○兼春宮坊大夫、兼字は行の上にあるべしと狩谷氏云り
○年名、三代實錄に據るに年名の中納言に任じ從三位に叙せられしは貞觀十四年八月廿五日なり
○音人、參議に任ぜられしは貞觀六年正月十六日

孫、重熙累洽、追尋前業、遂勸勤修、數月以降、大納言正三位臣年名、參議從三位左衛門督臣音人、天不慭遺、奄然下世、至元慶二年、更勅攝政右大臣臣基經、俾命參議刑部卿正四位下兼行勘解由長官近江守臣菅原朝臣是善等、與前修史者文章博士從五位下兼行大內記越前權介都朝臣良香、從五位下行大外記嶋田朝臣良臣等、專精實錄、潭思必書、良香慭斯文之晩成、忘彼命之早殞、注記隨手、亡去忽焉、臣等百倍筋力、參合精誠、銘肌不違、鞅掌從事、起自嘉祥三年三月己亥、訖于天安二年八月乙卯、都盧九年、勒成十卷、春秋繫事、鱗次不愆、動靜由衷、毛擧无失、唯細微、常語、麁小庶機、今之所撰、弃而略焉、名曰日本文德天皇實錄、取諸雖百世可知也、臣等生謝龍門、種非虎乳、殊恐謬缺文於聖訓、忝直筆於明時、謹詣天闕、奉進以聞、謹序、

にて正四位下に進みしは同八年三月廿三日、左大辨となりしは九年正月十二日なり
○愛成、大外記となりしは貞觀十年正月十六日
○良香、原本言道に作る閣本前本中本等に據て改む堀本及類史文草は原本に同じ此人元名言道なりしを良香と改めしは貞觀十四年五月七日なれば上文貞觀十三年の文字誤なくば言道とあるべきなり然るに三の字疑はしきに據て閣本以下諸本に據れり其理解說に見ゆ
○良臣、外記補任に據るに少外記となりしは貞觀十五年正月十三日なり然るに此に散位とあるに據れば勅命ありしは其より以前なりしなるべし
○舊史氏、文選西京賦に雅好二博古一學二乎舊史氏一とあり
○揖讓、尙書正義序に勳華揖讓而典謨起、湯武革命而誓誥興とあり禪讓を云淸和天皇の陽成天皇に御讓位ありしは貞觀十八年十一月廿九日なり
○刀筆、後漢書劉盆子傳に出二刀筆一書レ謁欲レ賀、注

元慶三年十一月十三日

右大臣正二位臣藤原朝臣基經

參議刑部卿正四位下兼行勘解由長官近江守臣菅原朝臣是善

從五位下行大外記臣嶋田朝臣良臣

に古者記事書於簡冊謬語者以刀削而除之故曰刀筆とあり。○武子文孫、尚書立政に文子文孫、傳に文王之子孫とあるに據れり　○重熙累洽、文選東都賦に至於永平之際重熙而累洽、注に熙光明也洽合也とあり　○逾勸勤修、勤は原本勸に作る諸本に據て改む　○年名、元慶元年四月八日薨年七十六　○音人、同年十一月三日薨年六十七　○天不慭遺、左傳哀十六年に孔丘卒公誄之曰旻天不弔不慭遺一老とあるに出づ　○元慶二年更勅、更に勅ありし月日は詳ならず　○良香、少内記より大内記に進みしは貞觀十五年正月、宿禰を改て朝臣を賜はりしは元慶元年十二月辛卯なり　○從五位下行大外記、行字は中本前本谷本及類史文草に據て補ふ良臣の少外記より大外記に進みしは貞觀十六年正月、從五位下となりしは同十八年正月なり　○實錄、魏志王肅傳に司馬遷記事不虛美不隱惡云々敍事有良史之才謂之實錄とあり　○潭思、漢書揚雄傳に潭思渾天、注に潭深也とあり　○亡去忽焉、良香の元慶三年二月乙酉此書の完成せざるに先ちて卒せるを云、亡は原本已に作る類史文草(閣本)に據て改む　○銘肌、文選上責躬表に刻肌刻骨、注に孝經鉤命決曰削肌刻骨挈挈勤思とあり　○執掌、毛詩小雅北山章に或王事鞅掌、箋に鞅猶何謂捧之也負何捧持以趨走言促遽也とあり　○都盧、總べてなり白居易詩に骨肉都盧无一口糧儲依約有三年、菅家文草七鴻臚贈答詩序に首尾五十八首更加江郎中一篇都盧五十九首とあり盧は藤本及類史慮に作る　○繫事、杜預左傳序に記事者以事繫日以日繫月以月繫時以時繫年所以紀遠近別同異也とあり　○鱗次不愆、文選勵志詩に四氣鱗次、注に鱗次は如魚鱗之相次とあり順序を愆らざるを云　○毛擧、漢書刑法志注に毛擧言擧豪毛之事輕小之甚とあり　○雖百世可知、論語爲政篇に其或繼周者雖百世可知也とあり　○龍門、司馬遷を云史記太史公自序に遷生龍門とあり　○虎乳、漢書班固敍傳に班氏之先與楚同姓令尹子文之後也子文初生棄於瞢中而虎乳之楚人謂乳穀謂虎於檡故名穀於檡字子文楚人謂虎班其子以爲號と見ゆ　○缺文、論語衞靈公篇に子曰吾猶及史之闕文也、注に古之良史於書字有疑則闕之以待知者とあり　○忝直筆於明時、後魏書韓麒麟傳に顯宗曰臣仰遭明時直筆而無懼とあり　○元慶三年、原本三を二に作る諸本及類史釋紀に據て改む　○十一月十三日、一は原本二に作る諸本及類史に據て改む　○參議云々、以下善に至る廿五字及次行嶋田良臣の官位氏名は類史に據て補ふ

校訂標注 六國史第八卷目次

【嘉祥三年】文德、尙書大禹謨に帝乃誕敷㆓文德㆒、易小畜の象に君子以懿㆓文德㆒、論語季氏篇に遠人不㆑服則脩㆓文德㆒以來㆑之等あるに據れるならむ
○母藤原氏、紀略に母夫人從三位藤原順子とあり齊衡元年四月皇太后と爲給ふ清和紀貞觀十三年九月辛丑紀に傳あり
○太政大臣、太は原本大に作る諸本及紀略に據て改む下同じ
○仁明皇帝、皇帝の文字は儀制令に見え國史には天平勝寶八歲十二月紀に皇帝啓白と見えたるを始とし孝謙紀淳仁紀には多く見えたれど其他には多く天皇と申奉れり
○宣陽殿、拾芥抄中末に宣陽殿日華門北とあり
○休廬、原本倚廬に作る諸本及紀略に據て改む續後紀には皇太子直曹とあり
○東宮雅院、拾芥抄中末に雅院或御曹司傍東宮城內東前坊中御門北陋東云々とあり
○緣葬諸司、裝束司山作司養役夫司治路司次第司等を云

日本文德天皇實錄卷第一

起嘉祥三年三月盡六月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

文德天皇、諱道康、仁明天皇長子也、母藤原氏、贈太政大臣正一位冬嗣之女也、年十六、承和九年八月乙丑(四)、立爲㆓皇太子㆒、嘉祥三年三月己亥(廿一)、仁明皇帝崩㆓於清涼殿㆒、于㆑時皇太子下㆑殿、御㆓宜陽殿東庭休廬㆒、左右大臣率㆓諸卿及少納言左右近衞少將等㆒、獻㆓天子神璽寶劔符節鈴印等㆒、須臾駕㆓輦車㆒、移㆓御東宮雅院㆒、陣列之儀、一同㆓行幸㆒、但無㆓警蹕㆒、○庚子(廿二)、定㆓緣葬諸司㆒、中納言從三位源朝臣弘、權中納言橘朝臣峯繼、參議從四位下伴宿禰善男、散位從四位上源朝臣生、彈正大弼從四位下清原眞人長田、左中辨清原眞人岑成、左近衞少將從五位上良岑朝臣宗貞、大藏大輔藤原朝臣貞本、大外記外從五位下朝原宿禰良道等、六位以下四八、爲㆓裝東司㆒、中納言從三位源朝臣定、大藏卿平朝臣高棟、參議從四位上藤

原朝臣助、散位從四位下正躬王、右京大夫從四位上源朝臣寛、從四位下木工頭興世朝臣書主、散位從五位下文室朝臣笠科、勘解由次官山代宿禰氏益等、六位已下四人、爲山作司、後追以中納言從三位安倍朝臣安仁、散位從五位下藤原朝臣正岑、山口朝臣春方等、重補山作司、前丹波守從四位下滋野朝臣貞雄、宮內少輔從五位下橘朝臣伴雄等、六位已下三人、爲養役夫司、山城守從四位下茂世王、右京亮從五位上橘朝臣枝主等、六位一人、爲治路司、中納言從三位源朝臣弘爲前次第司長官、治部少輔從五位下藤原朝臣松影爲次官、以六位已下各二人爲判官主典、參議宮內卿從四位上滋野朝臣貞主爲後次第司長官、從五位下橘朝臣永範爲次官、判官主典同前、是日遣散位從五位上高階眞人淸上、從五位下藤原朝臣緒數等、率諸衞監護左右兵庫、令京畿七道擧哀成禮、限以三日、喪服之期、以日易月、式部省率百寮、於紫宸殿前擧哀、公卿及侍臣以下於東宮擧哀、○(廿三)辛丑、東宮成服、公卿百寮從之、○(廿五)癸卯、葬仁明皇帝于深草山陵、送終之禮、皆從儉約、是奉遺詔、

○裝束司、御葬儀に關する車輿服御等一切の事を掌る
○山作司、山陵を作ることを掌る
○養役夫司、養民司に同じ、寶字四年六月（續紀下四一頁）に見ゆ
○治路司、御葬儀に就きての道路を作ることを掌る
○次第司、御葬の行列の事を掌る之を前後に分ち各長官・次官・判官・主典等を設く
○緒數、尊卑分脈に諸數或緒數とあり
○令京畿、令は原本命に作る類史卅五及紀略に據て改む
○限以三日、漢書文帝後七年紀に遺詔曰其令天下吏民令到出臨三日皆釋服
○以日易月、同紀に又服大紅十五日小紅十四日纖七日釋服、注に凡三十六日而釋服矣此以日易月也とあり
○成服、喪服を著るを云
○深草山陵、山城國紀伊郡、續後紀嘉祥三年三月紀に見ゆ
○近隣、紀略近陵に作る

○土左守、左は原本佐に作る諸本に據て改む○小野朝臣千株及、右近衞少將に任ぜられし事四月己酉紀に見ゆれば追書せるなるべし又及の下に內舍人一人の五字脫ちたるかと思へど下文と書法異なれば然らざるべし○紀伊寺、廣隆寺來由記に隆城寺又名紀伊寺奉爲孝德天皇而秦川勝弟和賀建焉と見ゆ今寺址詳ならず○正四位下行大舍人頭、行字は例に據て補ふ○寶皇寺、山城志に廢寶皇寺在愛宕郡阿彌陀峯一名鳥部野寺とあり○從四位上行加賀守、行字は例に據て補ふ○貞岑、原本眞岑に作る下文に據て改む○來定寺、史徵に在紀伊郡今亡蓋東福寺邊、編年記に天曆六年八月十五日朱雀天皇崩廿日葬來定寺とと見ゆ○從四位下行大學頭、行字は例に據て補ふ○正親正、親下の正は原本王に作る前本谷本に據て改む○刑部少輔、刑は原本治

也、○（廿八）甲辰、遣從四位下行民部大輔基兄王、外從五位下豐階公安人等、存問供御葬之諸大夫、先是諸衞著甲、以備非常、今日脫却、各從常儀、○（廿七）乙巳、晏駕之後、初盈七日、仍遣使於近隣七箇寺、以修功德、右近衞少將兼土左守從五位下小野朝臣千株、及內豎十人、爲紀伊寺使、正四位下行大舍人頭兼越前權守高枝王、侍從從五位上嶋江王、刑部大輔正五位下藤原朝臣行道、內舍人一人、內豎十人、爲寶皇寺使、從四位上行加賀守正行王、中務大輔從五位上並山王、散位從五位下藤原朝臣正岑、駿河守丹墀眞人貞岑、爲來定寺使、從四位下行大學頭時宗王、從五位下正親正善永王、刑部少輔藤原朝臣關雄、爲拜志寺使、從三位行大藏卿平朝臣高棟、散位從四位下世宗王、從五位下永直王、內舍人一人、內豎十人、爲深草寺使、散位從四位下基棟王、從五位下安原王、大原眞人宗吉、橘朝臣三夏等、內舍人一人、內豎十人、爲眞木尾寺使、散位從四位下道野王、從五位下高原王、大判事藤原朝臣本雄、加賀介良岑朝臣清風、內舍人一人、內豎十人、爲檜尾寺使、是日嵯峨山陵、暴風雷雨、樹木

倒仆、遣中納言從三位安倍朝臣安仁、就加察視、公卿奏言、施事天下、猶稱令旨、在於視聽、有所疑、請稟天旨、改令代勅、未之許焉、○丙午、(廿八)左近衞少將從五位上良岑朝臣宗貞、出家爲僧、宗貞先皇之寵臣也、先皇崩後、哀慕無已、自歸佛理、以求報恩、時人愍焉、○夏四月(戊申朔)己酉、公卿上啓曰、竊以、万物不能自化、資大匠以陶鈞、億兆不能自治、頼元首之司牧、一時曠位、則九服所以廻遑、一日無政、則万機由其擁塞、是以姬王纘統、戴冕宅憂之初、漢帝乘乾、正位殂落之夕、通行不滯、爲万代之舟車、觀望相依、百王之戸牖者也、大行聖帝、明齊日月、道括乾坤、崇德叶於笙鏞、體政存於俎豆、七十二帝、彼復何人、三五六經、本慙聲教、遂攬乃昔以來禮典舊章、察其利病之端、參於方今之代、遺制云、皇太子可於柩前卽皇帝位、一依周漢故事、伏惟、殿下深仁植性、純孝因心、寢門問豎、竭愛敬之誠、馳道申虔、盡溫恭之禮、臣子之道克宣、天人之望允集、宜肅奉聖旨、屬茲時來、居南面之尊高、應北辰之大寶、而偏纏罔極之至哀、不忍割情以就禮、涉旬踰月、以至今日、臣等顒顒、深所未達、況乎先帝已有遺勅、孝善述父

に作る嘉祥二年二月壬子紀及下文六月乙丑紀・仁壽元年二月辛亥紀等の文に據て改む
○拜志寺、山城國紀伊郡拜志鄕ありし此鄕にありしなるべし玄蕃式に凡近都諸寺東拜志以北西石作以北停預講師僧綱撿察さ見ゆ
○從三位行大藏卿、行字は例に據て補ふ
○深草寺、山城國紀伊郡深草鄕にありしなるべし今詳ならず
○眞木尾寺、私記に按宇治郡朝日山東、池尾村邊有槇尾山古置寺歟是蓋非葛野郡槇尾山寺さ云
○加賀介良岑朝臣淸風、私記に或云淸風不加賀介此恐誤さ云
○楡尾寺、字類抄に法禪寺是也實惠僧都居住所也
○察視、紀略察覯に作る
○宗貞出家爲僧、良峯安世の第八子にして桓武天皇の孫なり紹運錄に頭左少將左中辨正四下哥人出家僧正遍照是也號良僧正又花山僧正云々さあり宗貞出家の時の事今昔物語に詳しく見ゆ
(四月)資大匠以陶鈞、

文選鄒陽獄中上書の注に陶家名模下圓者爲鈞以其能制器爲大小比之於天也良曰陶鈞造瓦器者制方圓大小任其所欲故比之矣とあり、匠は原本造に作る諸本に據て改む。
○九服、尙書禹貢に出づ緇紀下（五頁）參看すべし
○廻邉、徊徨に同じ文選廿泉賦の注に徊徨謂心驚とあり
○姬王纘統云々、尙書顧命に乙丑王（成王）崩越七日癸酉王（康王）麻冕黼裳由賓階隮云々とあるを云戴冕は即位の意宅憂は尙書說命に王宅憂亮陰三祀とあるに出で諒闇と同じ
○漢帝乘乾云々、後漢書大喪志に三公奏尙書顧命太子即日即天子位于柩前とあり乘乾は即位を云周易乾卦の象傳に時乘六龍以御天とあるに出づ殂落は尙書舜典注に殂落死也と見ゆ殂は原本徂に作る尙書に據て改む
○舟車、大戴禮に譬如舟車然相濟達也とあり權宜運用の便法を云
○百王之戶牖、百の上に

志、何得拘匹夫之情孝、缺万乘之典章、謹案春秋例、人君即位有四、初喪即位一也、既葬即位二也、踰年即位三也、三年諒闇終即位四也、殿下已在初喪而忘制、宜追既葬而示儀、上承七廟之靈、下定万民之望、臣等自負舊恩於丘山、思致新主於堯舜、不任悾款之至、謹奉啓以勸進、令曰、雖有遺詔、既踰旬月、況亦陵土未乾、不忍即正、不聽、從五位下源朝臣愼、從五位下橘朝臣信蔭等爲侍從、從五位下御春朝臣眞濱爲近江權介、從五位下淸原眞人秋雄爲但馬介、左兵衛佐如故、從五位下紀朝臣宬弟爲因幡權介、右兵衛佐如故、從五位下橘朝臣常蔭爲讃岐權介、正五位下橘朝臣眞直爲阿波守、從五位下坂上大宿禰貞守爲左近衛少將、從五位下小野朝臣千株爲右近衛少將、從五位下源朝臣興爲左兵衛權佐、從五位上藤原朝臣良仁爲右兵衛權佐、大宰帥三品葛井親王薨、親王桓武天皇第十二子也、母大納言贈正二位坂上大宿禰田村麻呂之女、從四位下春子也、親王幼而機警、年六歲、勅賜帶劍、弘仁十年賜爵四品、拜兵部卿、天長三年爲上野太守、承和七年爲常陸太守、八年進

爵三品、親王頗善射藝、有外家大納言之遺風、嘗嵯峨天皇御豐樂院、以觀射禮、畢後勅諸親王及群臣、各以次射、親王時年十二、天皇戲語親王曰、弟雖少弱、當執弓矢、親王應詔而起、再發再中、時外祖父田村麻呂亦侍坐、驚動喜躍、不能自已、即便起座、抱親王而舞、進曰、臣嘗將數十万之衆、征討東夷、實賴天威、所向無敵、自料、勇畧兵術多所不究、今親王年在齠齔、武伎如此、愚臣非所能及、天皇大咲曰、將軍褒揚外孫、何甚過多、親王耽愛聲樂、殊翫絲管、晩年好酒、志在讌樂、累日連夜、沈醉忘疲、嘉祥三年爲大宰帥、薨時年五十一、朝廷因循舊典、遣監喪使等、親王有子廿餘人、是日公卿僉議、定先皇七七日御齋會司、中納言從三位源朝臣弘、參議宮內卿從四位上滋野朝臣貞主、參議右大辨從四位上藤原朝臣良相、參議從四位下式部大輔伴宿禰善男、散位從四位上源朝臣生、從四位下木工頭興世朝臣書主、右少辨從五位上橘朝臣海雄、散位從五位下藤原朝臣菅雄等、六位已下三人、爲御齋會行事、圖書頭從五位下橘朝臣高成、左衛門佐從五位下紀朝臣道茂等、六位一人、爲造佛司、左

脱字あるべし
○括乾坤、括は原本枯に作る諸本に據て改む
○笙鏞、尙書益稷に笙鏞以間鳥獸蹌々、傳に鏞大鐘吹笙擊鏞鳥獸化德相率而舞蹌蹌然とあり
○爼豆、史記孔子世家に出て祭器の汎稱なり此は禮典を云
○七十二帝、文選封禪文に繼韶夏崇號諡略可道者七十有二君とあるに據れり
○三五六經、同に五三六經載籍之傳維風可觀也、注に五帝三皇之道六經典籍之所傳述美惡亦可見也とあり
○寢門問豎、禮記文王世子に文王之爲世子朝於王季日三至於寢門外問內豎之御者曰今日安否如何とあるに出づ
○馳道中處、漢書成帝紀に帝爲太子云々初居桂宮上嘗急召太子出龍樓門不敢絕馳道とあるに出づ中處は敬を致すを云
○北辰之大寶、天位を云大寶は易繫辭傳に出づ
○顒顒、毛詩大雅卷阿章注に顒顒溫貌とあり義此

に妥ならず原本頭注に或い當レ作二顧々一さあり顧々は蒙昧の貌なれば是なるに似たり
○善述父志、中庸に夫孝者善繼二人之志一善述二人之事一者也さあるに出づ
○既葬卽位、既葬の二字は谷本藤本に據て補ふ
○在初喪而忘制、初喪卽位さいふ制を忘れて卽位し給はざるを云諸本忘を忌に作るは非
○七廟之靈、禮記王制に天子七廟さあるに據れり
○悾款、原本愷疑に作る前本藤本に據て改む任昉勸進箋に實有二愚誠一不レ任二悾款一さ見ゆ
○令曰、紀略令旨に作る
○葛井親王薨、淸和紀貞觀九年正月戊午紀に仲野親王者桓武天皇之第十二皇子也さあり纂輯御系圖には葛井親王を第十二子仲野親王を第十三子さす
○兵部卿、卿字は諸本に據て補ふ
○外家大納言、田村麻呂を云
○營、原本等に作る諸本に據て改む
○喜躍、喜は原本嘉に作る諸本に據て改む

京大夫從四位上正行王、雅樂頭從五位下藤原朝臣貞敏、侍從從五位下橘朝臣信蔭等、六位已下四人、爲莊嚴堂司、彈正大弼從四位下淸原眞人長田、治部大輔從五位上坂上大宿禰正野、散位從五位上丹墀眞人門成等、六位已下三人、爲供僧司、○庚戌、公卿重上啓曰、臣等先已上啓、具陳勸進之誠、而殿下至孝爲性、不忍割情、久曠万機、經引數月、雖云禮制、亦有權時、請擇吉辰、早正其位、以順兆人之望、以固万國之基、令曰、卿等上啓、驟輸中誠、事緣遺詔、義歸權奪、今不獲已、俯依來啓、○辛亥、爲除凶服、先遣大中臣氏人於五畿內七道諸國、以修大祓、○壬子、遣使於七箇寺、修二七日御齋會、每寺公卿大夫幷內舍人內豎等一兩人、○癸丑、地震、帝公除、百官吉服、大祓於朱雀門前、有魚虎鳥、飛鳴於東宮樹間、何以書之、記異也、○乙卯、大雷雨、諸衞警陣、賜陣頭侍從及衞士以上祿、各有差、○戊午、帝自雅院、移御中殿、勅賜中納言源朝臣定帶劔、先皇賜之、今依舊賜之、○己未、遣使於七箇佛寺、修三七日御齋會、如前日儀、○辛酉、遣左近衞將曹粟田眞持於深草陵、列栽樹木、間以一丈、

○齠齔、字彙に齠始毀齒也齔同レ齔毀齒也男子八月生レ齒八歲而齔女子七月生レ齒七歲而齔さあり幼少なるを云
○將軍、原本軍を兵に作る谷本に據て改む
○參議從四位下式部大輔、參議の二字原本從四位下の下にあり傍書に據て改め移す
○從五位下橘朝臣高成、從字は諸本に據て補ふ
○道茂、茂は原本藏に作る諸本に據て改む
○有權時、變に應じて改むるを云
○以固万國、固は原本因に作る前本中本淀本に據て改む
○驟輪、輪は原本論に作る諸本に據て改む
○儀奪、文選齊竟陵文宣王行狀に逮二衣裳外除心哀內疚一禮屈二於厭降一事迫二於儀奪一さあるに出で權宜に依りて喪服を除くを云
○修二七日、修字は藤本及紀略に據て補ふ
○公除、表面に喪服を除くを云公は原本出に作る紀略に據て改む
○百官吉服、官は原本宮

相襲成行、○壬戌、地震、飛驒國講師傳灯滿位僧德嚴上奏、諸國國分二寺、安居修行、爲國誓念、而此國舊來不修此法、論之佛理、可謂闕如、請准諸國、每年薰修、許之、○癸亥、遣權中納言橘朝臣岑繼、告深草山陵、以卽位之由、其策文曰、掛畏支天皇朝廷爾、恐見恐見毛申賜久、遺多万倍留詔乃隨爾、天日嗣爾仕奉倍支狀乎、公卿等屢勸請天、而日月毛近久、心神毛哀迷爾依弖、不堪流狀、再比三比懼利辭止毛、御命旨止言弖、固勸强禮波、己志爾波從己止不得、故是以大御坐處乎拂潔侍弖、天之日嗣乎戴荷知、守供奉倍支事乎、恐見恐見毛申賜久止奏、又申久、掛畏支天皇朝廷乃矜賜牟厚慈乎蒙戴弖之、天之日嗣乃政者平久、天地日月止共爾、守仕奉倍之止思食事乎、恐見恐見毛申賜久止奏、○甲子、帝卽位於大極殿、其日晨旦快雨、百官以雨日儀從事、至日中時天晴、策命曰、明神止大八洲國所知天皇詔旨良万止宣勅、親王諸王諸臣百官人等、天下公民衆聞食止宣、掛畏支平安宮爾御宇之倭根子天皇、我皇、此天日嗣高

に作る前本舊版本に據て改む吉服は凶服を除きて吉服を著くるなり
○魚虎鳥、抄羽族部に魚虎爾雅集注云鵄(曾比見)日本紀私記文徳天皇實錄魚虎鳥三字)小鳥也色青翠而食魚江東呼爲水狗兼名苑云魚虎とあり
○中殿、拾芥抄中末に清涼殿又云御殿、南殿西常寢居也と見ゆ
○源朝臣定、源字は諸本及紀略に據て補ふ
○佛寺、佛は紀略になし
○國分二寺、寺字は諸本に據て補ふ
○安居、釋氏要覽に南山鈔云形心靜攝曰安要期此住曰居と見ゆ
○策文、策は字書に簡也連編諸簡謂之策古無紙筆大事書之於策小事書之於簡とあり詔詞を云
○天日嗣、下文何れも天の下に之字あり此にもあるべきか
○拂潔、諸本掃潔に作る
○厚慈乎、乎字は閣本前本中本等に據て補ふ
○平久、平は原本乎に作る諸本に據て改む
○從事、紀略行事に作る

座之業乎、掛畏近江大津乃宮爾御宇之天皇乃初賜比定賜倍留法隨爾、仕奉止仰賜授賜比之大命乎、受賜利恐美、受賜利懼利、進母不知爾、退母不知爾、恐美坐久止宣天皇勅、衆聞食止宣、然皇止坐天、天下治賜君波、賢人乃良佐乎得天之、天下乎波平久安久治物爾在止奈毛聞行須、故是以大命坐宣久、朕雖拙劣、親王等始天、王等臣等乃相共奈比奉利、相扶奉事依天之、此乃仰賜比授賜倍留食國乃天下之政波、平久安久仕奉倍之止奈毛所念行、是以以正直之心天、天皇朝廷乎、衆助仕奉止宣天皇勅、衆聞食止宣、辭別宣久、凡人子乃蒙福万久欲爲留事波、於夜乃多米爾止奈母聞行須、故是以朕親母藤原氏乎、皇太夫人爾上奉利治奉流、又仕奉人等中爾、其仕奉狀隨爾、冠位上賜比治賜布、又大神宮乎始天、諸社乃禰宜祝等爾、給位一階、又僧綱乎始天、諸寺智行有聞流、幷天下僧尼乃年八十以上爾、施物太万不、又左右京五畿內乃鰥寡孤獨不能自存者、及天下給侍留人等爾、給御物布、力田之輩乃、超衆者爾、賜爵

○策命、詔詞など云
○明神止云々、此詔旨天應元年四月癸卯詔（續紀下三六七頁）及天長十年三月癸巳詔に相似たり參看すべし
○平安宮爾云々天皇、仁明天皇など申奉る
○大津乃宮云々天皇、天智天皇を申奉る
○仰賜授賜比之、授賜の二字は續紀續後紀三代實錄等の宣命の例及下文策に據て補ふ
○然皇止坐天、然は原本烈に作る天長十年三月卽位詔及天安二年十一月卽位詔に據て改む
○在止奈毛、毛は原本利に作る閣本中本淀本及原本傍注に據て改む
○拙劣、劣は諸本幼に作る
○始天、始は原本初に作る前本谷本藤本に據て改む
○相共奈比、原本頭書に共一作穴とあれど諸本何れも同じく淸和紀天安二年十一月卽位詔にも共とあれば舊のまゝにて改めず但し訓はアナと訓べし
○是以以正直之心、原本

一階、又諸國言上、承和九年以往租稅未納者、先帝御坐之時爾、免給倍止勅支、今天皇我御意止爲天、去年以往未納毛、復盡免給波久止勅天皇御命乎、衆聞食止宣、授從二位源朝臣常正二位、正三位源朝臣信從二位、從三位源朝臣定、安倍朝臣安仁等正三位、從四位上滋野朝臣貞主、藤原朝臣助、藤原朝臣長良、小野朝臣篁、藤原朝臣良相等正四位下、從四位下伴宿禰善男從四位上、无位雄風王、利基王等從四位下、從四位上坂上大宿禰淨野正四位下、從四位下淸原眞人瀧雄從四位上、正五位上伴宿禰成益、正五位下春澄宿禰善繩等從四位下、從五位上藤原朝臣良仁正五位上、從五位上藤原朝臣高房、從五位下菅原朝臣是善等正五位下、從五位下鎌倉王、藤原朝臣春岡、文室眞人助雄、良岑朝臣長松、藤原朝臣關主、橘朝臣淸蔭、佐伯宿禰屋代、外從五位下豐階公安人等從五位上、外從五位下都宿禰貞繼、三統宿禰眞淨、正六位上在原朝臣善淵、大原眞人眞室、小野朝臣貞樹、橘朝臣休蔭、齋部宿禰伴主、安倍朝臣有道、從六位上藤原朝臣諸藤等從五位下、正六位上廣宗

下の以字なく心を人に作る以は前本藤本淀本等に據て補ひ心は仁明紀卽位詔清和紀卽位詔に據て改む
○多米爾止奈母、奈母は原本大字にせるを例に據て小字とす
○藤原氏、順子贈正一位冬嗣の女五條后と稱す
○給侍、戸令に凡年八十及篤疾給二侍一人一、九十二人、百歳五人皆先盡二子孫一とあり
○力田、田は原本由に訛れり諸本に據て改む
○關主、關は原本閑に作る中本藤本に據て改む
○榎井朝臣嶋長、原本臣下に禰字あり諸本及類史九十九に據て削る
○家原宿禰、類史には朝臣に作れるど下文齊衡三年十月己丑紀にも宿禰と見えたれば原本のまゝにてあるべし
○心喪、史記仲尼世家に三年心喪畢相訣而去とあるに出づ喪期既に滿ち凶服を除くも心にて喪に服するを云
○深草陵、草字は中本及類史卅六に據て補ふ
○窣堵婆、慧苑音義に塔

宿禰平麻呂、榎井朝臣嶋長、家原宿禰氏主等外從五位下、○乙丑、遣レ使解二諸關警一、是日宣詔内外云、易レ月之制、雖レ據二舊章一、臣子之道、須レ存二心喪一、宜レ仰二有司一、朞年之內、禁二宴飲作一レ樂、及著二美服一、先レ是深草陵窣堵婆所レ藏陀羅尼、自發レ落地、遣二参議伴宿禰善男一、就加二安置一、○丙寅、遣二使於七箇佛寺一、修二四七日御齋會一、如二前日儀一、固近江國關使從四位下右中辨藤原朝臣氏宗歸奏二奉契一、○戊辰、固伊勢國關使右衛門權佐從五位上藤原朝臣春岡、固美濃國關使散位從五位下藤原朝臣菅雄等歸奏二奉契一、○己巳、六衛解レ嚴一、皇太夫人移二御東五條院一、警蹕威儀、一擬二乘輿一、詔遣二左右近衛少將將監番長各一人、近衛各九人、左右兵衛尉志番長各一人、兵衛各十九人一、分二陣院下一、以備二宿衛一、詔二佐渡國一、放二還配流罪人金刺福貴滿一、○庚午、前春宮職印一枚、獻二于內裏一、○辛未、太政官重宣二今月十七日詔旨一、頒二下京畿諸國一云、今案二詔旨一、去年已往言上租稅未レ納、悉可レ免除、宜レ命二官長一、分明搜撿、見二在民身一、卽從二免除一、又雖レ非二別錄申一レ官、所司文簿載二未一レ納之由一者、亦同二言上之例一、若後日遣レ使巡撿、國郡司并預レ事人等徵

梵言也或曰、偸婆、正云、窣堵婆、此翻爲墳陵、また玄應音義には此云方墳、亦言廟、一義也とあり倭名抄には調度部伽藍具に收む、窣は類史率に作る
○從五位上藤原朝臣春岡、上は原本下に作る上文甲子紀に據て改む
○解嚴、正字通に敵退稍弛備曰解嚴とあり
○東五條院、拾芥抄中末に東五條五條后宮とあり
○威儀、威は原本成に作る諸本及紀略に據て改む
○左右近衛少將、少將の二字は閣本藤本中本に據て補ふ
○金剌、原本剌を判に作るは剌の譌なり原本傍注に據て改む判は剌の俗字
○雖非別錄、非字は藤本堀本(朱)に據て補ふ
○事條、條は原本修に作る諸本に據て改む
○天長十年例、三代格七天長十年七月六日太政官符に見ゆ
○山野之禁云々、此詔は三代格十六に見え嘉祥三年四月廿七日太政官符應禁制山野不失民利事とあり一日の差あり文亦異同あり參看すべし

取訖、隱爲未進、及稱不言上之色、欺責頑民者、必處重科、並牓示路頭、普令知見、但地子未納、不在免限、自餘事條、准天長十年例、○壬申(廿五)、正五位上藤原朝臣良仁爲中宮亮、右兵衛權佐如故、○癸酉(廿六)、遣使於七箇佛寺、修五七日御齋會、亦如前日儀、宣詔、山野之禁、本爲鶏雉、至於草木、非有所制、如聞、所由不熟事意、矯峻法禁、奪人斧斤、捕人牛馬、絶其往還之跡、妨其樵蘇之業、爲人之患、莫此之甚、宜早下知、莫令更然、又聞、豪貴之家、非有官符、妄占山野、多妨民利、如斯之類、並早禁斷、其江河池沼之類、同亦准此、莫致人愁、牓示路頭、普令知見、○甲戌(廿七)、從五位下三統宿禰眞淨爲中宮大進、○丙子(廿九)、授正六位下橘朝臣茂房從五位下、正六位上佐佐貴山公仲繼外從五位下、詔以上野國聖隆寺、爲延暦寺別院、是月天寒、○五月(戊寅朔)己卯(二)、大風、折木殺草、記灾也、遣侍從從五位上嶋江王、左少辨從五位下文室朝臣助雄、中務少丞正六位上百濟王忠岑、內舍人正六位上八多朝臣湊、從八位上清瀧朝臣岑成等、向伊勢大神宮、迎齋內親王、大祓於建禮門前、○庚辰(三)、修六七日御齋會、從五位上坂上大宿

○所由、由は藤本司に作る
○妨其樵蘇之業、樵蘇は漢書韓信傳に樵蘇後爨、注に樵取薪也蘇取草也とあり木を伐り柴を苅るを云妨は原本如に作る藤本及原本傍注に據て改む
○聖隆寺、今廢寺となり所在詳ならず
（五月）殺草、殺は原本拔に作る諸本に據て改む
○記灾、原本記異に作る諸本に據て改む
○從五位上嶋江王、上は原本下に作る類史及承和十五年正月戊辰紀（續後紀三三一頁）に據て改む
○齋内親王、仁明天皇第八皇女久子内親王
○東大寺、以下藥師寺までの七寺は所謂七大寺なり
○從五位下高階眞人、從字は諸本に據て補ふ
○嵯峨太皇太后崩、諸陵式に嵯峨陵太皇太后橘氏在山城國葛野郡不入頒幣之例と云同郡嵯峨村上嵯峨にあり
○深谷山、今も大深谷の名存す
○三日、閣イ本前イ本等三月三日の四字に作れど

禰正野、左京亮從五位下飯高朝臣永雄等爲東大寺使、散位從五位下百濟王教福、源朝臣穎等爲元興寺使、刑部少輔從五位下藤原朝臣關雄、散位源朝臣同等爲興福寺使、散位從五位下丹墀眞人繩主、文室朝臣墾田麻呂等爲大安寺使、前越後守從五位下丹墀眞人氏永、散位大宅朝臣年雄等爲西大寺使、散位從五位下高階眞人信澄、在原朝臣善淵等爲法隆寺使、散位從五位上百濟王慶世、從五位下橘朝臣三夏等爲藥師寺使、○辛巳、嵯峨太皇太后崩、○壬午、葬太皇太后于深谷山、遺令薄葬、不營山陵、先是民間訛言云、今茲三日不可造餻、以無母子也、識者聞而惡之、至于三月、宮車晏駕、是月亦有太后山陵之事、其無母子、遂如訛言、此間田野有草、俗名母子草、二月始生、莖葉白脆、毎屬三月三日、婦女採之、蒸擣以爲餻、傳爲歲事、今年此草非不繁、生民之訛言、天假其口、太皇太后、姓橘氏諱嘉智子、父清友、少而沉厚、涉獵書記、身長六尺二寸、眉目如畫、擧止甚都、寶龜八年、高麗國遣使修聘、清友年在弱冠、以良家子、姿儀魁偉、接對遺客、高麗大使獻可大夫史都蒙見之而器之、

閣本以下諸本及紀略になし抄所引亦同じ

○餻、抄飲食部飯餅類に餻考聲切韵云餻（久佐毛知比）烝米屑爲之文德實錄云嘉祥三年訛言曰今茲三月不可造餻以無母子也とあり

○宮車晏駕、仁明天皇の崩御を云

○母子、抄草木部草類に菴䕡子本草云菴䕡子（波々古）、箋注に按嘉祐本草云鼠麴草雜米粉作粿食之甜美生平岡熟地高尺餘葉有白毛黃花荊楚歲時記云三月三日取鼠麴汁蜜和爲粉謂之龍舌粄以壓時氣江西人呼爲鼠耳草云々是可以充波々古とこ云り

○身長六尺二寸、長字は内イ本及原本傍注に據て補ふ

○寶龜八年云々、寶龜七年十二月乙巳紀に渤海國遣獻可大夫司賓少令開國男史都蒙等一百八十七人賀我卽位と見ゆ

○白面、宋書沈慶之傳に欲伐國而與白面書生輩謀之事何由濟とあり若輩にして經歷なき者を云

問通事舍人山於野上云、彼一少年、爲何人乎、野上對、是京洛一白面耳、都蒙明於相法、語野上云、此人毛骨非常、子孫大貴、野上云、請問命之長短、都蒙云、卅二有厄、過此無恙、其後清友娶田口氏女生后、延曆五年爲内舍人、八年病終於家、時年卅二、驗之果如都蒙之言、后爲人寛和、風容絶異、手過於膝、髮委於地、觀者皆驚、嵯峨太上天皇、初爲親王納后、寵遇日隆、天皇登祚、弘仁之始、拜爲夫人、先是數日、后夢出自針孔、立左市中、六年秋七月七日、后亦夢著佛瓔珞、居五六日、立爲皇后、十四年天皇禪位於淳和皇帝、尊天皇爲太上天皇、皇后爲皇太后、仁明天皇受禪、尊皇太后爲太皇太后、追贈后父太政大臣正一位、母正一位、后自明泡幻、篤信佛理、建一仁祠、名檀林寺、遣比丘尼持律者、入住寺家、仁明天皇助其功德、施捨五百戸封、以充供養、后亦與弟右大臣氏公朝臣、議開學舍、名學官院、勸諸子弟、誦習經書、朝夕濟々、時人以比漢鄧皇后、初法華寺有苦行尼、名曰禪雲、見后未笄、就把其臂云、君後當爲天子及皇后之母、后竊記之、遂生仁明天皇、及淳和太皇太后、后追想尼言、訪其所在、尼時既

○爲夫人、大同四年六月丁亥なり
○白明泡幻、佛書に夢幻泡影の語あり泡幻は世の儚なく定なきを云閣本前本等自明の傍に夙悟とあれど原本のまゝにてよし
○仁祠、後漢書楚王英傳の注に佛寺也とあり
○檀林寺、拾芥抄下本に檀林寺嵯峨野橘太后と見え山城志に葛野郡檀林尼寺皇后嘉智子建云々寺廢而建淨金剛院淨院亦西遷而或爲離宮或爲佛刹今天龍寺諸坊在此地と見ゆ
○弟右大臣、弟は原本第に作る諸本に據て改む
○學官院、官は西宮記以下に館とあれど原本官に作り藤本中本等宮に作るは官の訛なり台記久安三年四月十七日條にも學官院別當とあれば改めず字彙に宦仕也又學也左傳服虔注宦學也學職事爲官也とあり山城志に學館院二條西南大宮東とあり
○濟々、原本閣閣に作る諸本に據て改む濟々は爾雅釋訓に賢士殽多之容止とあり朝夕昇降の人士多きを形容せり

亡、及仁明天皇不豫甚篤、后哀戚毀容、遂剃髪爲尼、求冥救也、天皇崩後、相尋而后亦崩、時年六十五、后正位之後、專務化導、宮闈之內、陰敎邕穆、朝野稱之、嵯峨天皇特加敬重、意愛甚密、故老相傳、伊豫國神野郡、昔有高僧名灼然、稱爲聖人、有弟子名上仙、住止山頂、精進練行、過於灼然、諸鬼神等、皆隨頤指、上仙嘗從容語所親檀越云、我本在人間、有同天子之尊、多受快樂、爾時作是一念、我當來生、得作天子、我今出家、常治禪病、雖遺餘習、氣分猶殘、我如爲天子、必以郡名爲名字、其年上仙命終、先是郡下橘里有孤獨姥、號橘嫗、傾盡家產、供養上仙、上仙化去之後、嫗得審問、泣涕橫流云、吾與和尙、久爲檀越、願在來生、俱會一處、得相親近、俄而嫗亦命終、其後未幾、(嵯峨)天皇誕生、有乳母姓神野、先朝之制、每皇子生、以乳母姓爲之名焉、故以神野爲天皇諱、後以郡名同天皇諱、改名新居、后時夫人、號橘夫人、所謂天皇之前身、上仙是也、橘嫗之後身、夫人是也、后嘗多造寶幡及繡文袈裟、窮盡妙巧、左右不知其意、後遣沙門慧蕚、泛海入唐、以繡文袈裟、奉施定聖者僧伽和上康僧等、以寶幡及鏡奩之具、施入五

○鄧皇后、後漢書鄧皇后傳に詔徵和帝弟濟北河閒王子男女年五歲以上四十餘人、又鄧氏近親子孫三十餘人並爲開邸第、敎學經書、躬自監試尙幼者使置師保、朝夕入宮撫存詔導恩愛甚渥とあり
○法華寺、大和志に在添上郡、又名國分尼寺淡海公不比等創建見榮花談云々延暦十六年二月太政官符曰禁斷諸尼競入法華寺とさ見え今奈良市法華寺町にあり
○哀戚、哀は原本襄に作る藤本及原本傍注に據て改む
○陰敎邕穆、晉書后妃傳序に陰敎洽於宮闈とあり陰敎は婦女子の敎なり又邕穆は同桑虞傳に閨門邕穆と見えやはらぐ意卽ち皇后の化導に依て宮人の和親するを云
○上仙、靈異記に寂仙に作る
○頤指、漢書賈誼傳注に如淳曰但動頤指麾則所欲皆如意とあり頤はおとがひなり
○從容、藤本谷本淀本舊版本縱容に作る
○檀越、神護二年（續紀

臺山寺、○[九]丙戌、莊嚴清涼殿、安置金光明經、地藏經各一部、及新造地藏菩薩像一軀、屈請百僧、修先皇七七日御齋會、解座之後、便於大極殿、限三箇日、轉讀大般若經、以祈甘雨也、應時雨降、是日有制、爲諸名神、令度七十人、各爲名神、發願誓念、其得度者、皆以神字、被於名首、○[十]丁亥、終日陰雲、入夜雨降、○[十一]戊子、加雨、水潦奔溢、時人以爲、諸僧苦請之誠、感動龍王也、○[十三]庚寅、請僧五十口、分配東宮中宮、限三箇日、轉讀大般若經、○[十五]壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江國、歸葬本鄕、逸勢者右中辨從四位下入居之子也、爲性放誕、不拘細節、尤妙隷書、宮門榜題、手迹見在、延暦之季、隨聘唐使入唐、唐中文人、呼爲橘秀才、歸來之日、歷事數官、以年老羸病、靜居不仕、承和九年、連染伴健岑謀反事、拷掠不服、減死配流伊豆國、初逸勢之赴配所也、有一女、悲泣步從、官兵監送者、叱之令去、女晝止夜行、遂得相從、逸勢行到遠江國板築驛、終于逆旅、女攀號盡哀、便葬驛下、廬于喪前、守屍不去、乃落髮爲尼、自名妙冲、爲父誓念、曉夜苦至、行旅過者、爲之流涕、及詔歸葬、女尼負屍還京、時人異之、稱爲孝

下一三八頁）に注す
○雖遺餘習、遺は尾イ本藤イ本遺に作る
○上仙命終、靈異記に寶字二年歲次戊戌年寂仙禪師臨命終さ見ゆ
○橘里、伊豫國越智郡立花鄕是なり
○姓神野、矢野翁曰按延曆十年紀曰正月甲戌太秦公忌寸濱刀自女賜姓賀美能宿禰、賀美能親王之乳母也不與此合故老相傳至夫人是也恐係後人竄入
○改名新居、類史廿八に大同四年九月乙巳改伊豫國神野郡爲新居郡以觸上諱也さ見ゆ
○慧萼、慧は閣本前本等惠に作る釋書十六に釋慧萼齊衡初應橘太后詔齎幣入唐著登萊界抵雁門上五臺漸屆杭州鹽官縣靈池寺謁齊安禪師通橘后之聘云々さ見ゆ
○康僧、異稱日本傳此文を引て唐僧に作る
○鏡奩、後漢書光烈陰皇后紀注に奩鏡匣也さあり鏡筥なり
○地藏菩薩、地藏講式に梵號又底俱舍密亦號悲願金剛今號地藏薩埵彼

女、○(十七)甲午、四品時康(光孝)親王爲中務卿、二品仲野親王爲式部卿、三品賀陽親王爲彈正尹、四品人康(サネヤス)親王爲上總太守、四品本康親王爲上野太守、一品葛原親王爲大宰帥、正六位上藤原朝臣興世、石川朝臣豐河、布勢朝臣眞吉、伴宿禰須賀雄、並授從五位下、從五位下中臣朝臣逸志爲神祇大副、從五位下藤原朝臣諸藤爲侍從、從五位下春日臣雄繼爲大學博士、從五位上高階眞人清上爲彈正少弼、從五位上丹墀眞人門成爲大和守、從五位下丹墀眞人貞岑爲駿河守、正四位下坂上大宿禰淨野爲相摸守、右兵衞督如故、從四位下伴宿禰成益爲丹波權守、從五位上橘朝臣貞根爲安藝守、從四位上源朝臣冷爲讃岐守、從四位下淸原眞人長田爲大宰大貳、從四位下藤原朝臣氏宗爲右近衞中將、右大辨如故、○(十九)丙申、從五位下藤原朝臣菅雄爲民部少輔、詔以武藏國奈良神列於官社、先是彼國奏請、撿古記、慶雲二年、此神放光如火熾、然其後、陸奧夷虜反亂、國發控絃、赴救陸奧軍士、載此神靈、奉以擊之、所向無前、老弱在行、免於死傷、和銅四年、神社之中、忽有湧泉、自然奔出、漑田六百餘

胎藏界現二九尊之主伴一度二九界妄情一此金剛界列二寶生界會一擧二大悲之幢一導二三有迷途一 また地藏十輪經に安忍不動猶如二大地一靜慮深密猶如二秘藏一とあり

町、民有二疫癘一、禱而癒、人命所レ繫、不レ可レ不レ崇、從レ之、○戊戌(廿一)、石見國言、甘露降、○癸卯(廿六)、雨レ雹、大如二鴨卵一、

○解座、座は原本坐に作る紀略に據て改む解座は七々日御齋會の法座終了するを云　○便於大極殿、便は原本使に作る諸本及紀略に據て改む　○龍王、大雲輪請雨經に龍王能く甘雨を降らし一切樹木苗稼を生長せしむる力あるを云り　○橘朝臣逸勢、承和九年七月紀(續後紀一二五頁)に見ゆ逸勢は薩戒記にトシナリと訓じ空海遺告文亦同じ　○放誕、南史檀超傳に少好二文學一放誕任レ氣と見ゆ縱に妄言壯語するを云　○延曆之季、唐書日本傳に貞元末其王曰二桓武一遣二使者一朝其學子橘免勢浮屠空海願二留肄一業歷二二十餘年一使者高階眞人來請二免勢等倶還一詔可と見ゆ按に免は逸の省文　○文人、文は原本父に作る中本に據て改む　○板築驛、遠江風土記傳に引佐郡只木村公家(クゲ)塚即ち逸勢の墓なりと云されば イタツキのイを略してタツキといひタツキ一變してタダキとなれるか板築驛は延喜兵部式には見えず驛は里の誤なるべしと云　○逆旅、莊子山水篇に出で旅宿を云　○攀號、轅を挽留めて號泣するを云　○喪前、喪は墓の誤なるべし　○妙沖、沖は原本冲に作る前本藤本淀本に從ふ　○爲父、原本父を从に作る諸本に據て改む　○人康親王云々、續後紀に嘉祥二年閏十二月(三七七頁)人康親王爲二上總太守一同三年正月(三八一頁)本康親王爲二上野太守一と見ゆ何れか誤あるべし　○眞吉、原本頭注に眞一作レ貞とあり　○春日臣雄繼、續後紀承和十四年八月丁未紀に春日部雄繼等二人刊二部字一爲二春日臣一齊衡三年八月丁酉紀に春日臣雄繼賜二姓大春日朝臣一とあり　○坂上大宿禰、大字は諸本及上文四月甲子紀に據て補ふ　○奈良神、此神官社に預ること續後紀嘉祥二年十一月壬子紀(三七三頁)に出づ　○列於官社、於は原本爲に作る諸本に據て改む　○夷虜、原本虜を盧に作る諸本に據て改む　○控絃、漢書婁敬傳注に控引也謂皆引レ弓也とあり射手を云絃は弦の誤なるべし　○無前、後漢書馬武傳に常爲二軍鋒一力戰無レ前とあるに出で無敵と同じ　○石見國言、紀略言下に上字あり　○鴨卵、卵は原本卯に訛る諸本に據て改む

○六月(丁未朔)戊申(二)、能登國氣多大神授二從二位一、○己酉(三)、雷震二西寺剎柱一、剎二取其竿一、中央一許丈、去落二於右馬頭藤原朝臣春津宅一、詔以二武藏國廣瀨神、常陸國鴨大神御子神主玉神、並列二於官社一、安房國國造正八位上伴直千福麻呂授二外從五位下一、○庚戌(四)、伊豆國阿米都和氣命、伊太氐和氣命、阿豆佐和氣命、佐岐多麻比咩命、伊賀國佐佐神、津神等、並授二從五位

(二六月)藤原朝臣、原字は諸本に據て補ふ　○廣瀨神、神名式武藏國入間郡廣瀨神社、水富村上廣瀨　○神主玉神、神名式常陸國新治郡鴨大神御子神主玉神社、茨城郡東那珂村賀茂部　○官社、原本宮社に作る諸本及原本傍注に據て改む

下、壹岐嶋角上神列於官社、○丁巳、(十二)美作國獻靈龜、雪白可愛、○乙丑、(十九)從五位下藤原朝臣關雄爲諸陵頭、從四位下藤原朝臣諸成爲右京大夫、從五位上藤原朝臣大津爲備前守、外從五位下山田宿禰文雄爲備後介、○丙寅、(二十)夜有流星、頭尾轉行、○丁卯、(廿一)遣散位從五位下利見王、神祇少祐正六位上中臣朝臣稗守等、參伊勢大神宮、告以卽位之由、百官齋戒、廢務三日、○甲戌、(廿八)出羽國奏言、境接夷落、動(ヤヽモスレバ)爲風塵、至有嫌疑、必資占驗、請省史生一員、置陰陽師一員、許之、

○安房國造、國造本紀に阿波國造志賀高穴穗朝御世天穗日命八世孫彌都侶岐孫大伴直大瀧定賜國造とあり
○阿米都和氣命、神名式伊豆國賀茂郡阿米都和氣命神社、三宅嶋
○伊太氐和氣命、同式同郡伊太氐和氣命神社、三宅嶋稻根山、氐は原本豆に作る式に據て改む
○阿豆佐和氣命、同式同郡阿豆佐和氣命神社、利嶋
○佐岐多麻比咩命、同式同郡佐伎多麻比咩命神社、三宅嶋神著村南子山
○佐佐神、同式伊賀國阿拜郡佐佐神社、今阿山郡丸柱村音羽
○津神、式外の神所在詳ならず
○角上神、神名式壹岐嶋壹岐郡角上神社、所在詳ならず
○關雄、傳は仁壽三年二月甲戌紀に見ゆ
○備後介、後は原本前に作る諸本に據て改む
○夜有流星、夜字は紀略に據て補ふ
○神祇少祐、祐原本副に作る天安元年十二月庚寅

紀及原本傍注に據て改む
○稗守、前本谷本藤本等薭守に作る稗薭同じ
○大神宮、大原本太に作る谷本及紀略に據て改む
○動爲風塵、私記に爲恐起と云り風塵は漢書終軍傳に邊境時有㆓風塵之警㆒とあるに出で兵亂を云
○嫌疑、楚辭に明㆓法度之嫌疑㆒とありまぎらはしきまで相似たるを云ふ

日本文德天皇實錄卷第一

【嘉祥三年七月】

○砥鹿神、神名式參河國寶飫郡砥鹿神社、一宮村一宮、國幣小社に列す、鹿は原本並に作る尾イ本谷イ本及仁壽元年十月乙巳紀に據て改む

○貧窮者、窮字紀略になし

○穀祈、紀略祈穀に作る

○晏子內親王、齋宮記に宴子內親王文德皇女とあり

○惠子內親王、齋院記に惠子內親王文德天皇第八皇女也母藤原列子とあり、原本惠を慧に作る閣本前本藤本等に據て改む

○兩齋內親王也、也字は紀略に據て補ふ

○古子、古は原本右に作る諸本及類史(四十)紀略に據て改む

○此賞、賞は原本意に作る諸本に據て改む

○甘露、治部式上瑞に甘露美露也神靈之精也凝如脂其甘如飴一名膏露とみゆ

○飴餹、天文本倭名抄飲食部酥蜜類に飴餹(和名阿女)米蘖爲之味甘微温陶隱居云飴餹乃云膠飴皆是濕糖如厚蜜者と云

日本文德天皇實錄卷第二

起嘉祥三年七月盡十二月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

秋七月丙子朔、授參河國砥鹿神從五位下、從五位下橘朝臣永範爲刑部少輔。○丁丑、賑給左右京貧窮者。○庚辰、延屈百僧於大極殿、轉讀大般若經、爲穀祈也。備前國獻白龜。○甲申、皇女晏子內親王爲伊勢齋、惠子內親王爲賀茂齋、大祓於建禮門前、以命兩齋內親王也。從四位下藤原朝臣古子、无位東子女王、藤原朝臣年子、藤原朝臣多賀幾子、藤原朝臣是子等爲女御。伊豫國力田物部連道吉、鴨部首福主等、叙位一階、道吉等傾盡私產、賑贍窮民、故有此賞。○乙酉、讃岐國人大膳少進從七位上佐伯直正雄賜姓佐伯宿禰、隷左京職。石見國獻甘露、味如飴餹。○丙戌、進山城國火雷神階、授從五位上。遠江國任事、鹿苑兩神、並授從五位下、進大和國丹生川上雨師神階、授正四位下。龍田天御柱

命神、國御柱命神、若宇加乃賣命神、並加從五位上、策命曰、天皇我詔旨仁坐、天御柱國御柱神等乃廣前爾申賜倍止申久、國家乎鎭護賜布爾依天、御位奉授天乃後、年月久成多利、因茲、神祇少副正六位上大中臣朝臣久世主乎差使天、御位上奉利稱奉留、今毛今毛風雨隨時比、五穀豐登之女、天下平安爾、天皇朝廷乎堅磐爾常磐爾護賜比助賜倍止申賜波久止申、○壬辰、追崇外祖父左大臣正一位藤原朝臣冬嗣、爲太政大臣、外祖母尚侍從三位藤原朝臣美都子贈正一位、策命曰、天皇我勅命爾坐宣久、尊祖比敎親須留事波、食國乃恒典奈利、故是以、追弖太政大臣乃官贈賜比崇賜布勅命乎、散位從五位下藤原朝臣雄瀧乎差使弖、申賜久止宣、詔曰、貴德重親、前王之令圖、悼往飾終、有國之通典、朕外祖父左大臣正一位藤原朝臣、風標秀出、器宇凝深、德爲時宗、位居朝棟、至忠報國、世異名新、遺愛在人、身徂德盛、外祖母尚侍從三位藤原氏、自家刑國、以孝率忠、嬪規縟於采蘋、母則賢於大被、春花早落、甑流芳而有餘、石火不留、繼殘焰而仍照、朕寓形苫壤、沉思鼎湖、至哀之餘、懷夫親懿、況國憲有恒、崇班攸

○火雷神、神名式山城國乙訓坐大雷神社（續後紀一二五頁參照）
○任事、神名式遠江國佐野郡己等乃麻知神社、今小笠郡日坂村日坂宿、谷本任事を事任に作る
○鹿苑、同式同國磐田郡鹿菀神社、中泉町二宮
○進大和國、進字は尾イ本及前後の例に據て補ふ
○丹生川上雨師神、大同三年五月壬寅紀（後紀一八頁）に見ゆ
○龍田、官幣大社龍田神社（續紀下三二二頁參照）
○若宇加乃賣命神、官幣大社廣瀨神社なり
○詔旨仁、本朝月令仁を爾に作る
○奉授天乃、乃字衍か
○成多利、月令多を太に作る
○大中臣朝臣、朝臣の二字は下文九月乙未紀に據て補ふ月令に大上の正六位上なし
○今毛今毛、原本上の今を古に作る諸本及月令に據て改む
○外祖父左大臣、左大臣の三字は紀略に據て補ふ
○宣久、久は原本天に作り諸本之に作る何れも久

歸、宜加寵章、式炗拱木、外祖父可贈太政大臣、外祖母可贈正一位、布告遐邇、稱朕意焉、○（廿四）己亥、大雨、大極殿前龍尾道十二丈、爲水潦所決壞、○（廿六）辛丑、從三位藤原朝臣貞子授正三位、无位望子女王從四位下、從四位下廣井女王從四位上、從四位上當麻眞人浦虫正四位下、從五位下菅原朝臣閑子、安倍朝臣鳳子、甘南備眞人伊勢子、安倍朝臣殿子、石川朝臣普子等、並從五位上、外從五位下綾公姑繼、宗形朝臣豐子、无位藤原朝臣宜子、笠朝臣西子等、並從五位下、外從五位下神門臣富繼外正五位下、制、以施藥院司、未立秩限、准造瓦使、四年爲限、○（廿七）壬寅、策命曰、天皇我詔旨止、法師等爾白佐倍止勅大命乎白、大法師圓明乎權律師爾任賜事乎白佐倍止勅大命乎白、○（廿九）甲辰、授筑前國織幡神從五位下、

の訛なれば改む　○風標秀出、風標は風采に同じ出は原本上に作る藤イ本に據て改む　○時宗、當時に於て衆望の歸する人を云　○朝棟、朝廷の棟梁たるを云　○遺愛在人、遺は原本遣に作る諸本に據て改む　○自家刑國、此語晉書温嶠傳論に出づ刑は法なり　○嬪規嬬於采蘋、嬪規は下の母則と對す采蘋は毛詩召南小序に采蘋大夫妻能循法度也嬬は玉篇に繁采飾也とあり　原本規下に親字あり采を宋に作る諸本に據て改め削る　○大被、原本被を奴に作る諸本に據て改む大被は天中記卷十七に呉江夏孟宗少遊學與同學共處母爲作十二幅被其隣婦怪問之母曰小兒無異操懼朋類之不顧故大其被以招貧生之臥庶聞君子之言耳とあり夏孟宗の母を指せり　○春花、少年に喩ふ　○石火、劉子新論惜時篇に人之短生猶如石火炯然以過とあり　○寓形苦壊、苦壊は苦塊に同じく居喪の禮を云儀禮既夕記に寢苫枕塊疏に必寢苫者哀親之在草枕塊者哀親之在土とあり　○寵章、寵は原本冠に作る原本頭注に據て改む　○式炗、炗は說文に光本字明也と見ゆ　○拱木、文選恨賦に拱木斂魂とあり此語左傳僖三十二年に爾墓之木拱矣とあるに出で墳墓を云　○藤原朝臣貞子、仁明天皇女御貞觀六年八月丁巳紀に傳あり　○安倍朝臣殿子、倍は原本陪に作る諸本に據て改む　○无位藤原朝臣宜子、无は原本元に作る諸本に據て改む　○外從五位下神門臣、原本外下に位字あり衍なり諸本に據て削る、神門臣は錄右京神別に天穗日命十二世孫鵜濡渟命之後也と見ゆ　○制以施藥院云云、類史百七及格五に見ゆ　○圓明、東大寺別當次第眞雅の條に僧綱補任云以嘉祥三年七月廿七日壬寅圓明任權律師東大寺別當能治賞云々、圓は原本田に作る諸本及十二月辛亥紀に據て改む　○織幡神、神名式筑前國宗像郡織幡神社（名神大）、岬村鐘崎

○八月（丙午朔）戊申[三]、詔以二遠江國角避比古神一、列二於官社一、先レ是彼國奏言、此神叢社、瞰二臨大湖一、湖水所レ漑、擧土賴レ利、湖有二一口一、開塞無レ常、湖口塞則民被二水害一、湖口開則民致二豐穰一、或開或塞、神實爲レ之、請加二崇典一、爲レ民祈レ利、從レ之、○己酉[四]、右兵衞督正四位下坂上大宿禰清野卒、清野、大納言正二位田村麻呂第四子也、少慣二家風一、武藝絕倫、嵯峨太上皇在二東宮一時、年十八爲二春宮少進一、是時天皇御二武德殿一、特簡二天下騎射拔群之士廿人一、覽二其才品一、爰清野以二春宮少進一、獨參二其選一、又命二步射士佐味香飾麻呂、飯高常比麻呂、清野等三人一競射、清野爲二三人之先鳴一也、天皇甚奇愛レ之、弘仁十年正月叙二從五位下一、爲二陸奧鎭守將軍一、年纔廿七、十一年爲二陸奧介一、十三年爲二右近衞少將一、十四年十一月叙二從五位上一、天長元年、左貶爲二薩摩守一、俄而遷爲二土左權守一、入レ京之後、十年三月叙二正五位下一、爲二陸奧出羽按察使一、夷民和親、關塞無事、承和三年罷レ官歸レ都、卽爲二右馬頭一、數年遷爲二右兵衞督一、兼爲二因幡守一、十二年正月叙二從四位上一、兼爲二相摸守一、嘉祥三年四月叙二正四位下一、齡稍遲晚、老病相迫、有レ意レ避レ官、未レ言氣絕、時年六十二、○庚戌[五]、遣レ使

（八月）角避比古神、神名式遠江國濱名郡角避比古神社（名神大）、今詳ならず神祇志料に土人の口碑に高師山峯連き下諏訪山に角避比古神社の趾とて平地あり其麓の田畑の字を角避下と云り云々とあり

○列於官社、於字は例に據て補ふ

○擧土、土は原本上に作る諸本に據て改む

○己酉、此條は原本庚戌の次に錯在せるを干支を推して此に移す但し紀略も亦本史に同じければ古くより錯誤せるなり

○大納言、田邑麻呂傳記に弘仁元年九月任二大納言一とあり

○正二位、紀略に弘仁二年五月丙辰大納言正三位兼右近衞大將兵部卿坂上大宿禰田村麻呂薨二于粟田別業一贈二從二位一とあり補任亦正三位とす

○先鳴、左傳襄廿一年に州綽曰平陰之役先二二子一鳴、注に自比二於鷄鬪勝而先鳴一とあるに據れり

○土左權守、左は原本佐に作る諸本に據て改む

○關塞、關は原本開に作

る傍注に據て改む
○六十二、二は紀略三に作る
○從五位下橘朝臣永範、五は原本四に作る七月丙子紀に據て改む
○坂上大宿禰、大は四月己酉紀に據て補ふ
○神祇少祐、祐は原本副に作る原本頭注及天安元年十二月紀に據て改む
○中臣朝臣稗守、朝臣の二字は六月丁卯紀に據て補ふ稗は諸本薭に作る
○臣聞云々、全唐文劉允濟天賦に臣聞混成發粹大道含元云々と出づるに據れり
○驛三靈、文選班固典引の注に三靈天地人也とあり驛は馳六幽の馳と相對す
○馳六幽而薦祉、文選典引の注に六幽謂天地四方幽遠之處とあり天地幽遠の處より瑞祥を薦むるを云、原本幽を齒に作る諸本に據て改む
○遊蓮江使、龜を云莊子外物篇に宋元君夢人被髮闚阿門曰予爲清江使河伯之所元君覺使人占之曰此神龜也とあり、江は原本鄉に作る諸本に

五畿七道、班幣諸神、告以即位之由、大祓於建禮門前、以遣使也、參議正四位下滋野朝臣貞主爲相撲守、宮內卿如故、從四位下興世朝臣書主爲治部大輔、從五位下橘朝臣永範爲民部少輔、從五位下小野朝臣貞樹爲刑部少輔、從五位下藤原朝臣菅雄爲木工頭、從五位上藤原朝臣春岡爲左衛門權佐、從五位下藤原朝臣興世爲右衛門權佐、從五位上坂上大宿禰正野爲右馬頭、○癸丑、遣散位正五位下楠野王、神祇少祐正六位上中臣朝臣稗守等、向伊勢大神宮、告以晏子內親王爲齋、○丙辰、公卿抗表曰、臣聞、道粹含元、驛三靈而委貺、德敷齊聖、馳六幽而薦祉、故遊蓮江使、表昌化於堯壇、戲藻波臣、契禎期於軒浦、伏惟、皇帝陛下、則哲承基、窮神闡化、德比天地、明齊日月、荼蓼追思之痛、中宵猶深、草菉攀慕之情、日興彌切、伏見、美作國介從五位下藤原朝臣貞道等奏偁、所管英多郡大領外從八位上財田祖麻呂、於郡下川會鄉英多河石上、獲白龜一枚、又備前國守從四位下藤原朝臣諸成等奏偁、所管磐梨郡少領外從八位上石生別公長貞、於郡下石生鄉雄神河、獲白龜一枚、又石見

據て改む
○戲藻波臣、同じく龜を云莊子外物篇に我(鮒魚)東海之波臣也とあり承和十五年六月壬辰の勅に是以遊蓮瑞質表昌化於堯壇戲藻奇姿契禎期於軒浦と見ゆ。
○則哲、尙書皐陶謨に知人則哲とあり
○荼蓼追思之痛、荼は苦菜蓼はタデ、荼蓼にて苦痛の意先帝追慕の大御心の日夜止むことなきを云
○猶深、原本獨深に作る前本藤本中本に據て改む
○草菜攀慕之情、菜は原本菜に作る諸本に據て改む正字通に菜俗枲字とあり草菜或は苴菜の訛か禮記間傳に斬衰貌若苴齊衰貌若枲云々此哀之發於容體者也
○日興、原本日を曰に作る諸本に據て改む
○財田、財は原本賊に作る諸本に據て改む
○川會鄕、倭名抄に見ゆ會は原本倉に作る諸本及紀略に據て改む
○英多河、今の東川なるべし
○石生鄕、倭名抄に石生は伊波奈須と訓めり

國守從五位下笠朝臣岑雄等奏偁、所管安農郡川合鄕甘露降、臣等謹案、禮含文嘉云、外內之制、各得其宜、則山澤出靈龜、瑞應圖云、王者和氣茂、則甘露降於草木、食之令人壽、方今聖人啓祚、禎符惟新、令至治於太淸之治、同至德於帝堯之德、不任抃躍之至、謹詣闕庭、陳賀以聞、帝謙而不當之、○丁巳(十二)、遣右中辨從四位下藤原朝臣氏宗、向賀茂社、中宮亮正五位上藤原朝臣良仁向松尾社、並告以卽位之由、○甲子(十九)、群臣奏瑞、相趁無已、勅曰、祥符所感、在盛德而應稱、顯慶斯臻、豈非虛之可信、朕自在大哀、事聽冢宰、德未動近、化何覃幽、而今白龜甘露之祥至、令卿等表賀、朕之荒思、自知不堪、夫無災而患、著自前蹟、恃瑞而凶、非無往鑒、況上德不德、盛德之祥無聞、大聖絕聖、應聖之瑞自廢、誠能道德成曹、仁義爲巢、若二儀之不言、若四時之潛運、則万人仁壽、誰須千歲之靈龜、百物咸盈、豈慮曠時之甘液、漢光晉武、足爲吾師、陳賀之言、非攸欲聽、○丙寅(廿一)、公卿重上表、以求賀瑞、帝以苦請難拒、許之、○戊辰(廿三)、遣散位從五位下高原王、向豐前筑前兩國、以寶劔、明鏡、名香、綵帛等、奉八幡宮及香椎廟、○己(廿四)

巳、天南有レ聲、如レ雷、○辛未(廿六)、地震、從二西北一來、雞雉皆驚、

○九月乙亥朔、日有レ蝕之、○壬午(八)、遣三宮主正六位下占部雄貞、神琴師正六位上菅生朝臣末繼、典侍正五位下藤原朝臣泉子、御巫無位榎本連淨子等、向二攝津國一祭中八十嶋上、是日右京人村主岑成、於二攝津國嶋上郡河上一、獲二白龜一獻レ之、○甲申(十)、詔以二伊勢國多度大神一、列二於官社一、同國天照大神禰宜從八位下神主繼長、豐受大神宮禰宜從八位上神主土主等、授二外從五位下一、○乙酉(十一)、遣下少納言從五位上鎌藏王、內藏頭從五位下中臣朝臣壹志等、向二伊勢大神宮一、依レ例奉レ幣、別獻二細馬五疋一、以充中神御上、○戊(十四)

○雄神河、蓋今の吉井川にて英多川の下流なり ○安農郡、神名式民部式並に安濃に作り倭名抄亦同じされど下文にも安農とあれば改めず ○川合郷、倭名抄に見ゆ、郷は原本郡に作る諸本に據て改む ○禮含文嘉、嘉は原本素に作る藤本に據て改む、太平御覽卷八百七十三所引內外之制各得二其宜一則山澤出二鎭寶石一とあり ○太淸之治、淮南子本經訓に太淸之始也和順以寂漠、注に淸靜也太淸無爲之始者謂二三皇之時和順不レ逆二天暴一物也とあり ○不當之、之字は紀略に據て補ふ ○可信、可は原本傍書に一本所に作るといひ信は頭注に一作レ任とあり ○大哀、續後紀承和十年正月丁未紀に朕自レ在二大哀一とあり原本衰に作るは哀の訛なり大哀の文字は莊子齊物論に見ゆ ○事聽冢宰、君喪にあれば百官己を總べて冢宰に聽くこと古制なり尙書伊訓にも見ゆ ○白龜、白は原本日に作る諸本に據て改む ○令卿等、令は原本今に作る諸本に據て改む ○荒思、荒は原本悲に作る諸本に據て改む ○著自前蹟、自は原本白に作る諸本に據て改む ○徒鑒、徒は原本狂に作る閣本中本等に據て改む ○上德不德、老子の語 ○絕聖、絕は原本施に作る諸本に據て改む 老子十九章に絕レ聖棄レ智民利百倍とあり ○成曹、原本曹を胄に作る閣本に據て改む諸本曹に作るは曹の異體なり ○仁義爲巢、陸賈新語輔政に聖人居二高處一上則以二仁義一爲レ巢とあるに據て出づ ○二儀、天地なり ○漢光晉武、漢光は後漢光武帝なり後漢書に中元元年京師醴泉出赤草生郡國言二甘露降一群臣奏言靈物仍降宜下令二太史一撰集以傳中來世上帝不レ納常自謙無レ德每二郡國所一レ上輙抑而不レ當（節略 晉武は晉の武帝なり通鑑に太康五年正月有二靑龍二一見二武庫井中一帝觀レ之有二喜色一百官將レ賀、尙書左僕射劉毅表曰昔龍降二夏庭一卒爲二周禍一云々尋二案舊典一無二賀龍之禮一帝從レ之とあり

（九月）占部、卜部に同じ ○神琴師、琴彈きなり臨時祭式に御琴彈とあり ○御巫、巫は原本巠に作る前本谷本及紀略に據て改む ○祭八十嶋、住吉神大依羅神各四座海神垂水神住道神各二座を祭りて狹國は廣く峻國は平けく嶋の八十嶋墜る事なく依し奉る事を祈るなり參向の人員は臨時祭式に見ゆ、祭字は紀略に據て補ふ ○右京人村主、原本人村を大夫に作る諸本及紀略

○に據て改む
○獻之、紀略獻上に以字あり
○多度大神、神名式伊勢國桑名郡多度神社（名神大）とあり國幣大社多度神社是なり
○官社、官は原本宮に作る諸本及紀略に據て改む多度神を官社に列すること下文十月癸丑紀に再出す
○繼長、類聚大補任に貞觀四年六月叙㆓外從五位上㆒十二月叙㆓外正五位下㆒同七年十二月叙㆓從五位下㆒とあり
○豐受大神宮、紀略宮字なし從ふべし
○土主、主は藤イ本生に作る禰宜補任に禰宜外從五位下神主土主在任十三年四門五月丸四男也とあり
○鎌藏王、藏は續後紀承和十一年正月紀倉に作る
○伊勢大神宮、大神宮の三字原本國の一字に作る類史（三）紀略に據て改む
○細馬、細は原本納に作る諸本及類史紀略に據て改む細馬は良馬なり
○先先爾、類史に先の一字なし

子、遣㆓參議左兵衛督正四位下藤原朝臣助㆒、向㆓賀茂大神社㆒、策命曰、天皇我詔旨止、掛畏支大神乃廣前爾申賜倍止申久、先先爾禱申賜倍留御馬幷神財乎、九月爾潔備天、奉出賜波波可吉止卜申利、故是以神財乎設備天、潔捧天奉出須、但御馬波、馬寮內爾有穢爾依弖、此度波不㆓奉出㆒、來年乃四月乃祭爾設備天奉出无、此狀乎聞食天、天皇朝廷乎堅磐爾常磐爾、天下平安爾護賜比矜賜倍止、恐見恐見毛申賜波久止申、○己丑十五、亦遣㆓參議藤原朝臣助㆒、向㆓春日大神社㆒、策命曰、天皇我詔旨止、大神乃廣前爾申賜倍止申久、皇大神乃厚護爾依天之、天日嗣乃高御座爾波、平介久聞賜止奈毛所念行須、因㆑茲天、先先爾禱申賜比之御冠止爲天奈毛、建御賀豆智命、伊波比主命二柱乃大神乎波正一位爾、天兒屋根命乎波從一位爾、比賣神乎波正四位上爾上奉利崇奉留狀乎、神財乎令㆓捧持㆒天奉出須、此狀乎聞食天、益益爾天皇朝廷乎、堅磐爾常磐爾幸倍奉賜比、天下平安爾護賜比助賜倍止、恐見恐見毛申賜波久止申。詔曰、乾鑒不㆑測、隨㆓皇化㆒而効㆑靈、神理非㆑遙、應㆓人事㆒而通㆑感、是以

○可吉止卜申利、舊版本吉以下三百二十字を脫せしを明和八年十一月源元寬の本を以て補刻す閣本前本中本藤本等諸本何れも元寬本と同じ吉は原本告に作る類史に據て改む○依弖、原本弖字なし類史に據て補ふ○朝廷、廷は原本庭に作る谷本淀本に據て改む下同じ○堅磐爾、爾は原本なし閣本中本藤本等に據て補ふ下同じ○正四位上爾、原本上の下に乃御冠の三字あり閣本前本中本等に據て削る○恩有所漸、漸は玉篇に進也又浸也染也とあり○龜龍不祕幽贊之符、白龜の現れたるを云幽贊は易說卦傳に幽贊於神明而生蓍とあるに出づ○雲露云云、甘露の降れるを云○群言、群は原本郡に作る諸本に據て改む○集蓼之痛、毛詩周頌小毖章に予又集于蓼、疏に我又集止於患難似蓼棻之辛苦然とあり集は會也辛苦に會ふを云○擠壑之慮、左傳昭十三

恩有所漸、龜龍不祕幽贊之符、德有相覃、雲露豫彰昇平之瑞、朕上遵遺制、下酌群言、辭不獲免、遂踐皇極、然猶集蓼之痛彌切、擠壑之慮未申、譬涉大川罔知攸濟、卽知、天上甘露之淵、未必爲朕而灑、水中神蔡之智、豈能賴朕而浮、故斷尙書之章、不聽群公之賀、而今攝津畿服之地、亦獲神龜而獻之、僉謂、不世之鴻符、難得而廢矣、朕重違敦請、再三念之、若是百神七廟之顧復万民、三槐九棘之緝熙庶績之所致者乎、有司其擇吉日、告於宗社、夫封壇馬齒、獻瑞不恒、天貺攸降、理須優異、宜特令攝津國嶋上郡、莫輸今年之調、美作國英多郡、石見國安農郡、備前國磐梨郡、並免當年之庸、獲龜之人岑成等、叙從六位上、賜物准例、天下祝部、各免其租、又五畿內七道諸國、承和六年以往調庸未進、咸從免除、溥以膏潤、由茲惠液之祥、布以至和、協彼長生之瑞、是日內供奉大法師圓仁奏、置天台總持院十四禪師、簡練行者以充之、永不絕、○十八壬辰、授播磨國足速手速神從五位下、○廿一乙未、遣神祇少副正七位上大中臣朝臣久世主、向攝津國住吉大神社、奉寶幣、賽宿禱也、○廿三丁酉、進參議左衛門督正四位下

藤原朝臣長良階從三位、先是七月大水、山埼橋斷、帝以爲、河橋易壞、依水浸齧、得其便地、自無取害、是日詔、遣中納言安倍朝臣安仁、源朝臣弘、參議滋野朝臣貞主、伴宿禰善男等、就山埼、以察利害、求其便地、乃定置橋、○庚子、(廿六)遣侍從從五位上嶋江王、向伊勢大神宮、神祇大副從五位下中臣朝臣逸志、向賀茂大神社、神祇權少祐正六位上占部業基、向尾張大神社、告以賀瑞之由、大祓於建禮門前、以遣使也、又下知五畿七道諸國、班幣名神、同告賀瑞之由、是日伊勢齋內親王禊於鴨河、勅遣從四位下右中辨藤原朝臣氏宗、從修禊事、

年に楚靈王聞群公子之死、自投于車下、曰人之愛其子也亦如余乎、侍者曰甚焉、小人老而無子、知擠于溝壑矣、林注に言小人若身已老而無子息、死而墜填溝壑可知さあるに據れり二句共に先帝の崩御を痛念し給ふを云　○罔知攸濟、濟は渡なり罔は原本同に作る閣本前本谷本に據て改む　○神蔡、蔡は大龜なり論語公冶長篇に臧文仲居蔡、注に蔡國君之守龜出蔡地因以爲名焉さあり　○群公、公は原本臣に作る諸本に據て改む、群公は群卿さ云に同じ　○畿服、畿內さ云に同じ　○不世、不世出さ云に同じ五百年或は千年に一度出で世毎には出でざるを云　○百神、諸神を云　○七廟、曲禮に出づ已に注す、下文に見ゆる山科陵以下を指せり　○顧復、毛詩小雅蓼莪章に顧我復我、注に顧旋視也復反覆也さあり　○三槐九棘、周禮秋官朝士に見ゆ已に注す　○緝熙庶績、緝熙は毛詩大雅文王章に出で緝は續熙は明也さ注し庶績は尚書堯典に庶績咸熙さありて績は功也さ注す　○封壇馬鬣、詳ならず或は誤あらむか壇は閣本前本藤本谷本壝に作り中本壇に作る　○不恒、恒は原本垣に作る藤本山崎本に據て改む　○內供奉、宮中內道場に供奉する高德の僧を云十人あるを以て十禪師さも又內供奉禪師さも云　○十四禪師、叡岳要記に十四人の名見ゆ　○練行者、練は原本湅に作る諸本に據て改む　○永不絕、永下恐くは脫字あらむ　○足速手速神、式外詳ならず　○正七位上大中臣朝臣、七月丙戌條七を六に作る　○住吉大神、官幣大社住吉神社　○賽宿禱也、也は原本之に作る藤本に據て改む　○七月大水、月は原本日に作る尾本前本藤本に據て改む　○山埼橋、乙訓郡離宮八幡宮の邊より綴喜郡八幡町橋本に架く、埼は原本崎に作る諸本に據て改む下同じ　○尾張大神社、熱田神宮

（十月）丁未勅、勅字は谷本及紀略に據て補ふ

○冬十月乙巳朔、從五位下文室朝臣笠科爲勘解由次官、正五位下菅

○山科山陵、以下深草山陵に至る八陵なり前田原山陵を除けば七陵にて上に七廟と云ふに合へり
○安倍朝臣弘行、倍は原本陪に作る中本谷本に據て改む
○大原山陵、續後紀承和七年五月紀を參看すべし
○參議從四位上伴宿禰、原本參を藤に作る諸本に據て改む
○甘露、天武紀七年十月紀(紀下二七九頁)に見ゆ
○進出天、天は諸本に據て補ふ
○稻荷神、續後紀承和十年十二月戊午紀に見ゆ
○廣田神、神名式攝津國武庫郡廣田神社(名神大月次相嘗新嘗)大社村廣田、官幣大社に列す、神功紀に注す
○大和大國魂神、同式大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座(並名神大月次相嘗新嘗)、朝和村新泉、官幣大社に列す
○石上神、已に注す
○大物主神、同上
○葛木一言主神、神名式大和國葛上郡葛木坐一言主神社(名神大月次新嘗)、今南葛城郡吐田郷村

原朝臣是善爲加賀權守、文章博士如故、○三丁未、勅賜忠良親王帶劔、○五己酉、遣中納言正三位源朝臣定、左京大夫從四位上正行王、向山科山(天智)陵、散位從五位下春原朝臣末繼、內舍人從六位下安倍朝臣弘行向前(施基)田原山陵、右京大夫從四位下藤原朝臣諸成向後(光仁)田原山陵、參議正四位下滋野朝臣貞主、掃部頭從五位下滋野朝臣善蔭向柏(桓武)原山陵、中納言從三位源朝臣弘、彈正大弼從四位上藤原朝臣衞向楊梅(平城)山陵、中納言正三位安倍朝臣安仁、從四位下宮內大輔房世王向嵯(嵯峨)峨山陵、從三位大藏卿平朝臣高棟、散位從四位下藤原朝臣輔嗣向大(淳和)原山陵、參議從四位上伴宿禰善男、侍從從五位下藤原朝臣諸葛向深(仁明)草山陵、告以賀瑞之由、策文曰、天皇恐見恐毛、掛畏支山陵爾申賜倍止申久、維嘉祥三年八月十七日爾、公卿等奏世良久、攝津國、美作國、備前國、並獻白龜、石見國獻甘露、禮良久乎進止奏世利、如此支希世留大瑞波、是薄德乃可令感致支物爾波非須、掛畏支山陵乃慈賜比示賜倍留物奈利止爲天奈毛、貴喜比、受賜利畏万留狀乎、進出天恐見恐見毛申賜波久止申、○七辛亥、進山城

國稻荷神階、授從四位上、授攝津國廣田神從五位下、進大和國大和大國魂神階、授從二位、石上神、及大神大物主神、葛木一言主神等、並正三位、夜岐布山口神從五位下、河內國恩智大御食津彦命神、恩智大御食津姬命神等、並正三位、丹比神從五位上、伊勢國阿耶賀神從五位上、尾張國熱田神正三位、越前國氣比神正二位、筑前國宗像神從五位上、竈門神從五位上、筑後國高良玉垂命神從四位上、肥後國健磐龍命神正三位、伊豆國三嶋神從五位上、○壬子、伊豆國伊古奈比咩命神、阿波神、物忌奈乃神、並授從五位上、近江國伊富岐神從五位下、紀伊國伊太祁曾神從五位下、○癸丑、以伊勢國多度神、列於官社、○戊午、從四位上藤原朝臣衞爲勘解由長官、從五位下藤原朝臣雄瀧爲攝津守、○己未、信濃國御名方富命神、健御名方富命前八坂刀賣命神、並加從五位上、○庚申、出羽國上言、地大震裂、山谷易處、壓死者衆、○甲子、遣左馬助從五位下紀朝臣貞守、向紀伊國日前國懸大神社、策命曰、天皇我詔旨止、掛畏大神等乃廣前爾申給倍止申久、先先爾神財奉進牟止禱申賜比支、故是

森脇
○山口神、同式同國添上郡夜支布山口神社（大月次新嘗）、大柳生村大柳生
○恩智大御食津彦命神、同式河內國高安郡恩智神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）、今中河內郡南高安村恩智
○丹比神、同式同國丹比郡丹比神社、今南河內郡丹比村多治井
○阿耶賀神、同式伊勢國壹志郡阿射加神社三座（並名神大）、今阿阪村大阿阪小阿坂
○熱田神、已に注す
○氣比神、同上
○宗像神、續後紀承和七年四月丙寅紀に見ゆ
○竈門神從五位上、承和七年四月丙寅紀に從五位上に進むとあれば正五位下の誤なるべし貞觀元年正月甲申紀を參看すべし
○高良玉垂命神、續後紀承和七年四月丙寅紀に見ゆ
○健磐龍命神、同上
○三嶋神、神名式伊豆國賀茂郡伊豆三嶋神社（名神大月次新嘗）、今田方郡三嶋町、官幣大社に列す
○伊古奈比咩命神、同式

同國同郡伊古奈比咩命神社(名神大)、白濱村白濱、原本伊字なく古を右に作る諸本及類史十四に據て改め補ふ
○阿波神、同式同國同郡阿波神社(名神大)、神津嶋
○物忌奈乃神、同式同國同郡物忌奈命神社(名神大)、神津嶋
○並授從五位上、從は諸本及類史に據て補ふ
○伊富岐神、神名式近江國坂田郡伊夫伎神社、伊吹村伊吹
○伊太祁曾神、同式紀伊國名草郡伊太祁曾神社(名神大月次相嘗新嘗)、今海草郡西山東村伊太祁曾、官幣中社に列す
○己未、此條原本庚申の次にありしを干支を推して此に移す但し紀略も亦到置せるに據れば其誤れること久し
○御名方富命神、已に注す、名は式に據て補ふ
○健御名方富命、持統紀五年八月に注す健原本建に作る藤本に據て改む
○前八坂刀賣命神、刀は原本力に作る類史に據て改む

以、種種乃神財平潔備天、令捧持天奉出須、此狀平聞食天、天皇朝廷平、常磐爾堅磐爾、護幸奉賜比、天下平安爾矜賜比助賜倍止、恐見恐見毛申給波久止申。同日、遣同貞守於坐伊太祁曾神社、策命曰、天皇我詔旨爾申給久、御冠授奉牟止禱申賜比之爾依天、從五位下乃御冠爾上奉利崇奉留狀平、御位記令持天、奉出須此狀平聞食天、天皇朝廷平、常磐爾堅磐爾、護幸奉賜倍止申給久止申。亦遣右中辨兼右近衞中將從四位下藤原朝臣氏宗、向園神韓神等社、策命曰、天皇我詔旨爾申給久、御冠奉授无止禱申賜比之爾依天、從五位下乃御冠平奉授利崇奉留狀平、御位記令持天、奉出須此狀平聞食天、天皇朝廷平、常磐爾堅磐爾、護幸奉賜倍止申給久止申。○乙丑(廿二)、紀伊國伊達神、志摩神、靜火神、並加從四位下。○丁卯(廿三)、屈七十僧於東宮、轉讀大般若經、別請七僧於清涼殿、修法印咒、並限三日、爲國祈也。詔以壹岐嶋天手長男、天手長比咩兩神、列於官社。○十一月甲戌朔、詔以伊豆國伊古奈比女、安房、物忌奈三神、列於官社。○己卯(六)、從四位下治部大

○日前國懸大神、神名式紀伊國名草郡日前神社（名神大月次相嘗新嘗）、國懸神社（同上）、今海草郡宮村秋月、官幣大社
○禱申賜比支、禱は原本祈に作る諸本に據て改む下同じ
○常磐爾、爾は原本なし諸本に據て補ふ
○於坐、坐字恐くは下文申給の上にあるべきなり
○策命曰、策命の二字藤本に據て補ふ
○常磐爾、爾字は諸本に據て補ふ
○護幸奉賜倍止、賜字は藤本及類史に據て補ふ
○右中辨、原本中を大に作る上文八月丁巳條に據て改む
○園神韓神、神名式に宮內省坐神三座（並名神大月次新嘗）園神社、韓神社二座
○御冠乎、乎は原本爾に作る谷本及類史に據て改む
○此狀乎、乎は類史に據て補ふ
○常磐爾、爾は諸本に據て補ふ
○伊達神志摩神靜火神、續後紀承和十一年十一月

輔興世朝臣書主卒、書主、右京人也、本姓吉田連、其先出レ自二百濟一、祖正五位上圖書頭兼內藥正相摸介吉田連宜、父內藥正正五位下古麻呂、並爲二侍醫一、累代供奉、宜等兼長二儒道一、門徒有レ錄、書主爲レ人恭謹、容止可レ觀、昔者嵯峨太上天皇在藩之時、殊憐二其進退一、延曆廿五年爲二尾張少目一、大同四年四月爲二縫殿少允一、弘仁元年正月遷爲二內匠少允一、四年五月遷爲二左兵衞權大尉一、七年二月轉爲二左衞門大尉一、兼二行撿非違使事一、有レ頃遷爲二右近衞將監一、書主雖レ長二儒門一、身稍輕捷、超二躍高岸一、浮二渡深水一、猶同二武藝之士一、能彈二和琴一、仍爲二大歌所別當一、常供二奉節會一、新羅人沙良眞熊、善彈二新羅琴一、書主相隨傳習、遂得二祕道一、弘仁八年正月叙二外從五位下一、拜二織部正一、九年正月爲二和泉守一、治聲頗聞、十二年正月叙二從五位下一、十四年正月叙二從五位上一、爲二備前守一、是時和泉罷レ任、未レ歸二京師一、便道之任、政化淸平、天長四年遷爲二左京亮一、五年二月拜二筑後守一、因二身病困一、確辭不レ行、八年二月更爲二左京亮一、承和四年上請、改レ姓爲二興世朝臣一、七年正月爲二信濃守一、九年正月叙二正五位下一、十二年拜二木工頭一、十四年正月叙二從四位下一、嘉祥三年八月遷

爲治部大輔、以年老身衰、聊披山林之地、常發觀念之業、卒時年七十三、○辛卯、帝以諒闇故、不親祭事、所司齋潔、祇奉舊章、○壬辰、右大臣於侍從局、錄親王已下五位已上見在座者奏之、○癸巳、依大臣所奏簿錄、進新嘗會宴、賜祿有差、○乙未、進越前國金山彦神階、加從四位下、○丙申、詔曰、紫極高映、運亭毒而不言、黃屋尊居、播惠愛而無恃、故勛華繼躅、未隔於勤勞、禹履垂風、猶同於含育、朕忝奉先訓、虔撫令圖、飡荼蓼以銷神、膽蒸庶以剋思、而今至誠不暢、小信未孚、陰德愆和、柔祇告譴、出羽州壤、偏應銅龍之機、邊府黎甿、空被梟禽之害、邑居震蕩、踏厚載而不安、城柵傾頽、想艱虞而益恐、咸須子視、或至於死傷、獨作母臨、何懈於拯救、宜馳星使、就展恩光、其被災尤甚、不能自存、使國商量、蠲免租調、並不問民狄、開倉廩貸振、其生業莫使重困、崩墻毀屋之下、所有殘屍露骸、官爲收埋、務申優恤、庶俾委凍者、知挾纊之溫、阻飢者得廩窖之飽、從四位上清原眞人瀧雄爲治部大輔、授正六位上安堺宿禰良棟外從五位下、○戊戌、惟仁親王爲皇太子、策命曰、天皇我詔旨勅命乎、親王諸王諸臣

辛亥紀に見ゆ、火は原本大に作る藤本及類史に據て改む
○天手長男天手長比咩、神名式壹伎嶋石田郡天手長男神社(名神大)、天手長比賣神社(名神大)、柳田村物部
(十一月)安房神、上文に阿波神さあり
○興世朝臣書主卒、書主は本姓吉田宿禰なりしが下文の如く承和四年六月興世朝臣の姓を賜へり
○出自百濟、錄左京皇別に吉田連觀松彦香殖稻天皇(諡孝昭)皇子天帶彦國押人命四世孫彦國葺命之後也云々さあり續後紀承和四年六月己未紀を參看すべし
○古麻呂、古は原本右に作る諸本に據て改む
○在藩之時、東宮にて坐す時なり
○尾張少目、私記に攷文云按尾張上國目无大少之道按在延暦之時不可必執式文非之
○新羅人、羅は原本罪に作る諸本に據て改む
○沙良眞熊、寶龜十一年五月紀に姓廣岡造を賜ふこさ見ゆ

○弘仁八年正月、弘仁の二字は衍なるべし正は原本六に作る類史九十九に據て改む
○因身病困、困は原本因に作る中本谷本に據て改む
○叙正五位下、正字は諸本に據て補ふ
○木工頭、原本木を水に作る諸本に據て改む
○觀念之業、觀念は佛陀を觀察思念するを云
○齋潔、紀略潔齋に作る
○在座者、貞信公記に延長九年正月一日停止節會又無小朝拜親王公卿陣頭聊有飮食非侍從大夫皆預見參其祿法准十六日是嘉祥三年十一月十九日例也とあり
○有差、有は原本在に作る藤本中本谷本及類史九に據て改む
○金山彥神、式外、敦賀郡粟野村金山
○丙申詔曰、類史百七十一に出づ
○亭毒、已に注す
○黃屋尊居、黃屋は漢書賈誼傳に出づ居は中本谷本及類史に據て補ふ
○勛華繼躅、勛華は放勛重華にて堯舜を云、躅は

百官人等、天下乃公民、衆聞食止宣、隨法爾可有岐政止志天、惟仁親王乎立而皇太子止定賜布、故此之狀乎悟弖、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣。大納言從二位源朝臣信爲東宮傅、參議正四位下藤原朝臣良相爲春宮大夫、從五位下大枝朝臣音人爲東宮學士、從五位下藤原朝臣冬緒爲春宮亮。○壬寅、(廿九)參議正四位下藤原朝臣良相爲左大辨、春宮大夫、左近衞中將、陸奥出羽按察使如故、從四位下藤原朝臣氏宗爲右大辨、右近衞中將如故、正五位下藤原朝臣貞守爲右中辨、備前守如故、從五位下橘朝臣時枝爲內匠頭、從五位下南淵朝臣年名爲式部少輔、從五位下藤原朝臣恒雄爲伊勢介、橘朝臣數岑爲尾張守。○癸(三十)卯、遣中納言正三位安倍朝臣安仁、宮內大輔從四位下房世王等、向嵯峨山陵、遣參議左兵衞督正四位下藤原朝臣助、正四位下大舍人頭高枝王等、向深草山陵、策文曰、天皇我恐美恐美毛、掛畏支御陵爾申賜倍止申久、食國乃法止定賜比行賜倍留法隨爾可有岐政止之天、惟仁親王乎立天、皇太子止定賜布、此狀乎恐美恐美毛申賜久止申。○十二月(甲辰朔)庚戌、(七)詔以上野

原本燭に作る類史百七十一に據て改む
○禹殷垂風、禹は夏の禹王、殷は殷の湯王なり垂は原本乘に作る藤本谷本及類史に據て改む
○剡思、剡は原本判に作る諸本及類史に據て改む
○柔祇、文選月賦注に柔祇は地也とあり
○應銅龍之機云々、以下想艱虞までは上文十月庚申紀に見ゆる出羽國大震災の事を云銅龍之機は後漢書張衡傳に造候風地動儀以精銅鑄成員徑八尺合蓋隆起形似酒尊外有八龍首銜銅丸下有蟾蜍張口承之其牙機巧制皆隱在尊中如有地動尊則振龍機發吐丸而蟾蜍銜之振聲激揚伺者因此覺知とあり一種の地震計なり
○厚載、地を云易坤卦の彖傳に坤厚載物とあるに出づ
○須子視、子視は母臨の對語なり
○星使、使臣なり已に注す
○使國、私記に或云勅使國使、玄道按當有司字と云り

國甲波宿禰神、列於官社、○辛亥、補僧綱、策命曰、天皇我詔旨止、法師等爾白左閇止宣勅命乎白、律師道雄乎權少僧都爾、權律師圓明乎律師爾任賜事白左閇止宣勅命乎白、○丁巳、雷、何以書之、記異也、○戊午、屈僧徒、禮佛懺悔、○癸酉、進河內國和爾神階、加從五位上、堤津嶋女神從五位下、

○民狄、狄は原本牧に作る類史に據て改む
○貸振、貸は原本藏に作る諸本及類史紀略に據て改む類史振下一字闕字とす
○挾纊、左傳宣十二年に三軍之士皆如レ挾レ纊、注に纊綿也とあり
○廪窂、後漢書劉虞傳に牢稟逋懸、注に牢賈直也稟食也とあり糧食の意なり
○備前守如故、續後紀嘉祥三年正月甲午紀に藤原朝臣貞守爲二兼備前介一とあり補任には守とす
○癸卯、癸は原本玉に作る諸本に據て改む
○遣參議左兵衛督、遣字は閣本藤本に據て補ふ
○天皇我恐美恐美毛、上の美字は原本見に作る前本中本谷本に據て改む
(十二月)甲波宿禰神、神名式上野國群馬郡甲波宿禰神社、金嶋村川嶋
○和爾神、式外詳ならず
○堤津嶋女神、堤下に根字脫ちたるかと思へど類史十四にもなく諸本亦同じければ古くより無かりしなるべし、堤神は神名式に河内國茨田郡堤根神社とあり今北河内郡大和田村野口にあり、津嶋女神は同式同國同郡津嶋部神社(鍬靫)とあり今北河内郡庭窪村金田にあり

日本文德天皇實錄卷第二

日本文德天皇實錄卷第三

起仁壽元年正月盡十二月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

仁壽元年(辛未)春正月甲戌朔、帝不受歲賀、以諒闇未終也、○甲申(十一)、正六位上長統王、藤原朝臣眞數、紀朝臣永直、坂上大宿禰當岑、橘朝臣數雄、丹墀眞人高主、伴宿禰三宗等、並授從五位下、正六位上高丘宿禰百興、高狩忌寸清貞、春良宿禰藥麻呂等、並授外從五位下、參議正四位下小野朝臣篁爲近江守、參議正四位下藤原朝臣助爲信濃守、左兵衞督如故、參議從四位上伴宿禰善男爲美作守、中宮大夫式部大輔如故、從五位下藤原朝臣松影爲山城守、從五位下藤原朝臣正世爲河內守、外從五位下上毛野朝臣綱主爲和泉守、從五位下善友朝臣穎主爲攝津權介、外從五位下高丘宿禰百興爲尾張介、從五位下橘朝臣數雄爲遠江守、正五位下楠野王爲駿河守、從五位下小野朝臣貞樹爲甲斐守、正五位下

【仁壽元年】

○當岑、當は原本常に作る諸本及類史九十九に據て改む下同じ

○清貞、類史九十九に清眞に作る

○並授外從五位下、並字は藤本及類史に據て補ふ

○左兵衞督、左は原本右に作る承和十五年正月甲戌紀に據て改む

○上毛野朝臣、毛は原本平に作る諸本及齊衡二年正月戊子紀に據て改む

○貞樹、樹は原本村に作る諸本及嘉祥三年八月庚戌紀に據て改む

橘朝臣眞直爲相摸權守、從五位下橘朝臣末茂爲下總守、長統王爲上野介、正四位下南淵朝臣永河爲下野守、從五位下坂上大宿禰當岑爲出羽守、丹墀眞人高主爲若狹守、良岑朝臣清風爲加賀介、從五位上紀朝臣椿守爲越中權守、從五位下三原朝臣朝主爲能登守、從五位上豐階公安人爲丹後權守、從四位下滋野朝臣貞雄爲但馬權守、從五位下藤原朝臣秋常爲因幡守、藤原朝臣忠岑爲伯耆守、外從五位下春良宿禰藥麻呂爲出雲介、從四位上源朝臣勤爲阿波守、從五位下高階眞人岑緒爲伊豫守、從五位下物部首廣泉爲權掾、內藥正侍醫如故、從五位下小野朝臣千株爲土左權守、右近衛少將如故、從五位下藤原朝臣眞數爲筑前守、山口朝臣春方爲筑後守、外從五位下內藏朝臣雄繼爲豐前介、從五位下伴宿禰三宗爲鎭守將軍、○乙酉、(十二)地震、○庚子、(廿七)詔、天下諸神、不論有位無位、敍正六位上、○癸卯、(三十)加越前國足羽神從四位下、是夜有流星、大如斗、餘光久之乃滅、○二月乙巳、(甲辰朔 二)地震、○辛亥、(八)從五位上藤原朝臣關雄爲治部少輔、美志眞王爲諸陵頭、從五位下丹墀眞人氏永爲

○永河、永は原本氷に作る諸本及承和六年八月己巳紀・天安元年二月甲申紀に據て改む
○千株、千は原本于に作る前本藤本中本に據て改む下同じ
○土左權守、左は原本佐に作る諸本に據て改む
○庚子詔、此詔太政官符として三代格一に載す
○足羽神、神名式越前國足羽郡足羽神社、福井市足羽上町
○如斗、晉書天文志元帝景元四年六月に有大流星二、並如斗とあるに出づ斗は酒を酌む器なり
○餘光、光は紀略に據て補ふ
(二月)關雄、關は原本開に作る閣本藤本に據て改む下同じ

〇正親正、原本正親王に作る前本谷本に據て改む
〇別制大原野祭儀、大原野神社は山城國乙訓郡大原野にあり祭神春日に同じ廿二社註式に舊記云仁壽元年二月二日依二太皇太后御祈一山城國葛野郡大原野仁宮柱廣知立春冬乃御祭加賜さ見え祭儀は儀式に載す
〇諸藤、藤は原本勝に作る諸本及嘉祥三年五月甲午紀に據て改む
〇興岑王、王は原本主に作る諸本に據て改む
〇六位二人、攷文に六位下恐脫二以下二字一
〇嘉祥寺、山城志に紀伊郡嘉祥廢寺瓦町邑有二地名嘉祥寺畠一さ云此寺の事清和紀貞觀元年三月大僧都眞雅上表にも見ゆ私記云棄レ殿爲二佛刹一蓋昉二于此一
〇讌寢、讌は原本譙に作る諸本及類史紀略に據て改む讌は醼に同じ字彙に醼は合飮與レ宴同、寢は堂室也、古者正朝曰二路寢一次曰二燕寢一さあり
〇不忍、忍は原本思に作る諸本及類史紀略に據て改む

刑部少輔橘朝臣茂房爲掃部頭、善永王爲正親正、從四位上源朝臣生爲左京大夫、從五位下藤原朝臣興世爲陸奧守。〇（十二）乙卯、別制大原野祭儀、一准梅宮祭。〇（十三）丙辰、定先皇御忌齋會行事司、左京大夫從四位上源朝臣生、雅樂頭從五位下藤原朝臣貞敏、侍從橘朝臣信蔭、藤原朝臣諸藤等、六位以下七人爲莊嚴堂舍司、右京大夫從四位下藤原朝臣諸成、散位從五位下山田宿禰古嗣、藤原朝臣有貞、丹墀眞人繩主、藤原朝臣長基、大炊頭外從五位下蕃良朝臣豐持、六位以下五人爲辨備僧供司、散位從五位下興岑王、利見王、伴宿禰龍男、藤原朝臣備雄等、六位二人爲撿挍講讀二師房司、散位從五位下春枝王、永貞王、治部少輔藤原朝臣關雄、散位田口朝臣統範等、六位以下四人爲撿挍集會衆僧房司。是日移清涼殿、爲嘉祥寺堂。此殿者先皇（仁明）之讌寢也、今上不忍御之、故捨爲佛堂。〇（廿一）甲子、從五位下藤原朝臣興世爲常陸權介、陸奧守如故、坂上大宿禰貞守爲美濃權介、左近衞少將如故、伴宿禰三宗爲下野權介、鎭守將軍如故、正四位下高枝王爲越前權守、大舍人頭如故、從五位下藤原朝

臣緒數爲介、三原朝臣永道爲伯耆守、○丙寅、无品常康親王落髮爲僧、親王者先皇（仁明）第七子也、母紀氏、少而沉敏、風情可察、先皇諸子之中、特所鍾愛、親王追慕先皇、悲哽無已、遂歸佛理、求冥救也、○丁卯、正三位藤原朝臣貞子出家爲尼、貞子者先皇之女御、風姿魁麗、言必典禮、宮掖之內、仰其德行、先皇重之、寵數殊絕、雖有內愛、必加外敬、先皇崩後、哀慕追戀、不肯飮食、形容毀削、臥頭之下、每旦有涕泣處、左右見之、不堪悲感、遂爲先皇、誓入大乘道、戒行薰脩、無有遺類、道俗稱之、○三月癸酉朔、日有蝕之、○甲戌、加筑後國高良山玉垂神正四位下、○戊寅、請卅二僧於東宮、轉讀大般若經、○辛巳、讀般若訖、親賚加常、更有恩勅、施度者各一人、○壬午、右大臣藤原朝臣良房於東都第、延屈智行名僧、奉爲先皇、講法華經、徃年先皇有聞大臣家園樹櫻甚美、戲許大臣、以明年之春有翫其花、俄而仙駕化去、不遂遊賞、屬春來花發、大臣恨曰、先皇所期之春、今日是也、春來依期、仙去不歸、花是人非、不可堪悲、道俗會者、莫不爲之流涕、公卿大夫、或賦詩述懷、或和歌歎逝、○丁亥、地震、○壬辰、修先皇御忌齋會

○常康親王爲僧、雲林院に住せらる、故に雲林院宮と云貞觀十一年五月薨
○紀氏、名は種子、紀名虎の女、古今集目錄に見ゆ
○悲哽、哽は原本鯁に作る藤本に據て改む玉篇に哽食不下喉也とあり
○藤原朝臣貞子、右大臣三守の女、貞觀六年八月三日薨
○言必典禮、字書に典は法也禮は體也得其事體也とあり言語必ず法ありて事體を得るを云
○內愛、愛は原本受に作る諸本に據て改む
○薰脩、脩は原本備に作る諸本及類史紀略に據て改む
（三月）高良山玉垂神、已に出づ類史に山字なし
○戊寅、寅は原本刀に作る刀の訛なり今諸本に據て改む下同じ
○請卅二僧、請卅は原本諸卅に作る諸本及類史紀略に據て改む
○親賚加常、狩谷校本云親當作嚫按三寶集會云財嚫者投施也云云又續後紀嘉祥元年八月庚戌有嚫施之物元來不蓄之文

嚫嚫通、加字恐くは衍なるべし
○智行、原本知行に作る諸本に據て改む
○樹櫻、狩谷校本に樹櫻當作櫻樹とあれど諸本及紀略何れも同じければ舊に據る
○花是人非、花はありて人はあらざるを云
○月有蝕、狩谷氏曰按癸巳廿一日也無月蝕之理未詳
○書之、書は原本焉に作る諸本に據て改む
（四月）正躬王、下にも見ゆ何れか誤あるべし
○正五位下藤原朝臣高房、正五位下の四字は藤本堀イ本及上文に據て補ふ
○清原眞人清海、眞人は原本朝臣に作る續後紀承和十四年二月丁丑紀及齊衡二年正月丙申紀に據て改む
○永名、永は原本氷に作る諸本に據て改む
○岳守、岳は藤本丘に作る
○出居侍從、儀式の時出居の座にありて事を行ふなり

於嘉祥寺、百官盡會、○癸巳、月有蝕之既、○己亥、有水鳥、似鷺而小、不得其名、集殿前梅樹、何以書之、記異也、○夏四月癸卯朔、從四位下道野王、房世王、正躬王、貞內王、雄風王、高叡王、伴宿禰成益、正五位上藤原朝臣良仁、正五位下藤原朝臣高房、從五位上平朝臣春香、藤原朝臣並藤、豐階公安人、從五位下小野朝臣千株、百濟王永仁、文室眞人有眞、善友朝臣豐宗、高橋朝臣安雄、坂上大宿禰貞守、藤原朝臣冬緒、橘朝臣常蔭、橘朝臣茂房、藤原朝臣三藤、清原眞人清海、南淵朝臣年名等、並爲次侍從、正四位下高枝王、從四位下茂世王、基兄王、正躬王、從四位上豐江王、正四位下橘朝臣永名、從四位上藤原朝臣衛、源朝臣生、源朝臣安、源朝臣勤、源朝臣冷、清原眞人瀧雄、從四位下藤原朝臣春津、藤原朝臣岳守、清原眞人岑成、藤原朝臣諸成、春澄宿禰善繩、正五位下藤原朝臣貞守、藤原朝臣行道、從五位上久賀朝臣三夏等、爲出居侍從、○丙午、地震、○庚戌、帝始御南殿、賜親王已下侍從已上祿有差、從五位上良岑朝臣長松、從五位下物部首廣泉、大枝朝臣音人、春日臣雄繼等、並爲次侍從、○癸

丑、定悠紀主基等國、伊勢國爲悠紀、播磨國爲主基、並卜之所食也、○戊午、授賀茂別雷神禰宜賀茂縣主益雄外從五位下、○辛酉、遣使者、向賀茂大神社奉祭、但齋內親王(憙子)未盈齋限、故不得侍祭、○甲子、定大嘗會行事司、○丁卯、帝喚散位從四位下春澄宿禰善繩、於北殿講文選、丹後權守從五位上豐階公安人爲都講、○庚午、改元仁壽、詔曰、體元居正、陽秋之格言、去故成新、易象之玄訓、是以皇流異派、帝寶分暉、莫不改正朔以乘風、變徽章以演化者也、朕以不敏、嗣奉鴻基、諒陰之禮已終、瘡巨之痛猶切、但逾年以後、日月推移、不率舊章、恐招新譏、去年即位之初、頻得白龜及甘露之瑞、雖朕之不德推而不居、而聽於公卿、告之宗廟、方今純陽布德、万物成文、宜顧靈應於往時、變年紀於今日、孫氏瑞應圖云、甘露降於草木、食之令人壽、其改嘉祥四年、爲仁壽元年、○辛未晦、地震、○五月癸酉、雷雨、○乙亥、加雨、○己卯、雨水、○庚辰、遣使者、向丹生川上雨師社、奉幣馬、以祈霽、賑給左右京不能自存者、○壬午、地震、出雲國司奏言、女子私部繼成女、節操尤著、請加旌顯、詔賜爵二級、復終其身、○乙未、地

○卜之所食、龜卜に合へるを云
○益雄、祠官系圖に益雄(禰宜)仁壽元年四月戊午叙外從五位下御祖宮禰宜廣男次男
○齋限、齋院式に凡齋王於初齋院三年齋とあり齋限は三年なり
○大嘗會行事司、儀式に以中納言一人參議一人爲悠紀主基兩所撿挍行事四位各一人五位三人諸司判官已上四人主典已下五人官掌一人使部直丁各一人とあり
○北殿、紫宸殿を南殿と云に對して仁壽殿を云
○都講、講師を云講義の時に本文を擧唱する人なり
○仁壽、詔詞中に甘露降於草木食之令人壽とあるに據れり
○體元居正、春秋隱元年杜注に凡人君卽位欲其體元以居正とあるを云原本元を九に作る諸本に據て改む
○陽秋之格言、陽秋は春秋を云辭源に晉簡文帝鄭后諱阿春故謂春秋爲陽秋とあり、之は諸本に據て補ふ

○去故成新、易雜卦傳に革去故也鼎取新也とあるを云

○帝寶、宋(南朝)鮑照河清頌序に君圖帝寶燦爛瑰英とあり

○瘖臣之痛猶切、原本臣を巨に猶を獨に作る巨は原本傍注に據り猶は閣本前本藤本に據て改む瘖巨は創鉅に同じ禮記三年問に創鉅者其日久痛甚者其愈遲三年者稱情而立文所以爲至痛極也とあるを云

○新議、原本新議に作る諸本に據て改む

○純陽、純陽は四月に當れど此にては夏の意なるべし

○靈應、靈は原本霊に作る閣本藤本中本に據て改む

(五月)加雨、私記に加字恐衍と云

○復終、復は原本後に作る諸本及類史に據て改む

○在南殿前、在は原本有に作る諸本に據て改む

○書之、書は原本盡に作る諸本に據て改む

(六月)祿各有差、類史祿上に賜字あり

○乙訓、神名式山城國乙

震。有死蛇在南殿前、頭有傷處、似有物齧之、何以書之、記異也、○六月壬寅朔、帝御南殿、賜侍臣飲、祿各有差、○[三]甲辰、遣使者向伊勢、賀茂、松尾、乙訓等神社、以祈霽、策文曰、天皇我詔旨止、掛畏支大神乃廣前爾申久、近來雨降己止、渉旬天、百姓乃農業流損奴倍之、掛畏支大神乃厚助爾依天、此災波可止之止所念行天奈毛、去五月廿七日爾御馬進牟、雨止女賜止禱申賜比之、而卜定多留日促爾之天、御馬取爾遣己止不堪、後日爾必進牟、故是以差使天、太幣乎令捧持、奉出須此狀乎聞食天、降雨忽晴天、五穀不損、秋稼豐登之女、天皇朝廷乎常磐爾堅磐爾、天下平安爾護幸倍助賜比矜賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申、又別辭申、此雨乃不止左留由緣乎卜求禮波、春祭爾供奉世留使等中爾、有穢事介利、因茲大神不志己理賜倍利止卜申世利、而祭使波、御卜合倍留人乎令供奉止奈毛、所念行世留、此事乎聞食天奈毛、懼畏利御坐須、大神神那我良聞食天、今毛彌益爾安爾護助賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申、○[四]乙巳、天霽、○[五]丙午、遣使者、分赴五畿內、賑給病水者、○

○訓郡乙訓坐大雷神社、已に注す
○策文、紀略策命に作る
○大神、大は原本太に作る諸本に據て改む
○可止之止、下の止字は諸本に據て補ふ
○日促爾之天、促は追也又速也さあり
○御馬取爾、取は原本所に作る諸本に據て改む
○奉出須、奉は原本傍注に據て補ふ
○忽晴天、忽は原本怱に作る藤本に據て改む
○登之女、女字は諸本に據て補ふ
○不志㠯理、倭訓栞に節凝の義なるべし物事に節だちて心よからぬ意にいへりさ云、㠯は原本巳に作る閣本藤本に據て改む
○令供奉止奈毛、毛は原本利に作る中本藤本に據て改む
○病水者、水災に懺めるものなど云
○道雄卒、釋書二にも傳見ゆ
○亦從、亦は原本並に作る諸本及類史に據て改む
○闍梨空海、闍梨は阿闍梨の略稱
○承和、原本永和に作る

己酉、權少僧都傳灯大法師位道雄卒、道雄、俗姓佐伯氏、少而敏悟、智慮過人、師事和尚慈勝、受唯識論、後從和尚長歳、學華嚴及因明、亦從闍梨空海、受眞言教、承和十四年拜律師、嘉祥三年轉爲權少僧都、會病卒、初道雄有意造寺、未得其地、夢見山城國乙訓郡木上山形勝稱情、卽尋所夢山、奏上營造、公家頗助工匠之費、有一十院、名海印寺、傳華嚴教、置年分度者二人、至今不絶、○甲寅、詔以近江國散久難度神、列於明神、○戊午、以薩摩國賀紫久利神、預於官社、○庚午、攝津權介從五位下善友朝臣穎主卒、穎主少入學讀經、頗通義理、天長元年二月任山城少目、承和四年三月爲直講、八年五月轉爲助教、穎主元姓佐夜部首、後改爲善友朝臣、十二年正月叙外從五位下、十四年二月爲博士、十五年正月叙從五位下、嘉祥二年五月、年老乞骸骨、四年正月、朝廷恤其儒者、更任攝津權介、卒時年七十二、○秋七月辛未朔、公卿大夫近仗下飲、別詔內藏寮、賜五位以上祿有差、○戊寅、地震、外從五位下善世宿禰豐永爲大炊頭、外從五位下清村宿禰是嶺爲大和權介、從五位下藤原朝臣冬緒爲遠江權

諸本及類史に據て改む拜律師の事承和十四年十二月癸巳紀に見ゆ
○爲權少僧都、嘉祥三年十二月辛亥紀に見ゆ
○木上山、山城志に乙訓郡木上山在海印寺村とさ見ゆ
○頗助、原本助を々に作る藤本中本及類史百八十九に據て改む
○一十、紀略十一に作る
○海印寺、山城志に海印寺奥海印寺村號木上山寂照院とあり
○散久難度神、神名式近江國栗太郡佐久奈度神社（名神大）、大石村東
○賀紫久利神、同式薩摩國出水郡賀紫久利神社、中出水村水鯖淵
○預於官社、社は諸本に據て補ふ
○助敎、敎は原本散に作る諸本に據て改む
○佐夜部首、錄攝津神別に佐夜部首伊香我色男命之後也とあり
○儺者、者は耆の誤なるべし
○更任、正月甲申紀に見ゆ
（七月）近仗、仗は原本伏に作る諸本及類史紀略

守、春宮亮如故、從五位下紀朝臣貞守爲近江權介、外從五位下蕃良朝臣豐持爲備前權介。○丁亥、補僧綱、策命曰、天皇我詔旨、法師等爾白左閇止宣勅命乎白、大僧都延祥乎僧正爾、少僧都長訓乎大僧都爾、律師眞濟乎少僧都爾、大法師壽朗、壽教乎波律師爾、大法師明詮乎權律師爾任賜事乎白左閇止詔勅命乎白。○壬辰、夜有如火光者、墜於殿前、左右驚亂、須臾乃定。○八月庚子朔、屈僧一百六人於大極殿、讀大般若經、爲穀祈也。○辛丑、河內國獻嘉禾、一莖三穗。○壬寅、授山城國掘雷氷都久雷湯豆波和氣神從五位下。○己酉、大雨水。○庚戌、式部省獻異鳥雛、鳧觜鷂脚、長頸無尾、白黑雜文、有詔放之、令遂其生。○癸丑、詔曰、朕聞、佐下民者天也、相上帝者君也、君道得則天錫純嘏、民心苦則國或挺灾、朕以寡昧、嗣守鴻基、憂負重而春氷、顧馭朽以秋駕、只願返淳源於既遠、舒景煦於方今、家詠京坻之豐、人誇鍾鼓之聲、而誠難感徹、道謝潛通、行神失和、坎德爲沴、去夏人民、或坐爲魚、今秋廬宅、乍成涌川、朕之不德、万姓何辜、憂心悠々、將何以寄、其使左右京及五畿內、無出今年調、被灾尤甚、不能

自存一者、有司量加二賑恤一、俾下安二其居務一、班二恩惠一、稱中朕意上焉、省二鑄錢司主典史生長上各一員一、○甲寅、[十五]遣下左右撿非違使廉實一、京師被二水害一者稟給上、○癸亥、[廿四]駿河國獻二瑞草一、紫葉朱莖、或謂二之芝一、○乙丑、[廿六]伊勢齋(晏子)內親王禊二於鴨川一、卽日入二於野宮一、○己巳、[三十]大祓二於朱雀門前一、百官盡會、爲二大嘗祭一、豫除二群穢一、

○九月庚午朔、日有レ蝕之、○辛未、[二]進二陸奥國駒形神階一、加二正五位下一、○甲戌、[五]散事從四位下百濟王貴命卒、貴命從四位下陸奥鎭守將軍兼下野守俊哲之女也、貴命姿質姝麗、閑二於女工一、嵯峨太上天皇御宇之時、引爲二

に據て改む
○延祥、釋書巻三に見ゆ仁壽三年九月丙申卒年八十五
○長訓、齊衡二年九月己巳紀に傳見え亦釋書巻三にも見ゆ齊衡二年九月卒年八十二
(八月)穀祈、紀略祈穀に作る
○掘雷氷都久雷湯豆波和氣神、式外所在未詳　○己酉大雨水庚戌、大以下五字は紀略に據て補ふ　○梟黹鵄脚、梟は原本鳥に作る紀略に據て改む鵄は紀略に鷄に作る　○令遂其生、原本令を命に作る藤本に據て改む　○天錫、錫は原本賜に作る諸本に據て改む　○純嘏、毛詩大雅卷阿章に出づ嘏は福なり　○國或挻灾、或は原本傍注式に作る挻は後漢書楊賜傳注に生也とあり　○憂貧重而春氷云々、文選王融曲水詩序に念レ貧二重於春氷一懷レ御二奔於秋駕一とあるに據れり秋字は藤イ本に據て補ふ　○返淳源於既遠云々、淳源は文選頭陀寺碑文に淳源上派、注に淳和之源とあり上古淳厚の風を云上古淳厚の風を慕ひて大なる撫育の恩を現世に施すを云　○京坻之豐、坻は原本垣に作る傍注に據て改む毛詩小雅甫田章に曾孫之庾如レ坻如レ京とあるに出で穀物の豐饒なるを云　○鍾皷之聲、毛詩周南關雎章に窈窕淑女鍾鼓樂レ之とあるに出づ和樂するを云　○感澈、澈は徹の訛なるべし　○行神失和、陰陽五行を云るなるべし失原本夫に作る諸本に據て改む　○坎德爲沴、沴は原本彌に作る諸本に據て改む坎德は水を云易說卦傳に坎者水也とあり沴は字書に水不レ利也害也と云　○人民或坐爲魚、水害に遭るを云爲魚は左傳昭元年に微レ禹吾其魚乎とあるに出づ魚は原本莫に訛れるを諸本に據て改む　○廬宅乍成涌川、涌は水の波を騰ぐるなり水害に由て家屋のある地の忽に川となるを云、廬は原本序に作る諸本に據て改む　○万姓何辜、万姓は人民を云、辜は原本事に作る諸本に據て改む　○稱朕意、意は諸本に據て補ふ　○廉實、廉潔實直なる人を云　○稟給、稟は原本廩に作る諸本及紀略に據て改む　○瑞草、皇極三年紀及紀略天長四年八月乙巳條に見ゆ治部式下瑞に芝草形似二珊瑚一枝葉連結或丹或紫或黑或金色或隨二四時一變レ色一云一年三華食レ之令二眉壽一　○入於野宮、於は原本北に作る類史及紀略に據て改む

(九月)駒形神、神名式陸奥國膽澤郡駒形神社、水澤町、國幣小社に列す
○姝麗、姝は原本妹に作る閣本谷本に據て改む
○忠良親王、淸和紀貞觀十八年二月戊辰の條に薨

去の事見ゆ
○十一日叙從四位下、此下恐らくは脫文あらむ
○熊野杵築兩大神、熊野は國幣大社熊野神社、杵築は官幣大社出雲大社を云
○青幡佐草壯丁命、神名式出雲國意宇郡佐久佐神社、今八束郡大庭村佐草、佐は原本位に作る式に據て改む壯丁は彥の義訓なるべし
○御譯命、同式同郡御譯神社、今能義郡能義村飯生意多伎神社相殿
◎阿遲須伎高彥根命、同式同國出雲郡阿庭須伎神社、簸川郡遙堪村遙堪字阿式にあり原本根字なし、藤本に據て補ふ
○與都彥命、式外未詳
○速飄別命、神名式出雲國嶋根郡波夜都武自神社、八束郡本莊村新庄字椋見谷久良彌神社相殿
○天穗日命、同式同國能義郡天穗日命神社、嶋田村吉佐
○弘宗王、二年正月壬午紀に從五位上弘宗王爲丹後守とあり
○奏請、請は原本諸に作る諸本に據て改む

女御、卽是二品式部卿大宰帥忠良親王之母也、弘仁十年正月叙從五位上、十月十一日叙從四位下、○戊寅、以有水災、廢重陽宴、但公卿於近仗下、與諸侍臣、聊進菊酒、賜祿有差、○庚辰、遣使者向伊勢大神宮、奉細馬八疋、以充神御、寶幣具至、○乙酉、特擢出雲國熊野、杵築兩大神、並加從三位、青幡佐草壯丁命、御譯命、阿遲須伎高彥根命、與都彥命、速飄別命、天穗日命神等、並授從五位下、○丁亥、無品親子內親王薨、親王者仁明天皇之女、母藤原氏、天皇殊憐愛之、天皇崩後、哀慕無休、遂以滅性、時人悲之、○甲午、進筑後國高良玉垂神階、加從三位、○乙未、從五位下弘宗王奏、請子男八人、改其王號、賜姓中原眞人、許之、散位從四位下藤原朝臣岳守卒、岳守者從四位下三成之長子也、天性寬和、士無賢不肖、傾心引接、少遊大學、涉獵史傳、頗習草隸、天長元年侍於東宮、應對左右、舉止閑雅、太子甚器重之、三年拜內舍人、七年喪父、孝思過禮、幾於毀滅、太子踐祚、拜右近衞將監、俄遷爲內藏助、承和元年授從五位下、三年兼爲讃岐介、遷爲左馬頭、讃岐介如故、五年爲左少辨、辭以停職、不能聽受、

○岳守、岳は藤本丘に作る
○授從五位下、元年正月戊午紀に見ゆ
○停職、職は原本耳に作る藤本に據て改む
○因撿挍、因は紀略自に作る
○元白詩筆、元は元稹、白は白居易なり舊唐書元稹傳に與白居易友善當時言詩者稱元白焉とあり私記に按六朝人謂文爲詩筆と云
○歸罷、歸は原本鄕に作る諸本に據て改む
（十月）裝束使、裝は原本裝に作る諸本に據て改む使は傍注司に作る
○知立、神名式參河國碧海郡知立神社、知立町知立
○砥鹿、嘉祥三年七月丙子紀に注す
○糟目、神名式參河國碧海郡糟目神社、上鄕村渡前
○日長、同式同郡日長神社、安城町下中嶋
○狹投、同式同國賀茂郡狹投神社、西加茂郡猿投村猿投
○野見、同式同郡野見神社、高橋村野見、原本見

出爲大宰少貳、因撿挍大唐人貨物、適得元白詩筆奏上、帝甚耽悅、授從五位上、十二年授正五位下、十三年授從四位下、特拜右近衞中將、兼爲美作守、嘉祥元年出爲近江守、人民老少、俱皆仰慕、歸罷之後、無復榮望、論者高之、卒時年四十四、○冬十月己亥朔、定大嘗會御禊裝束使、並前後齒簿次第司、○癸卯、地震、○乙巳、進參河國知立、砥鹿兩神階、並加從五位上、糟目、日長、狹投、野見、謁磐、播豆、赤孫、御津、石鞍、石纒、阿志等十一神、並授從五位下、○丙午、進肥後國健磐龍命大神階、加從二位、長門國鹿集、福賀、磨能峯、壬生等四神、並授從五位下、○戊申、因幡國大江、志保濃、都波奈彌、伊蘇乃佐伎、都波只知等五神、並授從五位下、○己酉、遣大藏少輔從五位下藤原朝臣良方、向香椎八幡大菩薩宮、奉寶幣、○辛亥、地震、○乙卯、遣使者、向平野神宮、策命曰、天皇我詔旨止、平野大神等爾申給倍止申久、大神等乎彌高爾彌廣爾、崇奉牟止那毛所念行須、故是以、正三位今木大神乎波從二位爾、正五位上久度、古開等二前乃神乎波從四位下爾、合殿坐須比咩神乎波正五位下乃御冠爾、上奉利崇奉流狀乎、參

字なし藤本に據て補ふ
○謁磐、同式同國額田郡謁播神社、岩津村東阿知和、特選神名帳に加茂郡御藏村とす
○播豆、同式同國播豆郡羽豆神社、吉田町宮崎
○赤孫、同式同國寶飫郡赤日子神社、蒲郡町神之鄕
○御津、同式同郡御津神社、御津村廣石
○石鞍、同式同郡石座神社、今南設樂郡東鄕村大宮
○石經、同式同國八名郡石卷神社、石卷村三輪
○阿志、同式同國渥美郡阿志神社、野田村芦
○鹿集、式外、厚狹郡村梶浦宮崎神社蓋是
○福賀磨能峯、式外、並未詳
○壬生、式外、美禰郡嘉萬村下鄕堅田
○大江、神名式因幡國八上郡大江神社三座、八頭郡大伊村橋本、一に財原さ云、江は類史十四及式に據て補ふ
○志保濃、同式同郡鹽野上神社二座、八頭郡伊井田村鹽上
○都波奈彌、同式同郡都

議正四位下左大辨兼行左近衞中將陸奧出羽按察使藤原朝臣良相乎差使弖申奉出須、此狀乎聞食弖、神那我良母天皇御孫命乎、堅磐爾常磐爾護幸奉賜比、天下平安爾守矜賜倍止申賜久止申、○庚申(廿二)、遣使者、向伊勢大神宮、告以大嘗祭事、○甲子(廿六)、帝幸鴨川、大修禊事、爲大嘗祭、豫除群穢也、○乙丑(廿七)、進信濃國健御名方富命、前八坂刀賣命等兩大神階、加從三位、○戊辰(三十)晦、大祓於朱雀門前、○十一月(己巳朔)甲戌(六)、日無精光、中有黑點、大如李子、○乙亥(七)、進右大臣藤原朝臣良房階正二位、加其家夫人正四位下源朝臣潔姬從三位、○辛巳(十三)、詔以尾張國眞清田、大縣兩神、列於官社、○己丑(廿一)、地震、○辛卯(廿三)、帝有事於八省院、緣大嘗祭也、○壬辰(廿四)、幸豐樂院、賜宴群臣、○癸巳(廿五)、頻御豐樂院宴飮、悠紀主基二國奏風俗歌舞、獻物同如昨儀、○甲午(廿六)、御豐樂殿、策命曰、天皇我大命良万止勅大命乎、諸聞給止宣、悠紀主基爾仕奉流二國乃國司等、日夜無怠事久、務結利勤之久仕奉爾依天治賜不、又仕奉人等中爾、其仕奉狀乃隨、治賜人毛在、又御意乃愛盛爾、治賜人毛一二在、故是以冠位上賜治賜波久止詔天皇大命乎、衆

波奈彌神社二座、八頭郡散岐村和奈見、彌は原本廣に作る式に據て改む○伊蘇乃佐伎、同式同郡伊蘇乃佐只神社二座、八頭郡安部村安井宿、乃は藤本に據て補ふ○都波只知、同式同郡都波只知上神社二座、八頭郡散岐村佐貫、知は藤本に據て補ふ○戸方、方は原本房に作る諸本に據て改む○八幡大菩薩宮、宇佐神宮○古開、開は原本關に作る前本谷本淀本に據て改む○二前、月令二所に作り二上の等字なし○令殿、月令此下に爾字あり○參議正四位下、正は原本從に作る類史十四・月令及下文に據て改む○差使弖、弖は原本尼に作る諸本に據て改む○群穢、群は原本邪に作る諸本に據て改む○前八坂刀賣命、前八は原本彦及に作る谷本及類史十四に據て改む

(十一月)李子、倭名抄果蓏部に見ゆ

聞食止宣、授四品時康親王階三品、從三位源朝臣弘、藤原朝臣長良、並加正三位、從四位下正躬王從四位上、從四位上豐江王正四位下、正五位下楠野王從四位下、從五位下高原王從五位上、正六位上粟田王從五位下、從四位下藤原朝臣春津、長岑宿禰高名、正六位上源朝臣啓、並叙從四位上、正五位下藤原朝臣貞守、橘朝臣眞直、並叙從四位下、從五位上高階眞人清上、藤原朝臣大津、久賀朝臣三夏、並叙正五位下、從五位下嶋田朝臣清田、文室朝臣名繼、小野朝臣千株、出雲朝臣岑嗣、源朝臣興、中臣朝臣逸志、藤原朝臣恒雄、並叙從五位上、外從五位下縣連氏益、无位源朝臣至、正六位上藤原朝臣良世、安倍朝臣貞行、和氣朝臣臣範、紀朝臣有常、和氣朝臣貞臣、伴宿禰春世、文室眞人眞文、藤原朝臣藤河、橘朝臣宅主、甘南備眞人春成、丹墀眞人今繼、當麻眞人眞道、藤原朝臣眞冬、紀朝臣東人、中臣朝臣薭守、上毛野朝臣尙行、林朝臣宮吉、縣犬養宿禰小成、柿本朝臣枝成、並叙從五位下、正六位上山田連春城、朝宗宿禰吉繼、春道宿禰永藏、安原宿禰岳、永野宿禰加祜麻呂、並叙外從五位

○眞清田神、神名式尾張國中嶋郡眞墨田神社（名神大）一宮市一宮、國幣中社に列す
○大縣神、同式同國丹羽郡大縣神社（名神大）、樂田村
○大嘗祭、紀略祭を會に作る
○階三品、原本品を位に作る諸本及類史九十九に據て改む
○粟田王、粟は原本栗に作る諸本及類史に據て改む
○柿本朝臣、錄大和皇別に柿本朝臣大春日朝臣同祖天足彦國押人命之後也敏達天皇御世依家門有柿樹爲柿本臣氏と見ゆ
○源朝臣至、古今集目錄二條の條に至者大納言正三位定第三子云々と見ゆ
○臣範、臣は下文或は巨に作る
○眞冬、眞は類史直に作る
○永藏、永は原本氷に作る前本藤本谷本及類史に據て改む
○加祜麻呂、祜は原本祐に作る藤本に據て改む
○又如舊儀、原本又如を人加に作る諸本及類史に

下、奏大歌五節舞、又如舊儀、○乙未、策命曰、天皇我大命良万止勅大命乎、衆聞給止宣、神祇官人等乎始天、大嘗會爾參出來天、仕奉流悠紀主基二國乃國司郡司百姓、及司司人止毛、番上已上爾御物賜布、又悠紀主基兩國乃主典與利以下、國醫師爾至万弖、及諸郡司主帳已上乃把笏者爾、位一階上賜治賜布、又悠紀國乃今年庸物、主基國乃今年田租免賜布、兩國乃卜相郡司爾波、特御物賜波久止宣、是日從四位下淸子女王叙從四位上、无位定子女王正五位下、伴宿禰友子、无位橘朝臣忠子、並叙從四位下、從五位下綾公姑繼從五位上、无位藤原朝臣香子、藤原朝臣貳子、正六位上安倍朝臣厚子、並叙從五位下、○丁酉晦、大祓於朱雀門前、謂之解齋、○十二月壬寅、詔以淡路國大和大國魂神、列於官社、○乙巳、遣使者、向伊勢大神宮奉幣、○丙午、无品繁子内親王薨、親王者、嵯峨太上天皇之女、母太皇太后（橘嘉智子）也、容姿美艶、進止有度、久嬰熱病、醫療難救、出家爲尼、馳情彼岸、遂以傾逝、太后（順子）哀戀、○壬子、遣使者、賑給伯耆國飢民、賜出雲國飯石仁多兩郡百姓復一年、○壬戌、太政官奏刑部省斷罪文、舊

例十一月奏レ之、去月有二大嘗祭事一、故延至二今月一、參議左大辨兼春宮大夫左近衞中將陸奧出羽按察使正四位下藤原朝臣良相加二從三位一、即日拜二權中納言一、大藏卿從三位平朝臣高棟、右大辨兼右近衞中將從四位下藤原朝臣氏宗等、並拜二參議一、賜二遠江國城飼（キカフ）郡百姓復一年一、○丙寅、（廿九）正六位上大枝朝臣乙枝、无位嶋田朝臣吉子、並授二從五位下一、冬溫、何以書レ之、記レ異也、

日本文德天皇實錄卷第三

據て改む
○主帳、帳は原本長に作る諸本に據て改む
○謂之解齋、謂は原本爲に作る諸本に據て改む、大嘗の齋戒は十一月晦の大祓訖て解く故に之を解齋と云
（十二月）淡路、淡は原本談に作る諸本に據て改む
○大國魂神、神名式淡路國三原郡大和大國魂神社（名神大）、榎列村幡多
○馳情彼岸、彼岸は行願品疏に波羅蜜者此云二到彼岸一也以二生死一爲二此岸一煩惱妄念爲二中流一眞空之際爲二彼岸一也と見ゆ、生死煩惱の岸を出離して彼の涅槃の岸に到らむことを念ずるなり
○飯石仁多、倭名抄に飯石は以比之、仁多は爾比多と訓り今も郡名存す
○舊例、舊は原本白に作る諸本及類史に據て改む
○高棟、補任に桓武天皇十五皇子一品式部卿葛原親王一男と見ゆ
○右近衞、右は原本左に作る閣本前本藤本及嘉祥三年十一月壬寅紀に據て改む　○氏宗、補任に中納言葛野麿卿七男母從三位和氣淨麿女と見ゆ　○城飼郡、倭名抄に城飼は岐加布と訓り、○乙枝、諸本乙枚に作る

日本文德天皇實錄卷第四

起仁壽二年正月盡十二月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

（壬申）二年春正月戊辰朔、帝御大極殿、受歳賀、還御南殿、賜宴侍臣、皆如舊儀、○庚午、帝朝中宮於冷然院、群臣扈從者賜宴於東釣臺、五位已上盡會、特有恩詔、未得本任放還者亦預席、賜祿有差、○甲戌、幸豐樂院、以覽青馬、助陽氣也、賜宴群臣如常、○戊寅、加肥後國阿蘇比咩神從四位下、○己卯、諸衞府獻殺杖、逐精魅也、○壬午、外從五位下山宿禰池作爲河內介、太秦公宿禰是雄爲攝津介、從五位上藤原朝臣關主爲伊賀守、外從五位下山田連春城爲駿河介、從五位下橘朝臣岑範爲武藏介、藤原朝臣菅雄爲近江介、正五位下久賀朝臣三夏爲信濃守、從五位下紀朝臣冣弟爲介、右兵衞佐如故、從四位上源朝臣寬爲越中守、刑部卿如故、從五位下山代宿禰氏益爲介、丹墀眞人繩主爲丹波介、從五位上弘宗王

○奉勅撰、撰は原本選に作る堀本淀本谷イ本に據て改む

【仁壽二年】正月、原本正を二に作る諸本及類史七十一に據て改む

○中宮、太皇太后藤順子

○未得本任放還、未だ解由狀を得ざるものを云、

放は原本於に作る藤本中本谷イ本に據て改む

○助陽氣也、公事根源に馬は陽の獸なり青は春の色なり是によりて正月七日に青馬をみれば年中の邪氣をのぞくさいふ本文侍なりさあり本文さは蓋十節錄を云

○戊寅、寅は原本刀に作る諸本に據て改む下同じ

○阿蘇比咩神、神名式肥後國阿蘇郡阿蘇比咩神社さあり今宮地町官幣大社阿蘇神社御同殿

○殺杖、殺は原本卯に作り紀略剛に作る閣本前本藤本等に據て改む字彙に殺大剛卯也以正月卯日作佩之以除厲さあり始て卯杖を獻ること持統天皇三年正月乙卯紀に見ゆ

○太秦公、太秦は原本大奏に作る前本藤本中本に據て改む

○是雄、淸和紀天安二年八月乙卯紀是を此に作る
○闕主、闕は原本開に作る閣本藤本中本に據て改む
○三夏爲信濃守、此事仁壽三年正月丁未紀にも見ゆ何れか誤あるべし
○御仲眞人、下文八月辛丑紀御長に作る寶字七年八月己丑紀（續紀下七八頁）に池田親王の男女五人に御長眞人を賜ふこと見ゆ同姓なり
○讚岐權守、守は原本介に作る諸本に據て改む
○土左守、左は原本佐に作る閣本前本中本に據て改む下同じ
○春岡、岡は原本綱に作る諸本に據て改む
○帝幸、帝は原本常に作る諸本及類史七十二に據て改む
○觀、類史觀に作る
○不過數人、過は原本过に作る諸本及類史に據て改む
○繩足、上文壬午條に繩主とあり
○在世、在は原本枉に作る諸本及類史に據て改む
（二月）滋野朝臣貞主卒、貞主の傳は大日本史

爲丹後守、從四位下春澄宿禰善繩爲但馬守、從五位下御仲眞人近人爲因幡權守、飯高朝臣永雄爲播磨權介、從五位上藤原朝臣仲統爲備前介、左近衞少將如故、從四位下茂世王爲讚岐權守、從五位下橘朝臣常蔭爲介、從五位上小野朝臣千株爲伊豫介、右近衞少將如故、從五位下橘朝臣時枝爲土左守、從五位上藤原朝臣春岡爲大宰少貳、從五位下當麻眞人鴨繼爲筑前介、侍醫如故、從四位下雄風王爲左馬頭、○癸未、賜宴侍臣、踏歌如舊儀、○甲申、帝幸豐樂院、以觀射禮也、○乙酉、亦幸豐樂院、觀諸衞府賭射、公家以白布賜勝者、其多籌者、得布亦多、先王舊式也、○己丑、帝觴于近臣、命樂賦詩、其預席者、不過數人、此復弘仁遺美、所謂內宴者也、○甲午、授正六位上丹墀眞人繩足從五位下、從七位上飯高朝臣在世、无位春原朝臣內子、並授從五位下、○丙申、授正六位上藤原朝臣良繩從五位下、內宴餘樂、有此恩奬、○二月庚子、地震、○乙巳、參議正四位下行宮內卿兼相摸守滋野朝臣貞主卒、貞主者、右京人也、曾祖父大學頭兼博士正五位下楢原東人該通九經、號爲名儒、天平

百廿七に載せ叙任年月は補任に詳なり
○行宮內卿兼相摸守、兼は原本行の上にありしを狩谷校本に據て移せり
○檜原、檜は原本獪に作る諸本に據て改む
○九經、周禮・儀禮・禮記・左傳・公羊・穀梁・易・詩・書を云
○爲駿河守、續紀天平十九年三月乙酉紀に見ゆ
○賜姓伊蘇志臣、續紀勝寶二年三月戊戌紀に東人等賜勤君姓とみゆ
○賜姓滋野宿禰、淸和紀貞觀元年十二月癸卯紀滋野貞雄傳に延曆十七年改伊蘇志臣賜滋野宿禰とあり
○雅有度量、雅は原本稚に作る前本及補任に據て改む雅量あるを云
○涯岸、崖岸に同じ風岸氣岸と云が如く氣骨に富めるを云、舊唐書鄭覃傳に天性和樂與人交、持一心未嘗變節不爲崖岸嶄絕之行とみゆ涯崖相通ずべし
○弘仁二年、原本此四字を五年の二字に作る堀イ本原本傍注及補任に據て改む

勝寶元年爲駿河守、于時土出黄金、東人採而獻之、帝美其功曰、勤哉臣也、遂取勤臣之義、賜姓伊蘇志臣、父尾張守從五位上家譯、延曆年中賜姓滋野宿禰、貞主身長六尺二寸、雅有度量、涯岸甚高、大同二年奉文章生試及第、弘仁二年爲少內記、六年轉爲大內記、十一年授外從五位下、兼爲因幡介、十二年授從五位下、遷爲圖書頭、因幡介如故、十四年、仁明天皇初在儲之日、遷東宮學士、因幡介如故、天長八年、勅與諸儒撰集古今文書、以類相從、凡有一千卷、名祕府畧、九年兼爲下總守、太子登祚之初、拜內藏頭、下總守如故、數月遷爲宮內大輔、承和元年授從四位下、兼爲相摸守、二年遷爲兵部大輔、六年兼爲大和守、七年遷爲大藏卿、大和守如故、八年罷大和守、兼讚岐守、九年遷式部大輔、讚岐守如故、其秋拜參議、十一年春、捨城南宅爲伽藍、名慈恩寺、貞主坐禪之餘、歷遊其間、時人慕之、其夏上表、讓式部大輔、不許焉、十二年陳便宜十四事、事多不載、議亦不行、嘉祥二年春兼尾張守、于時大宰府吏多不良、衰弊日甚、貞主上表曰、夫大宰府者、西極之大壤、中國之領袖也、東以長門爲關、西以

○祕府畧、本朝書籍目錄に祕府略貞主卿以于時東宮學士因幡介與諸儒撰集さあり又柱史抄所引政事要略に滋野朝臣貞主造宣命譜奏聞さあり
○拜內藏頭、天長十年三月庚子紀に出づ
○爲宮內大輔、同年十二月己丑紀に出づ
○慈恩寺、百練抄六に保延二年十二月慈恩寺燒亡此寺者是滋野貞主遣唐使之間摸漢朝慈恩寺建立之、また拾芥抄中末に滋野井中御門北西洞院西滋野貞主卿家さあり
○吏多不良、原本吏を史に作り良を食に作る諸本に據て改む
○衰弊、弊は原本幣に作る諸本に據て改む
○中國、皇國を指せり領袖は晉書魏舒傳に出で此は要害の土地を云へり
○郡縣、郡は原本群に作る諸本に據て改む
○重鎭、唐書韓弘傳に出で兵權を執りて要地に據る者の意
○就祖、祖は原本租に作る前本谷本に據て改む就祖は先例を範さする意
○關門、關は原本開に作

新羅爲拒、加以九國二嶋、郡縣闊遠、自古于今、以爲重鎭、夫謀事必就祖、發政占古語、因撿舊記、大唐高麗新羅百濟任那等、悉託此境、乃得入朝、或緣貢献之事、或懷歸化之心、可謂諸藩之輻湊、中外之關門者也、因玆有德爲帥貳、才良爲監典、若無其人、選取辨官式部、頃年以來絕而不行、近得飛語云、彼吏或擊目閉口、似避時之人、或忘恥貪財、爲聚斂之吏、府司國宰、莫不悲傷、若如此不變、恐噬臍不及、臣聞此語、心神罔措、雖此之飛語有何信據、而臣子之理、何不預憂、又聞、少貳從五位下小野朝臣恒柯、筑前守從五位下紀朝臣今守、有意執論、無力矯枉、未審虛實、唯得耳剽、臣不勝血誠、伏觸逆鱗、言詞切直、默止不省、其秋爲宮內卿、三年夏授正四位下、兼爲相摸守、仁壽二年春、毒瘡發唇吻、詔賜醫藥、中使相望於路、道俗來問者、日屬街巷塡咽、遺戒子孫云、殯斂之事、必從儉薄、徂歿之後、子孫齋供而已、卒于慈恩寺西書院、時年六十八、時人知與不知、莫不流涕愍惜、貞主天性慈仁、語恐傷人、推進士輩、隨器汲引、長女繩子、心至和順、進退中規、仁明天皇殊加恩幸、生本康親王、時子內親王、柔子內親

王、少女奥子頗有風儀、閑訓克脩、爲天皇所幸、生惟彦親王、濃子内親王、勝子内親王、時人以爲、外孫皇子、一家繁昌、乃祖慈仁之所及也、○（十）丁未、從四位下丹波權守伴宿禰成益卒、成益右京人也、父從五位上宇治人、成益少在大學、長習文章、應進士擧、遂得登科、弘仁十四年爲左京少進、天長元年秋爲式部少丞、七年春左轉爲右京少進、九年冬叙從五位下、承和三年夏爲大藏少輔、冬遷右少辨、十一年夏爲左中辨、十二年春叙從四位下、依法隆寺僧善愷訴訟事、辨官同共解却、後出爲丹波權守、境內肅然、國人稱其廉潔、成益爲人質直、在公奉法、不阿權貴、卒時年六十四、○（十五）壬子、從四位下房世王爲中務大輔、從五位下紀朝臣松永爲少輔、從五位上並山王爲內匠頭、從五位下善友朝臣豐宗爲散位頭、從五位上良岑朝臣長松爲宮內大輔、正五位下石川朝臣長津爲木工頭、從五位下山田宿禰古嗣爲左京亮、外從五位下家原宿禰氏主爲勘解由次官、竿博士如故、從五位上坂上大宿禰正野爲相摸守、外從五位下高狩忌寸淸貞爲安房守、從五位下藤原朝臣宗吉爲左兵衞權佐、藤原朝

ろ諸本に據て改む
○避時之人、原本之人を倒置す諸本に據て改む
○忘耻貪財、原本忘を忌に、貪財を貧賤に作る忘は藤本淀本に據り貪財は諸本に據て改む
○不變、不は有の誤か
○嚙臍、左傳莊六年に若不早圖後君噬齊とあるに出づ臍齊通ず
○耳剽、漢書朱博傳の注に剽刦也猶言行聽也とあり所謂聽きかじりなり
○逆鱗、韓非子說難篇に夫龍之爲蟲也柔可狎而騎也然其喉下有逆鱗徑尺若人有嬰之者必殺人、人主亦有逆鱗說者能無嬰人主之逆鱗則幾矣とあるに出づ
○毒瘡、丹毒瘡なり抄疾病部に丹熛毒之氣其色無常、箋注に萬安方丹毒俗云知利氣亦云毛衣草亦云火と見ゆ
○街巷、街は原本衛に作る諸本に據て改む
○塡咽、塡は原本愼に作る諸本に據て改む
○遺戒、遺は原本遣に作る諸本に據て改む
○進士、選叙令に進士取明閑時務幷讀文選

○爾雅、者と見ゆ
○閫訓、婦德を云閫は文選述成紀贊の注に閫閾閫門之內也とあり婦女の居る處を云
○式部少丞、丞は原本烝に作る閣本前本藤本に據て改む
○訴訟、訟は原本詔に作る諸本に據て改む
○辨官同共解却、同は原本內に作る諸本に據て改む辨官解却の事承和十三年十一月壬子紀に見ゆ
○良岑朝臣、良は原本善に作る諸本に據て改む
○家原宿禰、宿禰は下文六月己酉紀連に作る
○高狩忌寸、狩は原本狩に作る諸本に據て改む
○宗吉、下文悉く宗善とあり然るに續後紀は此に同じ或は文字を改めしにや
○爲左兵衞權佐、下文戊午紀に兵衞を衞門に作る
○故民部卿、故は中本に據て補ふ
○爲彈正大弼、爲は藤本に據て補ふ
○中院西門、中院は中和院なり舊訓誤れり內藤氏亦之に依て疑を存す今改て本文の如く訓り

臣良世爲右兵衛權佐、正五位上藤原朝臣良仁爲右馬頭、中宮亮如故、○丙辰、播磨國言、紫雲見、散位從四位上和氣朝臣仲世卒、仲世者故民部卿正三位清万呂第六子也、天性至孝、年十九爲文章生、大同元年爲大學大允、奉公忠謹、每至寢臥、首向宮闕、弘仁六年遷式部大丞、十年授從五位下、天長元年爲北陸道巡察使、四年爲近江介、所得俸祿、施給貧民、累遷、承和四年爲彈正大弼、初臺無南門、仲世奏移中院西門以爲臺門、亦私以位祿買近江國高嶋郡田五町、以充厨家之費、七年遷爲勘解由長官、十一年出爲播磨守、清靜而化、民不敢擾、數年病、卒、時年六十九、國人惜之、○丁巳、特授備中國吉備津彦命神四品、列於官社、是夕彗星出于西方、長可五丈、○戊午、左衛門權佐從五位下藤原朝臣宗善爲撿非違使、大宰少貳從五位下橘朝臣高宗獻白鼠一頭、○己未、詔加甲斐國目一員、○壬戌、越前守正五位下藤原朝臣高房卒、高房者參議從四位上藤嗣第三子也、身長六尺、膂力過人、甚有意氣、不拘細忌、弘仁十三年爲右京少進、累遷、天長三年爲式部大丞、四年春授從五位

下、拜美濃介、威惠兼施、屬託不行、發擿姦伏、境無盜賊、安八郡有陂渠、隄防決壞、不得蓄水、高房欲脩隄防、土人傳曰、陂渠有神、不欲遏水、逆之者死、故前代國司廢而不脩、高房曰、苟利於民、死而不恨、遂駈民築隄、溉灌流通、民至今稱之、亦席田郡有妖巫、其靈轉行、暗噉心、一種滋蔓、民被毒害、古來長吏、皆懷恐怖、不敢入其部、高房單騎入部、追捕其類、一時酷罸、由是無復噉心之毒、後歷備後肥後越前等守、所在有績、疽發背卒、時年五十八、○廿七甲子、右兵衛佐兼信濃介從五位下紀朝臣宼弟卒、宼弟者從四位下木津魚之第十一子、參議從二位百繼之弟也、弘仁十一年爲內膳典膳、承和三年正月爲左衛門少尉、七年轉爲大尉、十二年正月叙從五位下、十三年五月爲右兵衛佐、嘉祥三年四月兼爲因幡權介、仁壽二年正月遷爲信濃介、卒時年五十八、宼弟武藝之士、膂力過人、登高涉深、輕捷少偶、追捕京畿盜賊姧宄、漸以絕盡、○廿八乙丑、從四位下藤原朝臣貞守爲左中辨、從五位上橘朝臣海雄爲右中辨、從五位下藤原朝臣冬緒爲右少辨、春宮坊亮遠江權守如故、文室朝臣笠科爲中務少輔、藤原朝

○清靜、清は原本青に作る諸本に據て改む史記老子傳に無爲自化、清靜自正とあるに出づ
○吉備津彥命神、承和十四年十月（續後紀三二八頁）に注す、彥は原本なし藤本に據て補ふ
○加甲斐國目一員、此官符三代格五に出づ
○藤嗣、鷲取（魚名の子）の子、嗣は原本原に作る諸本に據て改む
○膂力、膂は原本旅に作る藤本に據て改む
○屬託、政務を人に委囑するを云、魏志諸葛誕傳に爲吏部郞人有所屬託輒顯其言而承用之と見ゆ
○姧伏、狩谷校本云伏當作狀
○噉心、呪術を以て人心を盜取て之を食ふを云前田夏蔭の稻荷神社考下に本史高房傳を引て噉食人心とは荼吉尼を使ふ邪法なりと云り
○有績、原本有清に作る堀本に據て改む
○疽、抄疾病部に疽說文云疽（一名發背）久癰也とあり
○宼弟者、者字は藤本中

本に據て補ふ
〇百繼、木津魚の一男弘仁十三年參議となり承和三年九月乙酉薨
〇七年轉、轉原本博に訛る閣本藤本に據て改む
〇少偶、偶は字書に匹也對也とあり
〇姧宄、宄は原本穴に作る淀本に據て改む
〇從五位下紀朝臣松永、諸本下を上に作るは非なり松永は齊衡元年正月壬辰從五位上に叙せらる
（三月）獼猴、漢書西域傳注に沐猴卽獼猴と見えおほざるを云
〇椒魚、紀略に延曆十六年八月己巳掖庭溝中獲レ魚長尺六寸形異二常魚一或云椒魚在二深山澤中一とあり今の山椒魚なるべし
〇筑摩神、式外の神なり神祇志料に今坂田郡筑間村筑間浦にあり蓋御食津神を祭ると云、摩は類史十四に麻に作る
〇僧食時、食事の時に天食時・法食時・畜生食時・鬼神食時の四種あり毘羅三昧經に出づ
〇攘水旱之災、攘は原本救に作る諸本に據て改む
〇轉大般若經、轉下に讀

臣有貞爲二縫殿頭一、清原眞人秋雄爲二信濃介一、左兵衛佐如レ故、從四位下清原眞人岑成爲二越前守一、茂世王爲二丹波守一、從五位下紀朝臣松永爲二丹後守一、紀朝臣有常爲二但馬介一、左馬助如レ故、從五位上弘宗王爲二讚岐權守一、從五位下安倍朝臣貞行爲二右衛門權佐一、〇三月丁卯朔、日有レ蝕之、〇庚午、右衛門權佐從五位下安倍朝臣貞行爲二撿非違使一、〇壬申、左右近衛官人已下、見レ在レ陣者、賜レ祿有レ差、賑二給京師尤貧者一、〇癸酉、近江國得レ魚、形似二獼猴一、異而獻レ之、故老皆云、此椒魚也、昔時見レ有二此物一、〇甲戌、授二近江國筑摩神從五位下一、遣二使者一賑二給播磨國飢民一、〇丁丑、詔、諸大寺起二四月一日一迄二八月卅日一、衆僧食時、同集二食堂一、各讀二大般若經一卷一、以攘二水旱之災一、永爲二歲事一、〇戊寅、地震、〇辛巳、遣二使者一賑二給河內、若狹、因幡三國飢民一、〇壬午、請二高僧及沙彌練行者各卅二人於東宮一、轉二大般若經一、限二三日一訖、〇夏四月丁酉朔、帝不レ御二南殿一、侍從以上、近仗下飮、賜レ祿有レ差、〇甲辰、遣二使者一、向二五畿七道諸國一、奉二名神幣一、〇庚戌、修二仁王會一、起レ自二宮城一、及二于諸國一、設二百高座一、一日二時、講二演經王一、〇壬子、授二无位蕃良朝臣名門子從五位

字脱ちたるか

（（四月））百高座、高は諸本及類史紀略に據て補ふ

○經王、衆經中の王たる意にて仁王經を謂るなるべし

○齋內親王、惠子內親王なり齋は原本齊に作る紀略に據て改む下同じ

○紫野齋院、山城名勝志愛宕郡一に大宮一條以北さあり

○御歳神、神名式大和國葛上郡葛木御歳神社（名神大月次新嘗）、葛城村東持田

（（五月））松尾神、神名式山城國葛野郡松尾神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）官幣大社松尾神社

○齋宮諸司、原本齋を齊に作り齋下に西字あり諸本及類史紀略に據て改め削る

○都宿禰、元慶元年十二月辛卯紀に姓朝臣を賜ふ其先御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神）之後さあり

○桑原公、天平神護二年二月乙卯紀に桑原連眞嶋等賜二姓桑原公一、神護景雲二年八月辛酉紀に桑原直新麻呂等賜二姓桑原公一さ見えて蕃別なり元慶元年

下、○甲寅、地震、○乙卯、賀茂齋內親王禊於河濱、是日始入紫野齋院、○庚申、加大和國御歳神從二位、○辛酉、修賀茂祭、如常儀、○五月丁卯朔辛未、天皇不御武德殿、依停騎射走馬之觀也、○甲戌、加山城國松尾神正二位、○丙子、除伊勢齋宮諸司、○戊子、主計頭從五位下都宿禰貞繼卒、貞繼大和介外從五位下桑原公秋成子也、弘仁十三年與兄正五位下文章博士腹赤、共上請改姓都宿禰、天長元年四月任中務少錄、五月遷爲式部少錄、十年正月爲因幡掾、承和五年二月爲式部大錄、九年正月遷爲備前掾、十二年二月爲主計助、十三年正月叙外從五位下、十四年二月轉爲頭、嘉祥三年四月叙從五位下、貞繼累歷吏部、詳知舊儀、後到此職者、必相訪習行之、患惡瘡卒、時年六十二、○癸巳、大和國言、紫雲見、是月、甘露降於京師樹上、及大和、越前、加賀、但馬、因幡、伯耆、隱岐、播磨、長門等九國、並言甘露降、○六月戊戌、地震、○戊申、遣使者賑給土左國飢民、○己酉、外從五位下家原連氏主爲主計頭、從五位下菅原朝臣善主爲勘解由次官、○乙卯、相摸權守從四位下橘朝臣眞直卒、眞直、右

紀さ合はず
○式部少錄、錄は原本椽に作る諸本に據て改む下の大錄亦同じ
○吏部、式部省の唐名
○詳知、原本祥和に作る諸本に據て改む
○是月、月は原本日に作る閣本谷本及紀略に據て改む
（二六月）遣使者、遣は諸本に據て補ふ
○九年七月遷爲筑後權介、原本七を正に作り權字なし承和九年七月戊午紀（續後紀一三一頁）に據て改め補ふ
（一七月）貢賦、賦は原本賊に作る諸本に據て改む
○兩國、原本兩の上に之字あり諸本に據て削る
○若宇加乃賣命神、官幣大社廣瀨神社
○天御柱命神國御柱命神、同龍田神社
○都賀那木神、神名式大和國宇陀郡都賀那木神社、伊那佐村山路、原本那を郡に作り賀字なし賀は式に據て補ひ那は諸本に據て改む
○傷禾稼、傷は原本復に作る諸本に據て改む禾稼は禮記月令に出で穀物を

大臣從二位氏公第三子也、承和初爲內舍人、遷爲左馬大允、七年正月叙從五位下、八年爲肥後介、九年七月遷爲筑後權介、入爲中務少輔右兵衞佐、嘉祥二年正月叙從五位上、轉爲右近衞少將、三年正月叙正五位下、爲阿波守、仁壽元年正月出爲相摸權守、十一月叙從四位下、卒時年卅七、眞直性善唱歌、仁明天皇殊所憐愛也、○秋七月丙寅朔乙亥、（十）遣使者向賀茂、松尾、稻荷、貴布禰等名神、奉幣祈雨、卽日得甘澍、○戊寅、（十三）免遠江國城飼郡貢賦、○甲申、（十九）賜肥前豐後兩國貧民一万六千餘口復、○庚寅、（廿五）大和國若宇加乃賣命神、天御柱命神、國御柱命神等、並加從四位下、○辛卯、（廿六）以大和國都賀那木神、列於官社、○壬辰、（廿七）遣散位從五位上安宗王、從五位下利見王、向廣瀨龍田神社、奉幣馬、爲祈年也、是日六位已上、借用官物薨卒死去者、盡從恩免、○癸巳、（廿八）暴風雨傷禾稼、○八月乙未朔、遣少納言從五位上鎌藏王、向伊勢大神宮、奉幣請止風雨、○辛丑、（七）陸奧國伊豆佐咩神、登奈孝志神、志賀理和氣神、並加正五位下、衣多手神、石神、理訓許段神、配志和神、儛草神、並授從五位下、從五位下御長眞

云り
（八月）辛丑、丑は原本末に作る類史十四及紀略に據て改む
○伊豆佐咩神、神名式陸奧國宮城郡伊豆佐賣神社、今陸前國宮城郡利府村飯土井
○登奈孝志神、同式同國氣仙郡登奈孝志神社、今下文の衣太手神理訓許段神と併せて水上神社と稱し陸前國氣仙郡高田町氷上山にあり合せて氷上三社と稱す、孝は原本考に作る諸本及類史に據て改む
○志賀理和氣神、同式同國斯波郡志賀理和氣神社、今陸中國紫波郡赤石村櫻町
○衣多手神、同式同國氣仙郡衣太手神社、所在上に注す、手は原本宗に作る藤本に據て改む衣多手或はエタテと訓むべきか
○石神、同式同國桃生郡石神社、今陸前國桃生郡十五濱村濱石峯山
○理訓許段神、同式同國氣仙郡理訓許段神社、所在上に注す原本訓字なく許を計に作る式に據て改め補ふ

人近人爲越前守、○癸丑[十九]、遣使者向越前國氣比神宮奉幣、○丙辰[廿二]、安房國安房神、天比理刀咩命神、並特加從三位、從四位下清原眞人岑成爲彈正大弼、從五位下縣連氏益爲勘解由次官、橘朝臣永範爲下野介、○己未[廿五]、淡路國上言、有牛產犢一身兩頭、○辛酉[廿七]、四品吉備津彥命神奉充封廿戶、○癸亥[廿九]晦、地震、○閏八月甲子朔、日有蝕之、○戊辰[五]、授遠江國息神從五位下、○乙亥[十二]、大風、發屋拔木、○丙子[十三]、以遠江國息神列於官社、○己卯[十六]、以廩院米賑給京師被風災者、○辛巳[十八]、授勳五等吉彌侯部呰外從五位下、○乙酉[廿二]、地震、○丙戌[廿三]、從五位下藤原朝臣三藤爲諸陵頭、○丁亥[廿四]、大祓於建禮門前、伊勢齋內親王將參大神宮、故有此祓、○戊子[廿五]、伊勢齋內親王禊於鴨川、○庚寅[廿七]、大雨、○壬辰[廿九]、遣左近衞少將從五位上藤原朝臣仲統、右近衞少將從五位上在原朝臣行平等、向賀茂松尾大神等社奉幣、請以止雨、○癸巳[三十]、大祓於朱雀門前、伊勢齋內親王將參大神宮、故重有此祓、○九月[甲午朔]庚子[七]、伊勢齋內親王參大神宮、帝御大極殿以遣之、自餘如常儀、中納言正三位安倍朝臣安仁、右中辨從五位上橘朝

臣海雄等、爲長奉送使、○辛丑、地震、○壬寅、重陽節也、帝不御南殿、勅公卿、喚侍從文人等宴賞、賜祿如常、○冬十月癸亥朔、帝不御南殿、勅公卿飲宴侍從、賜祿如常、○甲子、加大和國御歳神正二位、若宇加乃賣命神、天御柱命神、國御柱命神、並加從三位、從五位下藤原朝臣緒數爲越前介、藤原朝臣世數爲越後守、○丁卯、地震、遣中臣忌部兩氏人、向五畿七道諸神社、奉幣賽宿禱也、○庚辰、地震、有聲如雷、○己丑、請五十僧於東宮、轉讀大般若經、限三日訖、○十一月己亥、地震、勘解由次官從五位下菅原朝臣善主卒、善主者從三位清公第三子也、少而聰慧、美容儀、頗有口辯、年廿三、奉文章生試、及第、承和之初拜彈正少忠、三年爲聘唐使判官、兼爲播磨權大掾、彈正少忠如故、復命之日叙從五位下、七年拜兵部少輔、明年出爲伊勢介、十四年爲越前介、後拜勘解由次官、病卒、時年五十、外從五位下家原連氏主爲筭博士、主計頭如故、從五位下大枝朝臣音人爲民部少輔、東宮學士如故、紀朝臣東人爲典藥頭、豐住朝臣永貞爲木工權助、伴宿禰龍男爲彈正少弼、安倍朝臣安正爲勘解

○配志和神、同式同國磐井郡配志和神社、今陸中國西磐井郡山目村山目
○儛草神、同式同國同郡儛草神社、今陸中國東磐井郡舞川村舞草
○安房神、承和三年紀（續後紀九〇頁）に注す
○天比理乃咩命神、承和九年紀（續後紀一三九頁）に見ゆ原本天を大に作る藤本及式に據て改む
○牛産、牛は原本午に作る諸本及紀略に據て改む
○晦、原本なし類史百七十一及紀略に據て補ふ
（閏八月）息神、神名式遠江國敷智郡息神社、所在未詳
○廩院、拾芥抄中末に廩院在民部省東、納諸國庸租米充公用、納下厨家之殘とあり
○吉彌侯部呰、藤本に呰下麻呂脫歟と云
○行平、平は原本幸に作る藤本中本淀本に據て改む
（九月）長奉送使、齋宮を伊勢まで長く送り奉るに依て長奉送使と云奉は藤本に據て補ふ
（十月）御歳神、上に注す

由次官、從五位上高原王爲伊豆守、○辛丑、特加大和國金峯神從三位、率川坐大神御子神、狹岡神、率川阿波神、並授從五位下、○甲辰、遣使者向丹波國麻氣神社奉幣、○乙卯、帝親奉新嘗祭、自餘如常儀、○丙辰、幸豐樂院、賜宴群臣、亦如舊儀、○十二月癸亥、以美濃國伊富岐神列於官社、○庚午、丹後權守從五位上豐階公安人賜姓眞人、大外記外從五位下名草宿禰安成賜姓滋野朝臣、外從五位下大學助助教西漢人宗人賜姓滋善宿禰、○乙亥、加大和國大神大物主神從二位、○丙子、加伊豆國三嶋大神從四位下、阿波咩命神、物忌奈命神、伊古奈比咩命神、並加正五位下、阿米都和氣命神、伊太氐和氣命神、阿豆佐和氣命神、波布比咩命神、並加從五位上、○庚辰、加左大弁正四位下小野朝臣篁從三位、○辛巳、天台沙門素然卒、沙門者嵯峨太上天皇之子也、賜姓源朝臣名明、性甚朗悟、天皇好文書、欲教諸子、皆有才學、知明、奇器、勅勸對策、天長九年正月叙從四位上、爲大學頭、承和五年正月兼爲加賀守、六年正月遷除近江守、九年正月轉爲播磨守、大學頭如故、七月遭太上天皇崩

○越後守、守は原本傍注介に作る

(十一月)聰慧、慧は原本惠に作る諸本に據て改む

○頗有口辯、原本頗字なく辯を弁に作る頗は藤本に據り辯は諸本に據て補ひ改む

○後拜、後は原本復に作る諸本に據て改む

○竿博士、竿は原本竿に作る閣本藤本に據て改む

○豐仕朝臣永貞、原本仕を任に、永を米に作る前本藤本中本に據て改む

○金峯神、神名式大和國吉野郡金峯神社(名神大月次新嘗)、吉野山金御嶽に在り中古以來藏王權現また金精大明神と稱す藏王は金剛藏王の略

○率川坐大神御子神、同式同國添上郡率川坐大神御子神社三座、官幣大社大神神社境外攝社、奈良市子守町

○狹岡神、同式同國同郡狹岡神社八座、奈良市法蓮町

○率川阿波神、同式同國同郡率川坐阿波神社、奈良市西城戸町

○麻氣神社、同式丹波國

船井郡麻氣神社（名神大）船井郡麻氣村竹井
○自餘如常儀、餘字は藤本に據て補ふ
（十二月）伊富岐神、神名式美濃國不破郡伊富岐神社、岩手村伊吹嶽
○豐階公、錄河内皇別豐階公川俣公同祖彦坐命男澤道彦命之後也
○外從五位下名草宿禰、原本外字なく位一字衍れり諸本に據て補刪
○滋野宿禰、錄右京神別に紀直同祖天道根命之後也とあり
○西漢人、錄攝津雜姓に川内漢人火明命九世孫否井命之後と見ゆ、其同族なるべし漢は原本渼に作ろ諸本に據て改む
○大神大物主神、官幣大社大神神社大和國磯城郡三輪町にあり大物の二字は藤本谷本に據て補ふ
○伊豆國三嶋大神、以下八座は前に出づ、原本伊豆を駿河に作る嘉祥三年十月辛亥紀齊衡元年六月己卯紀に據て改む
○阿波咩命神、神名式には阿波神社とあり名神祭式には阿波命神社に作る
○物忌奈命神、原本忌下

服解、八月復任、俄而遷爲左京大夫、九月更兼爲播磨守、十三年正月加正四位下、爲刑部卿、十四年正月兼爲越中守、嘉祥元年正月遷爲阿波守、二年二月爲參議、從初承勅、勉勵彌切、諸子百家、略以閲覽、晏駕之後、哀慕感恨云、誰爲爲之、不遂其業、歸心佛道、離遠俗塵、遂爲沙門、終于山中、時人高其節操、皆以感慕、○癸未、參議左大辨從三位小野朝臣篁薨、篁參議正四位下岑守長子也、岑守弘仁初爲陸奧守、篁隨父客遊、便於據鞍、後歸京師、不事學業、嵯峨天皇聞之、歎曰、既爲其人之子、何還爲弓馬之士乎、篁由是慚悔、乃始志學、十三年春奉文章生試及第、天長元年拜巡察彈正、二年爲彈正少忠、五年遷爲大内記、七年爲式部少丞、九年授從五位下、拜大宰少貳、有詔不許之官、其夏喪父、哀毀過禮、十年爲東宮學士、俄拜彈正少弼、承和元年爲聘唐副使、明年春授從五位上、兼備前權守、數月拜刑部大輔、三年授正五位下、五年春、聘唐使等四舶、次第泛海、而大使參議從四位上藤原常嗣所駕第一舶、水沃穿缺、有詔以副使第二舶改爲大使第一舶、篁抗論曰、朝議不定、再三其事、亦初定舶次

〇に寸字あり式に據て削る
〇伊古奈比咩命神、神字は藤本に據て補ふ
〇伊太氏和氣命神、氏は原本豆に作る式に據て改む
〇波布比咩命神、神字は藤本に據て補ふ
〇素然卒、補任嘉祥三年の條に源明十二月日出家法名素然於横川仁壽二年十二月入滅號横川宰相入道とさ見ゆ
〇賜姓源朝臣、錄左京皇別源朝臣明年二云々腹飯高氏云々依弘仁五年五月八日勅賜姓貫於左京一條一坊とあり
〇性甚朗悟、經國集卷十三に九日翫菊花篇應製詩を載せ源明時年十三さあり朗悟は宋史高宗紀に資性朗悟博學强記さあるに據れり
〇對策、策は問題を書せる札を云、登庸に當りて問題を科しその學識を試むる法にて漢書公孫弘傳に出づ
〇遭太上天皇崩、遭は原本遷に作る諸本に據て改む
〇小野朝臣篁薨、古今集目錄に參議正四位下岑守

第之日、擇取宦者、爲第一舶、分配之後、再經漂廻、今一朝改易、配當危器、以己福利、代他害損、論之人情、是爲逆施、既無面目、何以率下、篁家貧親老、身亦尩瘵、是篁汲水採薪、當致匹夫之孝耳、執論確乎、不復駕舶、近者大宰鴻臚館、有唐人沈道古者、聞篁有才思、數以詩賦唱之、每視其和、常美艷藻、六年春正月、遂以捍詔、除名爲庶人、配流隱岐國、在路賦謫行吟七言十韻、文章奇麗、興味優遠、知文之輩、莫不吟誦、凡當時文章、天下無双、草隷之工、古二王之倫、後生習之者、皆爲師摸、七年夏四月、有詔特徵、八年秋閏九月、叙本位、十月任刑部大輔、九年夏六月爲陸奥太守、秋八月入拜東宮學士、其月兼式部少輔、十二年春正月授從四位下、于時法隆寺僧善愷、告少納言登美眞人直名、爲寺檀越枉法狀、訴之太政官、加訊鞫、漸將讞斷、而世論嗷々、爲善愷成私曲、由此朝廷更論此事、延至分爭、名例律私曲相須之二義、或以爲一、或以爲二、弁官上下、還罹其網、遂令明法博士讃岐朝臣永直考之、考曰、私曲兩字、混處一科、是相須之義也、當今之事、只有一犯、不足結罪、事未斷畢、十三年五月爲權右中弁、新關

一男延曆副將軍永見孫弘仁十二年秋補文章生云々と見ゆ
○便於據鞍、原本便於を便放に作る諸本に據て改む便は便習なり據鞍は後漢書馬援傳に據鞍顧眄とあり馬に乘るを云專ら武事を事とせりとなり
○歎曰、歎は原本難に作る諸本に據て改む
○喪父、喪は原本哀に作る閣本前本藤本中本に據て改む
○明年春、春は原本奉に作る諸本に據て改む
○大使參議、議は原本儀に作る諸本に據て改む
○害損、害は原本客に作る閣本中本淀本に據て改む
○尩瘵、尩は荀子正論篇注に癈疾之人また疾病之人と見ゆ瘵も亦說文に勞病也とあり
○匹夫之孝、孝經に謹身節用以養父母此庶人之孝也とあり
○舩舶、舶は原本船に作る諸本に據て改む
○鴻臚館、鴻臚は原本鳴臚に作る諸本に據て改む
○捍詔、字書に捍與扞同拒也とあり

其事、即據律文、以爲私與曲明是二也、若私若曲、有一於此、未免其罪、而連涉日月、不肯決斷、仍上請議定私曲律義之表、並所執狀、以糺法處之不熟律義、明弁官之可處私罪、篁初恨此論之不平、作傷時詩卅韻、寄參議滋野朝臣貞主、後重令諸儒傍議、其文曰、被右大臣宣偁、奉勅、據參議小野篁朝臣上表及所執、律文義定可考申、謹依宣旨、覆案律文、公罪謂緣公事致罪而無私曲者、疏云、私曲相須、公事與奪、情無私曲、雖違法式、是爲公坐云云、私罪條疏云、私罪謂不緣公事、私自犯者、雖緣公事、意涉阿曲、亦同私罪者、由此案之、私者不緣公事、自犯之名、曲者雖緣公事、意涉阿曲之謂也、相須則私與曲、二事相待之理、然則無私無曲、可爲公罪、一私一曲、不免私罪、而永直等說云、私曲者謂私之曲相須者、合私曲兩字爲一義、以連讀之意云云者、文義相錯、公私不分、此說之迂、難可據信、篁朝臣所執、誠爲允愜、九月遷左中辨、十四年春正月爲參議、四月兼彈正大弼、十五年春正月轉左大辨、兼信濃守、夏四月又兼勘解由長官、仁壽二年春正月轉右大弁、餘皆如故、明年春正月加從四位上、夏五月以

○除名、名字は藤本に據て補ふ

○配流隱岐國、續後紀此事を五年十二月己亥（一三〇頁）とす蓋命下れる日に據て記せるか

○七言十韻、言字は藤本堀イ本に據て補ふ

○草隷、草書と隷書となり

○二王之倫、王は原本三に作る諸本に據て改む二王は晉の王羲之と其第七子王獻之を云父子共に能書を以て名あり

○有詔特徵、續後紀に承和七年二月辛酉召流人小野篁、六月辛酉流人小野篁入京披黄衣以拜謝とあり

○夏六月、古今集目錄正月十一日に作り補任は五月十一日に作る

○陸奥太守、太原本大に作る諸本に據て改む

○法隆寺僧善愷云々、續後紀承和十三年九月乙丑和氣眞綱の傳に至當年（承和十三年）春夏際法隆寺僧善愷告少納言從五位下登美眞人直名所犯之罪云々と見え明法博士斷文は同年十一月壬子紀に見ゆ

病辭官歸家、嘉祥三年四月加正四位下、仁壽元年春正月遙授近江守、明年春病瘳、復爲左大弁、後又病發不朝、天皇深爲矜憐、數遣使者診視病根、賚賜錢穀、冬十二月就家、叙從三位、及困篤、命諸子曰、氣絶則殮、莫令人知、薨時年五十一、篁身長六尺二寸、家素清貧、事母至孝、公俸所當、皆施親友、○丁亥、勅五畿內七道諸國、請練行僧、讀金剛般若經、以賚疫神、

○登美眞人、眞人は原本朝臣に作る尾イ本及續後紀に據て改む
○訴之太政官、官下に恐らくは官の一字を脫す
○加訊鞫、鞫は原本鞠に作る原本傍注に據て改む訊鞫は後漢書鄧隲傳に出で嚴しく訊問するを云
○罹其網、罹は原本羅に作る傍注に據て改む
○私曲兩字、字は原本犯に作る堀イ本及原本傍注に據て改む
○權右中辨、右は諸本左に作る
○法處、法家の訛ならむ
○傍議、議は原本儀に作る諸本に據て改む
○宣偁、偁は原本備に作る諸本に據て改む
○覆案、漢書元帝紀五年に出で反覆調査するを云
○雖違法式、違は原本達に作る諸本に據て改む
○十五年、閣イ本嘉祥元年に作る　○轉左大辨、此四字は堀本(朱)及承和十五年正月甲戌紀に據て轉ふ　○仁壽二年春正月轉右大弁、此十一字は衍なり國史大系本に仁壽二を嘉祥元、春正を夏四と改めたれど承和十五年卽嘉祥元年なれば之も亦誤なり元年四月轉右大辨の事實なし　○明年春正月、嘉祥二年正月丁戌なり
○嘉祥三年、嘉祥の二字は堀本(朱)に據て補ふ　○復爲左大弁、復は原本後に作る諸本に據て改む　○診視、診は原本趁に作る藤本に據て改む閣本は赴視に作る　○冬十二月、二の字は藤本に據て補ふ　○叙從三位、上文庚辰紀に出づ　○氣絕則殮、氣絕は晉書荀菘傳に出で絕命に同じ殮は入棺なり絕は原本純に作る諸本に據て改む　○五十一、小野氏系圖は五十に作る　○家素淸貧云々、魏志華歆傳に歆素淸貧祿賜以賑施親戚故人家無擔石之儲とあるに出づ　○練行僧、行は諸本及類史百七十三に據て補ふ　○金剛般若經、經は藤本に據て補ふ

日本文德天皇實錄卷第四

【仁壽三年】皆如常儀、常は閣本前本舊に作る

〇當世王、當は原本常に作る諸本及類史九十九に據て改む

〇藤原朝臣輔嗣諸成、諸成の上に藤原朝臣の四字あるべきなり然るに類史にもなければ省略せしにや下文諸葛の上も亦同じ

〇愜、原本悏に作る諸本及類史に據て改む

〇闇繼、中本園を國に作る天長十年二月丁亥紀に攝津國人凡河内忌寸紀主等三人に姓清内宿禰を賜ふとあり又承和六年正月

日本文德天皇實錄卷第五

起仁壽三年正月盡十二月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉 勅撰

(癸酉)三年春正月壬辰朔、帝御大極殿、以受歲賀、還御南殿、賜宴侍臣、皆如常儀、〇七戊戌、幸豐樂院、觀靑馬、賜宴群臣、亦如舊儀、授從四位上伴宿禰善男正四位下、從四位下道野王、藤原朝臣氏宗等、並從四位上、无位當世王從四位下、從五位上豐前王正五位下、從五位下善永王、益善王等、並從五位上、正六位上正岑王、仲井王、眞貞王等、並從五位下、從四位下藤原朝臣輔嗣、諸成等、並從四位上、從五位上田口朝臣房富、笠朝臣年嗣、丹墀眞人門成、藤原朝臣貞本、在原朝臣行平、藤原朝臣仲統等、並正五位下、從五位下藤原朝臣本雄、百濟王永善、清原眞人秋雄、廣宗宿禰糸繼、文室朝臣笠科、藤原朝臣良方、山田宿禰古嗣、橘朝臣永範、南淵朝臣年名、紀朝臣今守、坂上大宿禰貞守、源朝臣愜等、並從五位上、外從五位

庚申紀に清內宿禰御園見ゆ之と同系なるべし
○諸葛、葛は原本萬に作る諸本及類史に據て改む
○高橋朝臣、橋は原本橋に作る閣本前本藤本等に據て改む類史は高階眞人に作る
○物部彌範、弥文に彌恐弘さあれご續後紀嘉祥二年十月紀に據るに彌範弘範は別人なり閣本前本宮本何れも彌さあれば輙く改め難し
○氏子、私記に或云承和十三年五月叙二從五位上一不レ知二孰是一
○殺杖、原本祝杖に作る諸本及類史七十一に據て改む二年正月己卯紀を參看すべし
○丙午、此條類史百七十一に據て補ふ
○貞守爲右大辨、右は原本左に作る諸本及齊衡元年正月辛丑紀に據て改む
○遠江權守如故、權字は堀本藤本及元年七月戊寅紀（四六頁）に據て補ふ

下朝妻造清主、清內宿禰園繼、正六位上源朝臣平、橘朝臣安永、平朝臣實雄、藤原朝臣弟男、藤原朝臣岑主、諸葛、和氣朝臣春生、藤原朝臣秋緒、紀朝臣貞嗣、橘朝臣宗雄、紀朝臣野鷹、當麻眞人清雄、伴宿禰安道、大春日朝臣高庭、佐伯宿禰子房、高橋朝臣安野等、並從五位下、正六位上有宗宿禰益門、山口忌寸西成、御輔朝臣永道、物部彌範、菅原朝臣梶成、安野造子香爐等、並外從五位下、○己亥、正四位下藤原朝臣古子、明子等、並授從三位、從五位上當麻眞人眞伊止子從四位下、无位安倍朝臣德子、大枝朝臣氏子等、並從五位下、從七位下秦忌寸嶋子外從五位下、○辛丑、授无位橘朝臣房子從四位下、○癸卯、諸衞府獻殺杖、內侍傳旨、○甲辰、地震、○丙午、地亦震、○丁未、賜宴侍臣、踏歌如常、三品忠良親王爲上總太守、參議從四位上藤原朝臣氏宗爲左大辨、從四位下藤原朝臣貞守爲右大辨、參議正四位下藤原朝臣助爲近江守、左兵衞督如故、從五位下紀朝臣貞守爲少納言、從五位上橘朝臣海雄爲左中辨、文室朝臣助雄爲右中辨、藤原朝臣冬緒爲左少弁、春宮亮遠江權守如故、小野朝

○三夏爲信濃守、三夏は二年正月(五五頁)已に信濃守と爲る重出疑ふべし
○全繼爲介、下文七月庚寅紀に重出す
○土左權守、左は原本佐に作る諸本に據て改む
○有常、有は原本在に作る諸本に據て改む
○爲右兵衞佐、齊衡元年正月辛丑紀及古今目錄右を左に作れど元慶元年正月乙未紀には右とあり
○臣範、下文七月庚戌紀齊衡三年二月辛巳紀貞觀元年三月丁巳紀には巨範に作る
○停賭射、停字は諸本及類史七十二に據て補ふ
(二月)藏鉤、抄術藝部雜藝類に藏鉤三秦記云昭帝母鉤弋夫人手拳而國色先帝寵之世人爲藏鉤法是也とあり貞觀八年九月甲子紀紀朝臣夏井の傳に詳なり
○林泉、北史韋敻傳に所居之宅枕帶林泉蕭然自

臣恒柯爲右少弁、橘朝臣門雄爲大監物、正五位下菅原朝臣是善爲大學頭、文章博士加賀權守如故、從五位下佐伯宿禰眞持爲山城介、從五位上鎌藏王爲大和權守、外從五位下清村宿禰是嶺爲介、從五位下藤原朝臣秀雄爲河內守、安倍朝臣氏主爲參河守、大原眞人眞室爲介、從四位下時宗王爲相摸守、從五位下藤原朝臣安雄爲介、外從五位下朝宗宿禰吉繼爲下總介、從五位下藤原朝臣正世爲常陸介、佐伯宿禰雄勝爲近江權介、從五位上紀朝臣今守爲美濃守、正五位下久賀朝臣三夏爲信濃守、從五位上坂上大宿禰正野爲越後權守、從四位上正躬王爲丹波守、治部卿如故、外從五位下春道宿禰永藏爲因幡介、從四位上源朝臣多爲美作守、宮內卿如故、從五位下吉備朝臣全繼爲介、正五位下在原朝臣行平爲備中權介、右近衞少將如故、從五位下百濟王安宗爲安藝介、三統宿禰眞淨爲周防守、眞貞王爲長門守、伴宿禰須賀雄爲土左權守、滋野朝臣善蔭爲大宰少貳、紀朝臣有常爲右兵衞佐、但馬介如故、和氣朝臣臣範爲左馬助、○戊申、(十七)停大射禮、但勅公卿、令諸衞府、於

逸と見え山林泉石又は庭苑を云
○進士、考課令に見え職官志に凡其試貢人有六類、焉〈稱六類依唐六典〉一曰秀才二曰明經三曰進士云々とあり進士の稱は禮記王制篇に出づること已に注せり
○南池、山城志に葛野郡南池院在七條南烏丸類聚國史曰弘仁四年四月幸皇太弟南池、また續教訓抄に南池院ト申ハ四條ナハテノ北、西宮殿ノ森ノ西四丁許繩手ヨリ北ヘ一丁餘ノ程ニ嶋アリ廻ハ池ナリ云々とあり
○雲林院、紫野大德寺の巽にあり河海抄五に雲林院は淳和の離宮也仁明天皇に處分し奉給次常康親王傳領本堂は彼親王室也とあり元慶八年九月丁卯紀を參看すべし
○梨下院、類史廿八に天長九年夏四月甲子鑾輿遷御梨本院爲修大內也と見え拾芥抄宮城指圖には上東門の南左近衞府の西にあり梨本に作る
○制曰、三代格十七に見え十九日とす
○公謙、晉書王坦之傳に

豐樂殿前射。○己酉（十八）、亦停賭射。○癸丑（廿二）、內宴如常。○二月（辛酉朔）癸亥（三）、加筑前國宗像神正五位下。○乙丑（五）、帝覽藏鉤戲。左右相分、飛鳥遊附者不禁。○甲戌（十四）、治部少輔兼齋院長官從五位下藤原朝臣關雄卒。關雄者刑部卿從三位眞夏第五子也。天長二年春、奉文章生試及第。關雄少習屬文、性好閑退。常在東山舊居、耽愛林泉。時人呼爲東山進士。承和元年秋、淳和太上天皇嘉其爲人、特詔徵之。關雄辭而不獲、遂應詔命。天皇賜以優禮、從事左右。明年拜勘解由判官。劇務繁併、既非其好。數月遷少判事。關雄尤好鼓琴。天皇賜其祕譜。由是雅調稍妙。關雄亦能草書。南池雲林兩院壁、皆令關雄書之也。六年授從五位下。累遷。嘉祥四年治部少輔。仁壽二年兼齋院長官。以病辭退。遂不被免。卒時年四十九。○庚辰（二十）、帝自東宮移幸梨下院。此院先代別館也。在左近衞府西。制曰、利國通規、公謙爲本。安民茂躅、損挹厥初。朕薰腴未施、化跡仍疎。恐黎氓之不親、望列辟以懋德。而今所生男女、皆當享封爵之重、疏湯沐之用。思其煩費、內以忸怩。竊見乃祖聖皇、貽厥之謀、除親王之號、賜朝臣之姓。奕代相沿、已爲成式。誠宜

陶聖風而長扇、共源氏而混流、但前號親王、不在此限、同母後產、亦復一例、慶雲之惠、既無愛憎、若樹之華、更有濃淡、蓋以域中大寶、在屈己以利人、天下至公、欲損上以益下、普告中外、咸俾聞知、○庚寅〔三十〕晦、帝幸冷然院、翫景物也、賜侍臣祿有差、即日亦幸右大臣藤原朝臣良房第、以覽櫻花、置酒興樂、六位已上會者、賜祿各有差、是月、京師及畿外多患皰瘡、死者甚衆、天平九年、及弘仁五年、有此瘡患、今年復不免此疫而已、○三月〔辛卯朔〕甲〔四〕午、加從三位源朝臣潔姬正三位、授正六位下難波連薳麻呂外從五位下、緣去月遊賞右大臣第而恩及家人也、○丁〔七〕酉、授大外記外從五位下滋野朝臣安成從五位下、授正六位上宍人朝臣繼成外從五位下、○戊〔十八〕申、地震、○壬〔廿二〕子、請名僧百口於大極殿、轉讀大般若經、限三日訖、攘灾疫也、大和守正五位下丹墀眞人門成卒、門成者從五位下內藏助兼右衛士佐豐長之子也、性甚剛直、大同之初拜巡察彈正、弘仁之初爲少判事、九年爲大和少掾、十一年轉爲大掾、天長三年授從五位下、五年爲丹波介、土民庶戾、不順教化、舊號難治、門成施以猛政、笞罰爲先、廳事之前、篚

見ゆ公平無私にして謙損なるを云
○損挹、此語は後漢書光武紀に見ゆ荀子宥坐篇に挹而損之、注に挹亦退也猶言損之又損とあり
○薰腴、唐王勃益州夫子廟碑に薰腴廣被とあり德澤を云
○黎氓、庶民を云氓は原本岷に作る閣本藤本中本に據て改む格には黎民に作る
○列辟、爾雅釋訓に天子諸侯通稱辟とあり列侯と云に同じ
○疏湯沐之用、湯沐の用は史記高祖紀に出で賜祿を云疏は分也
○煩費、費は原本貫に作る諸本に據て改む
○忸怩、尚書五子之歌に顏厚有忸怩、疏に外貌顏厚而內情羞慙とあり
○乃祖聖皇貽厥之謀、嵯峨天皇の皇子に源姓を賜へるを云貽厥之謀は毛詩大雅文王有聲章に詒厥孫謀以燕翼子とあるに出づ貽は詒に同じ
○奕代、奕は原本變に作る諸本に據て改む奕代は增韻に累世也とあり
○復一例、復は原本後に

楚如積、數年部內大理、民至今稱之、九年爲治部少輔、十年爲備前介、承和九年敍從五位上、十年爲刑部大輔、十二年爲宮內大輔、後遷爲武藏守、所部曠遠、盗賊充阡、門成下車未幾、風俗肅清、姧猾歛手、嘉祥三年爲大和守、豪宗右姓、縱放不制、門成施政自如、無所迴避、境內夷晏、民皆戴之、今年敍正五位下、病卒於官、門成雖無才學、長於從政、所到之處、必樹風聲、○丁巳、以穀倉院籾鹽、給京師患皰瘡者、○戊午、越中權守從五位上紀朝臣椿守卒、椿守春宮亮從五位上白滿長子也、弘仁四年正月爲大內記、十一年正月爲典藥助、十二年正月敍從五位下、爲上總介、十三年正月爲安房守、承和五年正月加從五位上、仁壽元年正月爲越中權守、卒時年七十八、椿守工於隷書、尤得其節、答渤海書、特簡好手、椿守前後再書、皆盡其善、朝廷美之、○夏四月壬戌、地震、○丁卯、從五位下藤原朝臣岑主爲齋院長官、○庚午、遣侍從從五位上嶋江王、神祇大副兼內藏頭從五位上中臣朝臣逸志等、向伊勢大神宮、請除災疫、從五位下三統宿禰眞淨爲中宮大進、藤原朝臣良繩爲內藏助、從五位上益

作る諸本に據て改む例は原本傍注一本列に作るさ云

○慶雲之惠、蓋し慈雨を以て父母の恩に譬ふ文選曹植責躬表に不分荊棘者慶雲之惠也、注に言慶雲蔭物不分荊棘蘭桂而覆之さあるに據れり

○若樹之華、蓋し子孫に譬ふ者は一本落に作るさ云

○域中、周禮地官大司徒に宇内曰域中さ見ゆ

○賜祿、賜は藤本に據て補ふ

○皰瘡、抄疾病部瘡類に皰瘡此間云毛加佐さあり（續紀上二五六頁參照）

○天平九年、續紀（上二七三頁）に見ゆ

○弘仁五年、史に見えず

○而已、紀略は也の一字に作る

（三月）大同、同は原本司に作る諸本に據て改む

○巡察彈正、察は藤本堀本及原本傍注に據て補ふ、職員令に巡察彈正十人掌巡察內外糺彈非違さ見ゆ

○大和少掾、掾は原本椽に作る諸本に據て改む下同じ

○庶戻、私記に庶一作鹿按恐狼誤と云
○笞罰、職制律に詳かなり
○箠楚、笞杖なり雲麓漫鈔に韓昌黎詩云州司卑官不堪說未免箠楚塵埃中と見ゆ楚は原本楚に作る諸本に據て改む
○充阡、阡は字書に以東西爲阡、南北爲陌と見え此は巷閭を云原本傍注に阡は一本斥とあり
○豪宗右姓、後漢書羊陟傳に見え勢位盛大なる家を云
○自如、自若に同じ漢書李廣傳に吏士無人色而廣意氣自如、注に猶言如舊と見ゆ
○從政、論語子路篇に出で治政に參與するを云
○風聲、尚書畢命に彰善癉惡樹之風聲とあるに出で土地風俗を識別して聲教の法を立て善風を布くをいふ
○隸書、隸原本隷に作る諸本に據て改む
○其節、節は諸本筋に作る
○渤海、渤原本教に作るを紀略に據て改む
○特簡、特は原本時に作

善王爲大藏大輔、正五位下豐前王爲大和守、○甲戌[十四]、大內記從五位下和氣朝臣貞臣卒、貞臣字和仁、播磨守從四位上仲世第三子也、數歲喪母、哀戚過禮、叔父參議眞綱深相矜愛、弱冠從治部卿安倍朝臣吉人受老莊、吉人奇之、後入大學、研精不息、廿四擧秀才、廿八對策、不得其第、承和十四年拜大學大允、嘉祥元年遷大內記、仁壽元年冬十一月授從五位下、患皰瘡卒于官、時年卅七、時人惜之、貞臣爲人聰敏、質朴少華、性甚畏雷、不留意小藝、唯好圍碁、至於對敵交手、不覺日暮夜深、○戊寅[十八]、无品成康親王薨、親王者仁明天皇第八子也、母右大臣從二位藤原朝臣三守之女、贈從二位貞子也、親王幼而岐嶷、有成人之志、天皇殊奇愛之、天皇崩後、未經幾歲、不耐疱瘡之患、遂以殞逝、○乙酉[廿五]、以皰瘡染行、人民疫死、故停賀茂祭、遣侍從從五位上嶋江王、神祇大祐從七位上忌部宿禰高善等向社下、申謝事由、但山城國司齋供如常、○丙戌[廿六]、詔曰、皇王建極布政、貴其順時、聖哲凝規宣風、欲其應節、故能裁成庶物、覆燾之德克隆、光宅八埏、全濟之功斯遠、朕以寡德、忝統鴻基、旰日勿休、乙夜忘寢、非貪

る諸本に據て改む
(四月)眞淨爲中宮大進、眞淨は嘉祥三年四月甲戌中宮大進となる蓋し再任せるなり狩谷氏は齊衡元年正月辛丑紀に據て大夫の誤かと云
○字和仁、字は原本守に作る諸本に據て改む
○秀才、選叙令に凡秀才取博學高才者、凡秀才出身上々第正八位上上中正八位下とあり
○卒于官、官は原本宮に作る藤本中本淀本等に據て改む
○交手、手は原本下に作る藤本堀イ本に據て改む
○三守之女、之は中本谷イ本に據て補ふ
○贈從二位、淸和紀貞觀六年八月丁巳紀には贈從一位とあり
○皰瘡染行、皰は原本疱に作る諸本に據て改む染は紀略流に作り倭名抄所引類史亦流に作る閣本前本谷本皰上に頗字あり
○大祐、原本大佑に作る前本藤本及類史百七十三に據て改む　○覆燾、中庸に如天地之無不持載無不覆幬とあり燾は幬に同じ覆也と注す　○八埏、埏は原本挻に作る諸本に據て改む八埏は文選封禪文注に埏地之八際也とあり八方に同じ　○全濟、全活賙救なり南史劉善明傳に出づ　○忝統、忝は類史恭に作る　○旰日、左傳襄十四年注に旰は晏也とあり　○乙夜、文選新刻漏銘注所引漢舊儀に黃門持五夜甲夜乙夜丙夜丁夜戊夜也とあり乙夜は今の午後十時に當る　○札瘥、周語に民生有財用而死有所葬然則無天昏札瘥之憂、注に疫死曰札瘥病也とあり　○以芽、芽は原本藥に作る類史に據て改む　○

四海之富、非念九重之尊、只欲導仁壽、以寘群生、息勞役以安万姓、而誠款未申、咎徵斯應、皰瘡之疫流行、札瘥之嗟競起、當春夏陽和之時、草木皆有以芽、而吾百姓愁病之人、或阽於死亡、朕之不德、撫育乖方、憂惕之誠、罔知攸濟、月令春夏下寬大之令、頒德化之政、以順天帝、以救災變、宥司務脩職任、欽奉時訓、罪疑從輕、賞疑從重、貴埋胔掩骸之仁、崇養老矜孤之德、其自今日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、未發覺已發覺、未結正已結正、繫囚見徒、咸皆赦除、但犯八虐、故殺謀殺、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在赦例、令天下州郡、勿輸承和十年以往調庸未進、優復百姓、息當年傜十日、其疾病者、長吏親自巡視、便給醫藥、諸所振贍、務令優速、庶隱恤之旨、致感革於上玄、仁貸之風、鐲凶札於中壤、○戊子、備中守從四位上源朝臣安、卒、安嵯峨太上天皇子也、母粟田氏、性懶文書、好習射藝、承和十二年敍從四位上、嘉祥三年正月任備中守、卒時年卌二、

阽於死亡、漢書文帝紀に出で注に阽近邊欲墮之意とあり　○德化、類史百七十三に化を利に作る　○罪疑、尚書大禹謨に罪疑惟輕功疑惟重とあり
○埋胔掩骸、禮記月令孟春の條に掩骼埋胔とあるに出づ、骸骼何れも枯骨の意なれば同じ胔は肉腐曰胔と注す　○犯八虐、犯は類史紀略に據て補ふ　○未進、未は原本不に作る諸本及類史紀略に據て改む　○疾病、疾は原本疫に作る諸本に據て改む　○長吏、吏は原本史に作る諸本及類史に據て改む　○便給、便は類史に據て補ふ　○振贍、原本極贍に作る振は類史に據り贍は閣本中本淀本及類史に據て改む、振贍は後漢書郞顗傳に稟邮貧人賑贍孤寡此天之意也人之慶也仁之本也儉之要也と見ゆ振賑通用す　○感革、感は動也革は改也感動せしむるを云　○上玄、天を云　○凶札、周禮地官均人の疏に凶謂年穀不熟札謂天下疫病とあり　○中壤、壤は原本壞に作る諸本及類史に據て改む中壤は中土に同じ中國の意なり

○五月（庚寅朔）癸巳（四）、詔相摸、上總、下總、常陸、上野、陸奥等六國、寫一切經、六國各分部帙、寫得上之、○甲午（五）、停騎射走馬之觀、以災疫也、○己亥（十）、從五位下藤原朝臣野主爲齋院長官、○庚子（十一）、詔十七寺、讀大般若經、限三日訖、攘災疫也、○壬寅（十三）、亦詔大宰府、於觀音彌勒兩寺、並四王院、香椎廟、管内國分寺、讀大般若經、加從五位上藤原朝臣並藤正五位下、授正六位上中臣志斐連春繼外從五位下、復罪人和氣朝臣齊之、讚岐朝臣永直等爵、是日並藤卒、並藤參議從三位刑部卿大宰員外帥勳四等濱成之曾孫、中判事正六位上臣繼之孫、豐前介正六位上石雄之子也、並藤善陰陽推步之學、明曉天文風星、初爲丹波權掾、天長二年留爲陰陽助、六年正月叙從五位下、七年爲筑後守、九年二月爲陰陽頭、承和四年爲和泉守、七年正月還復陰陽頭、十四年正月兼爲加賀守、嘉祥三年正月

（五月）十七寺、類史百七十三には十の字なし　○觀音彌勒兩寺、觀音寺は筑前國大宰府にあり養老七年二月丁酉紀に勅遣僧滿誓於筑紫令造觀世音寺と見ゆ彌勒寺は宇佐八幡宮の傍にあり　○四王院、筑前國續風土記に御笠郡坂本村の北なる四王寺山の上に寺跡ありと云々と見ゆ　○加從五位上、加字は藤本及類史九十九に據て補ふ　○臣繼、尊卑分脈に濱成の子臣彥（イ臣繼）其子古雄其子並藤母陰陽頭中臣國珍女とあり　○推步、後漢書馮緄傳注に推步謂究日月五星之度昏旦節氣之差とあるに出で儀器及算術を用ひて天象を考測するを云　○風星、後漢書李郃傳に通五經善河圖風星と

叙從五位上、今日加正五位下、優其才學少倫、年齒衰落也、時年六十二、○（十四）癸卯、詔武藏信濃兩國、寫一切經各一部、○（十六）乙巳、无品齊子内親王薨、親王嵯峨太上天皇第十二女也、母正五位下文室眞人久賀麻呂之女、從五位上文子也、親王適三品大宰帥葛井親王、內外戚皆耻其非成禮、○（廿一）庚戌、大宰府上言、壹伎嶋女子伴部刀自賣、攣生三男、勅賜正税三百束、及乳母一人、○（廿二）辛亥、尾張國從五位上眞清田神、并无位大縣神、並授從四位下、授外從五位下宍人朝臣繼成從五位下、繼成有不可叙外位之愁、故改授、詔美濃國、出穀二千一百斛、給患皰瘡者、○（廿五）甲寅、加贈正五位下橘朝臣逸勢從四位下、○（廿九）戊午、參議正四位下左兵衛督兼近江守藤原朝臣助卒、助贈左大臣從一位内麻呂第十一之子也、少遊大學、頗涉史傳、弘仁十三年九月爲少判事、同年十一月爲兵部少丞、十四年二月爲大學助、天長元年二月爲出雲介、四年正月爲春宮少進、五年閏三月爲式部大丞、六年正月叙從五位下、卽爲遠江介、八年七月爲春宮坊亮、十年二月爲右近衛少將、三月加正五位下、兼便轉權中將、承和

あり
○少倫、倫は字書に類也比也とあり
○葛井親王、嵯峨天皇と異母兄弟なり
○壹伎嶋、伎原本岐に作る閣本前本藤本に據て改む
○攣生、攣は原本孿に作る類史五十四に據て改む、説文に攣は一乳兩子也とあり多産するを云
○眞清田神、承和十四年十一月紀に見ゆ
○大縣神、承和十四年十一月癸酉紀に奉授尾張國无位大縣天神眞清田天神二前並從五位下とあれば此に无位とあるは非なり
○皰瘡、皰は原本疱に作る諸本に據て改む下同じ
○閏三月、原本三を二に作る原本傍注及補任・長暦に據て改む
○兼便、便は原本使に作る諸本に據て改む
○九年七月爲左兵衛督、補任督を佐とす
○四年正月兼爲信濃守、四年の二字は藤本堀本及仁壽元年正月甲申紀に據て補ふ

○踢蹐、字彙に踢は不伸也又曲也蹐は小歩也累足也累足而行歩之狹也とあり
（二六月）處療、處は傍注に劇又一作痛とあり
○桅子、桅は釋名に船前立柱曰桅、韻會に桅舟上帆竿、天治本新撰字鏡にホハシラと訓り狩谷校本に桅一作柁一作橈とあり桅或は梔の訛か梔は抄舟車部舟具類に舵唐韻云舵正船木也漢語抄云柁（船尾也或作梔和語云太以之）とあり
○失路東西、路字は諸本に據て補ふ
○何嶋、原本何下一字空白とし諸本一に作るは衍なり故に削る
○鍼博士、職員令義解に針博士一人掌教針生等
○多治氏、多治眞人長野の女眞宗なり
○四品、藤本に此上に叙字あるべきかと云
○是月、是字は原本空白とす白雲本に據て補ふ原本傍注四に作るは所據を知らず
○常陸太守、太は原本大に作る諸本に據て改む下同じ

元年正月叙從四位下、四年正月兼爲尾張守、六年正月加從四位上、九年七月爲左兵衞督、轉爲右衞門督、十年二月拜參議、十三年正月遷爲治部卿、十五年正月更爲左兵衞督、嘉祥三年四月加正四位下、四年正月兼爲信濃守、仁壽三年正月兼爲近江守、皰瘡之後、緣不愼治而卒、時年五十五、助心性淸直、不憚毀譽、朝廷之士、爲之踢蹐、○六月辛酉、侍醫外從五位下菅原朝臣梶成卒、梶成右京人也、業練醫術、宜解處療、承和元年從聘唐使渡海、朝廷以梶成明達醫經、令其請問疑義、五年春解纜、著於唐岸、六年夏歸本朝、路遭狂飈、漂落南海、風浪緊急、皷舶艫、俄而雷電霹靂、桅子摧破、天晝黑暗、失路東西、須臾寄著、不知何嶋、々有賊類、傷害數人、梶成殊祈願佛神、儻得全濟、與判官良峯長松等合力、削採集破舶材木、造一船共載、爾時便風引舶、得著此岸、朝廷嘉其誠節、十年爲鍼博士、次爲侍醫、卒於官、○癸亥、一品大宰帥葛原親王薨、親王者桓武天皇之第三子、嵯峨太上天皇之兄也、母夫人多治氏、延曆廿二年正月四品、是月爲治部卿、大同元年五月爲大藏卿、三年正月爲彈正尹、四年九

月叙三品、弘仁元年九月爲式部卿、三年正月兼爲大宰帥、七年正月叙二品、十四年十月更爲彈正尹、天長七年正月兼爲常陸太守、八月更爲式部卿、八年正月叙一品、承和五年正月兼爲上野太守、十一年正月兼復爲常陸太守、嘉祥三年遷爲大宰帥、親王少而慧了、歷覽史傳、常以古今成敗爲戒、爲人恭儉、不傲於物、久在式部、諳職務、凡在舊典、莫不達練、擧朝重之、勅賜輦車入宮、禮儀異諸親王、薨時年六十八、朝廷監喪、葬儀如常、王家推謝、專從儉薄、不敢違遺令也、○丁卯、以尾張國大國靈神、大御靈神、憶感神等、列於官社、○己巳、以大和國金峯神、預於名神、前豐後權守從五位下登美眞人直名卒、直名從五位下藤津之子也、弘仁十三年二月爲主膳監正、天長二年七月爲美濃大掾、三年正月遷爲近江大掾、四年正月叙從五位下、七年正月爲大和介、承和二年九月爲大判事、九年正月爲散位頭、十一年二月遷爲少納言、十四年正月出爲大宰少貳、嘉祥二年正月叙從五位上、八月遷爲豐後權守、秩滿未得放還、卒時年六十二、直名頗有才學、口弁過人、抑屈己者、必酬以彼所病、故議者

○慧了、慧は原本惠に作る諸本に據て改む
○監喪、喪は原本哀に作る前本堀本谷本等に據て改む
○大國靈神、神名式尾張國中嶋郡尾張大國靈神社、稻澤町國府宮
○大御靈神、同式同國同郡大御靈神社、同上
○憶感神、同式同國海部郡憶感神社、神守村
○金峯神、二年十一月辛丑紀に見ゆ
○嘉祥二年正月叙從五位上、二は原本三に作る嘉祥二年八月辛丑紀に據て改む此に叙從五位上とあれども下文何れも從五位下とあれば此叙位の事疑はし
○多天神、神名式尾張國中嶋郡大神社(名神大)、大和村於保
○能有、紹運錄に正三位右大臣左近大將皇太子傅仁壽三年賜源姓號近院大臣母伴氏
○時有、同云天安二年三月入道母清原氏
○本有、同云正四位下治部卿母滋野氏
○載有、同云正四位下母同本有

○憑子、同云源憑子從四位上、尙謙子列子濟子奥子も同じく載せたれど位階及母の名は見えず
○前日詔、二月庚辰紀に見ゆ
○伊豫國、豫は原本勢に作る諸本に據て改む
○村山神、神名式伊豫國宇摩郡村山神社(名神大)津根村、山は原本上に作る式に據て改む
(七月)良繩、繩は原本繼に作る諸本に據て改む
○全繼爲美作介、正月丁未紀に已に出づ何れか誤あるべし
○淺間神、神名式駿河國富士郡淺間神社(名神大)大宮町にあり官幣大社に列す
○從五位上全世王、上は原本下に作る天安元年正月丙午紀及類史十一に據て改む
○從五位上中臣朝臣逸志、原本上を下に、逸を免に作る上は仁壽元年十一月甲午紀及類史に據り逸は諸本に據て改む
○齋部宿禰、齋は原本齊に作る淀本藤本に據て改む
○灾疫、疫は類史殄に諸

疾之、法隆寺僧善愷訴訟事、遂延及弁官除名、此類也、○[十一]庚午、帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、以尾張國多天神預於名神、皇子能有、時有、本有、載有、皇女憑子、謙子、列子、濟子、奥子等、賜姓源朝臣、隷左京職、行前日詔也、○[十五]甲戌、以伊豫國村山神預於名神、○秋七月庚寅朔、參議從四位上藤原朝臣氏宗爲近江守、左大弁右近衞中將如故、從五位下藤原朝臣良繩爲侍從、内藏助如故、大枝朝臣音人爲大内記、民部少輔如故、平朝臣實雄爲治部少輔、藤原朝臣岑主爲大藏少輔、齋院長官如故、坂上大宿禰當宗爲掃部頭、從五位下春日臣雄繼爲越中權守、大學博士如故、吉備朝臣全繼爲美作介、從四位上源朝臣多爲備中守、宮内卿如故、從四位上源朝臣冷爲讃岐守、○[四]癸巳、地震、○[五]甲午、以駿河國淺間神預於名神、○[十二]辛丑、加尾張國多天神從五位上、○[十三]壬寅、特加駿河國淺間大神從三位、○[十五]甲辰、地震、○[十八]丁未、遣散位從五位上全世王、神祇大副從五位上中臣朝臣逸志、散位從五位下齋部宿禰伴主等、向伊勢大神宮奉幣、攘灾疫也、○[廿一]庚戌、從五位下春枝王爲中務少輔、藤原朝臣三藤爲陰

本は深に作る
○吉備雄、吉は原本なし紀に據て補ふ
續後紀嘉祥二年正月壬戌紀に據て補ふ
○巨範、巨は諸本及仁壽元年十一月甲午紀同三年正月丁未紀には臣に作り齊衡三年二月辛巳紀及淸和紀貞觀元年三月丁巳紀には巨に作る
◎揖前、薩摩郡高江村久見崎あり蓋此地か
○復終其身、復字は諸本に據て補ふ
○福依賣天性、福字は藤本に據て補ふ
○父母年皆、原本母字なく皆は耆に作る母は藤本堀本(朱)に據て補ひ皆は諸本に據て改む
○傭力致養、晉書文明皇后傳に竭力致養とあり傭は人に雇役せらるゝを云
○諮稟、後漢書明德馬皇后傳に出で父母に諮りて命をうくるを云
○褻慢、褻は正韻に與媟通狎近也と云
(八月)春常王、賜姓の事は承和十五年四月庚寅紀に已に出つ此に重出するは疑はし
○六世王、王字は藤本及原本傍注に據て補ふ

陽頭、從五位下伴宿禰春世爲治部少輔、從五位上良岑朝臣長松爲諸陵頭、從五位上藤原朝臣本雄爲刑部大輔、文室朝臣笠科爲宮內大輔、從五位下藤原朝臣吉備雄爲掃部頭、藤原朝臣眞冬爲左京亮、從五位上山田宿禰古嗣爲相摸權介、從五位下平朝臣實雄爲信濃守、和氣朝臣巨範爲陸奥權介、正五位下藤原朝臣行道爲美作守、○辛亥、地震、○丙辰、賜薩摩國孝女揖前福依賣爵三級、復終其身、旌表門閭、福依賣天性至孝、父母年皆八十、老病著床、無子、唯有一女、福依賣扶侍左右、嘗藥二十餘年、傭力致養、曉夕辛勤、容顏焦痩、觀者憐之、福依賣雖云野族、閑於禮儀、恭敬父母、有所諮稟、必正色作聲、未曾褻慢、○八月己未朔、西京失火、延燒百八十餘家、○丙寅、從四位下藤原朝臣貞守爲參議、從五位下利見王爲少納言、從五位下縣犬養大宿禰氏河爲肥後權介、○戊辰、賜伯耆國百姓復一年、○辛未、五世王正六位上春常王、六世王正六位下田上王、春世王等、並賜姓文室朝臣、○癸酉、加正二位勳一等氣多大神、封戸十烟、位田二町、○庚辰、從三位建御名方富命神、前八坂刀賣命

○富命神前八坂刀賣、原本八坂前富に作る藤本尾イ本及仁壽元年十月乙丑紀・淸和紀貞觀元年正月甲申紀に據て改む
○散位從五位下、下文に據るに從上に外字を脫せしか
○河成、此人の事蹟今昔物語卷廿四に詳なり
○圖畫、原本圖書に作る閣本前本谷本に據て改む
（九月）延祥、釋書三にも傳見ゆ
○敏慧、慧は原本惠に作る諸本に據て改む
○加意、加は原本如に作る堀本（朱）に據て改む
○具足戒、比丘の二百五十戒又は比丘尼の三百四十八戒を云へり、卽ち出家二衆此の戒を受くれば無量の戒德身に具足するが故に斯く稱すと決定藏論に見ゆ
○鋒起、釋書鋒を蜂に作り諸本起字を闕く起或は銳の誤か
○稍轉仁壽元年拜僧正、稍轉の二字は原本年下にあり諸本及類史百八十九に據て此に移す
○春秋、秋は原本訛れるを諸本及類史に據て改む

神祝、預於把笏、○（廿四）壬午、地震、散位從五位下百濟朝臣河成卒、河成、本姓余、後改百濟、長於武猛、能引强弓、大同三年爲左近衞、以善圖畫、屢被召見、所寫古人眞、及山水草木等、皆如自生、昔在宮中、令或人喚從者、或人辭以未見顏容、河成卽取一紙、圖其形體、或人遂驗得、其機妙類如此、今之言畫者、咸取則焉、弘仁十四年拜美作權少目、天長十年授外從五位下、累遷、承和年中爲備中介、次爲播磨介、時人榮之、卒時年七十二、○九月戊子朔、大風、發屋拔木、○（九）丙申、重陽宴也、帝不御南殿、勅公卿、召侍從文人等賜菊酒、一如常儀、但以天下有災、不擧音樂、是日、僧正延祥大法師卒、延祥、俗姓槻本氏、近江國野洲郡人也、數歲辭家、師事僧正護命、護命察其敏慧、加意教誘、延曆七年受具足戒、其年護命、於春日寺、講涅槃經、延祥預聽焉、時護命問延祥曰、汝有夢乎、答曰、有之、護命曰、爲我言之、延祥曰、夢臥七重塔上、爾時三日並出、光照身上、護命曰、吉不可言、愼勿語人、天長七年春、於大極殿、説寂勝王經、諸宗智者、論難鋒起、延祥敏對不滯、聽者莫不歎服、稍轉、仁壽元年拜僧正、病卒、春秋八十五、夏臈六

十八、○辛丑、詔大宰府、出穀三万八千七百餘石、賑給管內患皰瘡者、○冬十月己未、地震、是日、虹見於太政官廳前、○丁卯、帝御南殿、賜宴侍臣、祿各有差、○戊辰、但馬守從四位下春澄宿禰善繩賜姓朝臣、攝津國奏言、長柄三國兩河、頃年橋梁斷絕、人馬不通、請准堀江川、置二隻船、以通濟渡、許之、○癸酉、安藝國佐伯、山縣、沙田三郡、免今年徭役、恤窮民也、從五位下興岑王爲中務少輔、正四位下南淵朝臣永河爲因幡守、從五位下春枝王爲正親正、小野朝臣貞樹爲甲斐守、○丙子、招提寺田地百七十八町四段三百廿三步、永爲傳法田、初寶龜中、大唐和尚鑑眞買得此地、施入寺家、其後逐年墾闢、頃畝增廣、以功德故、聽不輸租、○己卯、授加賀國白山比咩神從三位、文章博士正五位下菅原朝臣是善奏請、文章生未出身者、及第之後、不經勘籍、預考例、許之、遠江國奏言、廣瀨河舊有郵船二艘、而今水闊流急、不由利涉、公私行人、擁滯岸上、請更加置二艘、以濟羇旅之難、許之、○壬午、任僧綱、策命曰、天皇我詔旨止法師等爾白左閇止宣勅命乎白、大僧都長訓乎僧正爾、少僧都實敏乎大

○七百餘石、石は類史百七十三に斛に作る
(十月)從四位下春澄宿禰、原本下を上に作る天安二年正月庚子紀及仁壽二年正月壬午紀に據て改む
○長柄、攝津志に西成郡長柄河一名中津川淀河第二支とあり
○三國、同志に豐嶋郡三國川自嶋下流經郡界長洲三國邑等入河邊郡一名神崎川とあり
○堀江川、狩谷氏曰按今大和川也今稱堀江川者元祿年間所開也
○佐伯山縣、二郡共に今も同じ
○沙田、倭名抄に沙田は万須多と訓り今豐田郡に入る
○免今年傜役、免字は藤本考語及狩谷校本に據て補ふ
○永河、原本氷河に作る諸本に據て改む
○招提寺、大和志に唐招提寺在添下郡五條村一名龍興寺
○聽不輸租、原本輸租を輸祖に作る諸本に據て改む
○授加賀國、授は類史十

四に加に作る
○白山比咩神、神名式加賀國石川郡白山比咩神社、河内村三ノ宮、國幣中社に列す
○廣瀨河、遠江風土記傳七下に天龍河文德實錄仁壽三年記廣瀨河とあり
○擁滯、擁壅通用す
○羇旅、周禮地官遺人注に過行寄止者とあり旅客を云
○長訓、釋書三に傳見ゆ
○實敏、同上
○眞濟、東寺長者補任に眞濟の任を十一月廿九日とし權少僧都とす釋書三に傳見ゆ
○明詮、釋書二に傳見ゆ
○眞雅、同三に見ゆ
○壽仙、傳詳ならず
○慧運、慧は原本惠に作る堀本中本谷本等に據て改む安祥寺第一世貞觀十三年九月卒釋書十六に傳見ゆ
（十一月）敬滿神靈、神名式遠江國蓁原郡敬滿神社（名神大）、谷口村（志料）
（十二月）陰陽書、唐書藝文志に王璨新撰陰陽書三十卷と見ゆ
○左京人、左は原本右に

僧都爾、少僧都眞濟乎權大僧都爾、權律師明詮、律師眞雅乎少僧都爾、大法師壽仙乎律師爾、大法師慧運乎權律師爾、任賜事乎白左部止宣勅命乎白、○十一月（丁亥朔）己亥（十三）、地震、○癸卯（十七）、帝不御神嘉殿、所司奉祭、如常儀、○甲辰（十八）、幸豐樂院、賜宴群臣、如常儀、○癸丑（廿七）、以遠江國敬滿神靈、預於名神、○甲寅（廿八）、加外從五位下丸部嶋繼從五位下、○十二月（丁巳朔）甲子（八）、陰陽寮奏言、使諸國郡、及國分二寺、據陰陽書法、毎年鎭害氣、從之、○丁丑（廿一）、相摸權介從五位上山田宿禰古嗣卒、古嗣左京人也、越後介外從五位下勳六等益人之長子也、爲人廉謹而寡言辭、幼歳喪母、敬事從母、天性篤孝、嘗讀書傳、至於樹欲靜而風不止、子欲養而親不待、流涕不禁、卷帙爲之沾濡、弘仁十二年丁父憂、哀毀過禮、天長三年爲陸奧按察使記事、五年爲少內記、六年遷爲少外記、承和元年轉爲大外記、公卿大臣以備顧問、推薦文士、多見納用、故人仰之、十三年出爲阿波介、政績有聲、阿波美馬兩郡、常罹旱災、古嗣殊廻方略、築陂蓄水、賴其灌漑、人用溫給、後爲相摸權介、病卒於官、時年五十六、

作る諸本及天長十年紀（續後紀三三頁）に據て改む
○敬事從母、從母は爾雅に母之姊妹爲從母とあり姨なり藤本從を後に作る
○樹欲靜而風不止云々、韓詩外傳及家語致思篇に見ゆ養原本艱に作る諸本に據て改む
○親不待、待は原本在に作る諸本に據て改む
○丁父憂、丁は原本遭に作る諸本に據て改む丁は爾雅釋詁に當也と見ゆ
○承和元年轉爲大外記、外記補任承和元年條に大外記山田古嗣十一月十九日任元少とありされば元年の上に承和の二字あるべきなり依て今此二字を補ふ
○十三年、藤本堀本此上に承和の二字あり
○美馬、倭名抄に美万と訓り貞觀二年三月二日壬子紀に割阿波國美馬郡置三好郡と見ゆ
○羅旱災、羅は原本羅に作る諸本に據て改む
○築陂、陂は原本波に作る諸本に據て改む
○賴其灌漑云々、後漢書張禹傳に禹爲開水門通引灌漑云々後歲至墾千餘頃民用温給とあるに據て出づ　○相撲權介、權字は上文に據て補ふ

日本文德天皇實錄卷第五

日本文德天皇實錄卷第六

起齊衡元年正月盡十二月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

(甲戌)齊衡元年春正月丙戌朔、停朝賀、以雨後泥深也、帝御南殿、賜宴侍臣、如常儀、今日朔旦立春也、○丁亥、大宰府貢赤腹魚、承前元日貢之、延至今日緩之、故書、○辛卯、諸衛府獻殺杖、內侍傳旨、轉而奏上之、○壬辰、帝於梨下院賜宴群臣、一如常儀、授無品國康親王四品、正四位下高枝王從三位、從五位上弘宗王正五位下、從五位下春枝王從五位上、无位內宗王、正六位上美奈止王等、並從五位下、從四位上藤原朝臣衛、長岑宿禰高名等、並正四位下、從四位下清原眞人有雄從四位上、正五位上藤原朝臣良仁從四位下、從五位上坂上大宿禰正野、橘朝臣海雄等、並正五位下、從五位下藤原朝臣長生、紀朝臣松永、伴宿禰龍男、物部首廣泉、藤原朝臣冬緒、大枝朝臣音人、良岑朝臣清風等、並從五位上、外從五位

〔齊衡元年〕朔旦、旦は原本日に作る諸本及類史(七十二)紀略に據て改む○赤腹魚、抄龍魚部に䱇魚辨色立成云䱇(音宣波良可今案所出未詳)式文用腹赤二字とあり新撰字鏡の訓亦同じ倭訓栞にはらかは江次第官曹事類風土記には鱒也といへり腹赤の贄を奏するも赤心の表示なるべしと云其起源は公事根源に景行天皇の御宇筑紫の國宇土の郡長濱にて海人是を釣て奉る其後聖武天皇の御時天平十五年正月十四日大宰府より是を奉ける是よりして年毎の節會に供すべきよし定置れたるなりと云り、赤腹は紀略に腹赤とあれど諸本原本に同じく類史にも赤腹とあれば改めず但清和紀には腹赤とあり○延至、紀略至を及に作る○辛卯、此二字は類史七十一に據て補ふ○殺杖、殺は原本卯に作り紀略附に作る今諸本及類史に據て改む○轉而奏上之、此五字は類史七十一に據て補ふ

○帝於梨下院、原本帝及梨字なく下を本に作る帝は類史七十一及紀略に據り梨は諸本及類史紀略に據て補ひ下は類史紀略に據て改む
○國康親王、仁明天皇第六皇子、齊衡三年四月戊戌入道、昌泰元年三月甲申薨
○正四位下高枝王、四は原本五に作る嘉祥二年正月壬戌紀仁壽元年四月癸卯紀に據て改む
○名草宿禰、宿禰は原本朝臣に作る承和八年十一月丙辰紀下文八月丁丑紀及類史九十九に據て改む
○繼門、原本縱川に作る繼は諸本に據り門は下文及類史に據て改む
○朝原宿禰、原は原本臣に作る藤本中本及類史に據て改む
○河男、男は類史雄に作る
○菅原朝臣、原は原本野に作る諸本及類史に據て改む
○弟門、弟は原本第に作る諸本及類史に據て改む
○浦虫、虫は原本定に作る天安元年二月丁酉紀及清和紀貞觀元年八月癸巳

下名草宿禰豐成、菅野朝臣繼門、山田宿禰文雄、朝原宿禰良道、正六位上平朝臣有世、源朝臣直、藤原朝臣萬枝、伴宿禰河男、滋野朝臣善根、橘朝臣三冬、藤原朝臣宜、笠朝臣豐興、石川朝臣宗繼、淡海眞人貞主、藤原朝臣廣基、橘朝臣淨氏、菅原朝臣河道、大神朝臣千成等、並從五位下、正六位上菅野朝臣弟門、御船宿禰彥主、山口宿禰稻床、水取連繼雄等、並外從五位下、○癸巳八、從四位上廣井女王、正四位下當麻眞人浦虫等、並授從三位、正五位下藤原朝臣多可幾子(タカキ)從四位下、无位藤原朝臣能子、藤原朝臣在子、葉栗臣乙貞等、並從五位下、從七位上御使朝臣福子、无位山村近子等、並外從五位下、○辛丑十六、四品國康親王爲上野太守、參議從四位下藤原朝臣貞守爲下野守、右大弁如故、參議正四位下伴宿禰善男爲讃岐守、中宮大夫式部大輔如故、從五位下藤原朝臣岑主爲右少弁、外從五位下有宗宿禰益門爲主計助、筭博士如故、榎井朝臣嶋長爲主稅頭、從五位上藤原朝臣氏雄爲大藏大輔、益善王爲攝津守、從五位下藤原朝臣眞冬爲伊勢介、從五位上豐階眞人安人爲尾張權守、從

紀に據て改む
○多可幾子、藤原良相の女文德天皇の女御、淸和紀天安二年十一月辛未紀に傳見ゆ
○乙貞、貞は原本眞に作る諸本に據て改む
○御使朝臣、錄左京皇別に御使朝臣出自諡景行皇子氣入彥命之後也とあり、使は原本便に作る諸本に據て改む
○中宮大進如故、進は原本夫に作る仁壽三年四月庚午及淸和紀天安二年九月癸未紀に據て改む
○良繩爲播磨介、下文十一月戊申條にも出づ何れか誤あるべし
○源朝臣生、生は原本主に作る藤本及補任に據て改む
○藤原朝臣宜、宜は原本亘に作る諸本に據て改む
○左兵衛佐如故、仁壽三年正月丁未紀に右兵衛佐とす古今目錄は此に同じ
○萬枝、枝は原本傍注枚に作る
○外從五位下山口宿禰、外字は上文壬辰紀に據て補ふ
○內宴、內字は類史七十二及紀略に據て補ふ

五位下高橋朝臣淨野爲駿河守、文室朝臣有眞爲相摸權守、從五位上文室朝臣笠科爲武藏守、從五位下伴宿禰三宗爲權介、鎭守將軍如故、從五位下笠朝臣豐興爲上總介、三統宿禰眞淨爲美濃介、中宮大進如故、紀朝臣道茂爲信濃介、左衛門佐如故、從五位上伴宿禰龍男爲越後守、從五位下淸內宿禰園繼爲但馬介、大春日朝臣高庭爲出雲守、安倍朝臣有道爲石見守、小野朝臣恒柯爲播磨守、藤原朝臣良繩爲播磨介、侍從內藏助如故、從四位上源朝臣生爲美作守、左京大夫如故、從五位下藤原朝臣秋緒爲備中介、從四位下淸原眞人瀧雄爲安藝守、從五位下伴宿禰河男爲周防守、紀朝臣眞高爲紀伊守、藤原朝臣宜爲阿波介、紀朝臣有常爲讃岐介、左兵衛佐如故、藤原朝臣萬枝爲伊豫權介、外從五位下山口宿禰稻床爲豐後介、從五位下藤原朝臣良世爲右兵衛佐、○（十七）壬寅、停大射、但令諸衛府等於殿前射、○（十八）癸卯、亦停賭射、○（廿一）丙午、內宴、命樂賦詩、皆如常儀、○（廿八）癸丑、帝覲於中宮、賜宴侍臣、祿各有差、○二月（丙辰朔）（十三）戊辰、詔大和國、修灌頂經法、攘災疫也、○（十五）庚午、詔尾張國課口三分之一、特

從優復、河流漲溢、民多病水、故降此恩、○十六辛未、請僧五十二人於內裏、讀大般若經、限三日訖、從五位下百濟王教凝爲侍從、安倍朝臣有道爲大主鈴、從五位上橘朝臣枝主爲圖書頭、從五位下和氣朝臣齊之爲治部少輔、從五位上嶋江王爲諸陵頭、從五位下橘朝臣常蔭爲大判事、伴宿禰春世爲大藏少輔、從五位上良岑朝臣長松爲宮內大輔、從五位下安倍朝臣安正爲彈正少弼、外從五位下津宿禰良友爲左京亮、從五位下橘朝臣高成爲右京亮、齋部宿禰木上爲勘解由次官、橘朝臣春成爲齋院長官、伴宿禰河男爲鑄錢長官、周防守如故、藤原朝臣長基爲石見守、伴宿禰宗爲備後介、大判事如故、○二十乙亥、遣使者、賑給丹後國飢民、○

乙酉朔三月七辛卯、越中國高瀨二上兩神、並加從三位、○八壬辰、授伊豫國櫛玉姬神從五位下、○九癸巳、賜下野國節婦秦部總成女爵二級、復終其身、旌表其門閭、總成女者、秦部正月滿之妻也、性至謹篤、正月滿亡後、撫養遺孤、不復再醮、持節彌固、常修功德、追資其夫、兼願及一切衆生、國內稱之、○十四戊戌、加相摸國寒河神從四位下、從五位下菅野朝臣繼門爲大外記、從

(二月)大和國、內藤氏曰恐脫國分寺三字歟

○特從優復、原本特を持に復を優に作る特は藤本に據り復は藤イ本に據て改む

○五十二人、二は原本一に作る堀本藤本及紀略に據て改む

○安倍朝臣、倍は原本陪に作る堀本に據て改む下同じ

○從五位上嶋江王、上は原本下に作る閣本中本堀本及仁壽三年四月乙酉紀に據て改む

○高成爲右京亮、右は原本左に作る原本傍注に據て改む

○齋部宿禰、齋は原本齊に作る藤本に據て改む下同じ

(三月)高瀨、寶龜十一年十二月甲辰紀（續紀下三六〇頁）に見ゆ

○二上、同上

○櫛玉姬神、神名式伊豫國風早郡櫛玉比賣命神社、今温泉郡正岡村八反地

○再醮、再嫁なり字彙に冠娶祭名酌而無酬酢曰醮とあり

○寒河神、承和十三年九

月丙午紀、續後紀三〇七頁に見ゆ
○不動稻、原本不動は公廨に作る諸本に據て改む不動は出擧して利子のみを使用し本稻は動かさゞるを云
(四月)右兵衞陣、拾芥抄中末に兵衞陣左宣陽門右陰明門と見え陰明門內にあり
○非侍從、侍從を經ずして至尊に侍するを得るもの擬侍從以下を云
○大雷火明神、神名式河內國若江郡若江鏡神社なりと云、火は閣本には大に作る
○百枝卒、此下藤本に百枝者の三字あり
○綿裳、橘氏系圖に綿裳枝王從四位上左京大夫安木守とあると同人なるべし美好王の子佐爲(正四位下左兵衞中宮大夫賜橘姓)の子なり寶龜九年九月紀(續紀下二二一頁)を參考すべし
○不食葷宍、食字は堀本に據て補ふ葷は徐鍇說文注に臭菜也通謂芸薹椿韭蒜阿魏之屬方術家所禁謂氣不潔也とあり宍は肉字の古字なり

五位下丹墀眞人氏永爲二諸陵頭一、飯高朝臣永雄爲二刑部少輔一、外從五位下神直虎主爲二參河掾一、侍醫如レ故、從五位下朝原宿禰良道爲二播磨權介一、正五位下在原朝臣行平爲二備中介一、右近衞少將如レ故、○甲辰、无品宗子內親王薨、親王、嵯峨太上天皇第八女也、母從四位上高階眞人淨階之女、從五位上河子也、親王性操貞潔、資給寒素、至二于終身一、遂無二瑕釁一、○丁未、石見國奏請、以二不動稻三万五千餘束一、賑二給飢民一、許レ之、春寒殞レ霜、何以書レ之、記レ灾也、○夏四月乙卯朔、勅二公卿一、於二右兵衞陣下一賜レ飮、侍從有レ恩、非侍從者亦預レ席、日暮賜レ祿有レ差、○丙辰、授二河內國大雷火明神從五位下一、散位從四位下橘朝臣百枝卒、從四位上綿裳之子也、延曆十八年爲二內舍人一、大同二年爲二常陸員外掾一、弘仁十三年叙二從五位下一、天長七年正月叙二從五位上一、爲二伊勢介一、承和十三年正月叙二正五位下一、十五年四月叙從四位下一、百枝不レ解二文書一、好在二鷹犬一、年至二八十一、漁獵無レ息、剃レ頭爲レ僧、不レ食二葷宍一、家在二大和國山邊郡一、池堤頽破、洪流湧溢、倉舍家口、悉皆漂失、百枝獨繫二樹抄一、纔得レ存レ命、散位百濟王教福卒、教福從四位下安義之子也、嘉

祥三年正月叙從五位下、卒時年卅八、○丁巳、遣傳灯大法師位智戒、興智、眞秀、傳灯法師位明昭、玄永、傳灯滿位僧基藏、基秀、向七道諸國名神社、轉讀般若、祈民福也、○癸亥、園神韓神、並加從三位、○丁卯、帝自梨下院移御冷然院、五位已上扈從者、賜宴於釣臺、○癸酉、以有穢事、停賀茂祭、但山城國司齋供如常、○庚辰、詔曰夫人之至親、莫親於母子、故子登尊位、則貴歸於母、古先哲王、未有違之者、朕以不造、夙罹閔凶、憂深思遠、茫若無涯、當此之時、有嵯峨太皇太后、淳和太后並存、朕以尊母之典、雖光故實、而申厭之制、存亡異禮、故以所生藤氏、爲皇太夫人、却冀謙損之美、以招後福、然今太皇太后山陵之事、既歷多年、而淳和太后未進徽號、所生藤氏猶稱夫人、人子之禮、何意能安、凱風自南之時、寂感長養之恩、敢咨舊章、奉崇尊號、夫尊皇太后爲太皇太后、皇太夫人爲皇太后、載育万邦、厚德無疆、俾我四瀛、永有所賴、是日、肥前豐後兩國百姓窮困者九千餘人、復一年、○辛巳、有鳥集殿前松樹、俗名古々鳥、其鳴自呼、勅左近衛將曹神門氏成射之、應弦而墜、帝甚稱善、賜絹數疋、○壬午、陸奧國

○樹抄、抄は木末也
○遺傳灯大法師位、遺は原本進に作る諸本に據て改む
○園神韓神、嘉祥三年十月甲子紀(三三頁)に見ゆ
○釣臺、水邊に臨みて建てたる屋舍を釣殿と云此は露臺の水邊にあるものなるべし
○停賀茂祭、西宮記賀茂祭條に仁壽四年四月十九日賀茂下社有死穢、仍勅使幷齋王不參と見ゆ
○齋供、原本齊供に作る閣本及紀略に據て改む
○不造、毛詩周頌閔予小子章に閔予小子遭家不造、注に造は爲也又猶成也とあり
○閔凶、左傳宣十二年に出づ閔は憂也死喪の意嘉祥三年三月皇考仁明天皇の崩御を云
○茫、原本江に作る中本谷本淀本に據て改む
○雖光故實、原本傍注光一本先に作るとあれど諸本に光とあり光は明也母を尊ぶ典禮は故實に明かに見えたりと雖もとなり皇太后を奉るべきを云
○申厭之制、厭は原本献に作る諸本に據て改む

厭は玉篇に厭也一曰伏也又合也又損也中は舒也とあり厭へたるをのぶるを云

○存亡異禮、死者と生者と禮制を異にすとなり亡は天皇を存は所生藤原氏を申す

○所生藤氏、順子なり紀略藤の下原字あれど諸本原本に同じ故に採らず

○爲皇太夫人、夫人は原本后の一字に作る紀略に據て改む諸本に夫とあり人字なきは脱ちたるならむ藤原氏を皇太夫人とせられしは嘉祥三年四月文德天皇卽位の日なり

○既歷多年、嘉祥三年五月嵯峨太皇太后崩御より五年になれるを云

○徽號、太皇太后の尊號を云

○凱風自南之時、毛詩邶風凱風章に凱風自南吹彼棘薪、母氏聖善我無令人、箋に以凱風喩寬仁之母とあり凱は諸本諷に作り尾本原本に同じ

○寂慼、慼は原本戚に作る諸本に據て改む

○窮困、窮は原本穹に作る諸本及紀略に據て改む下同じ

奏曰、去年不登、百姓困窮、兵士逃亡、已乏屯戍、今虎狼之類、爭事强盜、逆亂之萌、近在目前、請發援兵二千人、以備不虞、勅許發一千人、○五月（甲申朔）戊子、（五）停騎射走馬之觀、○戊戌、（十五）勅陸奥國、以穀一万石、賑給俘夷、○庚子、（十七）地震、○甲辰、（廿一）從五位下笠朝臣豐興爲河内守、橘朝臣高宗爲上總介、橘朝臣仲宗爲肥後介、○乙巳、（廿二）從五位下藤原朝臣貞敏、諸葛三統宿禰眞淨等、爲次侍從、○己酉、（廿六）賜加賀國節婦和邇部廣刀自女爵二級、廣刀自女年十四、適山城國人秦眞勝、眞勝亡後、廬於冢側、于今卅餘年、追慕其夫、言及哀泣、○是月甚寒、山北微雪、記災也、○六月甲寅朔、以大和國金岑神、預於相嘗月次並神今食祭也、○甲子、（十一）帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、○丙寅、（十三）左大臣正二位源朝臣常薨、大臣是嵯峨太上天皇子、源氏第三郎、母飯高氏、太上天皇見其操行深沉、風神清爽、寵愛殊於他子矣、天長五年正月叙從四位下、七年六月叙從四位上、爲兵部卿、八年正月叙從三位、九年十一月爲中納言、十年三月加正三位、承和四年六月兼爲左近衞大將、五年正月爲大納言、七年八月爲右大臣、兼爲皇（傅貞）太子傅、八年

○古々島、抄羽族部鳥名に布穀鳥兼名苑云鳲鳩一名鴶鵴（布布止利）布穀也、箋注に寺嶋氏曰一名都都鳥又呼豆豆鳥按今俗呼加久古宇鳥是鳥鳴云加久古不見高光日記にさあり賀茂眞淵翁は呼子鳥に同じと云
○屯戌、戌は原本戎に作る諸本に據て改む
（五月）言及哀泣、言は原本害に作る諸本及類史五十四に據て改む
（六月）金峯神、仁壽二年十一月辛丑紀に注す
○源朝臣常甕、常賜姓は弘仁五年五月なり承和八年卅歲にて右大臣に任じ十二年左大臣に任ず在任十二年四十三歲にて薨ず世に東三條左大臣と稱す公卿補任を參看すべし
○飯高氏、更衣名は宅眉
○兼爲皇太子傅、承和九年八月乙丑紀に見ゆ
○八年十一月、八年の二字は堀本及承和八年十一月丙辰紀に據て補ふ
○推引、唐書蕭穎士傳に以推引後進爲己任と見ゆ人材を擢擧するを云り
○讒佞、讒は原本說に作

十一月叙從二位、十一年七月轉左大臣、嘉祥三年四月叙正二位、薨時年卌三、大臣容儀閑雅、言論和順、才能之士、推引而進、讒佞之徒、惡而不親、時人以爲、誠是丞相之器也、○丁卯、贈正一位、朝廷依舊、遣監喪贈位使等、依有遺令、喪家確辭不受、○丙子、大法師惠達爲律師、○丁丑、請僧卅二口於冷然院、讀大般若經、限三日訖、○己卯、加伊豆國三嶋神從四位下、阿波咩命神、物忌奈命神、伊古奈比咩神並正五位下、阿米都和氣命神、伊太氐和氣命神、阿豆佐和氣命神、波布比咩命神等、並授從五位上、○壬午、加肥後國健磐龍命神封卅戶、○癸未、地震、○秋七月甲申朔、日有蝕之、○甲辰、從五位上藤原朝臣本雄爲伊勢權介、刑部大輔如故、○乙巳、備前國貢一伊蒲塞、斷穀不食、有勑安置神泉苑、男女雲會、觀者架肩、市里爲之空、數日之間、遍於天下、呼爲聖人、各乞私願、伊蒲塞仍有許諾、婦人之類、莫不眩惑奔咽、後月餘日、或云、伊蒲塞夜人定後、以水飮送數升米、天曉如廁、有人窺之、米糞如積、由是聲價應時減折、兒婦人猶謂之米糞聖人、○丙午、石見國言、醴泉出、三日乃涸、○己酉、詔遠江國、以

る諸本に據て改む
○贈正一位、贈は原本賜に作る諸本に據て改む下同じ
○伊豆國三嶋神云云、以下叙位の事仁壽二年十二月丙子紀（六十七頁）に出づ
○物忌奈命神、原本此下に物忌奈命神の五字重出す堀本中本に據て削る
○伊太氐和氣命神、氐は原本豆に作る式に據て改む
○阿豆佐和氣命神、佐字は谷本及類史十四に據て補ふ
○健磐龍命神、承和七年四月丙寅紀（續後紀一六三頁）に出づ
（七月）伊蒲塞、翻譯名義集一に後漢書名伊蒲塞注云卽優婆塞也中華翻爲近住言受戒行堪近僧住也とあり此人の事宇治拾遺物語十二にも見ゆ
○架肩、觀衆の稠集せる狀を形容せり
○各乞私願、乞は原本々に作る閣本淀本に據て改む
○後月餘日、後は原本得に作る堀本（朱）藤本に據

剩田七町、施尼妙長、○庚戌、遣使者向伊勢大神宮、豫請止風雨、是日暴風、發屋拔木、須臾甚雨、洪水汎溢、當時有識、甚有疑恠、○八月癸丑朔、地震、加置陸奥國少掾一員、○丙寅、皇太子始謁覲、○戊辰、陸奥國馳驛上奏、鎭守將軍從五位下伴宿禰三宗卒、三宗者正六位上眞意之子也、眞意是正五位下氏上之子也、三宗元名健宗、當伴健岑配流之時、惡避其相涉、改爲三宗、嘉祥四年正月叙從五位下、爲鎭守將軍、兼爲下野權介、仁壽四年遷爲武藏權介、三宗撫邊有方、膽略著聞、病卒、民夷傷之、時年五十九、○己巳、授右近衞將監正六位上文室朝臣道世從五位下、拜陸奥鎭守將軍、○庚辰、右大臣正二位藤原朝臣良房、兼爲左近衞大將、大納言從二位源朝臣信、兼爲右近衞大將、權中納言從三位藤原朝臣良相爲大納言、陸奥出羽按察使如故、參議正三位藤原朝臣長良爲權中納言、左衞門督如故、參議從三位平朝臣高棟爲春宮大夫、源朝臣融爲伊勢守、右衞門督如故、從四位上源朝臣多爲參議、備中守如故、從三位高枝王爲大藏卿、越前權守如故、從五位下藤原朝臣良縄爲春宮

亮、侍從內藏助播磨介如故、從四位上源朝臣冷爲右馬頭、從五位下橘朝臣三夏爲散位頭、○丁丑、散位外從五位下名草宿禰豐成卒、豐成少學老莊、長讀五經、義理頗通、學徒多屬、天長七年爲大宰博士、承和四年爲直講、八年轉爲助教、十一月敍外從五位下、十一年正月以其老耄、遙授駿河介、以充教授之資、卒時年八十三、○九月丁亥、无品明子內親王薨、親王淳和太上天皇第七女、母右大臣正二位淸原眞人夏野之女春子也、陰陽權允兼陰陽博士正六位上刀岐直川人、上總少目從六位上刀岐直雄貞等、賜姓滋岳朝臣、○辛卯、重陽節也、帝御南殿、賜宴侍臣、命樂賦詩如常、○壬辰、遣使者向伊勢大神宮、奉幣、○壬寅、地震、○乙巳、從三位藤原朝臣良相爲右近衞大將、大納言如故、從四位下藤原朝臣良仁爲大舍人頭、中宮亮木工頭如故、從四位下春澄朝臣善繩爲刑部大輔、但馬守如故、從五位下藤原朝臣廣基爲春宮大進、從四位上源朝臣勤爲右近衞中將、阿波守如故、○辛亥、陸奥國百姓復一年、○冬十月壬子朔、賜飮侍臣如常、○庚申、正五位下備前守藤原朝臣大津卒、大津者

て改む
○米糞舉人、紀略に人字なし
○醴泉、治部式に大瑞とす白虎通に德至淵泉則醴泉湧とあり養老元年十一月紀（續紀上一三〇頁）を參看すべし
○尼妙長、內藤廣前云按尼妙長者橘逸勢之女尼妙冲事歟可追考
〔八月〕加置陸奥國少掾、三代格五に見ゆ
○丙寅、紀略丙丑に作る丑は刀の訛なるべし
○右大臣正二位、正は原本從に作る仁壽元年十一月乙亥紀に據て改む
○良相爲大納言、補任に權大納言とす
○融爲伊勢守、補任に伊豫守とす
○丁丑、此條干支を推すに庚辰の上にあるべきなり然るに內イ本には庚辰に係けたれば姑く舊に從ひて改めず
○外從五位下名草宿禰、外字は下文に據て補ふ
○直講、職員令集解に釋云天平二年三月廿七日奏直講四人とあり正七位下の官にて博士助教を佐く
○助教、二人正七位下の

官
○十一月、一は原本二に作る諸本及承和八年十一月丙辰紀に據て改む
○老耄、耄は耆の誤なるべし
（九月）刀岐貞、系詳ならず清和紀貞觀六年八月辛未紀にも滋岳賜姓の事見えたれど出自を記さず
○木工頭如故、私記に或云是時石川長津爲木工頭、此書良仁木工頭如故、可疑、然三代實錄貞觀二年紀擧良仁歷任亦云遷木工頭、而不書年月、前无所見、未詳と云
（十月）內麻呂、麻は原本磨に作る諸本に據て改む
○步射、抄術藝部に李太尉步射法云夫步射以目先領其特心射之、箋注に和名加知由美今按特心者的異名乎とあり
○歌恩、恩は原本思に作る原本傍注及堀イ本に據て改む歌恩は恩惠を謳歌する意狩谷氏は歌恐寄誤歟と云
○陸奧守、原本陸奧を倒置せり諸本に據て改む
○富贍、富は原本交に作る傍注一本に據て改む

贈左大臣從一位內麻呂第九之子也、大津身長短小、而意氣難奪、尤善步射、頗超等輩、年十八爲大舍人大允、後出爲常陸大掾、還爲右近衞將監、天長三年叙從五位下、爲備後守、頗有聲譽、民庶歌恩、九年爲大監物、十年遷爲散位頭、承和元年爲左馬助、三年爲信濃守、九年爲陸奧守、留爲左衞門佐、十一年爲伊豫守、歲餘豐稔、百姓富贍、仁壽元年爲備前守、十一月叙正五位下、卒時年六十三、○壬戌、授正六位上藤原朝臣基經從五位下、○丙寅、內藥正從五位上物部首廣泉賜姓朝臣、○戊辰、以山城國神足神、列於官社、○辛未、召刑部大輔春澄朝臣善繩、文章博士菅原朝臣是善、民部少輔大枝朝臣音人等於藏人所、賦重陽節文人所上之詩、○癸酉、侍醫外從五位下神直虎主、散位正七位下神直木並、大初位下神直己井等、賜姓大神朝臣、○甲戌、公卿奏讞、伊豆前守外從五位下百濟宿禰康保毆殺部下百姓數人、康保罪當死、詔減死一等、處之遠流、○十一月壬午朔癸未、從五位下藤原朝臣基經爲侍從、紀朝臣有常爲右近衞少將、讃岐介如故、從五位上小野朝臣千株爲備前守、從五位下藤原

○內樂止、內字は堀本(朱)に據て補ふ
○神足神、神名式山城國乙訓郡神足神社、新神足村神足
○菅原朝臣、朝臣の二字は類史七十四及紀略に據て補ふ
○所上之詩、之字は要略二十四に據て補ふ
○神直虎主、貞觀二年十二月甲戌紀に傳見ゆ
○已丑、丑は原本卉に作る諸本に據て改む
○鯽魚、抄龍魚部に鮒本草云鯽魚一名鮒魚(布奈)とあり
○戊申、有雄以下任國の順序違へり此は位階の高下に依て叙述し他例と異なり
○上稽帝載云云、帝載は尙書舜典に熙帝之載注に載事也とあり皇流は文選顏延年曲水詩に出づ帝載皇流共に先王の御事迹の意なり
○濁醪、醪は字彙に汁滓合之酒也とあり倭名抄に濁醪を毛呂美と訓り
○狀凝、凝は原本疑に作る諸本に據て改む
○兆人、億兆の人を云兆は原本非に作る閣本前本

朝臣三藤爲紀伊介、陰陽頭如故、○甲申（三）、地震、○癸巳（十二）、左近衛府獻生鯽魚、詔放御池中、○癸卯（廿二）、地震、帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、○甲辰（廿三）、帝御南殿、賜宴群臣、一如常儀、○戊申（廿七）、從四位上清原眞人有雄爲肥後守、從五位上高階眞人岑緒爲伊豫守、從五位下藤原朝臣良繩爲播磨介、左兵衛佐春宮亮如故、○辛亥（三十）晦、詔曰、上稽帝載、下酌皇流、莫不鍾靈貺以開元、割神符以改號者、近來石見國上醴泉、味寫濁醪、狀凝芳醴、雖朕之不德、讓而弗怡、然天意若曰、使兆人賴之、亦是宗社降靈、俊乂在官之攸致、豈其爲身而有顯辭也、有司宜擇吉日告宗社、又改仁壽四年、爲齊衡元年、其瑞出地主、美濃郡大領檜前淡海麻呂叙正六位上、賜物准例、復郡內當年傜、伊勢大神宮禰宜大物忌內人、諸社禰宜祝、及內外文武官把笏者、賜爵一級、但正六位上者、廻授一子、如無子者、宜量賜物、五位已上子孫、年廿已上者、叙當蔭之階、賜天下老人百歲已上穀三斛、九十已上二斛、八十已上一斛、欲使曠代禎符、及萬邦以共慶、隨時德政、逐五帝而齊衡、○十二月（壬子朔）甲寅（三）、遣使者向嵯峨山陵、告以改元之由、策文曰、

天皇恐美恐毛、掛畏支山陵爾申賜倍止奏久、維仁壽四年九月廿七日爾、石見國醴泉瑞獻禮利、圖書爾據勘爾合利、如此支希世留嘉瑞波、是薄德乃可感致支物爾波非須、掛畏支山陵乃慈賜比、示賜倍留物奈利止爲天奈毛、貴喜比受賜天、御世乃名乎改、齊衡元年止爲留、此狀乎申賜止、中納言正三位兼行左兵衞督源朝臣定、從四位下安藝守清原眞人瀧雄等乎差使天奉出須、但理須波、先川申賜天、後爾施行倍支物奈利、然乎有殊障天、一二日之間、延怠留事乎奈毛、恐畏利御坐須止、恐美恐美毛申賜久止申」是日木工頭正五位下石川朝臣長津、頓死於寮中、月次並神今食等神事、令所司奉祭、長津者中納言正三位兼宮內卿豐成之孫、正四位上武藏守河主之子也、弘仁十年三月爲內舍人、十二年二月爲右京大進、十三年六月爲修理大進、閏九月爲民部大丞、十四年正月遷爲皇太后宮少進、四月叙從五位下、五月爲大和介、天長八年七月爲木工助、九年正月叙從五位上、承和十年三月爲加賀介、嘉祥二年十一月叙正五位下、仁壽

藤本に據て改む
○後父、父は原本人に作る閣本中本に據て改む
○顯辭、文選典引に豈其爲身而有顯辭也、注に爲專擅之辭也と云ひ一身の故を以てのみにして辭退すべきにあらずとなり
○當年、當は原本常に作る諸本に據て改む
○當陛之階、五位は五位四位は四位各其位階に相當の陛位を云
○賜天下、賜は原本傍注に據て補ふ
○曠代禎符、原本禎を植に作る諸本に據て改む禎符は醴泉の出でしを云
○逐五帝而齊衡、古への五帝と權衡を保つべき德政を布かむとすとの意
（十二月）嵯峨山陵告以云々、原本山を上に作り以字は峨の下にあり諸本及紀略に據て改め訂す嵯峨山陵は皇祖父嵯峨天皇の陵なり山城國葛野郡嵯峨にあり
○奏久、奏は原本美に作る諸本に據て改む
○九月廿七日、谷森翁の說に九月廿七日は瑞を獻れる日にて上文に七月丙午とあるは本國にて醴泉

二年二月爲木工頭、卒時年七十、長津性能工巧、恪勤爲宗、故頻歷工官、遂終於此、先父所貯積文書數千卷、祕藏一舍、不曾借他、不知死後灰滅何處、〇甲子、詔諸國、奉諸神幣、告以賀瑞之由、〇己巳、禮佛懺悔、〇庚午、美作守正五位下藤原朝臣行道卒、行道者參議從三位楓麻呂之孫、從五位上城主之長子也、弘仁八年正月叙從五位下、爲民部少輔、遷爲美作介、十三年正月爲近江介、天長七年爲兵部少輔、承和三年叙從五位上、四年爲丹後守、十二年二月爲刑部大輔、嘉祥二年正月叙正五位下、仁壽三年七月爲美作守、卒時年六十六、行道累歷內外官職、政迹善惡無聞、可謂得其中庸者也、〇戊寅、越中國高瀨神、二上神等禰宜祝、並預把笏、〇庚辰、左衛門少尉從六位上雀部朝臣春枝、散位正六位上林朝臣並人等、改姓紀朝臣、〇辛巳、武藏國貢長人一枚、以備駈儺、

日本文德天皇實錄卷第六

の出でし日なるべしと云
〇據勘爾合利、爾の下に大瑞爾の三字脱ちしなるべし
〇嘉瑞波、瑞は原本傍注に據て補ふ
〇申賜止、原本止を爾に作る堀本及傍注に據て改む
〇瀧雄等乎、原本乎の下に岐字あるは衍なり諸本に據て削る
〇施行倍支、支は藤本谷本に據て補ふ
〇恐美恐美毛、上の恐美の二字は諸本に據て補ふ
〇二年十一月、原本一の字なし續後紀嘉祥二年十一月甲戌紀に據て補ふ
〇數千卷、千は原本十に作る諸本に據て改む
〇借他、原本倒置す諸本に據て改む
〇己巳、此條原本庚午の次にありしを干支を推して此に移す
〇嘉祥二年、原本二を三に作る續後紀嘉祥二年正月壬戌紀に據て改む

〇可謂得其中庸、原本可を無に作る諸本に據て改む　〇高瀨神二上神、三月辛卯紀に出づ　〇雀部朝臣、錄左京皇別に雀部朝臣建內宿禰之後也　〇辛巳、此下に晦字あるべきなり　〇貢長人一枚、西宮記十二月追儺條裏書に貞觀八年五月下知相摸武藏上總下總常陸等國選進長人六尺三寸以上者と見ゆ　〇備駈儺、原本備駈を節駈に作る諸本及類史七十四に據て改む駈儺は追儺を云史記黃帝記注に東山度索山有神荼鬱壘二神能禦凶鬼黃帝制驅儺以象之とあり字彙に儺は驅疫也と見ゆ追儺の儀は慶雲三年十二月に始ること公事根源河海抄紅葉賀及江次第等に詳かなり

【齊衡二年】

○輔世王、桓武天皇々子仲野親王の第二子

○連扶王、扶は原本快に作る清和紀貞觀元年二月己亥紀及類史九十九に據て改む

日本文德天皇實錄卷第七

起齊衡二年正月盡十二月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

(乙亥)二年春正月壬午朔、帝不御大極殿、以雪後泥深、仍停朝賀、勅公卿、賜宴侍臣如常、○戊子、帝御南殿、覽青馬、宴群臣如常儀、加三品賀陽親王二品、從三位藤原朝臣良相、橘朝臣岑繼等正三位、正四位下伴宿禰善男從三位、從四位下藤原朝臣貞守從四位上、從四位上正躬王正四位下、无位輔世王從四位下、從四位下楠野王從四位上、從五位下豐井王從五位上、无位連扶王、正六位上清名王等從五位下、從四位下清原眞人岑成從四位上、正五位下菅原朝臣是善、在原朝臣行平、藤原朝臣仲統等從四位下、從五位上高階眞人岑緒、源朝臣興等正五位下、從五位下藤原朝臣宗善、藤原朝臣菅雄、春日臣雄繼、小野朝臣貞樹、橘朝臣數雄、紀朝臣有常、藤原朝臣良繩等從五位上、外從五位下善世宿禰豐永、上

○源朝臣謹、嵯峨源氏なり紹運錄に母正四位下大原全子と見ゆ
○小野朝臣春枝、小は原本北に作る諸本及類史に據て改む三年二月辛巳紀また證とすべし
○滋岳朝臣川人、元年九月丁亥紀に正六位上刀岐直川人賜姓滋岳朝臣とありこれに據れば此上に正六位上とあるべきなりされど類史にも無ければ舊に依て補はす
○上村主、上字は堀本藤本及類史に據て補ふ
○卜部雄貞、嘉祥三年九月壬午紀に正六位下とあり占部に作る
○右近衛少將如故、良倘及清原秋雄少將に任ぜらるゝこと下文に見ゆ此に如故とあるは誤れり
○弟門、弟は原本第に作る諸本に據て改む
○弘峯、峯は上文岑に作る

毛野朝臣綱主、正六位上源朝臣謹、藤原朝臣忠宗、藤原朝臣常行、安倍朝臣良行、藤原朝臣興邦、坂上大宿禰當道(マサミチ)、藤原朝臣數守、橘朝臣時茂、藤原朝臣弘道、藤原朝臣良倘、橘朝臣良枝、紀朝臣弘岑、小野朝臣春枝、小野朝臣國梁、縣犬養大宿禰貞守等從五位下、滋岳朝臣川人、上村主宮雄、御船宿禰佐世、家原連氏雄、卜部雄貞等外從五位下、○己丑(八)、加從四位下源朝臣全姬正四位下、授无位藤原朝臣連子、大中臣朝臣安子等從五位上、正六位上紀朝臣全子、无位當麻眞人繼子等從五位下、○壬辰(十一)、授无位良岑朝臣親子從五位下、○丙申(十五)、中納言正三位安倍朝臣安仁爲陸奧出羽按察使、民部卿如故、參議從四位上源朝臣多爲越前權守、從五位下橘朝臣三夏爲山城守、藤原朝臣良倘爲大和介、右近衞少將如故、縣犬養大宿禰貞守爲和泉守、從五位上藤原朝臣宗善爲尾張守、外從五位下菅野朝臣弟門爲介、從五位下菅原朝臣河道爲參河介、紀朝臣弘峯爲遠江守、伴宿禰安道爲權介、清原眞人清海爲駿河權守、從五位上春枝王爲下總守、從五位下源朝臣舒爲美濃權介、橘朝臣

○正四位下藤原朝臣衞、正は原本從に作る堀イ本及元年正月壬辰紀に據て改む

○壹志宿禰、貞觀四年七月乙未紀に吉野賜姓大春日朝臣天足彥國押人命之後也と見ゆ

○仲統爲備前權守、權字は堀本(朱)及三年正月丙辰紀に據て補ふ

○右兵衞佐、兵は原本近に作る元年正月辛丑紀に據て改む

○淸原眞人秋雄云々、上文良尙及秋雄の記事を參看すべし

安吉雄爲上野介、文室朝臣道世爲下野權介、鎭守將軍如故、正四位下藤原朝臣衞爲加賀守、勘解由長官如故、從五位下藤原朝臣諸葛爲權介、從五位上豐井王爲能登守、外從五位下壹志宿禰吉野爲越後權介、從四位下茂世王爲丹波守、從五位上坂上大宿禰貞守爲權介、左近衞少將如故、從四位下在原朝臣行平爲因幡守、從五位下讚岐朝臣高作爲伯耆守、外從五位下安原宿禰岳爲出雲介、從四位下藤原朝臣仲統爲備前權守、外從五位下蕃良朝臣豐持爲介、從五位上紀朝臣益雄爲備中守、淸原眞人秋雄爲權介、右近衞少將如故、從五位下長峯宿禰秀名爲備後守、從四位上藤原朝臣輔嗣爲阿波守、源朝臣勤爲伊豫守、右近衞中將如故、從五位下藤原朝臣良世爲介、右兵衞佐如故、正四位下正躬王爲大宰大貳、從五位下藤原朝臣興邦爲筑前介、仲嗣王爲肥前守、正五位下高階眞人峯緒爲肥後守、從五位下大原眞人眞室爲介、藤原朝臣友永爲豐前守、石川朝臣宗繼爲豐後守、藤原朝臣穎基爲日向守、從五位上紀朝臣有常爲左近衞少將、讚岐介如故、淸原眞人秋雄、從

五位下藤原朝臣良尙等爲右近衛少將、安倍朝臣貞行爲左衛門權佐、藤原朝臣常行爲右衛門佐、坂上大宿禰當道爲權佐、藤原朝臣基經爲左兵衛佐、陸奥國奏曰、奥地俘囚等、彼此接及、殺傷同種、事須警備以防非常、仍且差發援兵二千人、許之、○戊戌、帝停觀大射、勅公卿、就豐樂殿下、令諸衛府次射、○壬寅、以伊勢國阿耶賀神、預於名神、帝御新成殿內宴、命樂賦詩、皆如常儀、○癸卯、帝御新成殿、以觀賭射、以前日停也、時京師多盜、掠奪人物、有詔搜起、自宮中及於京中、前山城守從五位下藤原朝臣松影卒、松影、刑部少輔從五位下星雄之子也、爲人嚴正、鬚眉如畫、起家補內舍人、累遷、天長四年爲式部大丞、時東宮僚屬、妙選名流、松影風望著聞、遷爲春宮少進、還復式部大丞、時當朝會、嵯峨皇子源朝臣常、緣勅帶劔、式部詰以未知詔旨、不聽、皇子愧赧而歸、以故天皇赫怒、貶黜式部官人、左轉松影、爲彈正少忠、九年承和元年爲聘唐使判官、兼山城權介、松影以母老固辭再三請、許之、三年復爲式部大丞、出爲丹波介、後復爲式部大丞、十一年春授從五位下、歷左少弁、中務治部兩省

○大射、射禮なり公事根源に是は建禮門にて行侍る事也代の始には豐樂院にてあり云々と見ゆ次射は以次射の意なり
○令諸衛府、令は原本命に作る類史七十二及紀略に據て改む
○阿耶賀神、嘉祥三年十月辛亥紀(三二頁)に見ゆ
○星雄、魚名の孫にて父は鷹取
○式部詰、原本詰を詰に作る堀イ本に據て改む
○九年、私記に一云疑有脫文
○聘唐使、聘は原本聘に作る諸本に據て改む

○楷模、法式模範なり後漢書盧植傳に士之楷模國之楨幹也とあり

○丹後國大虫神、神名式丹後國與謝郡大虫神社（名神大）、今桑飼村、後は原本波に作る式に據て改む

○用兵之道云々、孟子離婁篇に城郭不完兵甲不多非國之災也とあり又蜀志馬謖傳に用兵之道攻心爲上攻城爲下心戰爲上兵戰爲下とあるに據れり

○一以當千、文選李陵答蘇武書に疲兵再戰一以當千とあり

○衝要、衝は原本衡に作る諸本に據て改む

○窮窘、窘は原本窟に作る諸本に據て改む

○石椅神、神名式陸奥國耶麿郡磐椅神社、今岩代國耶麻郡磐瀬村

○伴良田連、姓氏錄に載せず田は原本由に作る閣本中本谷本に據て改む續後紀には伴吉田連とも作る

○六十四、四は堀本（朱）及紀略には六に作る

（二月）

少輔、出雲山城兩國守、病卒、時年五十七、松影四入式部、閑練故事、其進退容儀、得於天性、今到吏部者、皆推松影、爲楷模焉、○[廿五]丙午、伊勢國阿耶賀神、丹後國大虫神、並加從四位下、○[廿七]戊申、陸奥國飛驛奏、請加發援兵二千人、勅曰、夫邊要之寄、安危所繫、愼微慮萠、理固宜然、但時臨農要、人競耕稼、而多動士衆、遠行屯戍、恐懷患役之嗟、終乏如歸之志、凡用兵之道、未必貴多、苟奮其力、一以當千、宜便簡拔近城兵一千人、和誘其心、精練其武、能守衝要、以備機急、又知騷擾之由、發於飢困、故賜賑給料籾一万斛、事須不論民俘、務加優恤、開以恩惠、慰其窮窘、○[廿八]己酉、加陸奥國石椅神從四位下、大判事兼明法博士備後介從五位下伴宿禰宗卒、宗本姓伴良田連、後改爲伴宿禰、宗出自外國、少入大學、專心法門、習讀律令、始爲大宰明法博士、承和八年還爲右少史、十一年正月轉爲右大史、十二年六月轉爲左大史、十四年正月叙外從五位下、嘉祥元年二月爲勘解由次官、五月遷爲大判事、二年二月兼爲明法博士、三年正月叙從五位下、仁壽四年二月兼爲備後介、卒時年六十四、○[辛亥朔]二月[三]癸丑、以陸奥

○永倉神、神名式陸奧國白河郡永倉神社

○有長星出於東北、漢書文帝紀に八年夏有長星出東方、注に長星多兵革事と見ゆ北は原本地に作る諸本及紀略に據て改む

○吉備津彥名神、承和十四年十月甲寅紀に見ゆ原本名下に明字あり堀イ本及四月乙卯紀に據て削る

○鈴鏡、形狀に據れる名なり貞觀九年四月辛未伊福伎神に奉れると同じ物なるべし

○從五位下文室眞人、從は諸本に據て補ふ

○永直爲明法博士、永直は天長十年に上奏せる令義解序に署名して明法博士と云然るに此に爲明法博士とあるは疑ふべし

○直道、直は淀本眞に作る

○爲右京權大夫、爲字は諸本に據て補ふ

○從三位兼行、以文云兼字可疑

○修國史、續日本後紀なり

○帶法師位者、位字は堀本(朱)及類史百八十五に

國永倉神、列於官社、有長星出於東北、○癸亥(十三)、備中國言、吉備津彥名神庫內鈴鏡、一夜三鳴、○乙丑(十五)、從四位下輔世王爲侍從、從五位下文室眞人眞文爲大舍人頭、外從五位下讃岐朝臣永直爲明法博士、從五位下大宅朝臣年雄爲散位頭、從五位上藤原朝臣常永爲治部大輔、外從五位下御輔朝臣永道爲大判事、明法博士如故、從五位上嶋江王爲大膳大夫、從五位下藤原朝臣直道爲木工頭、正峯王爲正親正、從四位上正行王爲彈正大弼、正五位下豐前王爲左京權大夫、大和守如故、從四位下藤原朝臣良仁爲大夫、中宮亮如故、正四位下長峯宿禰高名爲右京權大夫、兼爲山城權守、外從五位下大神朝臣虎主爲備後介、侍醫如故、○丁卯(十七)、詔右大臣正二位兼左近衞大將藤原朝臣良房、參議從三位兼行中宮大夫讃岐守伴宿禰善男、從四位下行刑部大輔春澄朝臣善繩、正六位上行少外記安野宿禰豐道等、修國史、○戊辰(十八)、請一百僧於大極殿、轉讀大般若經、○辛未(廿一)、讀般若訖、僧年七十已上、及法師位已上者、賜度者各一人、其年六十已上帶法師位者、兼加一階、滿位者唯授一階、

據て補ふ
(三月)道野王卒、天長九年正月辛丑從四位下に仁壽元年四月癸卯次侍從となり三年正月戊戌從四位上に進む
○賀陽親王、桓武天皇々子貞觀十三年十月庚戌薨
○解絲竹、漢書張禹傳に內奢淫身居大第後堂理絲竹筦絃とあり絲は琴瑟、竹は笙笛の類を云
○仁壽三年、原本三を二に作る堀本(朱)及仁壽三年正月戊戌紀に據て改む
○病卒、此下に恐くは脫文あるべし
○諸國撿非違使、此に初て見ゆ此後貞觀三年十一月、同九年十二月、元慶元年十二月紀等に見ゆ
(四月)賜飮侍臣、二孟の旬宴なり
(閏四月)閏四月、四字は藤本谷本に據て補ふ
○清峯朝臣門繼、繼は原本總に作る諸本に據て改む下同じ續後紀承和三年閏五月壬辰紀また證さすべし
○九月爲縫殿頭、承和八年九月紀に見えず
○叙正五位下十五年正月、此十字續後紀承和十

○三月(庚辰朔)壬辰(十三)、散位從四位上道野王卒、道野王者大宰帥二品賀陽親王第一子也、淫於酒色、頗解絲竹、然性甚謹厚、未曾傲慢、天長九年叙從四位下、承和三年拜武藏守、仁壽三年叙從四位上、病卒、○丙申(十七)、大風雨、○乙巳(廿六)、制、大和國撿非違使正六位上伊勢朝臣諸繼預把笏、諸國撿非違使把笏、始於此人、○丙午(廿七)、從五位下藤原朝臣興邦爲筑前權守、○夏四月己酉朔、賜飮侍臣、如常儀、○庚戌(二)、地震、○乙卯(七)、遣使者向備中國、奉幣吉備津彥名神、○戊午(十)、禁私養鷹鷂、○是月、寒殞霜、記灾也、○閏四月(己卯朔)乙酉(七)、從五位下和朝臣豐永爲上總介、清瀧朝臣藤根爲下總守、散位從四位下清峯朝臣門繼卒、門繼左京人也、達練世俗、無他才學、嵯峨天皇殊錄恩舊、擢爲左衛門少尉、弘仁十二年正月叙外從五位下、四月除上野介、十三年遷爲右馬助、天長十年叙從五位下、承和三年四月出爲長門守、四年二月爲典藥頭、八年正月拜備後守、九月爲縫殿頭、十二年正月叙正五位下、十五年正月叙從四位下、隱居難波、病卒、時年七十四、○壬辰(十四)、有狐晝見、命近仗駈走、過御前、帝射而獲之、○癸巳(十五)、大雨水、○丁(十九)

二年正月甲寅紀同十五年正月戊辰紀に據て補ふ
○近仗、仗は原本伏に作る傍注一本に據て改む
○過御前、過は原本週に作る諸本に據て改む
○多藝石津武義群上、倭名抄に多藝は多岐石津は伊之津武義は武藝に作りて牟介と訓み群上は郡上とす民部式は武義群上共に本史に同じ現今は武義群上を武儀に群上を郡上に作り多藝は養老郡となる
○嗣峯王、類史八十七及下文天安元年正月乙卯紀峯を岑に作る
○推訴使、訴は原本討に作る諸本及類史に據て改む
（五月）氣比大神宮寺、宮寺の二字は類史百八十に據て補ふ
○賜恩餞絲竹間奏、原本餞を錢に間を問に作る錢は堀本（朱）に據り間は諸本に據て改む
○高良玉垂名神、承和七年四月丙寅紀に見ゆ
（六月）安祥寺、山城名勝志十七に宇治郡安祥寺在御廟野東諸羽明神西號吉祥山とあり三年十月辛卯紀清和紀貞觀元年

西、分美濃國多藝武義兩郡、爲多藝、石津、武義、群上凡四郡、遣使者賑給相摸國飢民、○辛丑、遣使者向丹生川上雨師神社、奉幣馬、請止淫雨、○丙午、大宰府馳驛言、日向守從五位下嗣峯王發兵、將殺推訴使正五位下田口朝臣房富、有司奏讞、詔免官爵、○是月、左右馬寮御馬疫死殆盡、

○五月辛亥、詔能登國氣多大神宮寺、置常住僧、聽度三人、永々不絕、○壬子、停騎射走馬之觀、不御武德殿、蓋據御馬多斃也、詔越前國氣比大神宮寺、御子神宮寺、置常住僧、聽度五人、心願住者亦五人、凡一十僧、永々不絕、○癸丑、大宰大貳正躬王將赴任、詣闕拜辭、殊賜恩餞、絲竹間奏、○丁巳、地震、○戊午、地亦震、○癸亥、加賀國分寺置布薩戒本田二町、○丁卯、加筑後國高良玉垂名神位田四町、○庚午、東大寺奏言、毗盧舍那大佛頭自落在地、

○六月戊寅朔、日有蝕之、詔、以安祥寺預於定額、施稻一千束、以充燈油、○癸未、震建禮門前柳樹、○甲申、遣參議左大弁兼左近衛中將從四位上藤原朝臣氏宗東大寺、見大佛頭墮落之狀、○戊子、帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、○戊戌、地震、從五位下伊統宿

○四月癸卯紀を參看すべし
○所司奉祭、神今食なり
○壬寅、原本癸卯の下にありしを干支を推して此に移す
○雄風王卒、嘉祥三年四月甲子從四位下に仁壽元年四月癸卯次侍從に二年正月壬午左馬頭となる
○沈敏、沈は原本汎に作る堀本(朱)に據て改む
(七月)佐保山陵、聖武天皇の御陵
○策命、命字は藤本及紀略に據て補ふ
○恐牟恐牟毛、二の牟字は美の誤なるべしされど諸本及東大寺要錄亦同じく牟さあれば改めず
○佐保陵爾、爾字は諸本に據て補ふ要錄には保の下に山字あり
○奏賜部止、奏は原本奉に作る堀本(朱)及要錄に據て改む
○久經爾太禮波、波は原本渡に作る要錄に據て改む
○頽落、頽は藤イ本及紀略頭に作る
○奉造固无止須、原本无を天に作る諸本に據て改む
○今毛今毛、今毛の二字

禰福代爲園池正、藤原朝臣弘道爲出羽守、○壬寅、地震、○癸卯、從四位下雄風王卒、雄風、贈一品萬多親王第四子也、爲人沈敏、弱冠入學、帝在東宮時、引爲侍者、頗習鷹馬、踐祚之日授從四位下、除左馬頭、補次侍從、給事殿中、進退閑雅、性素寬裕、卒官、時年卌二、帝甚愍悼之、○秋七月丁未朔、紀伊守從五位下紀朝臣眞高獻甘露、○戊申、遣參議宮內卿從四位上源朝臣多、安藝守從四位上淸原眞人瀧雄等、向佐保山陵、策命云、天皇恐牟恐牟毛、掛畏支佐保陵爾奏賜部止奏、御願止之天奉造理給倍留東大寺乃盧舍那佛、時代久經爾太禮波、自然爾毀損天、去五月廿三日乎以天、頽落給倍利、今御願能破奴倍支爾依天、奉造固无止須、今毛今毛畏山陵能御本願爾顧給天、相助護給爾依天、佛毛平爾奉造固利、天下毛平天可在止之天奈毛、參議宮內卿從四位上源朝臣多、安藝守從四位上淸原眞人瀧雄等乎差使天、恐牟恐牟毛奏賜久止奏、○丙寅、大宰府傳進入唐留學僧圓載上表、○壬申、地震、以紀伊國天手力男神預於官社、○戊寅、從三位百濟王勝義薨、勝義從四位下元忠之孫、從五位下玄風之子也、少游大

學、頗習文章、大同元年二月爲大學少允、四年二月爲右京少進、弘仁七年二月叙從五位下、十年二月爲左衞門佐、十一年正月兼爲相摸介、十二年十月叙從五位上、十三年三月遷爲但馬守、天長四年正月兼爲美作守、叙正五位下、六年二月叙從四位下、爲右京大夫、十年十一月遷爲左衞門督、承和四年正月兼相摸守、六月爲宮內卿、六年二月叙從三位、年老致仕、閑居河內國讃良郡山畔、頗使鷹犬、以爲養痾之資、卒時年七十六、○八月丁丑朔、地震、○（二）戊寅、地亦震、○（八）甲申、下總守從五位下清瀧朝臣藤根、上總介和朝臣豐永等、並授從五位上、○（十）丙戌、兵庫中鼓自鳴、○（十三）己丑、散位從四位下當世王卒、當世、二品大宰帥仲野親王第四子也、天性羸弱、惡當風雨、頗好鷹犬、不敢出遊、○（十五）辛卯、散位外從五位下上村主宮雄、右大史正六位上河原連貞雄等、改姓廣階宿禰、主計頭兼筭博士外從五位下家原連氏主、主稅助外從五位下氏雄、左大史正六位上繩雄、右近衞醫師正七位上善宗等、賜姓宿禰、○（十七）癸巳、式部卿仲野親王家令正七位下宇自可臣武雄改姓笠朝臣、○（廿一）丁酉、中務卿時康親王（光孝）

は要錄に據て補ふ
○乍天、天字或に爾字の誤なるべし
○差使天、原本天を爾に作る要錄に據て改む
○奏聞久止、奏は原本奉に作る要錄に據て改む
○天手力男神、神名式紀伊國牟婁郡天手力男神社、今熊野本宮境內
○戊寅、按に七月丁未朔此月戊寅なし戊寅は八月二日なり誤て此に收めしか然らざれば戊申（二日）或は丙寅（二十日）の誤かさも思へど同じく前後の順序を改めざるべからず故に姑く疑を存して舊に仍る
○鷹犬、原本犬を大に作る諸本に據て改む
（（八月））丁丑朔、原本朔字を脫す藤本に據て補ふ
○仲野親王、桓武天皇の皇子なり原本親字なし堀本（朱）及下文に據て補ふ
○外從五位下上村主、外及上字は正月戊子紀及下文三年正月丙辰紀に據て補ふ
○宇自可臣、錄右京皇別に孝靈天皇皇子彥狹嶋命之後也とあり
○朝野宿禰、續後紀承和

二年二月庚辰紀に大和國人正六位上忍海原連嶋依等賜姓朝野宿禰、葛城襲津彦之後也とあり忍海上連も亦同祖より出づ
○藤原朝臣冬緖、元年正月壬辰紀に從五位上を授けらる傍注に一本下とあるは非なり
(九月)八幡大菩薩宮、宮字は紀略及要錄に據て補ふ
○策命、命字は紀略に據て補ふ要錄にはなし
○佐保天皇、佐保は聖武天皇の御陵の名なり
○知識、知識は結社或は講中と云が如し天平十五年(續紀上三二〇頁)に出づ
○平爾奉造固利、造は上文に據て補ふ
○大幣帛、大は原本太に作る要錄に據て改む下同じ
○令捧持、令は原本命に作る谷本藤イ本に據て改む下同じ
○園神韓神、神名式宮內省坐神三座園神社韓神社二座とあり嘉祥三年紀(三三頁)に注す
○如常也、也字恐くは衍
○大織、濱成(不比等の

家令從六位下忍海上連淨永、改姓朝野宿禰、○己亥、從五位下源朝臣直爲侍從、從五位上藤原朝臣冬緖爲肥後守、○辛丑、地震、長門國言、牛產犢一身兩頭、○九月壬子、遣少納言從五位下利見王、向八幡大菩薩宮、策命曰、天皇我詔旨止、掛畏岐八幡大菩薩乃廣前爾、恐牟恐牟毛申給倍止申久、東大寺乃盧舍那佛波、佐保天皇御世爾、大菩薩乎知識爾奉唱天奉造給倍利、而乎時代久經爾天、自然爾毀損禮天、去五月廿三日乎以天、頽落給爾太利、今本志乃破奴倍支爾依天、奉造固无止須、今毛今毛、亦大菩薩乃相助介護賜牟爾依天、佛毛平爾奉造固利、天下毛平安介久在倍支、故是以、少納言從五位下利見王乎差使天、宇豆乃大幣帛乎令捧持天奉出須止、恐牟恐牟毛申賜久止申、別辭天申久、大宰府申久、前與利勞利繕波世賜不宮波、去閏四月爾作利畢奴止申須、此乎聞食、悅賜比天奈毛、悅大幣帛乎令副捧天奉出賜不、掛畏支大菩薩、如故爾安穩爾靜万利坐天、天皇乎常磐爾堅磐爾、夜守利日守利爾、護給比矜賜倍止、恐牟恐牟毛申賜久止申、○癸丑、以園神

孫」の子、紀略に文繼とあるは誤なり
○嶋田朝臣清田卒、錄右京皇別に嶋田臣神八井耳命之後也とあり臣姓なりしが弘仁十四年改めて朝臣を賜はる清田は日本後紀撰者の一人なり
○長訓大法師卒、法字は藤本堀本(朱)に據て補ふ長訓の傳釋書三にも見ゆ
○錦氏、錦部氏を修したるなり
○玄憐、憐は類史百八十九には瞵に作る
○疑薈、薈は廣雅釋詁に翳也障也とあり
○毗尼、翻譯名義集四に毘奈耶或毗尼什師云毗尼秦言善治謂自治婬怒癡亦能治衆生惡也南山云正翻爲律律者法也とあり
○白黑、僧侶と俗人
○從五位下藤原朝臣、從五位下の四字は中本藤本谷本に據て補ふ
○土九寺、左は原本佐に作る諸本に據て改む
○大興寺、詳ならず
○丈部、丈は原本大に作る藤本及類史に據て改む
○海印寺、山城國乙訓郡海印寺村にあり眞言宗弘

韓神、列於名神。是夕東宮有狼害人、明旦有人射殺、○乙卯[九]、重陽節也、帝御南殿、賜宴侍臣、命樂賦詩、如常也、是夜地震、○丙辰[十]、地亦震、○丁巳[十一]、大雨、○癸亥[十七]、無品安勅內親王薨、桓武天皇第十三女、母從四位上藤原朝臣大繼之女、從四位下河子也、○甲子[十八]、散位從五位上嶋田朝臣清田卒、清田者正六位上村作之子也、少入學、略涉經史、奉文章生試、遂及科第、後爲大學少屬、遷爲大宰少典、還爲內藏少屬、弘仁十四年、改臣姓爲朝臣、天長元年爲少外記、三年兼爲勘解由判官、四年轉爲大外記、兼爲下野權掾、天長六年正月叙從五位下、承和二年爲宮內少輔、四年遷爲治部少輔、六年九月出爲伊賀守、仁壽元年十一月叙從五位上、卒時年七十七、○乙丑[十九]、地震、○丙寅[二十]、地亦震、○己巳[廿三]、僧正長訓大法師卒、長訓俗姓錦氏、近江國滋賀郡人也、師事少僧都玄憐、延曆年中受具足戒、後於大極殿、說冣勝王經、應問而答、能發疑薈、稍轉、仁壽三年爲僧正、卒時年八十二、長訓自少至長、固持毗尼、推己及物、博愛爲先、白黑至今、稱其慈悲、○癸酉[廿七]、授正六位上紀朝臣夏井從五位下、從五位下藤原朝臣峯主

仁十年僧道雄開基
○眞如、眞如親王なり東大寺要錄所引親王の傳に營東大寺大毘盧舍那佛像頭斷墮地朝廷召集工匠經營鎔鎔勅令親王撿校取其處分功夫早畢親王有力焉と見ゆ
○天平勝寶四年勅書、私記に或曰續紀此勅載在天平十五年而東大寺板文係天平十五年蓋板文成於開眼之時而實在天平勝寶四年乎と云
○恐徒有勞、徒は原本從に作る諸本及要錄に據て改む
○預無能感、要錄預を須に作る
○一枝花、續紀及要錄所引花を草に作る
○一合土、續紀合を把に作る
○勿障、勿は原本句に作る諸本に據て改む
○催命、要錄依令に作る
○今件大佛、件は原本佛に作る藤イ本及紀略要錄に據て改む
○命天下、要錄命を令に作る命郡國の條亦同じ
○冥助、要錄冥加に作る
○遣使、狩谷校本遣一本作隨とあり要錄は原本

爲左少辨、紀朝臣夏井爲右少辨、橘朝臣高宗爲土左守、○甲戌、以伊豆國大興寺、預於定額、爲海印寺別院、大興寺者、孝子丈部富賀滿爲國家所建也、修理東大寺大佛司撿挍傳燈修行賢大法師位眞如、大納言正三位兼行右近衛大將藤原朝臣良相等奏言、謹案、去天平勝寶四年勅書偁、朕發菩薩大願、奉造盧舍那佛、廣及法界知識、夫有天下之富者朕也、有天下之勢者朕也、以此富勢、造彼尊像、事也易成、心也難至、恐徒有勞、人預無能感、諸知識者、發至誠心、各人招福、宜每日三拜盧舍那佛、自當存念各造盧舍那佛像、如更有人願持一枝花一合土造像者、勿禁勿障、同進百姓、催命加造者、卽知先皇本願、以一切人衆、爲善知識、欲共其福利、不專於一己、而今件大佛、已爲大破、修理所須、殆及新造、案佛所說、莊嚴佛事、修理舊物、所得功德、勝於新造、而獨用官物以充給、恐乖弘濟之本願、望請、命天下人、不論一文錢一合米、隨力多少、以得加進、又一切神祇、不望功德勝利者蓋寡矣、故先皇始自八幡大神、以爲善知識、賴其冥助、果彼大願、若諸神祇、望預件功德者、命所司、隨其所願、辨送料物、然

則先皇大願、始終不レ違、人神福利、古今如レ一、勅許レ之、於レ是命二郡國一、以二米及輕賫等一遣使運送、○乙亥晦、地震、○冬十月丙子朔、賜二飲侍臣一如レ常、○戊寅、地震、○丙戌、夫人從三位藤原朝臣緒夏薨、夫人贈左大臣從一位內麻呂之女也、弘仁元年十一月叙二從五位上一、三年正月叙二從四位下一、立爲二夫人一、六年七月叙二從三位一、薨後贈二正二位一、○癸巳、山埼津頭失火、延燒三百餘家一、○甲午、復二出羽國百姓困窮者万九千餘口一、○十一月癸丑、筑前國奏言、上座郡大領外從七位上前田臣市成、理レ郡年久、善政日聞、百姓同聲、謂二之不煩一、請假二外從五位下一、積レ効爲レ眞、從レ之、○庚申、地震、○乙丑、從五位下藤原朝臣近主爲二常陸介一、○丁卯、帝不レ御二神嘉殿一、所司奉祭如常儀、○戊辰、帝御二南殿一、賜二宴群臣一、一如二常儀一、○十二月丙子朔、大炊寮大八嶋竈神、齋火武主比命、庭火皇神、並授二從五位下一、○丁亥、地震、○癸巳、禮佛懺悔、○辛丑、中務少輔從五位下興峯王賜二姓清原眞人一、

日本文德天皇實錄卷第七

に同じ

(十月)賜飲侍臣、孟冬旬宴なり

○藤原朝臣緒夏、嵯峨天皇の夫人

○立爲夫人、後紀弘仁六年七月壬午紀に從四位下藤原朝臣緒夏爲二夫人一とありされば六年七月立爲二夫人一叙二從三位一とあるべきなり

(十一月)不煩、後漢書章帝紀詔に安靜之吏悃愊無レ華如二襄城令劉方一吏人同レ聲謂二之不煩一雖レ未レ有二它異一斯亦殆近レ之矣とあり煩瑣ならずして治績著しく擧るを云

○一如常儀、儀は類史九に據て補ふ

(十二月)大八嶋竈神云々、大八嶋竈神は大炊寮式に竈神八座、齋火・庭火神は陰陽寮式に庭火幷平野竈神祭(坐二內膳司一)神座十二前(各六前)とあり按に大八嶋竈神以下從五位下に叙すること天安元年四月癸酉紀に重出何れか誤なるべし、又同紀を按るに齋火の上に內膳司の三字あるべきなりされど類史にも見えざれば舊に據る　○興峯王、續後紀承和十三年二月己亥紀に從五位下益善王男興岑王等賜二姓清原眞人一と見ゆ、然るに仁壽元年二月丙辰に散位從五位下興岑王、三年十月癸酉にも從五位下興岑王爲二中務少輔一とありて此に斯く見ゆるは不審しきことなり

日本文德天皇實錄卷第八

起齊衡三年正月盡天安元年正月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

三年（丙子）春正月乙巳朔、停朝賀、以陰雨也、帝御南殿、賜宴侍臣、如舊、唯不作音樂、○丁未（三）、皇太子朝見、○辛亥（七）、帝御南殿、觀青馬、賜宴群臣、如常儀、授從四位下基兄王從四位上、无位棟貞王從四位下、從五位下利見王從五位上、正六位下末良王、清田王等從五位下、正四位下源朝臣寛正四位上、從四位下清原眞人長田從四位上、從五位下藤原朝臣近主、紀朝臣道茂、百濟王安宗、橘朝臣常蔭、在原朝臣善淵、安倍朝臣貞行等從五位上、外從五位下大神朝臣虎主、滋善宿禰宗人、山田連春城、山口忌寸西成、正六位上久賀朝臣三常、源朝臣包、藤原朝臣貞亮、橘朝臣茂生、藤原朝臣家宗、安倍朝臣房上、藤原朝臣三直、藤原朝臣大瀧、橘朝臣高繼、安倍朝臣弘良、紀朝臣春枝等從五位下、正六位上安野宿禰豐道、秦

【齊衡三年】如舊、舊下に儀字あるべきかと思へど類史にもなし
○辛亥、亥は原本未に作る諸本及類史（七十二）紀略に據て改む

○源朝臣寛、貞觀十八年五月癸卯紀の傳に承和三年「授從四位上」齊衡三年「加正四位下」とあり之に據れば從四位上源朝臣寛正四位下とあるべきなりされど類史亦此に同じ

○源朝臣包、原本包字なく二字空闕諸本亦同じ類史九十九及下文天安二年四月壬寅紀に據て補ふ
○高繼、類史高を尙に作る

○毅杖、毅は原本卯に作る藤本に據て改む
○大枝朝臣、枝は原本江に作る大枝を大江と改めしは貞觀八年十月丙戌なりされば此は大枝とあるべきなり故に傍注に據て改む
○東宮學士、東は原本春に作る前本藤本に據て改む
○藤原朝臣弟男、原本朝臣の二字なく弟を第に作る朝臣は藤本に據て補ひ弟は諸本に據て改む
○從五位上文室朝臣、閣本中本藤本五を四に谷本は六に作れど仁壽三年正月丁未紀は此に同じ
○貞守、貞は原本傍注眞に作る
○眞丘、眞は中本藤本直

宿禰永原、笠朝臣名高、丸子連家繼、坂合部宿禰人吉等外從五位下、○八壬子、无位藤原朝臣佐太、伴宿禰枝子等授從五位下、○十一乙卯、東宮獻御杖、諸衞府獻毅杖如常、○十二丙辰、從五位上藤原朝臣良繩爲右中弁、內藏助春宮亮播磨介如故、從五位上大枝朝臣音人爲左少辨、東宮學士如故、從五位下高橋朝臣淨野爲內膳奉膳、正四位下長岑宿禰高名爲山城守、右京權大夫如故、從五位下山田宿禰文雄爲河內介、外從五位下高丘宿禰宗雄爲攝津介、從五位下紀朝臣東人爲伊賀守、礒江王爲駿河守、外從五位下廣階宿禰宮雄爲介、津宿禰良友爲伊豆守、從五位下藤原朝臣大瀧爲武藏介、外從五位下家原宿禰氏主爲安房守、正五位下高階眞人岑緒爲近江介、從五位下紀朝臣永直爲陸奥守、高橋朝臣安雄爲若狹守、外從五位下高丘宿禰百興爲越前介、從五位下藤原朝臣弟男爲加賀介、從四位上源朝臣啓爲越中守、外從五位下秦宿禰永原爲越後介、從五位上文室朝臣助雄爲丹波守、坂上大宿禰貞守爲介、左近衞少將如故、從四位上源朝臣冷爲但馬守、從五位下紀朝臣眞丘

爲權介、藤原朝臣貞敏爲備前介、雅樂頭如故、大春日朝臣眞野麻呂爲紀伊權介、曆博士如故、藤原朝臣岑主爲讃岐權介、橘朝臣三夏爲筑前守、桑田眞人虎吉爲筑後守、外從五位下坂合部宿禰人吉爲豐前介、從五位下坂上大宿禰當宗爲左兵衛權佐、從四位下藤原朝臣仲統爲左馬頭、備前權守如故、從五位下紀朝臣春枝爲助、從四位下藤原朝臣良仁爲右馬頭、左京大夫如故、○辛酉（十七）、停大射禮、但勅諸衛府於殿前射、○壬戌（十八）、帝觀賭射、○乙丑（廿一）、內宴、命樂賦詩如常、○二月（甲戌朔）庚辰（七）、參議式部大輔從四位上藤原朝臣貞守、上表辭職、○辛巳（八）、從五位下滋野朝臣善根爲中務少輔、藤原朝臣興邦爲圖書頭、左兵衛權佐、筑前權守如故、從五位上藤原朝臣良縄爲內藏頭、右中辨春宮亮播磨介如故、從五位下興岑王爲諸陵頭、丹墀眞人弟梶爲民部少輔、外從五位下有宗宿禰益門爲主計頭、竿博士如故、從五位下大枝朝臣眞臣爲鼓吹正、當麻眞人鴨繼爲典藥頭、侍醫筑前介如故、善世宿禰豐永爲造酒正、從四位下菅原朝臣是善爲左京大夫、文章博士如故、從五位下大中臣朝臣眞主爲亮、從

に作る天安元年二月甲申紀は此に同じ

○坂合部宿禰人吉、宿禰の二字は上文辛亥紀に據て補ふ

○大射禮、大は原本太に作る諸本及類史に據て改む禮字は類史になし

（二月）興邦、邦は原本郡に作る藤本及二年正月戊子紀に據て改む

○內藏頭、補任に內藏權頭とすれど貞觀十年二月壬午紀の傳には內藏頭とあり

○興岑王、此王清原眞人の姓を賜はりしこと二年十二月辛丑紀に見ゆ此に王とあるは疑はし

○弟梶、弟は原本第に作る諸本に據て改む

○眞主、主は原本王に作る中本藤本及下文五月丙

實紀に據て改む
○有眞爲陸奧守、按に正月丙辰紀に紀朝臣永直爲二陸奧守一とあり此に有眞爲二陸奧守一とあるは故ありて改任せられしにや
(三月)稟粮、糧食を賜ふなり稟は玉篇に賜レ穀也與也供也給也とあり傍注稟に作るは非なり
○法隆寺、詳ならず
○月讀社、神名式山城國葛野郡葛野坐月讀神社(名神大月次新嘗)今松尾神社境外にあり攝社となる
○囓、原本囓を齧に作る諸本及紀略に據て改む
(四月)癸酉朔、朔字は諸本及類史紀略に據て補ふ
○三位已上名神々主云云、三代格一貞觀十年六月廿八日太政官符應下以レ女爲二禰宜一事の條に詳に見ゆ
○從四位上藤原朝臣諸成、原本上を下に作る下

五位上藤原朝臣恒雄爲二相摸權介一、橘朝臣永範爲二下野權守一、從五位下文室朝臣道世爲レ介、文室朝臣有眞爲二陸奧守一、和氣朝臣巨範爲レ介、橘朝臣休蔭爲二左兵庫頭一、小野朝臣春枝爲二鎭守將軍一、○十八辛卯、請二僧百三人於大極殿及冷然院一、分讀二大般若經一、○二十癸巳、地震、有レ聲如レ雷、○廿一甲午、地亦震、

○甲辰朔三月三丙午、雨雹、記レ灾也、○九壬子、大宰府奏言、新羅人卅人漂二著此岸一、稟粮放歸、以二出羽國法隆寺一預二於定額一、○十一甲寅、從五位下清原眞人長統爲二大學頭一、安倍朝臣房上爲二大炊頭一、伴宿禰須賀雄爲二紀伊介一、藤原朝臣三藤爲二土左權守一、陰陽頭如レ故、○十五戊午、移二山城國葛野郡月讀社一、置二松尾之南山一、社近二河濱一、爲二水所一レ囓、故移レ之、○廿四丁卯、加二陸奧守從五位下文室朝臣有眞從五位上一、○是月、地數震、京師及城南、或屋舍毀壞、或佛塔倚傾、

○夏四月癸酉朔、地震、帝不レ御二南殿一、勅二公卿一賜二飮侍臣一如レ常、○二甲戌、地震、詔、諸國三位已上名神々主及禰宜祝等、並預レ把レ笏、○八庚辰、駿河國言、甘露降、從五位下丹墀眞人弟梶爲二讃岐權介一、○十八庚寅、右京大夫從四位上藤原朝臣諸成卒、諸成、參議從三位巨勢麻呂曾孫、左兵衛佐兼阿波守

文及仁壽三年正月戊戌紀に據て改む
○十三年正月授正五位下、三は原本二に作る堀本(朱)及承和十三年正月己酉紀に據て改む
○資性勤爲宗、勤上脫字あるべし
○八座、參議を云
○遽然傾逝、原本遽を虚に作る谷本に據て改む
○皇親之限、原本皇を王に作る藤本に據て改む
○諸臣、諸は原本王に作る堀本藤本及紀略に據て改む
○國康親王、仁明天皇の第六皇子、昌泰元年三月十五日薨ず
○繼麻呂卒、麻は原本磨に作る閣本谷本に據て改む
○晩而入學、而字は諸本に據て補ふ
(五月)請僧、請は原本諸に作る諸本及類史百七十三に據て改む
○有年爲備後守、後は原

從五位下弓主之孫、正六位上助川之長男也、弘仁年中爲文章生、聰悟超倫、暗誦文選上帙、學中號爲三傑、弘仁十二年二月爲修理少進、九月遷民部少丞、十四年七月爲式部大丞、天長三年正月叙從五位下、爲相摸權介、十年五月爲右少弁、六月出爲大宰少貳、承和六年九月爲治部少輔、七年六月遷式部少輔、八年十一月加從五位上、九年五月兼爲勘解由次官、八月遷爲春宮亮、十三年正月授正五位下、十五年叙從四位下、爲右中辨、嘉祥二年爲備前守、三年六月爲右京大夫、仁壽三年正月叙從四位上、時人以爲、諸成才學不後等輩、資性勤爲宗、恨不登八座而遽然傾逝、時年六十四、○(廿二)甲午、彈正臺奏、五世王者、雖有王號、非皇親之限、其朝服色、宜依諸臣位階、從之、○(廿六)戊戌、上野太守四品國康親王落髮爲僧、爲人羸弱、不堪出仕、故避俗入道、散位外從五位下氷宿禰繼麻呂卒、繼麻呂字宿榮、左京人、晩而入學、日夜不倦、精於筭術、天長二年爲主計筭師、稍遷、承和八年爲筭博士、兼爲主計助、年老致仕、嘉祥元年特拜駿河介、卒時年七十六、○(廿九)辛丑晦、虹見於辨官廳前、○五月(壬寅朔)(五)丙午、停騎射

走馬之觀、不御武德殿、○庚戌、請僧二百五十人於大極殿、及冷然院、賀茂、松尾神社、分讀大般若經、限三日訖、攘災疫也、○甲寅、從五位下橘朝臣數岑爲木工助、正四位下豐江王爲右京大夫、從五位下藤原朝臣有年爲備後守、○丙寅、遣右大弁從四位上清原眞人岑成、向佐保山陵、策命曰、天皇恐牟恐毛、掛畏支佐保山陵爾奏賜閉止奏久、御願止之天奉造理給閉留東大寺乃盧舍那佛、時代久經爾太禮波、自然爾毀損天、去年五月廿三日乎以天頹落給閉利、因茲、參議宮內卿從四位上源朝臣多、安藝守從四位上清原眞人瀧雄等乎差使天、可奉造固狀乎奏給閉利、而國家事繁久、故障多之天、今末天爾忘太利、今奈毛始天、的久奉造固留、畏山陵乃御願爾願給天、相助護給爾依天之、佛毛奉造固利、平久可在止之天奈毛、右大弁從四位上清原眞人岑成乎差使天、恐牟恐毛奏賜久止奏、從五位下大中臣朝臣眞主爲民部少輔、藤原朝臣家宗爲大炊頭、安倍朝臣房上爲安房守、○戊辰、以山城國片山神、列於官社、兼預相嘗祀、○己巳、雨水、○六月壬申朔、地震、○癸酉、地亦震、○壬午、帝不御神嘉殿、所司奉祭如常

本前に作る諸本及天安二年九月辛巳紀に據て改む
○策命、此二字堀本藤本及紀略に據て補ふ
○恐牟恐毛、二の牟字は美の訛なるべし
○給閇留、閇は原本工に作る要錄に據て改む下同じ
○時代久經、時字は要錄及二年九月壬子紀に據て補ふ
○廿三日乎以天、乎以天の三字は閣本中本及要錄に據て補ふ
○瀧雄等乎、乎は要錄に據て補ふ
○狀乎奏給、給は原本結に作る諸本に據て改む
○今末天爾、原本末を爾に爾を末に作る諸本及要錄に據て改む
○願給天、原本願を顧に作る傍注及要錄に據て改む
○片山神、神名式山城國愛宕郡片山御子神社(大月次相嘗新嘗)、今賀茂別雷神社攝社となる
(六月二)請名僧二百、原本請を諸に百を日に作る諸本に據て改む
○西大、大は原本天に作る諸本に據て改む

○十四箇寺、箇字は紀略に據て補ふ
○益善王、舍人親王の後なれど父は詳ならず
○潔姬薨、清和天皇の外祖母たるを以て天安二年十一月癸未正一位を贈られ荷前の幣に預り四墓の一となる
○當麻氏、當麻眞人治田麻呂の女
○正一位、良房は貞觀十四年九月二日薨四日贈正一位、されば贈正一位とあるべきなり
○清和皇太后、藤原明子なり染殿后と號す
○三年三月、三は原本二に作る仁壽三年三月甲午紀に據て改む
○薨時、時字は紀略に據て補ふ
○賀樂岡白川地、諸陵式に愛宕墓贈正一位源氏清和太上天皇外祖母在山城國愛宕郡、山城志に在愛宕郡田中村東とあり
(七月)太子踐祚之日云云、續後紀天長十年十一月庚午に正五位下を授けらる大嘗會の時なりされば此に太子踐祚之日とあるは踐祚大嘗之日とあるべきなり

儀、○乙酉、從五位上在原朝臣善淵爲大舍人頭、是日請名僧二百六十五人於東西寺、及延曆、崇福、梵釋、天王、東大、興福、元興、大安、藥師、西大、法隆、新藥師等十四箇寺、讀所寫一切經各三遍、限七日訖、每寺差五位一人爲勅使、○丁亥、攝津守從五位下益善王賜姓清原眞人、○甲午、加正三位藤原朝臣長良從二位、○丙申、正三位源朝臣潔姬薨、潔姬者嵯峨太上天皇之女也、母當麻氏、天皇選聟未得其人、太政大臣正一位藤原朝臣良房弱冠之時、天皇悅其風操超倫、殊勅嫁之、清和皇太后即其長女也、潔姬性能琵琶、頗可賞翫、承和八年十一月叙正四位下、仁壽元年十一月叙從三位、三年三月叙正三位、薨時擇賀樂岡白川地、而爲葬地、○秋七月辛丑朔、遣使者、向諸社奉幣祈雨、○癸卯、權中納言兼左衞門督從二位藤原朝臣長良薨、長良贈太政大臣正一位冬嗣之長子也、志行高潔、寬仁有度、弘仁十三年爲內舍人、仁明天皇在儲宮時、晨昏侍坐、花時月夜、戲席射場、天皇每許以交敵之恩、長良逾修冠帶、不敢和狎、天長元年二月叙從五位下、二年二月爲侍從、十年二月爲左兵衞權佐、

○九年七月、原本七を八に作る傍注及續後紀承和九年七月丁巳紀に據て改む
○叙正三位、原本從二位に作る仁壽元年十一月甲午紀に據て改む
○爲權中納言、上文六月甲午紀に加從二位とあれば此下に其事を記すべきなり
○友愛、友は原本支に作る中本藤本に據て改む
○追贈云云、此事三代實錄元慶元年正月辛丑紀に見ゆ
○重贈、同三年二月己丑紀に見ゆ
○知子不如父、管子大匡篇に鮑叔曰先人有言知子莫若父とあり
（八月）乙亥、此條原本戊寅の次にありしを干支を推して此に移す一に丁亥に作るといへど類史紀略亦同じく乙亥とすれば誤にはあらざるべし
○伯耆神、神名式伯耆國川村郡波波伎神社、今東伯郡日下村福庭
○大山神、同式同國會見郡大神山神社、今西伯郡大高村尾高、國幣小社に列す

三月轉爲左衛門佐、太子踐祚之日叙正五位下、承和三年正月叙從四位下、遷除右馬頭、六年轉爲左馬頭、九年七月遷爲左兵衛督、十一年正月爲參議、十五年正月遷爲左衛門督、嘉祥三年四月叙正四位下、九月叙從三位、天皇晏駕之後、哀泣不絶、如父母、初斷歠肉、求冥助也、仁壽元年十一月叙正三位、四年八月爲權中納言、薨時年五十五、長良兄弟之間、友愛天至、接士大夫、常以寬容、人無貴賤、慕而仰之、後至于元慶元年、追贈正一位左大臣、三年重贈太政大臣、有子六人、第三子基經、今攝政右大臣也、基經幼少之日、敬愛異於諸子、古人有言、知子不如父、誠哉、少女高子、即今中宮也、此先人餘慶而所遠及也、○十二辛亥、越中國言旱、○十三癸丑、從五位下飯高朝臣永雄爲中務少輔、源朝臣至爲侍從、南淵朝臣彌繼爲大監物、從五位上豐階眞人安人爲圖書頭、從五位下橘朝臣常蔭爲刑部少輔、橘朝臣信蔭爲大判事、滋野朝臣善根爲肥前守、○十六丙辰、地震、○十七丁巳、雷雨、○十八戊午、地震、○二十庚申、若狹國言旱、○廿四甲子、詔試諸沙彌讀經、及第者聽度、○廿八戊辰、地震、○八月辛未朔、別遣勅使於神泉苑、試諸持咒

○國坂神、同式同國久米郡國坂神社、今東伯郡中北條村國坂
○倭文神、同式同國同郡倭文神社
○宗形神、同式同國會見郡胷形神社、今西伯郡成實村宗像
○大帶孫神、式外神、所在詳ならず
○三四許分、許は原本計に作る前本藤本谷本に據て改む
○藤原朝臣雄、朝字は中本藤本に據て補ふ
○近衞陣頭射殺、恐くは脫字あるべし
○末繼、原本永繼に作る諸本に據て改む補任に此月從四位上參議藤原朝臣氏宗兼左衞門督と爲る事見ゆ
(九月)實敏卒、釋書三にも傳見ゆ
○誨誘、藤イ本誨の上敎字あり中本には誨字なし
○入唐大僧都永忠、釋書十六に永忠寶龜之初入唐留學延曆之季隨使歸渉經論解音律とあり久しく唐にあり特に經論に精しき故に之を師とす
○所滯、狩谷氏は所は无の誤かと云

有驗者聽度、○乙亥、伯耆國伯耆神、大山神、國坂神、並加正五位下、倭文神、宗形神、大帶孫神、並從五位上、○丁丑、冷然院及八省院、太政官廳前、同時虹見、記異也、○戊寅、安房國言、天雨黑灰、從風而來、委地三四許分、○己丑、狂者藤原朝臣雄犯入禁中、近衞陣頭射殺、左衞門左兵衞官人、見在陣者、坐令狂者入宮、○丁酉、大學博士兼越中權守從五位上春日臣雄繼賜姓大春日朝臣、○戊戌、從五位下春原朝臣末繼、藤原朝臣正岑等爲大監物、橘朝臣常蔭爲縫殿頭、丹墀眞人貞岑爲大學頭、南淵朝臣彌繼爲大藏少輔、伴宿禰春世爲武藏介、淸原眞人長統爲越後權守、從五位上佐伯宿禰屋代爲備後介、○九月癸卯、大僧都傳燈大法師位實敏卒、實敏、俗姓物部氏、尾張國愛智郡人也、初實敏在孕時、母夢見室中建三重塔、及生眼有重瞳、耳孔相通、年十三從伯父大法師中安入都、實敏聰朗日倍、受持經論、中安歎異之、乃屬律師玄叡、玄叡察其法器、摩頂誨誘、更從入唐大僧都永忠、學經論所滯二年、受具足戒、弘仁十年、興福寺維摩會預席論難、時諸寺學業之輩、聽其竪義、莫不驚聳、承和九年、

○二年、原本年を十に作る類史に據て改む
○警策、警は原本驚に作る諸本に據て改む文選文賦注に言馬因警策而彌駿以喩文資片言而益明也又警驅動貌策可以擊馬者謂片善之言光益一篇亦猶以策擊馬得其警動也とあり
○脣舌紛紜、紛紜は亂也又衆也とあり言語の多きを云、紜は原本絃に作る諸本に據て改む
○業基、山田以文云業上卜部の二字を脫せるなるべし
○造酒司酒甕神、神名式に載せず大邑刀自、小邑刀自、次邑刀自神の三座にて大酒壺を靈形とす此酒壺の事續古事談に見ゆ
○仲嗣、承和十二年正月甲寅紀に授正六位上仲嗣王從五位下とみゆれど父詳ならず
○叙從五位下、承和十年正月庚子紀に授正六位上春枝王外從五位下とあり
○爲能登守、同辛丑紀に見ゆ
○興復、復は原本後に作る諸本に據て改む

於大極殿講最勝王經、皇帝臨聽、實敏問答警策、脣舌紛紜、分決疑滯、毫毛必剖、帝稱歎久之、明年擢拜律師、再轉爲大僧都、卒時年六十九、夏臈五十、實敏言詞可羨、音聲和美、發願教誨、聞者流涙、○己酉、重陽宴也、天皇御南殿、命樂賦詩如常、○庚戌、宮主外從五位下卜部雄貞、神祇少祐正六位上業基等、賜姓占部宿禰、○辛亥、造酒司酒甕神、從五位下大邑刀自、小邑刀自等、並預春秋祭、○癸丑、散位從五位上春枝王卒、春枝、四世從五位下仲嗣第八之男也、爲人謙退、敦崇佛道、弱仕嵯峨太上天皇、承和初爲越後介、頗有政績、十年正月叙從五位下、時當諒闇、殊擇治國者、春枝預此選叙之、卽爲能登守、彼國累年荒廢、百姓煩擾、春枝到國、比及三年、國漸興復、民得綏安、上請以定額大興寺、爲國分金光明寺、安居之講、自此勤修、梵唄之響、晝夜無休、仁壽三年七月爲中務少輔、十月遷爲正親正、四年正月叙從五位上、齊衡二年正月爲下總守、稱病篤不之任、隱居養痾、有恩、諸節祿及位祿等、准見任給、卒時年五十九、○丁巳、越前國天八百萬比咩神、天國津比咩神、天國津彥神、天鈴神、玉佐々良彥

○大興寺、承和十年紀(續後紀二六八頁)に見ゆ
○無休、休は原本林に作る諸本に據て改む
○有恩、私記に玄道按恐脫勅字一云云
○天八百萬比咩神、以下六座は何れも神名式に見え越前國敦賀郡にあり、天八百萬比咩神社は常宮浦にありて常宮神といひ、天國津比咩・天國津彦神は今常宮の末社となり、玉佐々良彦神は南條郡今庄村白鬼川の水上に、信露貴彦神は沓見村にあり天鈴神は詳ならず
○信露貴彦神、神字は下文戊辰紀及原本傍注に據て補ふ
○預於官社、於字は上下の文例に據て補ふ
○請僧、請は原本諸に作る諸本に據て改む
○眞室爲肥後介、二年正月丙申紀に重出せり
(十月)眞濟、貞觀二年二月丙午紀に傳見ゆ
○眞雅、元慶三年正月癸巳紀に傳見ゆ
○平岡神、此神に從一位を授け奉られしは嘉祥三年九月己丑なり幣布は二月十一月上申日平岡祭の

神、信露貴彦神等、並預於官社、○辛酉、地震、○壬戌、請僧於賀茂松尾大神社、讀金剛般若經、限三日訖、○乙丑、地震、○丁卯、從五位下紀朝臣春枝爲木工助、左馬助如故、藤原朝臣貞道爲左京亮、外從五位下秦宿禰永原爲山城介、從五位下藤原朝臣良尙爲上總權介、外從五位下榎井朝臣嶋長爲越後介、從五位下大原眞人眞室爲肥後介、○戊辰、授越前國天八百萬比咩神從四位下、天國津比咩神、天國津彦神、天鈴神、玉佐々良彦神、信露貴彦神、並授從五位下、○冬十月辛未朔、地震、○戊子、地震、權大僧都傳燈大法師位眞濟爲僧正、少僧都傳燈大法師位眞雅爲大僧都、○己丑、加從一位平岡神幣布廿四端、○辛卯、外從五位下御船宿禰佐世爲助敎、家原宿禰氏主爲筭博士、從五位下飯高朝臣永雄爲主稅頭、從五位上南淵朝臣年名爲春宮權亮、式部少輔如故、從五位下山口忌寸西成爲大和介、從五位下紀朝臣興我業爲陸奧權介、以山城國宇治郡粟田山、施入安祥寺、○甲午、地震、○乙未、地亦震、○十一月庚子朔、地亦震、侍醫正六位上門部連名繼等、賜姓興道宿禰、內匠少屬正

料なるべし
(十一月)門部連、錄大和神別に門部連牟須比命兒安牟須比命之後也、天武紀十年三月癸酉、同十二年九月丁未紀に直を改て連を賜ふこと見ゆ
○名繼、閣本爲繼に作る
○民忌寸、坂上系圖所引姓氏錄に民忌寸坂上大宿禰同祖都賀直男山木直之後也とあり
○晉書、唐書藝文志に晉書一百二十卷、注に房玄齡褚遂良許敬宗等脩而名爲御撰とあり
○賜宴、宴は諸本及類史九に據て補ふ
○後田原山陵、光仁天皇の御陵
○配天之事、漢土の風を摸して郊祀の禮を行ひ光仁天皇を以て天に配せむとするなり延暦四年十一月壬寅及同六年十一月甲寅紀を參看すべし
○所知志、志は原本に爾とあれど志にあらざれば通ぜず故に改む
○申賜、賜は閣本前本藤本等給に作る
○昊天、周禮春官大宗伯に以禋祀祀昊天上帝、注に昊天天也とあり

七位下民忌寸國成賜姓內藏朝臣、是夜大津失火、延燒七十餘家、○辛丑、地震、○壬寅、詔刑部大輔春澄朝臣善繩講晉書、帝自受讀、加美濃守從五位上紀朝臣今守正五位下、授左大史正六位上家原宿禰繩雄外從五位下、正三位橘朝臣岑繼爲中納言、外從五位下家原宿禰繩雄爲主稅助、○癸丑、地震、○乙卯、帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、○丙辰、帝御南殿、賜宴群臣如常儀、○丁巳、御池水色變黑、數日乃復、何以書之、記異也、○庚申、從五位上在原朝臣善淵爲中務少輔、○辛酉、遣權大納言正三位安倍朝臣安仁、侍從從四位下輔世王等、向後田原山陵、告以配天之事、策曰、天皇大命、掛畏平城宮爾天下所知志倭根子天皇御門爾申賜閇止奏、今月廿五日河內國交野乃原爾、昊天祭爲止志天、掛畏御門乎主止定奉天可祭事乎、畏牟畏牟毛申賜久止奏、攝津守從五位上清原眞人益吉、散位從五位下仲井王等賜姓文室眞人、○壬戌、大祓於新成殿前、諸陣警戒、帝進出庭中、大納言正三位藤原朝臣良相跪授郊天祝板、左京大夫從四位下菅原朝臣是善捧筆硯、帝自署其諱訖、執

○畏牟畏牟毛、二の牟は美の誤なるべし
○淸原眞人岑吉、淸原氏は舍人親王の後なり然るに更に文室眞人を賜ふこと不審なり岑吉の下或は脫文あるか
○祝板、祝文を書せるもの天壇には純青紙、地壇には、黄紙、日壇には朱紙を用ふ
○執珪、原本珪を班に作る原本傍注に據て改む珪は圭の古文、瑞玉なり
○右中弁從五位上、五は原本四に作る諸本及下文天安元年正月丙午紀に據て改む。
○柏原野、河内志に廢郊祀壇在交野郡片鉾村云々と云今北河内郡に屬す
○設蕝、蕝は原本蘊に作る紀略及狩谷考文に據て改む史記叔孫通傳注に束茅以表位爲蕝とあり
○有事圓丘、郊祀の禮を行ふを云圓丘は天を祀るには圓壇を設けて之を行ふ故に圓丘に事ありと云通典に周制大司樂云冬至祀天于地上之圓丘とあり
○夜漏上水一尅、子刻を云

圭、北面拜天、乃遣大納言正三位藤原朝臣良相、右大弁從四位上淸原眞人岑成、左京大夫從四位下菅原朝臣是善、右中弁從五位上藤原朝臣良繩等、向河内國交野郡柏原野、設蕝習禮、祠官盡會、○（廿五）甲子、有事圓丘、夜漏上水一尅、大納言藤原朝臣良相等、歸來獻胙（ヒモロギ）、○（廿九）戊辰、有鷺、集版位下、記異也、○十二月庚午朔、日有蝕之、○（四）癸酉、大雪、○（十）己卯、地震、○（十一）庚辰、帝不御神嘉殿、所司奉祭如常儀、○（十四）癸未、從五位下橘朝臣信蔭爲刑部少輔、外從五位下讃岐朝臣永直爲大判事、明法博士如故、從五位下橘朝臣貞雄爲宮内少輔、藤原朝臣直道爲美濃守、○（廿七）丙申、常陸國言、木連理、○（廿八）丁酉、美作國獻白鹿、詔放神泉苑、○（廿九）戊戌、常陸國上言、鹿嶋郡大洗礒前有神新降、初郡民有煑海爲鹽者、夜半望海、光耀屬天、明日有兩恠石、見在水次、高各尺許、體於神造、非人間石、鹽翁私異之、去後一日、亦有廿餘小石在向石（サキノ）左右、似若侍坐、彩色非常、或形像沙門、唯無耳目、時神憑人云、我是大奈母知少比古奈命也、昔造此國訖、去往東海、今爲濟民、更亦來歸、

○胙、說文に胙祭福肉也とあり
（十二月）直道、上文直を眞に作る
○白鹿、初學記卷廿九所引瑞應圖に王者承先聖法度無所遺失則白鹿來とあり
○詔放神泉苑、原本詔字なく放を於に作る詔は紀略に據て補ひ放は諸本に據て改む
○鹽翁、鹽燒く翁を云
○形像沙門、像は紀略に據て補ふ
○我是云々、書紀神代卷（卷上四〇頁）に夫大己貴命與少彥名命戮力一心經營天下とあり
【天安元年】庚子朔、此三字は天安の上に錯在せるを諸本及類史（七十二）紀略に據て此に移す
○詔衛府獻殺杖、私記に詔據上文恐諸誤と云原本殺を卯に作り獻字なし、殺は諸本に據て改め獻は諸本及紀略に據て補ふ
○觀青馬、青は原本音に作る諸本及類史九十九に據て改む
○廣宗、宗は原本宋に作る諸本及類史に據て改む

天安元年春正月庚子朔、天皇不受朝賀、南殿不卷御簾、宴飲群臣、賜祿如常、○（四）癸卯、詔衛府獻殺杖、內侍轉而奏上之、○（五）甲辰、風雪、○（七）丙午、天皇不幸豐樂院、御南殿、而觀青馬、宴會卽據常儀、无位時佐王授從四位下、從五位下全世王從五位上、无位繁原王從五位下、正五位下橘朝臣海雄從四位下、從五位上藤原朝臣良繩正五位下、從五位下春原朝臣廣宗、藤原朝臣貞敏、紀朝臣全吉、藤原朝臣良世、源朝臣平、紀朝臣夏井等從五位上、外從五位下山宿禰池作、正六位上在原朝臣守平、源朝臣矜、清原眞人道雄、伴宿禰中庸、藤原朝臣忠雄、坂上大宿禰岑雄、丹墀眞人宗雄、坂上大宿禰瀧守、丹墀眞人高棟、橘朝臣時成、紀朝臣冬雄等從五位下、正六位上坂上忌寸能文、阿牟公門繼、高橋朝臣文室麻呂、廣階宿禰貞雄、善道朝臣根莚、三善宿禰氏善、水取連柄仁、占部宿禰業基等外從五位下、○（八）丁未、无位藤原朝臣穎子授從五位上、從六位上百濟王貞琳、紀朝臣仲岑、從六位下和朝臣安子、從七位上平羣朝臣眞宗、從六位下秋篠朝臣春子、无位林朝臣氏子等從五位下、從八位上洒部公眞

員、從七位下麻續連眞屋子、賀陽朝臣姑子等外從五位下、〇十四癸丑、正五位下高階眞人岑緒爲左中弁、外從五位下有宗宿禰益門爲木工權助、主計頭筭博士如故、從五位下豐住朝臣永貞爲齋宮頭、從五位上安倍朝臣貞行爲大和守、外從五位下蕃良朝臣豐持爲權介、從五位下齋部宿禰木上爲參河守、從五位下紀朝臣貞守爲甲斐守、正五位下源朝臣興爲相摸守、右近衛少將如故、從五位下滋野朝臣安成爲介、正四位下豐江王爲下總權守、外從五位下安野宿禰豐道爲介、從四位上源朝臣冷爲近江守、正五位下紀朝臣今守爲介、從五位下安倍朝臣安正爲下野介、丹墀眞人河雄爲權介、從四位下橘朝臣海雄爲越前守、從五位下春原朝臣末繼爲越中介、丹墀眞人高棟爲丹後守、從四位上藤原朝臣春津爲但馬守、刑部卿如故、從五位下藤原朝臣忠雄爲因幡介、從五位上紀朝臣夏井爲播磨介、右少弁式部少輔如故、正五位下藤原朝臣良繩爲備前權守、左近衛中將右中弁春宮亮內藏權頭如故、從五位下善世宿禰豐永爲長門守、從五位上紀朝臣全吉爲紀伊介、右近衛少將主

〇守平、原本平落に作る藤本及類史に據て改む
〇中庸、類史庸を虎に作る二年三月己巳紀此と同じ
〇正六位上坂上、原本正を王に位下の上字はなし藤本及類史九十九に據て改め補ふ
〇高橋、橋は原本橋に作る類史に據て改む
〇水取連、連字は藤本及類史に據て補ふ
〇占部宿禰業基、類史寫本中業基を平麻呂とせるものあり內閣本は本史に同じ平麻呂とあるは後人の加筆なること伴信友正卜考に說あり
〇貞琳、琳は閣本珠に作る
〇和朝臣安子、安は原本字に作る諸本に據て改む
〇齋宮頭、宮は原本官に作る諸本に據て改む
〇源朝臣興、興は原本與に作る諸本及二年四月丙戌紀に據て改む
〇右近衛少將、少は原本中に作る原本傍注及下文四月丙戌紀に據て改む
〇刑部卿如故、內藤廣前云按可疑
〇右少弁式部少輔、右少

弁は原本右中弁に作る閣本傍書及齊衡二年九月癸酉に據て改む
○良繩、下文戊午紀に爲右近衞中將、四月丙戌紀に爲左近衞中將とあれば此に左近衞中將如故とあるは誤なるべし
○春澄宿禰、仁壽三年十月戊辰紀に改賜朝臣とあれば朝臣とあるべきなり
○散禁、獄令義解に謂不關木索唯禁其出入也とあり
○止觀、紀略に止を停とすれど類史は此に同じ
○開元大衍曆經、唐書藝文志に僧一行開元大衍曆一卷、釋日本紀に大衍曆宋開元十六年僧一行造と見ゆ
○五紀曆經、原本紀を繼に作る諸本に據て改む狩谷考文に唐書藝文志云寶應五紀曆四十卷曆志云寶應元年六月望戊夜月蝕三之一官曆加時在日出後有交不署蝕代宗以至德曆不與天合詔司天臺官屬郭獻之等復用麟德元紀更立歲差增損遲疾交會及五星差數以寫大衍舊術上元七曜起赤

殿頭如故、正四位上源朝臣寛爲讃岐守、從四位下春澄宿禰善繩爲伊豫守、從五位下大神朝臣虎主爲權掾、侍醫如故、從五位上小野朝臣貞樹爲大宰少貳、從五位上物部朝臣廣泉爲肥前介、內藥正侍醫如故、從五位下紀朝臣春枝爲左衞門權佐、左馬助木工助如故、近來處々井泉涸盡、左京三四條間、枯渴尤甚、今朝始雨降、○十六乙卯、前讃岐守正五位下弘宗王、前日向守從五位下嗣岑王散禁右京職、先此讃岐國百姓等、訴弘宗王、仍遣詔使推問虛實、伏辨已了、使等爲囚、付國禁固、而弘宗王脫禁、逃亡入京、故今重禁、又嗣岑王先被告將殺詔使、而竊輙入京、故亦禁固、○十七丙辰、天皇不幸豐樂院、止觀大射、公卿於豐樂殿下、令諸衞府次射之、先是曆博士大春日朝臣眞野麻呂上請、以開元大衍曆經造年久、而今撿大唐開成四年大中三年兩年曆、注月大小、頗有相謬、覆審其由、依五紀曆經造之、望也依件經術將造進、今日仍許之、眞野麻呂曆術獨步、能襲祖業、相傳此道、于今五世也、○十九戊午、於新成殿前、觀賭射、是日從四位下在原朝臣行平爲兵部大輔、因幡守如故、從五位下大和眞人吉直

道慮四度帝爲製序題曰五紀暦其與大衍小異者九事云々獻之加減頗異而偶與天合於是頒行訖建中四年とあり
○眞野麻呂、麻は原本麿に作る諸本に據て改む
○襲祖業、紀略襲を熟に作る
○右中弁春宮坊、右は原本左に作る上文癸丑紀に據て改む
○播磨介如故、上文癸丑紀に爲備前權守とあれば播磨介は備前權守と改むべきなり恐くは撰者の誤なるべし
○奔驅云々、庾信代人乞致仕表（文苑英華）に臣又聞驅奔效駕先轢于羸駘翔集賀成近遺于鎩翮とあり羸は瘠也疲弱也駘は疲鈍也鎩翮は文選蜀都賦注に殘羽也とあり羽翼を傷殘して飛ぶ能はざるを云
○材同擁腫、莊子逍遙遊篇に我有大樹人謂之樗其大本擁腫而不中繩墨とあり磊塊として平直ならず用に立たざる材を云
○弘通、通は原本道に作る閣本從本谷本に據て改

爲木工頭、正五位下藤原朝臣良縄爲右近衛中將、右中弁春宮坊亮內藏權頭播磨介如故、○庚申、內宴、命樂賦詩、自如舊儀、是日長忌寸、內藏忌寸、平田忌寸、山口忌寸、文忌寸、大藏忌寸、檜前忌寸、川原忌寸、谷忌寸等五十九氏、改忌寸賜伊美吉姓、是日右大臣正二位藤原朝臣良房抗表曰、臣良房言、臣聞、奔驅効駕、先轢於羸駘、翔集賀成、近遺於鎩翮、臣輙感之、以悽以悲、中謝臣材同擁腫、器謝弘通、徒以會遇時來、逮奉先帝、無翼而登霄漢、攀鱗而踐崇班、參贊王猷、日愼一日、頡頏禁闥、進不能退、臣之涯分、於是竟焉、陛下以光華之運、當邀於下夢、而渭陽之私、尙任於疲頓、臣視陰惕影、不敢遑寧、盡命輸誠、將酬大造、而去歲以降、老病相仍、顧悅之鬢早衰、燭武之言有驗、斯固周旋已久、甲子自多、滿而招殞、極而成變之所致也、臣位極人臣、正盈十載、縱令都忘饕冐、不知止足、將恐不免在梁之譏、俄嬰瞰室之禍、所以中宵耿々達旦呻吟、又臣奉宿衞職、廿五年于玆矣、警巡事重、士卒難調、而今臣志力俱廢、弓劔寂非、豈可虛妨折衝之任、久忝韜鈐之委、伏請褫退官職、頤病戶庭、或屬痊平之時、趁

陪階墀之外、在於老臣、良爲厚幸、無任慊懇之至、謹奉表陳乞以聞、不許之、

む
○脊溪、脊は原本脊に作る諸本に據て改む　○攀鱗、龍鱗を攀づる意にて先帝の御引立を蒙りてと云なり　○頡頏、毛詩邶風燕々章に燕々于飛頡之頏之、傳に飛而上曰頡飛而下曰頏とあり　○當邀於下夢、下夢は文選幽通賦に宣曹興而敗於下夢兮、注に曹大家曰宣周宣王也毛詩曰牧人乃夢衆維魚矣大人占之衆維魚矣實惟豐年宣王竟中興と云邀は招也迎ふる意御位に卽き給へるを云　○渭陽之私云々、毛詩秦風渭陽章に我送舅氏曰至渭陽とあり此詩は秦康公舅氏の歸國を送り已が母を念ひて歌へるにて舅は本來母の兄弟をいへど爾雅釋親に妻之父爲外舅とあり良房は文德天皇の夫人藤明子の父なり故に外舅と婿との關係を渭陽之私と云り卽ち外舅たるを以て疲頓して用ふるに堪へざる此身をも尙任用せられたりとなり私は原本和に作る諸本に據て改む　○視陰愒影云々、周書王褒傳に視陰愒日猶趙孟之徂年とあり愒は貪也日時を惜しみて寧息する暇なく力を盡すを云愒は原本揭に作る諸本に據て改む　○大造、文選爲袁紹檄豫州に有大造於操注に造恩也とあり大恩を云　○顧悅之鬢早衰、世說言語篇に顧悅與簡文同年而髮蚤白簡文曰卿何以先白對曰蒲柳之姿望秋而落松柏之質經霜彌茂とあり早は原本旱に作る閣本藤本谷本に據て改む　○燭武之言有驗、左傳僖三十年に佚之狐言於鄭伯曰國危矣若使燭之武見秦君師必退公從之辭曰臣之壯也猶不如人今老矣無能爲也已とあり二句にて既に衰老して爲すなきを云　○周旋、月日の廻るを云　○滿而招殞、殞は損の誤なるべし尙書大禹謨に滿招損謙受益とあり　○饕冒、左傳文十八年の傳に貪財曰饕、又冒亦貪也とあり　○在梁之譏、毛詩曹風候人章に維鵜在梁不濡其翼、彼其之子不稱其服、箋に鵜在梁當濡其翼而不濡者非其常也以喩小人在朝亦非其常不稱者言德薄而服尊とあり德なくして高官にあるの譏なり　○瞰室之禍、漢書揚雄傳に高明之家鬼瞰其室とあるに出づ注に鬼神害盈而福謙也とあり　○耿々、毛詩邶風柏舟章に耿々不寐とあり安ぜざるを云　○折衝之任、任は原本仼に作る藤本に據て改む　○韜鈴之委、韜鈴は兵法軍略を云韜は六韜、鈴は虎鈴にて何れも古の兵法書なりと云淵鑑類函に宋藝文志許洞虎鈴兵經と見ゆ　○褫退官職、原本褫を禘に官を宮に作る褫は藤本に據り官は中本に據て改む下同じ　○頤病、頤は易序卦傳に頤者養也とあり原本顯病に作る藤本に據て改む

○乙丑、（廿六）重上表曰、臣良房瀉瀝精誠、脫去官職、事非矯飾、庶蒙昭亮、而由衷靡發、卑聽逾遙、震蕩情靈、銷灼膚貌、（中謝）臣伏以、大臣是百寮之長、朝家理亂、本自繫之、大將爲七德之師、王室安危、莫不以之者也、臣叨以非據、久帶兩官、今屬老痾、何狎恒典、當陣執退、速褫朝章、長歌塲來、遽歸里第、

○由衷、衷心を云左傳隱三年に信不由中質無益也とあり中衷通ず原本由裏に作る藤本に據て改む　○卑聽、蜀志秦宓傳に天處高而聽卑とあり天聽と云に同じ　○七德、武事を云左傳宣十二年に夫武禁暴戢兵保大定功安民和衆豐

是則微臣之自分也、但以流波出浦、獨成嗚咽、去鳥辭巢、非無顧慕、況臣身甚渭陽之戚、情異義合之臣、必須粉骨答恩、死生致命、是以頻繁移病、不出朱城、時月扶羸、强趁絳闕、此亦睿心所照、更復奚言、臣聞負重致寇、易象表其終凶、福過生災、至人貽其炯誡、臣尙貪盈滿、遂及傾欹、何以駐東岱之魂、覩南薰之化、所以陳訴苦切淚繼之血、伏冀、陛下特留玄鑒、俯照丹慊、必降矜容之恩、停臣文武之職、在於老憊、頗免謗嗜、不任懇欵覼懼之至、謹重奉表、陳乞以聞、不許之、禁中有曲宴、預之者不過公卿近侍數十人、昔者上月之中、必有此事、時謂之子日態也、今日之宴修舊迹也

財者也、杜注に此武七德とあり
○陣執退、陣は陳に通用せるなるべし執は執持する意
○長歌揭來、揭來は文選思玄賦注に衡曰揭去也善曰劉向七言曰揭來歸耕永自疎とあり歸去來と云に同じ
○粉骨、骨字は藤本に據て補ふ
○頻繁移病云々、朱城は京師を云病を推して都に留り宮廷に參趨すとなり
○負重致寇、易解卦に負且乘致寇至貞吝とあるを云
○駐東岱之魂、生命を保ちてと云なり博物志に泰山一曰天孫言爲天帝孫也主召人魂魄東方萬物始成故知人生命之長短とあり岱は泰山なり
○覩南薰之化、孔子家語辨樂篇に昔者舜造南風之詩曰南風之薰兮可以解吾民之慍兮南風之時兮可以阜吾民之財兮とあるに據りて至治の御代を見むと云なり
○陳訴苦切淚繼之血、原本陳を陑に訴を祈に切を

功に作る陳は諸本訴は原本傍注切は閣本藤本谷本に據て改む涙繼之血は韓非子和氏篇に卞和乃抱其璞而哭於楚山之下三日三夜涙盡而繼之以血とあり

○謗啫、啫は原本啫に作る閣本中本等に據て改む啫は沓に同じ說文に沓語多沓沓也とあり

○陳乞、陳は原本陣に作る傍書に據て改む

○有曲宴、曲は原本由に作る諸本及類史に據て改む

○上月、上旬の意か藤本は正月に作る是なるが如し

○子日態、類史には平城天皇大同三年正月戊子を最初とす

日本文德天皇實錄卷第八

【天安元年】山田宿禰春城、齊衡三年正月辛亥紀及下文十二月壬申紀・二年六月己酉紀に據るに宿禰は連の誤なり
○維齊衡三年云云、按に此事前年十二月紀に丙申(廿七日)常陸國言木連理丁酉(廿八日)美作國獻白鹿とあり月日共に宣命と合はず又此に木連理平獻とあれど是は木連理を發見せしことを言上せるにて其物を獻れるにはあらず
○奏世利、世は原本禮に作る藤本に據て改む
○如是支、支は原本輿に作る諸本に據て改む下文致幣の下の支字亦同じ輿の草體と訛れるなり
○善是波、下文山陵に奉告の宣命と對照するに掛畏支の誤なるべし
○物奈利止、止字は藤本に據て補ふ
○貴喜比、喜は原本嘉に作る下文山陵に奉告の宣

日本文德天皇實錄卷第九

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

起天安元年二月盡十二月

二月己巳朔庚午(二)、地震、○乙亥(七)、地震、○壬午(十四)、地震、○甲申(十六)、地震、從五位上並山王、從五位下藤原朝臣基經等爲少納言、田口朝臣統範、藤原朝臣三直等爲大監物、淡海眞人貞主爲內匠頭、藤原朝臣家宗爲兵部少輔、外從五位下難波連藧麻呂爲隼人正、從四位上清原眞人長田爲刑部大輔、從五位下藤原朝臣大瀧爲少輔、外從五位下廣階宿禰貞雄爲大炊頭、從五位下伊統(これむね)宿禰福代爲造酒正、藤原朝臣正岑爲彈正少弼、善世宿禰豐永爲右京亮、山田宿禰春城爲勘解由次官、橘朝臣信蔭爲安房守、藤原朝臣秀道爲越後介、藤原朝臣諸藤爲丹波介、紀朝臣眞丘爲但馬介、正四位下南淵朝臣永河爲因幡權守、從五位下橘朝臣高成爲長門守、從五位上良岑朝臣清風爲左馬助、○乙酉(十七)、遣使內外諸名神社、

命に據て改む
〇神奈可良、奈は諸本那に作る他の例に據るに良下に毛字を脱せるか
〇稚親王、稚は朕の誤か
〇忠貞留、忠誠と云はむに同じマメナルと訓べし
〇德止之天無不酬、毛詩大雅抑章に無言不讐無德不報とあるを取れり
〇所在乃官、官は原本宮に作る諸本に據て改む
〇舊故毛有、大鏡裏書に據るに天皇擁立の功少からざるを云
〇正三位藤原良相上表、正三は原本從二に作るを上文宣命及下文丙辰紀に據て改む
〇軒臨之咫尺、軒臨は天皇軒臨なり咫尺は左傳僖九年注に威嚴常在顏面之前八寸曰咫とあり
〇端右、右大臣を云
〇淡辰、子より亥に至る一周十二日なり
〇日夜惣惶、原本日を曰に惶を遑に作る原本頭注に據て改む
〇款段之駕、後漢書馬援傳に御款段馬注に言形段遲緩とあり
〇輸困之材云々、文選鄒陽於獄上書自明に蟠木

賀木連理白鹿等之瑞、宣制曰、天皇我詔旨止、掛畏支諸大神乃廣前爾、恐美恐美毛申賜幣止申久、維齊衡三年十月廿日爾、公卿奏久、常陸國木連理乎獻、同年十二月十三日爾、美作國白鹿乎獻良久乎奏世利、如是支嘉瑞波、聖皇乃御世爾、天地乃示賜布物止奈毛聞食須、是薄德乃能令感致幣支物爾波非須、善是波皇大神乃慈賜比示賜幣留物奈利止爲天奈毛、貴喜比受賜利、御代乃名乎改天、天安元年止爲留事乎申賜爾、差使天、禮代乃大幣帛乎令捧持天奉出須、此狀乎神奈可良聞食天、風雨乃災無久、天下饒足之女、天皇朝廷乎、今毛今毛彌益益爾、常磐爾堅磐爾、夜守利日守利爾護賜幣止、恐見恐見毛申賜波久止申、〇丁亥十九、右大臣正二位藤原朝臣良房爲太政大臣、大納言從二位源朝臣信爲左大臣、大納言正三位藤原朝臣良相爲右大臣、宣制曰、天皇我詔旨良万止勅御命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民、衆聞食止宣不、右大臣正二位藤原良房朝臣波、朕之外舅那利、又稚親王止大坐時與利、助導支供奉禮留所毛安利、今毛又忠貞留心乎持天、

根柢輪囷離奇注に委曲盤戾也とあり
○貫士流、士は原本土に作る頭注に據て改む
○會昌、昌は原本冒に作る諸本に據て改む
○睠及渭陽寵兼惟舊、渭陽は正月乙丑紀に注す良相は文德天皇の女御藤原多可幾子の父なり故にかく云ふ、惟舊は尙書盤庚上に人惟求舊器非求舊惟新とあり
○待臣於常均之外云云、文選任彥昇爲范始興作求立太宰碑表に宜在常均之外、注に尋常均禁とあり
○知命、論語爲政篇に五十而知天命とあるに據れり
○允諧百揆、尙書舜典に百揆時叙、又益稷に庶尹允諧とあり
○衡軸、文選運命論に璣璇輪轉而衡軸猶執其中注に璇璣渾天儀可轉旋鄭玄曰轉運者爲機持正者爲衡莊子曰軸不運而輪致千里也とあり
○有刺於惟鵜、毛詩曹風候人章に維鵜在梁不濡其翼、序に候人刺近小人也とあり 原本鵜を䴀に作る

食國乃天下乃政乎、相安奈那比申賜比、助奉留事毛漸久玖那利奴、古人有言利、德止之天無不酬止奈毛聞食須、而今所在乃官波、掛畏支先帝乃治賜留所那利、朕未有所酬、是以、殊爾太政大臣官爾上賜比治賜、又大納言從二位源信朝臣毛、朕之伯父那利、亦舊故毛有爾依天奈毛、殊爾左大臣官爾任賜不、大納言正三位藤原良相朝臣乎波、右大臣官爾任賜久止、勅布天皇御命乎、衆聞食止宣、○戊子、右大臣正三位藤原朝臣良相上表曰、臣良相言、今月十九日、降軒臨之咫尺、拜微臣於端右、爾來屈計、未及浹辰、日夜慙惶、興居戰跼、中謝臣聞、款段之駑、向千里而自踠、輪囷之材、搆百尋而未可、臣幸憑餘慶、得貫士流、祗奉先朝、齎成貴仕、重屬聖明膺籙、景運會昌、睠及渭陽、寵兼惟舊、待臣於常均之外、擢臣於儕輩之中、夙忝崇班、頻歷顯要、遂使年未知命、位極人臣、榮進望古而無儔、恩獎當今而罕匹、伏以、大臣者允諧百揆、敷奏萬機、處衡軸之要、爲毀譽所歸、臣內求諸己、一無堪、何以助日月之光華、增天地之高厚、將恐、事乖才力、仍紊紀綱、聖朝有刺於惟鵜、微臣貽凶於覆餗、所以心顏罔厝、進退失圖、伏冀、天矜賜垂

昭高收陽和之溫煦、返離畢之滂沱、停臣此任、則彝倫載穆、不任靦懼屏營之至、謹奉表陳乞以聞、勅答不許之、是夜大雨、達旦不霽、○己丑、地震、是日改元爲天安元年、緣美作常陸二國、獻白鹿連理之瑞、遣雅樂頭從五位上藤原朝臣貞敏、參議從三位兼中宮大夫伴宿禰善男、侍從從五位下源朝臣至、權大納言正三位兼行民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁、木工頭從五位下大和眞人吉直、參議從三位兼春宮大夫平朝臣高棟、右兵衞佐從五位下藤原朝臣有貞、中納言正三位橘朝臣岑繼、散位從五位下橘朝臣岑雄等於諸山陵、宣制曰、天皇恐美恐美毛、掛畏岐山陵爾申賜倍止申久、公卿奏久、維齊衡三年十月廿日爾、常陸國木連理乎獻、同年十二月十三日爾、美作國白鹿乎獻禮留乎、進止奏世利、如是支嘉瑞波、是薄德乃令感致倍支物爾波非須、掛畏支山陵乃慈賜比示賜倍留物奈利止爲天奈毛、貴喜比受賜天、御世乃名乎改天、天安元年止須留事乎、差使天進出天、恐美恐美毛申賜久止奏、詔曰、玄穹質暗、効珍符而不言、皇王至公、代神工而布德、緬尋前載、遵來尚矣、朕以寡昧、纘守洪基、垂拱巖廊、

に作る藤本に據て改む刺は諸本判に作り惟鵜は原本頭注一に雉鵜に作るとあり

○微臣云云、易鼎卦に鼎折足覆公餗とあり、心顏靦厝は文選任彥昇爲范尙書讓吏部封侯表に奉命震驚心顏無措とあるに據れり

○離畢之滂沱、毛詩小雅漸々之石に月離于畢俾滂沱傳に畢噣也月離陰星則雨とあり雨を云以て天皇の恩澤に譬す

○屏營、彷徨として安んぜざる形容なり

○從五位上藤原朝臣貞敏、上は原本下に作る頭注及正月丙午紀に據て改む

○民部卿、卿字は諸本に據て補ふ

○齊衡三年云々、上文諸神に奉告の宣命に見ゆ

○玄穹質暗云云、文選封禪文に天爲質闇示珍符固不可辭注に天道質昧以符瑞見意とあり

○代神工而布德、尙書皐陶謨に天工人其代之とあり

○遵來、原本遵を導に作る諸本に據て改む

如履氷谷、勞形育物、亭毒之仁未弘、展敬奉天、貫徹之誠或缺、不知幽顯有何感通、去歲冬中、景貺荐委、美作國貢白鹿一頭、色均霜雪、自絕毛群、性是馴良、足稱仁獸、不因仙來在彤庭、重彼遐齡、毓于靈囿、常陸國上言、生連理樹二也、一郡山裏、兩處森然、分根合幹、異體同枝、或相連其間、一丈餘尺、或交柯之上、更挺好姿、斯皆書緹史而可傳、稽瑞圖而有慶、朕之菲虛、非可能致、唯由宗社垂祐、股肱叶贊、今欲鍾此休徵、不享獨美、施之惠澤、徧及萬方、宜復美作常陸二國百姓當年傜役廿日、就中瑞祥所出、重以優矜、苫田郡調、眞壁郡庸、今年可輸、并皆免之、其畢得異蹤郡司蝮臣全繼叙正六位上、賜物准例、見著祥木吏民二人、亦宜量與爵賞、又復天下黔黎今年之半傜、伊勢大神宮禰宜大物忌內人、諸社禰宜、及內外文武官把笏者、賜爵一級、但正六位上迴授一子、如無子者、宜量賜物、五位已上子孫、年廿已上者、叙當蔭之階、天下老人、及僧尼百歲已上者、賜穀四斛、九十已上三斛、八十已上二斛、七十已上一斛、鰥寡孤獨、不能自存者、量加賑恤、孝子順孫、義夫節婦、旌表門閭、終身勿事、又令京畿及諸

○垂拱巖廊、漢書董仲舒傳に虞舜之時游於巖郎之上垂拱無爲而天下太平、補注に巖郎猶高廊矣とあり
○因仙、校本仙下有鸞字と私記に云り
○彤庭、文選西都賦に玄墀釦砌玉階彤庭、注に彤赤色也以丹漆飾庭とあり
○毓于靈囿、神泉苑に放飼ふを云
○緹史、緹は說文に帛丹黃色也とあり
○畢得異蹤、畢得は捕捉に同じ
○大神宮、大は原本太に作る諸本に據て改む
○將順春令埋胔掩骼、禮記月令に見ゆ
○滌瑕、文選東都賦に出づ注に瑕猶過也とあり
○先聖攸禁、承和九年八月戊子（續後紀一二三六頁）の條を參看すべし
○溥告遐邇、溥は原本傳に作る諸本に據て改む
○伏伺隙、私記に一云隙上下疑脫一字と云
○聖造無訾、造は恩也訾は限なり聖恩限り無しとなり
○玉燭、爾雅釋天に四時

和謂之玉燭とあり
○無其人則闕、六典に三師訓導之官非道德崇重則不居其位無其人則闕之とあり
○以禮隔於人存云々、何れも死後に贈太政大臣となりしを云
○似騎虎而未下、隋書獨孤皇后傳に騎虎之勢必不得下とあるに據れり
○履氷而、而字は原本頭注に據て補ふ
○蕩蕩之化、尙書洪範に無偏無黨王道蕩々とあるに出づ
○炎炎之謠、炎炎は莊子齊物論に大言炎々、陸德明音義に炎々季頤云同是非也、謠は離騷注に謂毀とあり
○稽生之不堪、稽は原本稽に作る諸本に據て改む文選稽康絕交書に吾直性狹中多所不堪とあり
○阮公之孤嘯、晉書阮籍傳に籍嘗於蘇門山遇孫登與商略終古及栖神道氣之術登皆不應籍因長嘯而退とあり
○陶意、陶は樂なり
○優游、游は原本傲に作る諸本に據て改む
○不責密勿之効、文選傳

國、將順春令、埋齒掩骼、且夫隨時紀號、邦國之恒規、因瑞建元、古今之通典、可改齊衡四年、爲天安元年、又朕欲令犯辜滌瑕自新、然而數赦爲害、先聖攸禁、所以肆眚之詔、今日寂寥、溥告遐邇、咸使知聞、○辛卯、從五位下伴宿禰須賀雄爲縫殿頭、從五位下藤原朝臣秀道爲信濃介、右馬助如故、外從五位下坂上伊美吉能文爲越後介、從五位下藤原朝臣基經爲左衛門佐、少納言如故、藤原朝臣有貞爲左兵衛佐、從五位上橘朝臣常蔭爲右兵衛權佐、○是日太政大臣正二位藤原朝臣良房抗表曰、臣良房言、臣年髮已衰、羸病彌積、仍比陳表、乞停所職、祇奉還詔、未蒙矜許、重欲上誠、伏伺隙、何謂、聖造無訾、殊獎更加、不以臣之不肖、委以大臣非分之榮、已出慮外、骨驚毛竪、轉增憂懼、中謝臣聞、太政大臣者、君人取則、玉燭攸調、無其人則闕、誠有以也、爾惟臣列祖先臣、升此位者居多、皆以禮隔於人存、號開於身後、而今德不半古、榮則獨新、恥徹幽明、悲纏允滿、似騎虎而未下、如履氷而將陷、衰容更衰、危命增危、伏願曲照丹心、俯收玄澤、使蕩蕩之化、無偏於聖圖、炎炎之謠、獲免於愚鄙、則彝序無穢、國經

克全、豈臣輕非、獨所荷賴、不勝丹慊之至、謹拜表以陳聞、勅答不許、○壬辰(廿四)、左大臣從二位源朝臣信抗表曰、臣信伏見詔旨、以臣爲左大臣、天慈潛發、寵命盛彰、鞠躬慚惶、啓處無地、(中謝)臣聞、人性不及者、聖賢未必相强、器任非分者、庸愚猶知弗克、臣本以疎慵、酷厭俗務、愛嵆生之不堪、好阮公之孤嘯、常願日夜對山水而横琴、時時翫鷹馬而陶意、自參端揆以來、未嘗一日不懷辭退之志、先朝鑒其素性、賜以優游之詔、陛下假以餘恩、不責密勿之効、雖匪服之譏、幸被寛仁、而伐檀之嫌、常懷慙負、而今望隆百揆、任極三台、綺成衆務、權衡庶品、豈是微臣所可克堪、臣在少壯之時、猶苦性嬾心痴、何況於容髮衰老、尫病轉深乎、縱臣才頗可施、力稍堪勵、而苟辭榮官、志在靜退、則置之國憲、未足繩愆、伏望察其哀誠、高其危苦、求情究理、幸賜寛宥、則性命之惠於天造、尸素之責免於具臣、竊見古今、凡升高班者、例必再三固辭、雖堪其任、猶有此事、今臣所請、只是實言、非敢矯飾、因願者廻上請之後、不重煩拜表、遂守素情、誓以不欺、無任慊切、冒以陳請、勅答不許之、○癸巳(廿五)、權大納言正三位安倍朝臣安仁抗表曰、

亮求加贈劉前軍表に密勿軍國、注に密勿僶俛也とあり勤勞の貌、責は原本貴に作る前本中本淀本に據て改む

○匪服之譏、毛詩曹風候人章に彼其之子不稱其服、箋に不稱者言德薄而服尊とあるに出づ

○伐檀之嫌、毛詩魏風伐檀章序に伐檀刺貪也在位貪鄙無功而受祿君子不得進仕爾とあり

○慙負、負は原本員に作る藤本に據て改む負は字書に愧也とあり慙愧に同じ

○心痴、痴は原本知に作る原本頭注に知疑痴之訛とあるに據て改む

○未足繩愆、愆は字書に籀文愆字過也とあり

○哀誠、哀は衷の誤なるべし

○高其危苦、高は亮の誤なるべし亮は明也助也

○性命之惠於天造、性は原本情に作る諸本に據て改む於字上に脫字あるべし天造は天恩なり

○具臣、論語先進篇に今由與求也可謂具臣矣、注に謂備臣數而已とあり

○因願、頭注に一作同願とあり
○陳請、私記に以文按疑情訛と云
○權大納言、四月癸酉紀に權大納言正三位安倍朝臣安仁爲眞とあるに據て權字を補ふ
○臣安仁、臣は藤本に據て補ふ
○再實之木云々、後漢書馬皇后紀に常觀富貴之家祿位重疊猶再實之木其根必傷とあるに出づ
○重載之輪、王充論衡効力篇に重任之車彊力之牛乃能輓之是任車上阪彊牛引前力人推後乃能升踰如牛羸人罷任車退却還墮坑谷有破覆之敗矣とあるに出づ
○具瞻之地、毛詩小雅節南山章に赫々師尹民具爾瞻とあり
○榮施、榮は原本勞に作る頭注に據て改む
○慧子、文德天皇第九皇女紹運錄に嘉祥三年卜定但被廢其事秘之世莫知之母藤原則子と見ゆ
○述子內親王、慧子內親王の姉
○其事秘者、者は紹運錄之に作る古今集に田村の

臣安仁伏奉恩制、忝授大納言、祗命荷惠、以感以懼、凡人情得足、苦於放縱、苟或過量、何能保全、故再實之木、必傷其根、重載之輪、先覆其駕、臣雖愚昧、豈不危悚、臣今才微位貴、力劣權崇、帶職兩三官、周旋於具瞻之地、食邑八百戶、盈溢於尸素之身、伏願減大納言所食邑、給中納言所賜封、猶足使飽及子孫、榮施綿邈、不敢貪得空名、唯慮不捨往鑒、無勝丹款之至、謹陳謝以聞、依上表懇至、聽其所請、○丙申、廿八廢鴨齋內親王慧子、更立无品述子內親王、爲齋內親王、遣右大臣正三位藤原朝臣良相於神社、告事由、其事秘者、世無知之也、是日太政大臣重表曰、臣良房言、披誠上謁、既具前章、苟在由衷、寔非飾讓、然鳳闕高邃、龍澳不收、恩陷焦而空危、顧搖旆而奚託、中謝臣効微塵髮、施重丘山、每至寵命加身、何時不慙尸素、就中無地於自厝、未有今日之甚矣、却念、臣之此榮、當是陛下之殊恩、先父之餘慶、唯須上戴聖慈、下荷祖德而已、豈敢慇懃、曲讓於其間乎、雖然懼此不次、怪此非常、無火而焦、不寒而慄、恐亢龍有悔、難陪仙蹕之告成、老馬無休、空値弊帷之先掩、伏願曲留皇撰、俯察丹懇、許其救危之謀、許

帝の御時に齋院に侍ける慧子の御子を母あやまちありといひて齋院をかへられむとしけるを其事やみにければよめる、あま敬信、大空を照りゆく月し清ければ雲かくせども光りけなくにと見ゆ

○重表、重は原本褁に作る藤本及紀略に據て改む

○在由衷、衷は原本裏に作る藤本に據て改む

○鳳闈高邃云々、鳳闈は鳳闕に同じ皇居なり龍渙は任太政大臣の恩詔を云

○思玷焦、文選思玄賦に出づ既に注す

○顧搖旆云々、旆は旗なり旗の風に靡き搖らぐが如くにして託すべき所を知らずとなり不安の狀なり

○施重丘山、此句文選陸機表に施重山岳とあるに出づ

○戴聖慈、戴は原本載に作る諸本に據て改む

○亢龍有悔、易乾卦に出づ

○老馬無休云々、禮記檀弓に弊帷不棄爲埋馬也とあるに據れり

○泛扁舟而遠謝、史記越世家に范蠡事越王勾踐

以知足之分、使得退影閑扉、馳心魏闕、携藥餌以扶病、念佛經以待終、然則生涯之分、於臣已足、豈羨夫泛扁舟而遠謝、營九籥而長生者哉、不任悾款之至、謹遣左兵衛佐從五位上臣藤原朝臣良世、奉表陳聞、驟黷宸旒、伏深戰灼、不許之、○丁酉(廿九)晦、典侍從三位當麻眞人浦虫獻物於北殿、

○三月戊戌朔己亥(二)、從五位下紀朝臣冬雄爲齋院長官、備前權掾如故、安倍朝臣氏主爲參河守、齋部宿禰木上爲越中介、○辛丑(四)、太政大臣重表曰、臣良房言、臣聞、魯陽高麾、落日廻輪、疎勒固祈、枯泉飛液、臣前後頻瀝精誠、而天地未降感革、捫躬三省、憮然罔厝、(中謝)臣拔自常才、忝此重任、窮涯不反、盈量更加、訪諸古今、參之愚智、未有德薄而位高、如臣之比、是以低頭而念、攬涕而悲、上爲國家、下爲己身、寢食輙減、初感泉企之得官、頭髮併華、偏同韋誕之題殿、臣不敢惜桐露之微命、愛蟬翼之輕身、唯欲暫謝寅升之危、遂觀太平之化、伏願披豁聖懷、曲施鴻霈、停此崇高之號、銷彼盈滿之災、使遺音之鳥、退得栖林之便、濡尾之狐、終免濟水之害、不任荒悚之至、重奉表以陳聞、重表固辭、不遂允許、勅賜寶劍一隻曰、公宜

云々深謀二十餘年竟滅吳報會稽之恥云々乃裝其輕寶珠玉自與其私徒屬乘舟浮海以行終不反さ見ゆ
○九籥、文選鮑照升天行に五圖發金記九籥隱丹經、注に抱朴子曰仙經九轉丹金液經皆在崑崙五城之內藏以玉函尚書曰啓籥見書鄭玄易緯注曰齊魯之間名門戶及藏器之管曰籥以藏經而丹有九轉故曰九籥也さあり
○黷宸旒、旒は冕前に垂る、飾なり天子の御目を汚す意
○北殿、北は原本此に作る諸本及類史七十八に據て改む仁壽殿を云紫宸殿の北にあるに因て云
(三月)重表、重は原本裏に作る藤本に據て改む
○魯陽高麾云々、淮南子覽冥訓に魯陽公與韓構難戰酣日暮援戈而撝之日爲之反三舍さあり
○疎勒岡祈、後漢書耿恭傳耿恭字伯宗爲戊己校尉恭以疏勒城傍有澗水可固乃引兵據之七月匈奴復來攻恭於城下擁絕澗水恭於城中穿

帶此劔、副朕懇情、莫教蕭何獨誇漢朝、先是賜安車入朝、固辭不受、○甲(七)辰、頻抗表曰、臣良房言、臣聞、祿過其分、榮是深憂、任越其才、辭非飾讓、(中謝)臣近來抗表再三、不足上暢天聽、油雲之潤已凝、匪石之祈空廢、稽留詔命、潛恃深慈、孤負朝章、恐貽厚譴、是以誠在忘身、强將擬任、亦猶機蓬矢以射革、駟跛鼈以上阻、臣身侃德薄、慮淺効微、鍾此崇號、聲榮已甚、食他厚祿、面目何施、鼎實已盈、恐我仇之相就、車載更重、嗟斯軸之可摧、況今府帑懸罄、杼軸殆空、寔是愚臣二篋用享之時、一握專約之會也、伏望可新加賜封邑職田資人帶刀等類一切停止、以全在得之戒、將救履薄之危、非敢輕謝朝私、輒損國憲、正欲暫安鍾漏、稍存止足、特願大陽垂景、委照傾藿之心、上天虧盈、全分歙器之鑒、臣辭職□不獲命、讓賜又不蒙恩、則知天之降災、臣之難免耳、又願特廻聖慮、深察愚衷、使上有成物之慈、下無損身之禍、不任悾款之至、謹拜表以陳聞、頻塵冕旒、伏增氷谷、是日請衆僧百五十人於冷然院新成殿、及大極殿、限以三箇日、轉讀大般若經、○(十六)癸丑、遣左右近衛、左右兵衛、及檢非違使左右馬於京南捕群盜、○

乙卯(十八)、亦遣六衞府舍人等於平城捕群盜、○丙辰(十九)、勅曰、太政大臣道高翼贊、德叶儀形、在於朕躬、乃誠繫賴、而頻表沖撝、固辭成命、雖然拒斷、遂無容聽、今省重表、副朕心情、崇號所宜、不乖攝任、唯至祿法、推而不鍾、所新加邑、祈惣停止、忌滿之詞寔切、助公之意兼深、今欲酌成美於聖言、歸福謙於賢相、是故此般所請、不忤雅懷、以書報之、指不多及、○丁巳(二十)、外從五位下廣階宿禰貞雄爲玄蕃頭、外從五位下丸子連家繼爲大炊頭、○壬戌(廿五)、遣使京南禁遏姧盜、○丁卯(三十)、有勅、遣使神泉苑馬場、令角御馬之走足也、

井十五丈不得水吏士渴乏笮馬糞汁而飲之恭乃整衣服向井再拜爲吏士禱有頃水泉奔出(節略)とあり

○憮然、憮は原本撫に作る原本頭注に撫當作憮とあるに據て改む

○窮涯不反云々、文選王文憲集序に窮涯而反盈量知歸、注に言其知止知行窮涯畔則反也知滿如以器求物盈於器乃歸也量器也とあり

○低頭、低は原本伍に作る頭注に當作低とあるに據て改む

○感泉企之得官、北史泉企(周書には泉企に作る)傳に大統元年加開府儀同三司兼尙書右僕射進爵上洛郡公企志尙廉愼每除一官憂見顏色寢食輙減至是頻讓魏帝手詔不許とあるを云　○同韋誕之題殿、世說巧藝篇に韋仲將(名は誕)能書魏明帝起殿欲安榜使仲將登梯題之既下頭鬢皓然とあり　○桐露之微命、陸龜蒙秋思詩に桐露珪初落とあり桐露はもろきを云　○蟬翼之輕身、晉書周顗傳に質輕蟬翼事重千鈞とあり蟬翼は輕きに喩ふ　○寘升之危、玄道按升卦上六曰冥升傳曰六以陰居升之極昏冥於升知進而不知止者也其爲不明甚矣寘或曰冥謌と云　○鴻霈、霈は大雨也天子の恩澤に譬ふ　○遺音之鳥云々、易小過卦に飛鳥遺之音不宜上宜下とあり　○濡尾之狐、同未濟卦に小狐汔濟濡其尾无攸利と見ゆ　○寶劍一隻、原本隻を雙に作るは誤なれば改む　○莫敎蕭何獨誇漢朝、漢書蕭何傳に賜帶劍履上殿入朝不趨とあるを云獨り蕭何のみに誇らしめずして良房も其榮を誇るべしとなり　○油雲之潤、君の恩澤を云油雲は雨雲なり　○匪石之祈、毛詩邶風柏舟篇に我心匪石不可轉とあり動かすべからざる求なり辭意固きを云　○機蓬矢云々、爲す能はざるに喩ふ射革は貫革なり蓬矢を以ては革を貫く可らず跛鼈に駕しては險阻を登るを得ず　阻は原本但に作る　頭注に據て改む　○面目、面は原本而に作る堀本藤本に據て改む　○鼎實已盈云々、易鼎卦に鼎有實我仇有疾不我能卽吉とあり　○車載更重、吳志孫權傳注に趙咨曰聰明特達者八九十人如臣之比車載斗量不可勝數とあるに據れるなるべし　○杼軸殆空、毛詩小雅大東章に小東大東杼柚其空とあるに出で國の貧しきを云　○一簋用享、易損卦に二簋可用享、注に二簋至約可用享祭矣、彖傳に損損下益上とあり　○一握專約、易萃卦に一握爲笑とあり蓋し萃卦彖傳に萃聚也とあれば其意に用ひしか上句と共に節約すべき時節なりと云なり　○可新加賜、私記に可一云疑當作所と云　○在得之戒、論語季氏篇に及其老也血氣既衰戒之在

得とあり　○安鍾漏、魏志田豫傳に遜位曰年過七十而以居位譬猶鐘鳴漏盡而夜行不休是罪人也とあるに出づ鍾は頭注に一作鐘とあり從ふべし　○傾藿之心、文選求通親親表に若葵藿之傾葉太陽雖不爲之廻光終向之者誠也とあるに出づ　○分欹器之驗　荀子宥坐篇に孔子觀於魯桓公之廟有欹器弟子挹水而注之中而正滿而覆虛而欹孔子喟曰吁惡有滿而不覆者哉（節略）と見ゆ　○辭職□、□は前本堀本谷本に據て補ふ　○聖慮、慮は原本慮に作る堀本に據て改む　○愚衷、衷は原本哀に作る閣本藤本堀本に據て改む　○損身之禍、禍は原本福に作る堀本藤本に據て改む　○伏增氷谷、原本增氷の二字空白とす私記に按空二字當有增氷等字とあるに據て補ふ　○左右馬、馬下恐くは寮字を脫す　○儀形、職員令に太政大臣師範一人儀形四海、義解に形亦法也とあり形は當に刑に作るべきか　○沖撝、沖は虛也撝は易謙卦に撝謙とあり謙退を云り　○成命、尙書武成に恭天成命と見ゆ　○所新加邑、原本所を可に邑を色に作る所は內本に據り邑は上文に據て改む　○酌成美於聖言、論語顏淵篇に君子成人之美不成人之惡とあるに出づ　○福謙、易謙卦彖傳に鬼神害盈而福謙とあるに出づ　○令角、令字は堀本及類史七十三に據て補ふ

（四月）大炊寮大八嶋竈云々、此事齊衡二年十二月紀に已に出づ　○奉授從五位下、本朝月令六月條に下を上に作れど三代實錄と合はず類史亦下とす故に改めず奉字は類史及月令に據て補ふ　○當野忌寸、忌寸は下文伊美吉に作る　○淇上之譏、毛詩鄘風桑中章に要我乎上宮送我乎淇之上矣、序に桑中刺奔也衞之公室淫亂男女相奔至于世族在位相竊妻妾期於幽遠とあり　○一日百座、類史百七十七には百上に一の字あり　○如常也、也字類史五になし衍なるべし　○稻荷神三前、承和十年十二月戊午紀に注す但し稻荷神を三前とする事は

○夏四月戊辰朔、親王公卿侍東釣臺宴飲、賜祿如常、○六癸酉、有勅、大炊寮大八嶋竈、內膳司忌火庭火神、並奉授從五位下、又權大納言正三位安倍朝臣安仁爲眞、正六位上當野忌寸平麻呂授外從五位下、○七甲戌、无品滋野內親王薨、親王者桓武天皇第七女也、母大納言正三位勳四等藤原朝臣小黑麻呂之女、正五位下上子也、親王容色妖艷、不免淇上之譏、○九丙子、右中弁正五位下藤原朝臣良繩授從四位下、○十五壬午、修仁王會、近自禁中、遠及諸道、一日百座、精進勤行、○十八乙酉、鴨祭如常也、在山城國從四位上稻荷神三前、各授正四位下、○十九丙戌、天皇御南殿、太政大臣正二位藤原朝臣良房授從一位、右大臣正三位藤原朝臣良相授

從二位兼爲左近衞大將、大納言正三位安倍朝臣安仁兼爲右近衞大將、參議從四位上藤原朝臣氏宗兼爲伊豫權守、從五位下當麻眞人淸雄爲圖書頭、從五位上豐階眞人安人爲掃部頭、從五位下藤原朝臣備雄爲越後權守、從四位下藤原朝臣良繩爲左近衞中將、右中弁春宮亮內藏權頭播磨介如故、正五位下源朝臣興爲右近衞中將、相摸守如故、是日有勅、許无品惟喬親王帶劍、于時皇子年十四、未加元服、○二十丁亥、終日雨、通宵不休、地震、○廿三庚寅、始置近江國相坂大石龍花等三處之關剗、分配國司、健兒等鎭守之、唯相坂是古昔之舊關也、時屬聖運、不閇門鍵、出入無禁、年代久矣、而今國守正五位下紀朝臣今守上請加二處關、而更始置之也、○五月丁酉朔、日有蝕之、○三己亥、請僧百五十人於賀茂上下、松尾大神社、令轉讀金剛般若經、限以三箇日、○四庚子、有勅、遣使武德殿馬場、令角走左右馬寮御馬各十疋、○五辛丑、天皇不幸武德殿、人心寂寥、○八甲辰、請僧百四人於大極殿、限三箇日、轉讀金剛般若經、是日從五位上南淵朝臣年名授正五位下、正六位上道嶋宿禰瀧嶋授外從五位

此に始て見ゆ
○各授正四位下、類史五には授上に奉字あり
○播磨介如故、正月癸丑紀及六月甲申紀に據るに備前權守とあるべきなり
○相坂、近江國志賀郡
○大石、近江輿地志略四十七に栗太郡關津村古の大石の關ありし地址なりと云
○龍花、近江輿地志略廿九に龍華故關上龍華村の内畑山といふ處に其跡ありといひ同四に橡生越或は龍華越ともいふ此路龍華橡生を過る故に橡生越とも龍華越ともいふなりとあり
○出入、入は原本人に訛れるを堀本藤本に據て改む
（五月）左右馬寮、馬字は類史七十三及二年五月戊辰紀に據て補ふ
○南淵朝臣年名爲式部大輔云々、原本に南淵朝臣夏井とあり少輔を少將とせるは共に誤れり内藤廣前の説に臣夏の間に脱文あるべしと云り公卿補任に南淵朝臣年名天安元年五月八日正五位下任式部大輔權亮如元と

あり三代實錄貞觀八年九月甲子紀夏井の記事に齊衡四年春加從五位上兼播磨介俄而兼式部少輔とあるを併考るに南淵朝臣の下に年名爲式部大輔春宮權亮如故從五位上紀朝臣の二十字を脫せしなるべし然らざれば通ぜず故に試に之を補ふ國史大系本にも補ひたれど春宮權亮如故の六字なし少輔の輔字は諸本に據て改む

○右少辨播磨介如故、播磨介の三字は原本頭注に據て補ふ夏井播磨介となれるは正月癸丑なり

○安官貪祿云々、說苑臣術篇に安官貪祿云々與世沈浮上下左右觀望如此者具臣也守文奉法任官職事辭祿讓賜云々如此者貞臣也とあり貞正は貞臣の誤なるべし

○秉鈞當軸、干寶晉紀總論に秉鈞當軸之士とあり樞要の地にありて國政に當るを云

○釜滿云々、管子樞言篇に釜鼓滿則人概之人滿則天概之とあり

○瀝衷誠、衷は原本裏に作る塙本に據て改む

下、正五位下南淵朝臣年名爲式部大輔、春宮權亮如故、從五位上紀朝臣夏井爲少輔、右少辨播磨介如故、從五位上紀朝臣有常爲伊勢權守、外從五位下道嶋宿禰瀧嶋爲近江權介、從四位下菅原朝臣是善爲美作權守、文章博士左京大夫如故、從五位上清原眞人秋雄爲備中權守、從五位上良岑朝臣清風爲左近衞少將、從五位下佐伯宿禰雄勝爲右近衞少將、○丙午、右大臣從二位藤原朝臣良相抗表曰、臣良相言、臣聞、安官貪祿、謂之具臣、讓賜辭榮、名之貞正、二者優劣、爲臣鑒誡、（中謝）臣秉鈞當軸、德薄力微、跕焦之懼在懷、遜職之祈上表、而帝閽幽閟、嚴命不聽、是以朝夕階墀、僶俛從事、歿而後已、臣之所守、但以釜滿則人概之、人滿則天概之、臣居盈溢、深以戰兢、況今稟封戸者、倍於疇昔、國用闕乏、職此之由、夫豐儉隨時、古今通法、臣之昧進、何得偸安、伏望雖帶右大臣之號、猶食大納言之封、少弭尸素、且免物議、非敢詭飭、明瀝衷誠、仰乞宸旒、曲垂矜許、無任悚悸愧負之極、謹拜表以聞、有勅不許之、○丁未、地震、○庚戌、請僧六十三人於冷然院、限五箇日、轉讀大般若經、布施之外、別各施

○限五箇日、紀略限下に以字あり
○石楯尾神、神名式相摸國高座郡石楯尾神社、勝坂村(志料)
○吉田神、神名式常陸國那賀郡吉田神社(名神大)今東茨城郡吉田村吉田
○天慈不已未賜矜容、已未の二字は諸本に據て補ふ
○慚荷周章、慚荷は慚負に同じ周章は文選吳都賦周章夷猶の注に恐懼不知所之也とあり
○挹盈居沖、老子四十五章に大盈若沖とあり挹は抑也沖は虛なり
○蒙鴻貸、蒙鴻は原本象嶋に作る蒙は堀本(朱)鴻は諸本に據て改む
○趑趄、韓文送李愿歸盤谷序に足將進而趑趄とあり躊躇逡巡するを云趄は原本雎に作る堀本(朱)に據て改む
○忝越、忝は字書に辱居高位也とあり越は踰也分限を越ゆるなり
○纖毫、毫は原本豪に作る狩谷校本及原本頭注に據て改む
○潤屋之慮、大學に富潤屋とあり財貨を蓄へ家

度者一人。○(二十)丙辰、地震、雷雨、近來霖雨不霽、今日京中水溢、是日在相摸國從五位下石楯尾神預官社。○(廿六)壬戌、在常陸國從五位上勳八等吉田神授從四位下。右大臣從二位藤原朝臣良相又上表曰、臣良相言、臣近上表言、雖帶右大臣之號、猶食大納言之封、敢布腹心、實非矯飾、而天慈不已、未賜矜容、臣慚荷周章、心顏罔厝、(中謝)臣聞、懷寵耽祿、往哲誡其危亡、挹盈居沖、先賢訓其止足、臣猥蒙鴻貸、位極人臣、不獲趑趄、遂爲忝越、滿而能久、古來未聞、臣甚咨嗟、不曾安寢、加以臣殊感恩義、思効纖毫、潤屋之慮已忘、而利公之誠有日、今算封邑、當食二千、臣之庸虛、何貪厚賞、所以雖優詔之旨有可祇戴、而固陋之情終難自奪、今亦奉還職田等類、載之別表、添以奉進、伏冀更廻玄鑒、詳照丹愚、前後所陳、必垂允愜、無任迫悚屛營之至、謹重奉表以聞、大納言安倍朝臣安仁宣、奉勅、上表慇懃、宜職封停一千戶、充一千戶、但職田類、依例行之者。○(廿九)乙丑晦、淫雨未霽、洪水汎濫、道橋流絕、河堤斷決。○六月丙寅朔、從五位下藤原朝臣三藤、紀朝臣眞高等、授從五位上、從五位下紀朝臣好雄爲侍從、從五位下丹

りを富ましめむとの心算なり

○必垂允愼、必は原本心に作る前本堀本谷本に據て改む

（二六月）弟梶、弟は原本第に作る諸本に據て改む

○戊辰、戊は原本壬に作る類史十四に據て改む

○極樂寺、詳ならず

○左近衞馬場　河海抄に左近馬場は一條西洞院と見ゆ

○補焉、焉は原本馬に作る堀本（朱）及類史百七に據て改む

○不能則休、休は原本伏に作る諸本に據て改む

○預葭莩、漢書中山靖王傳に今群臣非有葭莩之親、注に葭蘆也莩者其簡中白皮至薄者也葭莩喩著とあり　源定は嵯峨天皇の子にて文德天皇の叔父に當る故にかく云り

○欽命、欽は當に耿に作るべきか

○勩骨、勩は原本助に作る諸本に據て改む勩は肋に同じ玉篇に肋擧欣切肉之力也同筋とあり

○羨効、羨は願也欲也涓塵の功を致さむと願ふなり

墀眞人弟梶爲讃岐介、外從五位下當野伊美吉平麻呂爲肥前權介、○戊辰、在備中國四品吉備津彦命神授三品、在陸奧國極樂寺、預定額寺、充燈分幷修理料稻千束、墾田十町、○壬申、遣勅使於左近衞馬場、令試春宮坊擬帶刀舍人歩騎兩射、各定其科、先是坊司請加增舍人十人、其時服日食、便用職物、許之、故試補焉、○丙子、風雨迅雷、○壬午、中納言正三位源朝臣定上表曰、臣定言、臣聞、選才授官、無効則黜、陳力就列、不能則休、（中謝）臣幸預葭莩、頻霑渙汗、位非德擧、榮乃恩升、謬忝納言之職、已知身分有餘、而亦兼以左兵衞府及勘解由使、愚心尙誠非宜、物議誰謂其可、然臣所以欽命不辭、忌謗無顧者、誠願先勩骨之未衰、將盡犬馬之微効、是以勤身鞅掌、唯力是視、不憚風雨、羨効塵涓、而隨職以降、數年空過、私責且彰、官謗行起、加之、自去春末、疥瘡纏身、五月以來、更亦殊劇、擧體臃腫、無階起居、醫療無驗、日夜苦辛、計其能痊、當曠時月、竊以、兵衞府機警繁務、史士難調、勘解由使拘放多端、疑論難決、縱得其才、弗勤無益、雖有其勤、非才何用、而今臣不才之上、恪勤又廢、既同曠官、何免重責、至

○兵衛府機警繁務、兵衛府は宮閤を分衛し車駕の出入には前後を警衛し非常を撿察し職任極て繁きなり故に機警繁務と云
○史士、堀本(朱)に史を吏に作る是なるが如し
○拘放多端、勘解由使は內外諸司所進の解由を勘ふるを職とす拘は解由狀を與へず拘留するをいひ放はユルスにて之を與ふるを云
○弗勤、勤は原本動に作る諸本に據て改む下同じ
○至中納言者、者字は堀本(朱)首に作る
○名器、左傳成二年に唯器與名不可以假人注に器車服、名爵號とあり
○辭劇、原本辭處に作る堀本(朱)藤本に據て改む
○恩再造、恩字の上下に脫字あるべし
○在梁之議、在梁は正月庚申紀に注す議は恐くは識の訛ならむ
○負乘之憂、易解卦に出づ既に注す
○內訟永斷、論語公冶長篇に未見能見其過而內自訟者也とあり
○天穗日命神、神名式出雲國能義郡天穗日命神

中納言者、有長官、傍多衆賢、國務行留、不繫一員、因願唯帶此納言、早解彼兩職、授受惟宜、名器無濫、不敢辭劇求易、叨高嫌卑、唯要其有利於公、無損於私、伏望恩再造、朝議無偏、擇賢才以改授、矜愚性以全榮、然則在梁之議、外暫初停、負乘之憂、內訟永斷、不任悾款之至、謹奉表以陳聞、右(良相)大臣宣、奉勅、抗表懇至、宜從來請、○(十九)甲申、在出雲國從五位下天穗日命神、預官社、在肥後國從五位上會男神授正五位下、從五位下粟田王賜文室眞人姓、從四位下藤原朝臣良繩爲右大弁、左近衛中將、勘解由長官、備前權守如故、從四位上清原眞人岑成爲大藏卿、從三位高枝王爲宮內卿、從四位上源朝臣多爲左兵衛督、從五位上紀朝臣夏井爲右中弁、式部少輔、播磨介如故、從五位下藤原朝臣家宗爲右少弁、從五位上良岑朝臣清風爲越中權介、左近衛少將如故、從五位下佐伯宿禰雄勝爲但馬權介、右近衛少將如故、○(廿四)己丑、勅遣左右近衛各五六人、於西北深山、錄寺幷修行者名、施供米鹽、各有差、○(廿五)庚寅、大宰府飛驛言上、對馬嶋上縣郡擬主帳卜部川知麻呂、下縣郡擬大領直浦主等、率黨類

社、嶋田村大字吉佐
○曾男神、式外神、詳ならず
○粟田王、出自詳ならず
○勘解由長官、良縄勘解由長官となること下文九月甲辰紀に出づ、此に如故とあるは誤にて內藏權頭とすべきなり
○對馬嶋云々、二年閏二月庚申紀及天安二年十二月八日條を參看すべし
○浦主、三代實錄には氏成に作る
（七月）巽維、維は隅なり、巽方と云に同じ
○地大震、大は閣本前本堀本及類史百七十一に據て補ふ
○秋官、周禮天官に秋官司寇刑官之屬、疏に春官秩宗夏官司馬秋士冬共工古者春行賞秩宗掌之行刑士掌之故士曰秋官とあり司法官を云
○免宥、宥字は諸本に據て補ふ
○刧人、劫は原本却に作る諸本に據て改む
○六十人、紀畧人を口に作る
（八月）大洗礒前酒列礒前神、大洗礒前神は神名式に常陸國鹿嶋郡大洗礒

三百許人、圍守正七位下立野正岑館、行火射殺正岑並從者十人、防人六人、從五位下橘朝臣貞雄爲兵部少輔、藤原朝臣貞道爲宮內少輔、縣連氏益爲左京亮、田口朝臣統範爲勘解由次官、正六位上竹田臣田繼賜清岑朝臣姓、參河國上言、今月六日廳院東庫振動、○癸巳、從五位下清原眞人長統爲伊勢介、是日請名僧廿八人於冷然院、轉讀大般若經、限以四箇日、○甲午、擇讀經僧中寂英俊者六七人、於御前令論議、大法師道詮爲座主、○秋七月己亥、雷雨、巽維有聲、如雷四五度、○辛丑、乾維有聲、如雷五六度、又巽維時時有聲、如雷、○癸卯、地大震、乾巽兩維有聲、如雷、○甲辰、河內越中等國司言上、不堪佃田、依不據實、下秋官而斷罪也、○庚戌、雷雨、自去月下旬不雨、田閭頗憂、今日適得膏澤、○辛亥、下制大宰府、免宥對馬嶋賊類、被劫入賊黨、及獄中死亡、實無罪者妻子、○甲寅、虹當冷然院北門東腋而見也、○己未、請名僧六十人於冷然院、令轉讀大般若經、限以三箇日、夜地震、其響如雷、○壬戌、從五位下藤原朝臣大瀧爲宮內少輔、○八月乙丑朔辛未、在常陸國大洗礒前、

前藥師菩薩神社(名神大)とあり今東茨城郡磯濱町に在りて國幣中社に列し酒列礒前神は同式に同國那賀郡酒列礒前藥師菩薩神社(名神大)とありて那珂郡平磯町に在り同じく國幣中社に列す齊衡三年十二月戊戌紀參看すべし
○天一神、神名式播磨國佐用郡天一神玉神社、德久村東德久
○高屋安倍神、神名式大和國城上郡高屋安倍神社三座(並名神大月次新嘗)磯城郡櫻井町若櫻神社境内
○椋橋下居神、十市郡下居神社是なり椋橋村隣村下村(櫻井町の内)にあり
○右近衞舍人町、拾芥抄に見えず
○數月、原本數日に作る類史百六十五に據て改む
(九月)長岑宿禰高名、長岑宿禰は承和二年十月庚子紀に與白鳥村主同祖出自魯公伯禽とあり氏人に長岑宿禰秀名見ゆ
○結童、後漢書獻帝紀に結童入學白首空歸とあるに據て出づ字書に結與髻同とあり

酒列礒前神等、預官社、許令攝津國人散位從八位下岸田朝臣全繼、帶兵仗把笏、撿國中非違、○戊寅(十四)、大氣濛濛、如苦霧之朝、○己卯(十五)、藻壁門自然頽落、時人以爲恠異也、○庚辰(十六)、在播磨國正六位上天一神授從五位下、在大和國從五位下高屋安倍神、椋橋下居神、并授從五位上、外從五位下當野伊美吉平麻呂爲豐前介、○乙酉(廿一)、請僧六十人於冷然院、限五箇日、轉讀大般若經、○丁亥(廿三)、在播磨國從五位下天一神、預官社、○己丑(廿五)、從五位下清原眞人道雄爲大學頭、朝野朝臣貞吉爲備中介、○辛卯(廿七)、右近衞舍人町火、○壬辰(廿八)、夜快雨、先是數月不雨、田畝頗苦、今日人間歡喜、以爲冥感也、○九月乙未朔丁酉(三)、正四位下右京權大夫兼山城守長岑宿禰高名卒、高名者右京人也、結童入學、年廿一、始爲文章生、少時養兄從五位下茂智麻呂、家貧無儋石之儲、専接文友、深結義兄、弘仁十二年春正月除式部少錄、頃之遷民部少錄、十三年除少内記、家途清貧、更望外吏、天長元年春正月除安房掾、立性清直、勤公忘私、七年春二月除右少史、九年春正月轉爲左少史、十年冬十一月轉爲左大史、承和元

○茂智麻呂、天長十年三月癸巳紀に河内國人大外記外從五位下長岑宿禰茂智麻呂と見ゆ
○甔石之儲、甔は儋に通ず漢書揚雄傳に家產不過十金乏無儋石之儲と見ゆ
○接爻友、爻は原本父に作る閣本中本に據て改む
○楊州海龍縣、唐書地理志に揚州海陵縣あり龍は陵の誤か音を寫して龍字を用ひたるか
○承和六年、承和の二字衍なり
○有能名、晉書陶侃傳に出づ才名と云に同じ
○嘉祥三年、私記に或云當有春三月三字と云
○仁壽元年冬十一月、仁壽元年の四字は堀本(朱)及原本頭注に據て補ふ仁壽元年十一月紀亦證とすべし
○無斗儲、文選左太沖詠史詩に外望無寸祿內顧無斗儲注に濟曰寸祿斗儲雖至少此皆無之と見ゆ
○治田若御子神、式外神所在詳ならず
○荒祭月讀云々、神名式に伊勢國度會郡荒祭宮

年春二月爲遣唐使准判官、二年春正月叙外從五位下、二月兼爲大膳亮、美作權介、三年從大使參議正四位下藤原朝臣常嗣、乘第一舶、船上雜事、大使委任、夏四月更於難波三津濱、追叙從五位下、邂逅屆大唐楊州海龍縣桑田鄕桑梓浦上、來朝長安、于時依無副使、被許上殿、承和六年歸于本朝、秋九月叙從五位上、爲次侍從、冬十月除伊勢權介、七年春正月叙正五位下、所行政事、頗合民望、八月別有勅、召爲嵯峨院別當、俄而除山城守、九年夏六月遷爲阿波守、遭嵯峨太上天皇晏駕、十年春正月轉除伊勢守、在任六年、政有能名、十五年春正月叙從四位下、嘉祥三年除播磨守、仁壽元年冬十一月叙從四位上、四年春正月叙正四位下、齊衡二年二月除右京權大夫、三年正月爲山城守、政用嚴明、百姓不擾、平生令子孫云、吾家淸貧、曾無斗儲、至於暝目之日、必從薄葬之義、卒於官、時年六十四、○壬寅、在加賀國正六位上治田若御子神授從五位下、伊勢國荒祭、月讀、瀧原、伊雜、高宮等神宮內人五人、始預把笏、○癸卯、重陽節也、天皇不御南殿、命公卿賦詩、賜祿如常儀、雖開宴筵、不擧音樂、緣

(大月次新嘗)瀧原宮(大月次新嘗)月讀宮二座(荒御魂命一座並大月次新嘗)高宮(大月次新嘗)志摩國答志郡粟嶋坐伊射波神社二座(並大)とあり何れも神宮の別宮にて高宮は豐受宮に屬す
○內人五人始預把笏、大神宮諸雜事記に天安元年九月八日太政官符を擧げて荒祭月夜見伊佐奈岐瀧原並宮伊雜多賀宮等內人事云々と記し伊佐奈岐宮と並宮とを加へたれど此に五人とあれば雜事記に載する所疑はし
○書堂、挍書殿をいへるか倭名抄に挍書殿俗云布美止乃とあり之を書堂と唐めかしく書けるにや
○倭文一神、式外神所在詳ならず一の字或は衍か
○伊勢權守如故、原本勢を像に作り權字なし堀本(朱)原本頭注及上文五月甲辰紀に據て改め補ふ
○占著、後漢書李忠傳に三歲間流民占著者五萬餘口とあり字書に占は擅據也據爲己有曰占とあり
(十月)宗像神、續後紀(一六三頁)に注す
○高良玉垂神、同上

旱雲不霑、秋稼爲害也、○甲辰、從五位上藤原朝臣常永爲刑部大輔、從四位下藤原朝臣良縄爲勘解由長官、右大弁、左近衞中將、備前權守如故、正五位下南淵朝臣年名爲春宮亮、式部大輔如故、從四位上基兄王、爲山城守、從五位上笠朝臣數道爲美濃守、○己酉、請名僧八人於書堂、限七箇日令修法、○庚戌、在武藏國正六位上倭文一神授從五位下、○辛亥、大和國司等言上不堪佃損田、據不實、下秋官而斷罪、從五位下橘朝臣休蔭爲侍從、紀朝臣好雄爲左兵庫頭、○己未、地震、○辛酉、從五位上紀朝臣有常爲少納言、伊勢權守如故、從四位下藤原朝臣仲統爲民部大輔、從五位下善世宿禰豐永爲伊豆守、從四位下藤原朝臣良仁爲越前權守、從五位下藤原朝臣常行爲周防權守、藤原朝臣興邦爲右衞門佐、筑前權守如故、中宮少屬正七位上秦忌寸永岑賜太秦公宿禰姓、脱山城國、占著右京、○冬十月乙丑朔、親王公卿、及侍從已上、侍於東釣臺飲宴、有勅奏音樂、賜祿有差、○丙寅、在筑前國正四位下勳八等宗像神授正三位、○丁卯、在筑後國從三位高良玉垂命名神、從五位下豐

〇豐比咩神、神名式筑後國三井郡豐比咩神社（名神大）高良神社境內
〇賜侍臣等、原本侍下に永河傳の三字あるは傍注の攙入なり諸本に據て刪る
〇槻本公老、寶龜九年正月癸亥紀に正六位上槻本公老授外從五位下とあり此後從五位下に進みしにや證とすべきものなし
〇坂田朝臣奈弖麻呂、後紀延曆十六年正月戊戌紀及類史七十九に見え錄左京皇別坂田宿禰の條に今上弘仁四年同奈弖麻呂等改賜朝臣姓也と見ゆ
〇第二之子、前本谷本二を三に作る
〇清人、原本清友に作る諸本及紀略に據て改む
〇賜姓南淵朝臣、賜姓のこと姓氏錄左京皇別に詳に見え扶桑略記元慶元年四月年名の傳にも本姓息長眞人中間冒外戚姓爲槻本公、後改爲坂田、寂後爲南淵と見ゆ
〇叙正四位下、正は原本從に作る諸本及承和十二年正月甲寅紀に據て改む
〇國老、禮記王制に有虞氏養國老於上庠疏に謂

比咩神等、充封戸幷位田、又請僧六十人於冷然院、限三箇日、轉讀大般若經、〇八壬申、雨、〇九癸酉、地震、〇十二丙子、召御馬廿五疋、覽之、訖則賜侍臣等各一疋、正四位下因幡權守南淵朝臣永河卒、永河、右兵衛佐從五位下槻本公老之孫、散位從四位下坂田朝臣奈弖麻呂第二之子也、昔者嵯峨天皇在藩之時、與朝野鹿取、小野岑守、菅原清人等、共侍讀書、大同元年爲少外記、踐祚之日、遷除民部少丞、弘仁四年正月叙從五位下、爲但馬介、八年閏四月拜民部少輔、九年二月遷除治部少輔、兼爲備後守、十年正月叙從五位上、六月爲權左少弁、十一年五月爲右近衛少將、八月爲右中弁、十二年正月轉爲左中弁、六月叙正五位下、卽爲治部大輔、十四年四月、天皇揖讓之際、叙從四位下、爲內藏頭、有勅爲冷然院別當、俄而兼爲越前守、同年十二月與兄正五位下弘貞陳父先志、賜姓南淵朝臣、天長十年正月叙從四位上、承和四年春、出爲備前守、其年秋爲大宰大貳、仁愛爲務、民庶仰慕、十年罷官歸京、卽拜刑部卿、請爲播磨守、累遷爲近江守、十二年正月叙正四位下、年登七十、致仕乞骸、仁壽元年

卿大夫致仕者ニとあり
○藥師菩薩名神、神名式に大洗礒前藥師菩薩神社酒列礒前藥師菩薩神社とあるは之に據れり八月辛未紀を參看すべし
○廣四丈、原本丈を尺に作る堀本(朱)原本頭注及紀略に據て改む
○負也、私記に一云負下當有態字歟と云
○眞濟、僧正に任ずることは齊衡三年十月戊子紀に見ゆ
○大法師上表、法師上の三字は諸本に據て補ふ
○三密、身密語密意密を云り菩提心論に所言三密者一身密者如結契印召請聖衆是也二語密者如密誦眞言令文句了々分明無謬誤也三意密者如住瑜伽相應白淨月滿觀菩提心也とあり
○其志既切、切字は高野大師廣傳に據て補ふ
○持行、持は紀略時に作る是なるべし時行は時刻を報知する意ならむか
○源朝臣直、直は谷本眞に作る

正月、朝廷矜其國老、遙任下野守、三年十月轉爲因幡權守、卒時年八十一、○(十三)丁丑、雷雨、○(十五)己卯、在常陸國大洗礒前、酒列礒前兩神、號藥師菩薩名神、遠江國言、木連理、是日有白雲、廣四丈許、東西竟天、○(廿一)乙酉、右近衛右兵衛右衛門三府、幷右馬寮等、大設宴會、貢獻酬、去五月六日競馬之負也、○(廿二)丙戌、詔法師等曰、天皇我詔旨止、法師等爾白左倍止勅命乎白、僧正眞濟大法師上表天、以爲、故大僧都空海大法師波、眞濟可師奈利、昔延曆年中、渡海求法、三密教門、從此發揮、諸宗之中、功無與二、所願波、以僧正號、將讓于先師者、雖知師資其志既切、而在於朕情、未有許容、仍今先師乎波、大僧正乃官贈賜比治賜不、眞濟大法師乎波、如舊久僧正官爾任賜事乎白左倍止詔勅命乎白、○(廿三)丁亥、夜有偸女、竊入藏殿、取服御物、即捕獲下撿非違使、○(廿四)戊子、陰陽寮持行漏刻鼓自鳴三度、○(廿七)辛卯、風雨、群臣奏曰、撿非違使奏言、犯死罪者二人、請誅之、詔減死一等、處之遠流、是日從五位下源朝臣直爲中務少輔、源朝臣穎爲侍從、從五位上在原朝臣善淵爲治部大輔、從五位下田口朝臣統範爲左京亮、縣連氏益爲

○八幡大菩薩宮、紀略には大菩薩の三字なし
○(十一月)持行漏刻鼓、持上に陰陽寮の三字なきは省略せるなり私記に脱字歟と云ふは當らず
○去月戊子、原本子を午に作る上文に據て改む
○賈誼、漢書賈誼傳に洛陽人也年十八以能誦詩書屬文稱於郡中と見ゆ
○尚書、太政官を云
○劒壁流汗云々、此句典據未だ考へず劒壁は文選劒閣銘に劒閣壁立千仞とあり蜀の劍門山なり弱水は尚書禹貢・山海經等に見ゆ
○遊楡枋者云々、遊楡枋者は蜩と鷽鳩の類培風の勢あるものは大鵬なり共に莊子逍遙遊篇に出づ
○割鴈鳥者云々、莊子養生主篇に出づ解牛は解牛刀なり小なる鳥を剖くべき刀は牛を割くに適せずとなり鴈は中本前本谷本等鳥に作る恐くは非
○曹局、曹司に同じ太政官其他何れも曹司あり故に曹局にのぞむと云り
○出制滕薛、論語憲問篇

右京亮、外從五位下廣階宿禰貞雄爲勘解由次官、○癸巳、冷然院南大庭大祓、緣奉幣八幡大菩薩宮使進發也、是夜天寒雨雪、○十一月甲午朔乙未、持行漏刻鼓又自鳴三度、與去月戊子恠同、○戊戌、右京大夫兼加賀守正四位下藤原朝臣衞卒、衞、贈左大臣從一位內麻呂第十之子也、二歲喪母、比及五歲、問母氏卽世之早晚、哀慕感人、大臣甚奇之、立爲嫡嗣、七歲遊學、十八奉文章生試及科、時人方之漢朝賈誼、頃之拜中判事、後遷爲大學助、弘仁十三年冬十一月敍從五位下、十四年春正月爲遠江守、政貴寬靜、百姓欣然、天長四年、朝廷善其治化、授從五位上、遷爲木工頭、六年春正月遷爲右少弁、七年春正月爲式部少輔、見有不法、必評論之、不避貴戚、帝甚器之、九年春正月授正五位下、十年春正月授從四位下、承和元年轉爲大輔、兼爲伊豫守、七年春正月授從四位上、九年春正月遷爲大宰大貳、上表固讓云、臣衞言、被尚書召、以臣爲鎭西大貳、劒壁流汗、弱水寒心、比之於臣、彼何足喩、臣聞、遊楡枋者、無培風之勢、割鴈鳥者、非解牛之宜、卽知、小大之分、自定於天資、輕重之用、甚明於人事、

に孟公綽爲趙魏老則優不可以爲滕薛大夫とあるに出づ滕薛共に小國の名なり出でて地方官たるを云制は原本製に作り滕は藤に作る制は原本頭注に據り滕は閣本藤本に據て改む
○方嶽之寄云々、方嶽は四方の岳にて尙書堯典舜典等に見ゆる四岳に同じ此處にては大宰府の官を云邦家之光は毛詩小雅南山有臺章に樂只君子邦家之光とあり有德の君子を云
○如蚊虻之負丘山、莊子秋水篇に是猶使蚊負山商蚷馳河也必不勝任矣とあり原本虻を虫に丘を兵に作る諸本に據て改む
○富與貴者云々、論語里仁篇に出づ
○冥叨之誹、冥は昧也事理に昧きなり叨は貪也濫也一本誹を諷に作るさ云
○九國二嶋、二は原本三に作る頭注に據て改む
○療治之寂也、寂は大日本史には官に作る
○飛鳥之葺草云々、十洲記に祖洲有不死之草秦始皇大苑中多枉死者橫道有鳥如鳥狀銜此草

者也、臣自出身以來、適二十餘年、雖頻遇昌運、頗歷司牧、而入莅曹局、出制滕薛、彼少事之地、尙恥治化於古、況方嶽之寄、必待邦家之光、而不以臣之輕瑣、猶令誤此重選、思力於內、圖任於外、如蚊虻之負丘山、何年月而期功効、富與貴者、是人之所欲也、臣何人而辭曜世之榮哉、所恐天工之空、從明時而始、豈顧冥叨之誹、實人口之中、庶暫收咫尺之威、熟察方寸之誠、帝不聽之、乃遂赴任、先是所管九國二嶋醫師博士、惣府所自任也、名實不副、天俸有費、因上奏云、博士執經授業之職、醫師合藥療治之寂也、雖道自有優劣、然事非無緩急、何者一夕之命得方、則存其生理、百年之身失術、則墜其天竿、彼飛鳥之葺草、流香之反魂、言於世路、是甚急者、而今府所任置醫師等、未必其人、假名居位、三藥非共知、十療無一驗、遂使病門失望、豈是皇度本意乎、請至件一色、殊依朝選、書奏、時議容之、自此始擢典藥生受業練道者、以爲彼管內醫師、十四年秩滿歸京、嘉祥二年春、渤海客入朝、五月五日、皇帝幸武德殿、賜宴於賓客、有勑、擇侍臣之善辭令者、以爲應對之中使、其日賜長命縷佩之、使者賓客歎其儀範、

覆死人面、當時起坐而自活也また聚窟洲多大樹、香聞數百里、名爲反魂樹、伐其木根心、於玉釜中煮取汁、更微火煎如黑餲、香氣聞數百里、死者在地聞香氣、乃却活不復亡也（節略）とあり原本葬を訛れるを傍書に據て改む

○三藥非共知云々、周禮天官疾醫に以五味五穀五藥養其病注に五藥草木蟲石穀也とあり頭注に三一本作五、知一作和とあり

○請至件一色、原本請を諸に作る諸本に據て改む

○長命縷、原本長を續に作る諸本に據て改む長命縷は藥玉なり又續命縷とも云り公事根源五日節會の條に群臣に藥玉をたまふ五色の糸をもてひちにかくれは惡鬼をはらふと申本文侍るにやと見ゆ（續後紀三六八頁參看）

○爲勘解由長官、嘉祥三年十月戊午紀に從四位上藤原朝臣衞爲勘解由長官とあり、されば此に見ゆる仁壽元年の四字は衍なり

○便於冷然院、便は原本

三年夏六月爲彈正大弼、王公豪右懼憚之、仁壽元年冬十月遷爲勘解由長官、兼爲加賀守、齊衡元年春正月授正四位下、天安元年夏六月爲右京大夫、卒、于時年五十九、○庚子（七）、遠江國上言、木連理、○庚戌（十七）、在下野國從三位勳四等二荒神、充封戸一烟、○乙卯（廿二）、帝不御神嘉殿、所司參會神祇官、行祭事、儀如常、○丙辰（廿三）、不御豐樂院、便於冷然院、命公卿開宴、百寮供張、五節舞態、尙如向龍顏之時、賜祿亦如常、○戊午（廿五）、喚大歌及五節舞妓、令歌舞、訖賜祿有差、是日從五位下藤原朝臣忠宗、安倍朝臣良行等爲大監物、大枝朝臣直臣爲玄蕃頭、外從五位下水取連柄仁爲皷吹正、正五位下高階眞人岑緒爲大藏權大輔、左中弁如故、從五位下藤原朝臣三直爲安房守、○庚申（廿七）、從五位下滋野朝臣善根爲河內權守、○壬戌（廿九）晦、近江介正五位下紀朝臣今守授從四位下、○十二月甲子朔、第一皇子惟喬親王、在御前加元服、于時年十四、巾櫛等類、不敢裝飾、太政大臣從一位藤原朝臣良房、左大臣從二位源朝臣信、應召參入、諸近習臣等、以次侍宴、自餘王臣不在預限、宴樂已酣、琴歌繁奏、既而惟喬親王授

使に作る諸本及類史九に據て改む
○五節舞、舞は類史儛に作る下同じ
○玄蕃頭、原本蕃を番に作る諸本に據て改む下同じ
○壬戌晦、十一月は甲午朔にて壬戌は廿九日なり下文に十二月甲子朔とあり卅日癸亥晦なれば此に晦とあるは誤なれど類史九十九も此に同じければ姑く舊に據る
（十二月）惟喬、舊版本喬を高に作る諸本原本に同じ
○巾幗、元服の具なり
○應召參人、良房・信兩人は加冠理髮奉仕の爲に召されしなるべし
○貞代王、紹運錄及淸原氏系圖に據るに天武天皇皇子舍人親王の子と見ゆ此に有雄を天武天皇五代の孫とし父を貞代王とするに合はず後世の僞構にや尙よく考ふべし
○有風操、晉書裴秀傳及南史袁粲傳に見ゆ風範操守風骨氣節に富めるを云
○爲攝津守、續後紀承和十年正月辛丑紀に有相王

四品、尙侍從三位菅野朝臣人數爲尙藏、典侍從三位廣井女王、從三位當麻眞人浦虫、爲尙侍也、○（九）壬申、正六位上紀朝臣本道、授從五位下、外從五位下陰陽博士滋岳朝臣川人兼爲陰陽權助、笠朝臣名高兼爲權陰陽博士、從五位下山田連春城爲玄蕃頭、大枝朝臣直臣爲諸陵頭、從四位下春澄朝臣善繩爲右京大夫、從五位下紀朝臣本道爲勘解由次官、從四位下藤原朝臣仲統爲加賀守、○（十四）丁丑、主計頭外從五位下有宗宿禰益門授從五位下、從四位下紀朝臣今守爲近江權守、外從五位下道嶋宿禰瀧嶋爲介、○（十八）辛巳、請僧五十人於內裏、限七箇日、轉讀大般若經、是夜雷雨、○（廿二）乙酉、夜雷、○（廿五）戊子、散位從四位上淸原眞人有雄卒、有雄者天渟中原瀛眞人（天武）天皇五代之孫也、父大監物從五位下貞代王、有雄頗有風操、尤習政理、天長五年式部卿葛原親王推擧爲正親佑、七年叙從五位下、卽轉爲正、承和六年叙從五位上、七年遷爲越前守、九年爲玄蕃頭、頃而遷爲中務大輔、十一年爲攝津守、政有聲譽、黎庶悅服、國內安靜、倉廩盈溢、嘉祥二年緣治國之功、授從四位下、三年爲肥後守、上

爲二攝津守一とあり此に十一年とあるは誤なり
○爲肥後守、嘉祥二年二月壬子紀に從四位下有雄王爲二肥後守一とあり此に三年とあるも誤なり
○賜清原眞人姓、此事三年に見えず嘉祥二年八月紀に左京人六世善淵王等に賜姓のことあり同十一月紀にも左京人長田王等に同姓を賜はること見えたるも有雄王の名聞えず
○蕃守、蕃は原本稗に作る諸本に據て改む

奏改二王號一、賜二清原眞人姓一、仁壽四年叙二從四位上一、卒、百姓老少哀慕罔レ極、
○廿七庚寅、從五位下中臣朝臣蕃守爲二神祇少副一、大和眞人吉直爲二越前介一、南淵朝臣彌繼爲二加賀權介一、

日本文德天皇實錄卷第九

[天安二年]自鳴、自は堀本(朱)及紀略に據て補ふ
○忠貞王、賀陽親王の子元慶八年八月乙卯紀に傳見ゆ
○仕世王、正躬王の男貞觀四年四月戊午紀に見ゆ
○經世、世は原本也に作る藤本堀本(朱)及類史九十九に據て改む下同じ
○紀朝臣靜子、例に據るに紀上に何位とあるべきなり安倍朝臣永子以下亦同じ

日本文德天皇實錄卷第十

起天安二年正月盡八月

右大臣正二位臣藤原朝臣基經等奉　勅撰

二年(戊寅)春正月甲午朔、天皇不聽朝賀、以陰雪也、○戊戌(五)、陰陽寮漏剋鼓、不撃自鳴、○庚子(七)、天皇不幸豐樂院、唯御南殿而觀青馬、賜宴群臣、卽如常儀、无位忠貞王授從四位下、无位仕世王從五位下、從四位下春澄朝臣善繩從四位上、正五位下源朝臣興、南淵朝臣年名、並授從四位下、從五位上藤原朝臣氏雄、橘朝臣清蔭、並正五位下、從五位下百濟王淳仁、橘朝臣貞雄、藤原朝臣有貞、大和眞人吉直、藤原朝臣基經等、並從五位上、正六位上源朝臣雙、坂上大宿禰高道、良岑朝臣經世、紀朝臣恒身、文室眞人高岑、橘朝臣朝雄、藤原朝臣廣守、藤原朝臣春江、藤原朝臣大野、都努朝臣清貞等、並從五位下、正六位上興道宿禰名繼、讃岐朝臣當世、上毛野朝臣永世等、並外從五位下、○辛丑(八)、紀朝臣靜子授正五位下、安倍

朝臣永子從五位上、藤原朝臣丹生子、同禹能子、同同子、池田朝臣宅繼子、甘南備眞人清子等從五位下、大和宿禰繼子外從五位下、〇己酉、十六四品惟喬親王爲大宰帥、參議從四位上源朝臣多爲信濃守、左兵衞督如故、外從五位下家原宿禰繩雄爲主稅頭、從五位下飯高朝臣永雄爲大藏少輔、滋野朝臣善根爲河內守、從四位下菅原朝臣是善爲伊勢守、文章博士如故、從五位上良岑朝臣長松爲武藏守、從五位下橘朝臣宗雄爲安房守、從五位上良岑朝臣清風爲美濃介、左近衞少將如故、從五位下田口朝臣統範爲信濃權介、正四位下豐江王爲下野守、從五位下坂上大宿禰高道爲陸奧介、藤原朝臣備雄爲越後守、從四位上清原眞人岑成爲因幡守、大藏卿如故、從五位下賀茂朝臣弟岑爲出雲守、從五位上清原眞人利見爲石見守、從五位下大中臣朝臣眞主爲美作介、菅野朝臣繼門爲備前權介、從五位上百濟王安宗爲安藝守、從五位下藤原朝臣三直爲介、在原朝臣善淵爲紀伊守、藤原朝臣春江爲阿波介、從四位下藤原朝臣良繩爲讃岐守、右大弁左近衞中將勘解由長官如故、從

〇同禹能子、同は藤原朝臣さあるべきなり同子亦同じ

〇大和眞人繼子、宿禰の二字は三代實錄貞觀五年八月丁丑紀(十一八八)並に同六年正月乙未紀(十二〇一)に據て補ふ傍注は取らず

〇大宰帥、帥は原本輔に作る諸本に據て改む天安二年十月癸丑紀に爲二大宰帥一とあり此に帥とあるは古今目錄に見ゆるが如く權帥なり

〇正四位下豐江王、正は原本從に作る仁壽元年十一月甲午紀に據て改む

〇弟岑、弟は原本第に作る諸本に據て改む

〇菅野朝臣繼門、野は原本原に作る諸本及下文に據て改む

〇右大弁左近衞中將、右は原本左に作る下文三月癸酉紀及九月壬申紀に據て改む

○正五位下藤原朝臣興邦、三代實錄二年九月壬申紀に從五位下とあり正は從の誤なり
○筑後守、閏二月壬子紀に筑前守とあり後は前の誤なるべし
○內藏權頭右衛門佐如故、興邦は二年九月壬申紀に爲內藏權頭とあり此に如故とあるは誤なるべし右は原本左に作る下文三月甲戌紀及九月壬申紀に據て改む
○按書殿、拾芥抄中末に按書殿月花門北とあり
○天長初、初は原本始に作る堀本(朱)に據て改む
○還爲彈正少弼、還は原本遷に作る諸本に據て改む
○承和十三年、十の字は堀本(朱)及承和十三年正月己酉紀に據て補ふ
○常住寺、山城國葛野郡常住寺佛舍利記に城州西山葉室常住寺(西大寺門徒)と見え拾芥抄下本には野寺常住寺藥師柏原と見ゆ字類抄に緣起詳なり
(二月)從五位下橘朝臣

五位下紀朝臣本道爲伊豫權介、從五位下橘朝臣三夏爲大宰少貳、正五位下藤原朝臣興邦爲筑後守、內藏權頭右衛門佐如故、從五位下藤原朝臣正岑爲肥後介、從五位下藤原朝臣秀道爲左兵衛佐、○庚戌、停觀大射、命公卿於豐樂殿下、令諸衛府次射之、○辛亥、亦停賭射、○壬子、參河國上言木連理、○乙卯、新成殿內宴如常、○丙辰、從五位下橘朝臣良枝爲內匠助、丹墀眞人貞岑爲民部少輔、菅野朝臣繼門爲備前介、○丁巳、散位從五位上文室朝臣海田麻呂卒、海田麻呂者大納言從二位智奴王之孫、從四位下勳三等大原之第五子也、弘仁中入仕按書殿、俄而爲常陸大掾、後爲主水正、天長初遷爲左馬大允、頻遷爲民部大丞、八年正月叙從五位下、爲紀伊守、更遷爲伊豫介、還爲彈正少弼、承和十三年叙從五位上、後爲石見守、卒時年六十九、○庚申、常住寺西南別院火、○辛酉、暴風大雨、○壬戌、前長門守從五位下眞貞王、弟正六位上清貞王等、賜清原眞人姓、○二月甲子朔戊辰、從五位下正岑王爲少納言、從四位下在原朝臣行平爲中務大輔、從五位下都努朝臣清貞爲大監物、

○從五位上橘朝臣貞雄、上は原本下に作る正月庚子紀に據て改む

○宗雄爲彈正少弼、原本少を大に作る諸本に據て改む

○伊勢權介、勢は原本豫に作る塙本(朱)及清和紀天安二年八月乙卯紀に據て改む下同じ

○當道爲備前權介、權は同上(三代上二頁)に據て補ふ

正五位下藤原朝臣氏雄爲治部大輔、從四位下藤原朝臣良仁爲兵部大輔、從五位下安倍朝臣良行爲刑部少輔、外從五位下讃岐朝臣當世爲大判事、正五位下高階眞人岑緒爲大藏大輔、左中弁如故、從五位上橘朝臣貞雄爲宮內大輔、從五位上淸原眞人利見爲大膳大夫、從五位下紀朝臣春枝爲木工頭、左衛門權佐如故、從五位下有宗宿禰益門爲助、主計頭笇博士如故、文室朝臣墾田麻呂爲正親正、大神朝臣宗雄爲彈正少弼、外從五位下御輔朝臣永道爲勘解由次官、從五位上藤原朝臣有貞爲伊勢權介、從五位上物部朝臣廣泉爲參河權介、內藥正侍醫如故、從四位下房世王爲武藏權守、從五位上大和眞人吉直爲權介、外從五位下廣階宿禰貞雄爲美濃介、從五位下良岑朝臣經世爲越前介、從五位上良岑朝臣淸風爲播磨權介、左近衛少將如故、從五位下坂上大宿禰當道爲備前權介、左近衛少將如故、從五位上紀朝臣有常爲肥後權守、從五位上藤原朝臣有貞爲右近衛少將、伊勢權介如故、從五位下紀朝臣恒身爲右衛門權佐、從五位上坂上大宿禰貞守爲左馬頭、從

○後太上皇、淳和天皇を申奉る
○謙光、易謙卦彖傳に謙尊而光、疏に尊者有謙而更光明盛大とあるに出づ
○別召、類史別字なし
○百高座、百字の上に恐くは設字を脱す
○仁壁神、神名式周防國吉敷郡仁壁神社、今宮野村宮野下
○五十七人、人は紀略日に作る
○率左右馬寮官人、率は原本卒に作る諸本に據て改む
○葭原神、神名式に伊勢國度會郡荻原神社とあるは是なり
○伯太彥伯太姬神、神名式河内國安宿郡伯太彥神社・伯太姬神社、今南河内郡古市村譽田神社に合祀す
○辛卯、卯は原本如に訛る諸本に據て改む
(閏二月)玄蕃頭、蕃は原本番に作る諸本に據て

五位下坂上大宿禰瀧守爲助、佐伯宿禰雄勝爲右馬頭。○辛未、公卿上奏曰、謹撿往事、後太上皇、德崇謙光、不存國忌、而獨留皇后之忌也、勘之禮經、義乖相配、伏請、一准舊典、式從停廢、謹錄事狀、伏聽天裁、制曰可。○壬申、越後國上言木連理。○癸酉、天皇別召四衛府射手等、令賭射之、前日廢、觀、今日更射、日暮陰雨、入夜風雪。○甲戌、大雪。○戊寅、修仁王會百高座。○己卯、在周防國正六位上仁壁神授從五位下。○庚辰、請僧五十七人於冷然院南殿、限三箇日、轉讀大般若經、是日在筑後國高良玉垂神社火。○乙酉、遣左近衛少將從五位下坂上大宿禰當道、右近衛少將從五位上藤原朝臣有貞等、率左右馬寮官人幷近衛、搜捕京中群盜。○丙戌、在伊勢國正六位上葭原神預官社。○己丑、在河内國從五位下伯太彥、伯太姬神、並預官社。○辛卯、從五位上安倍朝臣貞行爲右中弁、豐階眞人安人爲大學頭、從五位下清原眞人道雄爲兵部少輔、從五位下山田連春城爲左京亮、正五位下藤原朝臣氏雄爲大和守、從五位下大和眞人吉直爲常陸權介、紀朝臣本道爲筑前權守。○閏二月癸巳朔、從五

改む
○菊池城院、狩谷校本に舊址在菊池郡水嶋鄕謂大城小城と云今河原村木庭其趾なりといへど決め難し
○田心姬神、以下三柱の神は合せて之を宗像大神と申す正三位に叙する事已に元年十月丙寅紀に見ゆ此に再出せるは誤なるべし
○燒官舍民宅者等、等は類史八十七に據て補ふ
○鞫讞、鞫は原本鞠に作る類史に據て改む鞫は說文に窮理罪人也讞は廣韻に議罪也評獄也とあり
（三月）

位下橘朝臣宗雄爲石見守、○[十三]乙巳、雨雹、正六位上藤原朝臣有蔭授從五位下、從五位上藤原朝臣本雄爲治部大輔、從五位下橘朝臣岑雄爲左京權亮、巨勢朝臣河守爲右京權亮、從五位下藤原朝臣有蔭爲肥前守、○[二十]壬子、從五位下家原宿禰氏主爲玄蕃頭、竿博士如故、藤原朝臣興邦爲春宮大進、右衞門佐筑前守如故、藤原朝臣廣基爲右馬助、是日雨下、通宵不止、○[廿二]甲寅、前越後守從五位上伴宿禰龍男、被告故殺下獄、○[廿四]丙辰、肥後國言、菊池城院兵庫鼓自鳴、○[廿五]丁巳、又鳴、○[廿六]戊午、在筑前國正四位下勳八等田心姬神、湍津姬神、市杵嶋姬神、並授正三位、○[廿八]庚申、對馬嶋百姓、殺守正七位下立野連正岑、並燒官舍民宅者等、下刑官而鞫讞其罪也、○三月壬戌朔[五]丙寅、雷雨、囚獄司正正六位上飯高朝臣氏文、少令史從六位下中臣習宜朝臣弘門等、下刑官而斷其罪也、○[六]丁卯、請僧卅二人於內裏、轉讀大般若經、○[八]己巳、式部少丞伴宿禰春宗授從五位下、外從五位下占部宿禰業基爲神祇權大祐、從五位下伴宿禰中庸爲侍從、源朝臣穎爲宮內少輔、從五位上藤原朝臣貞敏爲掃部頭、

○恐見恐美毛、見は類史美に作る下同じ
○深草山陵、仁明天皇
○屢示、示は原本爾に作る諸本及類史卅六に據て改む
○汚穢、閣本藤本汙穢に作る
○且聞食天、且字は衍か
○咎祟、祟は原本崇に作る閣本に據て改む
○天子七廟、禮記王制に天子七廟三昭三穆與太祖之廟而七とあるに出づ
○舍故而諱新、同檀弓に出づ、左傳桓六年杜注に謂舍親盡之祖而諱新死者とあり
○贈皇太后、橘嘉智子、嘉祥三年五月辛巳崩文德天皇の皇祖母に坐す
○宗親、史記五宗世家に同母者爲宗親と見ゆ
○昭穆、昭は一世、穆は二世なり宗廟の制中央に太祖の廟あり左に昭、右に穆あり即ち昭は太祖の子にして穆の父に當る
○二俣神、俣は原本役に作る諸本に據て改む神名式周防國都濃郡二俣神社、今向道村大向
○直世王、王は原本主に

從五位下淡海朝臣豐庭爲河內權守、藤原朝臣大瀧爲陸奥權介、從四位下房世王爲越中權守、從五位下伴宿禰春宗爲出雲守、○癸酉[十二]、宣命曰、天皇恐見恐見毛、掛畏支深草山陵爾奏賜部止奏久、頃年恠異屢示、其由乎卜求爾、掛畏岐山陵乃御在所乃近地爾、汚穢事觸行己止不止之所致止卜申世利、因茲參議左大辨從四位上藤原朝臣氏宗、右大弁從四位下藤原朝臣良繩等乎差使天、奉出須此狀乎且聞食天、無咎祟志女賜倍良波、使等乃申爾隨天、汚穢事可令糺潔支狀乎、恐見恐見毛奏、○甲戌[十三]、公卿上奏曰、謹勘禮經、天子七廟、舍故而諱新、繇是言之、五月四日、贈皇太后國忌、宗親理盡、昭穆疎遠、禮典所宜、須從省除、謹錄事狀、伏聽天裁、制曰可、在周防國二俣神預官社、從五位上安倍朝臣貞行爲刑部大輔、從五位下藤原朝臣備雄爲少輔、安倍朝臣良行爲大藏權少輔、藤原朝臣興邦爲春宮亮、右衞門佐如故、從五位上藤原朝臣常永爲尾張權守、清原眞人利見爲越後守、○乙亥[十四]、丹波守從五位上文室朝臣助雄卒、助雄、者中納言從三位直世王之第二子也、字王明、少遊大學、略涉經史、未及

作る諸本に據て改む
〇爲右中辨齊衡三年正月、此十字堀本(朱)及仁壽三年正月丁未紀及齊衡三年正月丙辰紀に據て補ふ
〇諸別所、侍從所按書所等の類を云るか
〇能書者、原本者を之に作る堀本(朱)に據て改む又同本に之は人歟と傍注す字形より推せば人の誤なるべし
〇於常寧殿初、堀本(朱)初を砌に作る
〇(注)二人者云々、後人の加注なるべし
〇東宮學士、宮は原本官に作る諸本に據て改む
〇美濃權介如故、按に九月癸未紀に豐階眞人安人爲美濃權介とあり此に美濃權介如故とあるは誤なるべし
〇天夷鳥命神、式外神、河內志に天夷鳥命神祠在志紀郡道明寺村今稱天王とあり
〇卅三、前本藤本谷本等卅三に作る卅三とすれば天長三年の生れにて仁明天皇在東宮之時云々とあるに合はず
〇春宮亮如故、按に年名

成名、出就官途、承和元年正月叙從五位下、十二年八月爲齋宮頭、十四年二月爲大藏少輔、四月爲左少弁、嘉祥三年四月叙從五位上、爲遠江守、仁壽三年正月爲右中辨、齊衡三年正月爲丹波守、卒時年五十二、〇十五丙子、有勅令相摸介從五位下滋野朝臣安成、講老莊於侍從所、令文章生學生等五人預聽之、是日召會諸司諸別所能書者、於常寧殿初令寫般若波羅密多理趣經百卷、于時皇子源每有、時有、於殿上落髮入道、此夜有灌頂之事、二人者皇子之得姓者也、每有母多治氏、時有母清原氏、〇十九庚辰、從五位下丹墀眞人貞岑爲左少弁、從五位下山田連春城爲大學助、從五位下淡海眞人弘、岑爲民部少輔、從五位上豐階眞人安人爲東宮學士、大學頭美濃權介如故、大枝朝臣音人爲丹波守、〇廿二癸未、在河內國天夷鳥命神授從五位下、〇廿三甲申、地震、〇廿四乙酉、從五位下佐伯宿禰雄勝卒、雄勝者從五位上勳五等大野之子也、仁明天皇在東宮之時、殊所親愛、踐祚之日、頻歷數官、承和十五年正月叙從五位下、天安元年五月爲右近衞少將、六月兼爲但馬權介、後遷爲右馬頭、近江權介、卒時年卅三、從四位下南淵朝臣年名爲

去年九月甲辰紀に爲春宮亮、上文三月甲戌紀に藤原興邦之に代り下文五月辛巳紀年名復權亮と爲る此に春宮亮如故とあるは誤なり
○丹波介、介は原本守に作る堀本(朱)及淸和紀天安二年十一月壬午紀に丹波介坂上大宿禰貞守轉權守とあるに據て改む
○波寶神波比賣神、神名式大和國吉野郡波寶神社、今白銀村夜中、同波比賣神社、今下市町栃原
(四月)日有蝕之、原本有を在に作る前本淀本堀本(朱)に據て改む
○省符、符は原本府に作る諸本及類史に據て改む
○鞫定、鞫は原本鞠に作る類史八十七に據て改む
審問して罪を決するを云
○正八位下神主河繼授外從五位下、八は中本六に作る私記に或曰三代實錄貞觀三年六月書正八位上神主河繼四年十二月自外正六位上授外從五位下此恐誤と云
○今月壬辰、月は原本日に作る諸本に據て改む
○寶皇寺、鳥部野寺、嘉祥三年(三頁)に出づ類史

右京大夫、式部大輔春宮亮如故、從五位上坂上大宿禰貞守爲丹波介、從五位下坂上大宿禰瀧守爲伯耆介、從四位上正行王爲美作權守、彈正大弼如故、○己丑、在大和國從五位下波寶神、波比賣神、並預官社、是日無雲而雷、○辛卯晦、雨、請僧百人、相分七十人在內裏、三十人在八省院、三日間轉讀大般若經、○夏四月壬辰朔、日有蝕之、○癸巳、從五位下源朝臣舒爲雅樂頭、從五位下在原朝臣守平爲大膳大夫、從四位下在原朝臣行平爲左馬頭、先是刑部大丞正六位上石川朝臣宗主、大錄正七位上難波連清宗等、詐稱官宣、作省符、放免罪人佐伯宮人等、是日下兩人於刑官、鞫定其罪也、○丁酉、伊勢大神宮禰宜正八位下神主河繼授外從五位下、天陰雷雨、夜雨雹、大如碁石、須臾而止、通夜快雨、○戊戌、充越前國氣比神宮寺稻一萬束、爲造佛像之料、○庚子、天晴、今月壬辰至于己亥連雨、今日初霽、是夜寶皇寺火、俗名鳥戸寺金堂禮堂盡爲灰燼、○辛丑、於冷泉院南路大祓、爲遣諸名神社奉幣帛之使也、是日宮主外從五位下占部宿禰雄貞卒、雄貞者龜筴之倫也、兄弟尤長此術、帝

在東宮時爲宮主、踐祚之日爲大宮主、齊衡二年正月叙外從五位下、雄貞本姓卜部、齊衡三年改姓占部宿禰、性嗜飲酒、遂沉湎卒、時年卌八、〇十一壬寅、終日雨、空中有聲、如雷一度、安藝國言上、守從五位上百濟王安宗卒、是日遣從四位下右近衛中將源朝臣興、散位時宗王、從四位上、伊豫守春澄朝臣善繩、從五位下右馬助藤原朝臣廣基、陰陽頭從五位上藤原朝臣三藤、散位從五位下源朝臣雙、從四位下忠貞王、侍從輔世王、民部大輔藤原朝臣仲統、雅樂頭從五位下源朝臣舒、縫殿頭伴宿禰須賀雄、散位從四位下棟貞王、從五位下源朝臣包、從四位上越中守源朝臣啓、從五位下源朝臣同、高橋朝臣淨野等於諸大神社、宣命曰、天皇我詔旨止、恐美恐美毛申給倍止申久、御心爾有所念行爾依天那毛差使天、宇豆乃大幣帛乎令捧持天、奉出須此狀乎聞食天、安幣乃足幣止、受賜天天皇乎寶位無動久、常磐爾堅磐爾、護賜比助賜比、思食須御志乎毛、如御意爾果之幸倍賜比、天下平安爾護給比矜給倍止、恐美恐美毛申給波久止申、〇十五丙午、置下野國大少掾各一員、先是國上請、地勢曠遠、人居懸隔、巡撿部內官員數

〇百七十三に寂光寺に作る
〇(注)鳥戸寺、原本戸を尸に作る諸本及類史に據て改む
〇冷泉院、泉は上下の文何れも然とあれば此も然とあるべきなり
〇奉幣帛之使也、也は私記に校本有也字と云るに據て補ふ
〇龜筴之倫、龜筴は禮記曲禮に龜爲卜筴爲筮とありト筮を云倫は字書に類也又擇也と見ゆ
〇兄弟、弟は原本第に作る諸本に據て改む
〇爲宮主、原本此上に爲宮時の三字あり衍なり諸本に據て削る宮主は卜部の宮中にありて主として其事に奉仕するものを云
〇踐祚之日、日は原本月に作る諸本に據て改む
〇性嗜、性原本胜に作る諸本に據て改む
〇沉湎、初學記酒部に能飲者飲之不能飲者已謂之醧齊顏色均衆寡謂之沉閉門不出者謂之湎故君子可以宴可以醧不可以沉不可以湎と見ゆ
〇卌八、藤本淀本卅八に作る恐くは非

○棟貞王、王は原本主に作る諸本に據て改む

○如御意爾果之、ハタスは俗に言ふと同じ陽成紀元慶四年十二月癸未紀に本御意早果行倍岐物奈利止、萬葉三にむすびてし事は不果云々と見ゆ

○申給波久止、久は原本之に作る中本に據て改む

○懸隔、懸は原本縣に作る諸本に據て改む三代格は疎に作る

○高屋安倍神、元年八月庚辰紀（一五七頁）に見ゆ

○方相氏裝束、大舍人寮式に方相假面一頭後帔亦兩面四尺緋皂袷袍各一領緋皂單裳各一腰云々楯一枚桙一枚緋幡一流並納寮庫當時出用とあり政事要略廿九に方相氏の圖見ゆ

（五月）夏五月、夏字は衍なり

○筑波山神二柱授從四位、此神の事承和九年紀（續後紀一二三九頁）に見ゆ從字は堀本（朱）藤イ本に據て補ふ貞觀十二年八月戊申紀に據るに此時男神に從四位上、女神に從四位下を授奉られしなり

○於侍從殿前、侍從殿は

少、仍許之、是夜月蝕、○（十六）丁未、尾張國言上、守從五位上藤原朝臣宗善卒、宗善、大納言正三位眞楯之曾孫、山城守從五位上永貞第四子也、天長十年三月叙從五位下、承和四年爲長門守、十一年爲美作介、仁壽二年二月爲左衞門權佐、齊衡二年正月叙從五位上、爲尾張守、卒於任、時年六十四、○（十七）戊申、在大和國從五位上高屋安倍神授從四位下、○（十九）庚戌、從五位下藤原朝臣家宗爲造東大寺大佛長官、○（廿二）癸丑、在大和國從五位下波寶神、波比賣神、並授從四位下、○（廿三）甲寅、地震、○（廿四）乙卯、夜、大舍人寮火、追儺方相氏裝束一時滅却、○（廿五）丙辰、雷雨、○夏五月辛酉朔、（二）壬戌、常陸國筑波山神二柱授從四位、○（三）癸亥、陰陽寮奏漏刻博士等、於侍從殿前始置漏水、糺院外漏刻之誤、但無金皷、○（五）乙丑、停騎射走馬之觀、不幸武德殿、○（八）戊辰、有勅、公卿於武德殿馬場、令角走左右馬寮御馬各十疋、令左右近衞各十六人、左右兵衞各三人、春宮坊帶刀舍人三人而騎射、○（十一）辛未、從四位上淸原眞人瀧雄爲中務大輔、從五位下藤原朝臣忠宗爲少輔、源朝臣直爲兵部少輔、源朝臣穎爲刑部少輔、高橋朝臣淨野爲宮內

侍從所と別なるべし詳ならず前字は藤本堀本(朱)に據て補ふ
○漏水、水時計なり
○角走・角は競也競走に同じ原本角を屑に作る藤本堀本及類史七十三に據て改む
○八幡比咩神、神名式豐前國宇佐郡比賣神社(名神大)、宇佐神宮三座の一なり
○高良玉垂神、火災の事二月庚辰紀に見ゆ
○比咩神、神名式筑後國三井郡豐比咩神社(名神大)是なり豐比咩命一名淀姫と申す蓋海神豐玉姫神を祀る
○但彥神、原本但彥を玉垂に作る諸本及類史十四に據て改む
○伊豫親王、桓武天皇第四皇子なり
○窮毒、毒は廣雅に痛也苦也とあり
○爲因幡守、因幡は中本播磨に作る
○沙良眞熊、嘉祥三年十一月己卯紀興世朝臣書主傳に新羅人沙良眞熊善彈新羅琴とみえまた寶龜十一年(續紀下三五二頁)に武藏國新羅郡人沙

少輔、飯高朝臣永雄爲尾張守、淸原眞人淸海爲駿河守、淸原眞人秋雄爲豐前守、是日八幡比咩神授一品、侍從殿漏刻從停止、○十四甲戌、雨終夜不止、先是高良玉垂神、及比咩神等正殿遇失火、位記皆被燒損、仍今日勘舊文案、更令書之、但彥神本位從三位、今授正三位、比咩神本位從五位下、今授從四位下、又同神殊授封廿七戶、○十五乙亥、陰雨不止、洪水汎溢、東西兩河、人馬不通、是日宮內卿從三位高枝王薨、高枝、四品中務卿伊豫親王第二子也、爲人寬弘、頗習文書、大同初、親王遭害、三子遠配、辛苦流離、不知生計、弘仁改曆、聖皇踐祚、哀親王無辜諸子窮毒、殊降恩赦、免罪入京、返給前年被沒資財田宅、高枝與兄弟相議、均分男女、時人悲歎之、天長三年正月叙從四位下、爲因幡守、承和七年十月爲大舍人頭、嘉祥二年正月叙正四位下、仁壽四年正月叙從三位、八月除大藏卿、天安元年拜宮內卿、高枝學沙門空海之書迹、習沙良眞熊之琴調、未得其一道、遂至終身、時五十七、不蓄財產、遺令薄葬、○十九己卯、近江國夷外從八位下爾散南公澤成爲夷長、令把笏、先是國上請、俘夷之徒、老少無別、放

良眞熊等二人賜姓廣岡造と見ゆ
○不加敎喩、加は原本知に作る諸本に據て改む
○狠戾、戰國策に趙王之狠戾無親と見え狠の如く心ねぢけて道にもさるを云
○從四位下南淵朝臣、四は原本而に作る諸本に據て改む
○是善爲備前權守、此下恐くは文章博士如故の六字を脫す
○汎溢、溢は堀本（朱）濫に作る
○浩々、尙書堯典に浩々滔天、傳に浩浩盛大とあり
○冷然院、然は紀略に泉に作る
○草屨、紀略草履に作る
○頳尾、毛詩周南汝墳章に魴魚頳尾傳に頳赤也魚勞則尾赤と見ゆ
○入天、狩谷校本に紀略天作亘疑天垣誤寫と云
○家依、藤原永手の一男寶龜八年十月辛卯紀參議に任ず
○三起、原本三を二に作る尊卑分脈に據て改む
○事孽此人、孽は漢書司馬遷傳に媒孽其短、注に

縱爲事、暴亂任意、不加敎喩、無人統攝、往年國司等擇勇健者、私置其長、而夷等不服、猶行狠戾、望請置件澤成、卽預把笏、仍許之、○庚辰、雨下如注、通宵不止、○辛巳、大雨、正五位下高階眞人岑緒爲左京大夫、左中弁大藏大輔如故、從四位下南淵朝臣年名爲春宮權亮、右京大夫式部大輔如故、從五位下坂上大宿禰瀧守爲駿河介、從四位下菅原朝臣是善爲備前權守、從五位下坂上大宿禰當道爲介、左近衞少將如故、○壬午、大雨、洪水汎溢、河流盛溢、水勢滔々、平地浩々、橋梁斷絕、道路成川、東堀川水、入冷然院、庭中如池、左衞門陣直廬浮流、公卿諸司百寮、各率僚下、或草屨、或徒跣、競趣水畔、堀決禦流、池魚浮蕩、頳尾甚多、亦左右京被水害、流死者衆矣、○甲申、霖雨初止、天景新晴、○丙戌、地震、無雲而雷、○丁亥、夜有流星、入天、長一丈許、遣勅使、令巡撿兩京洪水之害、于時散位從五位上藤原朝臣宗成卒、宗成參議從三位兵部卿家依之孫、從五位下三起之長男、宗成素無才學、頗近邪佞、大同二年連及伊豫親王事、久弃于世、時人以爲事孽此人、右大臣淸原眞人夏野微時、曾爲昵友、遭大

孽謂爲生其罪釁也とあり釁に同じく醱す意
○遲明、遲は待なり漢書高帝紀に出で黎明をいふ
○有星入月魄中、星は原本日に作る藤本堀本(朱)に據て改む月魄は三才圖會に月輪郭無光處曰魄とあり
○穀倉院、拾芥抄中末に二條南朱雀西在大學西納畿内諸國銅錢無主位職田及沒官田大宰稻等諸庄物勤年中饗とあり
○民部廩院、同に在民部省東納諸國庸租米充公用納下厨家之殘とあり
○左右兩京、兩字は紀略に據て補ふ
(六月)今川、巨勢麻呂(武智麻呂の子)の子尊卑分脈には今河とあり
○清名、同に淨名とあり
○兩雞云々、私記に紀略曰萬壽四年五月癸亥雷雨云々豐樂院西第二堂雷火欲燒即以撲雷形似白雞五雜組云雷之形人常有見之者大約似雌雞肉翅其響乃兩翅奮撲作聲也とあり
○記怪也、原本怪を脏に作る諸本に據て改む

臣用事、天長六年正月叙從五位下、九年正月叙從五位上、家貧窮困、日夕不給而卒、時年七十四、○戊子、無雲而雷、遲明有星、入月魄中、○己丑、出穀倉院穀二千斛、民部廩院米五百斛、大膳職鹽廿五斛、賑給左右兩京苦霖之窮民、是日、於南大庭大祓、○六月庚寅朔辛卯、陸奧權介從五位下藤原朝臣大瀧卒、大瀧從四位下今川之孫、正六位上清名之長男也、少遊大學、爲文章生、承和十五年爲民部少丞、齊衡三年正月叙從五位下、爲武藏介、爲刑部少輔、天安元年爲大學頭、遷爲宮内少輔、天安二年三月遷爲陸奧權介、不之任卒、時年五十六、○壬辰、雷雨、此夜左近衞大宅年麻呂於北野見之、當稻荷神社、空中有兩雞相鬪、其色似赤、相鬪之間、毛羽散落、地雖相隔、見似眼前、良久而止、此語類妖妄、而記怪也、○甲午、雷雨、○丙申、和泉國言、霹靂破官舍六十餘宇、民室屋卅宇、被震死者二人、傷支體者三人、拔折十圍木十九株、殘廢田苗廿許町、○己亥、夜有如流星者、經天西落、大如月、光青赤、其後西方、空中有聲、如雷二度、○庚子、早旦有白雲、自艮亘坤、時人謂之旗雲、○壬寅、地震、○癸卯、參議

○民室屋、紀略室字なし
○十九株、堀本九を六に作る
○旱旦、旦は原本且に作る中本前本藤本等に據て改む
○自艮亘坤、艮は東北、坤は西南を云
○旗雲、旗のなびけるが如く棚引たる雲を云萬葉一に渡津海乃豐旗雲、懷風藻大津皇子詩に雲旌張嶺前と見え園大曆及花營三代記足利季世記多聞院日記等にも見ゆ
○遊俠、史記游俠傳に荀悅曰立氣齊作威福結私交以立彊於世者謂之游俠と見ゆ
○偸兒、抄人倫部に偸兒楊氏漢語抄云偸兒（沼須比斗）とあり
○山眞山、狩谷校本に賊名乎或山名乎未詳と云
○加雨、堀本（朱）に加を暴に作る
○大宰府言、紀略言下に上字あり
○去五月一日、原本五字なく日下に又日字あり諸本及紀略に據て刪補す
○九國二嶋盡被損傷、損字は紀略に據て補ふ諸本及紀略二を一に作る

從四位上源朝臣多爲伊勢守、左兵衛督如故、從五位下坂上大宿禰岑雄爲侍從、大神朝臣宗雄爲大監物、都努朝臣清貞爲大藏少輔、朝原宿禰良道爲左京亮、藤原朝臣宜爲勘解由次官、當麻眞人眞道爲大和介、紀朝臣全吉爲美濃權介、右近衛少將主殿頭如故、從五位上大和眞人吉直爲安藝守、從五位下山口伊美吉西成爲紀伊介、橘朝臣岑雄爲豐後守、○甲辰、參河國言、守從五位下安倍朝臣氏主卒、氏主父散位正六位上友上、少爲遊俠、交友博徒、氏主頗善騎射、輕捷如飛、夜追捕偸兒、還爲傷胸、明日尋逐、捕賊山眞山、仁明天皇在東宮、徵爲帶刀舍人、承和十一年二月叙從五位下、爲遠江守、被官使勘責解却、仁壽三年正月爲參河守、秩滿後、天安元年更復參河守、卒時年六十五、○丁未、雷雨、近來陽旱、炎氣盛蒸、是日加雨、河水頗溢、○己酉、從五位下安倍朝臣良行爲參河守、大宰府言、去五月一日、大風暴雨、官舍悉破、青苗朽失、九國二嶋盡被損傷、又肥後國菊池城院兵庫鼓自鳴、同城不動倉十一宇火、大學助從五位下山田連春城卒、春城字連城、右京人也、曾祖白金爲明法博

士、律令之義、無レ所レ不レ通、後言二法律一者、皆咸資二准的一、春城年十五入レ學、依レ未二成人一、於二堂後一聽二講晉書一、後嵯峨太上天皇欲レ令下皇子源朝臣明成中大業上、而求二大學生志レ學者一、將レ爲二同學一、時春城應レ徵、與二明同房一、閲二覽諸子百家一、遂授二丹波權博士一、爲二勉學之資一、俄而太上天皇崩、春城失レ塗悲歎、仁明皇帝欲レ令下春城遂中本業上、詔シテ侍二挍書殿一、賜レ閲二御書一、內藏寮日給二其食一、即遂授二備後權少目一、明年春遷二備中權少目一、承和十二年夏對策下科、明年春拜二少外記一、備中權少目如レ故、帝踐祚、仁壽元年大嘗會、授二外從五位下一、二年正月遂爲二駿河介一、三年春三月自請之レ任、傍吏百姓嫌二其淸察一、時部下駿河郡有下自二伊豆一新移神上、名二阿氣大神一、國司申レ官、建二新社一以祭祀、而禰宜祝等、增以二奇異之事一、詿二誤國司庶人一、春城到レ任、登時考訊、糺二其詭僞一、自レ此以後、妖言永絕、歲時祭祀而已、傍吏諸人、服二其聰察一、其年秋、奉レ使入レ京、明年春正月四日諸儒改二判對策一云、尺木寸玉、非レ無二瑕節一、況於二大才一、古人猶レ泥、仍置二丁第一、齊衡三年正月七日授二從五位下一、拜二勘解由次官一、同年十二月遷二玄蕃頭一、天安二年二月寢レ疾、病中遷二任左京亮一、即拜二大學助一、左京亮如レ故、京職忩

○不動倉、狩谷校本に舊址在二菊池郡米原村一（今城北村大字米原）至レ今穿レ地則燒米多出云と見ゆ
○與明同房、明字原本朋に訛る諸本に據て改む
○丹波權博士、原本權下に守字あり閣本前本谷本に據て削る諸國博士のこと職員令に凡國博士醫師國別各一人と見ゆ
○仁明皇帝、內藤校本に一本皇帝を天皇に作ると云
○阿氣大神、淫祀なり阿氣は何に據れるか詳ならず
○申官、申は原本中に作る諸本に據て改む
○詿誤、漢書王莽傳に臣莽當レ受二詿上誤朝之罪一とあり詿は誤也欺也人を欺瞞して惡に誘導するを云
○考訊、原本訊を誶に作る堀本に據て改む
○丁第、丁は原本一に作り中本下に作る他の諸本に據て改む大日本史注に按上云二承和十二年對策下科一此不レ當レ云レ置二丁第一作レ一者乙字訛故今訂レ之とあれど姑く諸本に據る
○拜勘解由次官、狩谷校

劇、病不理事、因罷左京亮、以大學助卒、時年卌九、春城雖長自寒門、而性甚寛裕、言詞正直、無所阿枉、無好小藝、不拘忌祟、頗得儒骨也、○[廿一]庚戌、遅明、濁霧濛々、無雲而雷、大風、○秋七月庚申朔[五]甲子、從四位上源朝臣勤爲宮內卿、外從五位下御船宿禰佐世爲大學助、從五位下清原眞人眞貞爲內膳正、平朝臣實雄爲彈正少弼、是日、武藏國上白雌雉一、○[十]己巳、正四位下彈正大弼兼美作權守正行王卒、正行王者、贈一品萬多親王第二子也、初與兄正躬王受業大學、初太上天皇有詔、徵之命直嵯峨院、天長十年三月授從四位下、爲侍從、時年十八、天皇甚寵遇之、承和五年兼越中守、九年遷爲左馬頭、十三年叙從四位上、轉爲左京大夫、仁壽元年除加賀守、齊衡二年爲彈正大弼、天安二年兼爲美作權守、其年卒於宮、正行性耽文酒、日夕無怠、鷹馬之類、愛翫殊甚、○[十二]辛未、宣命雨師、乙訓、水主、貴布禰神等、爲祈雨也、入夜天陰小雨、○[十五]甲戌、小雨、良久而止、入夜亦雨、○[十七]丙子、天陰微雨、通宵不止、是日神祇權大祐外從五位下占部宿禰業基兼爲宮主、○[十九]戊寅、雷雨、○[廿一]庚辰、左右相撲司率樂人、於新成殿

本に爲二勘解由次官及玄蕃頭一天安元年也拜上恐脱二天安元年正月六字一さ云

○左京亮如故、原本亮を助に作る傍注に據て改む

○卌九、卌は谷本白本丗に作る

○寒門、蜀志張任傳に家世寒門とあり寒は貧困なるを云

○阿枉、おもねりて言を枉るを云

○忌祟、何事にも吉凶告祟ありと恐れて忌み避くるを云

（〈七月〉）白雌雉、雌は原本鴜に作る中本及類史紀略に據て改む

○美作權守、權は三月乙酉紀に據て補ふ

○天長十年、天長の二字は堀本（朱）及原本傍注に據て補ふ

○爲左京大夫、承和十三年正月乙卯紀左を右に作る

○爲美作權守、權は原本傍注及上文三月乙酉紀に據て補ふ

○愛翫、愛は原本受に作る諸本に據て改む

○雨師、丹生川上神社

○乙訓、山城國乙訓郡乙

訓坐火雷神社

○水主、山城國久世郡水主神社

○天陰、天字は諸本に據て補ふ

○業基、原本平麻呂に作る堀本中本谷本及上文に據て改む平麻呂とあるは後人の加筆なり

○相撲司、撲は原本模に作る諸本及類史紀略に據て改む下同じ

○亂聲、音樂に亂聲と云ことあり、諸曲の如く一定の譜なく鉦鼓等を程よく撃つに依て名付く、樂のまさに發せむとする時之を奏し相撲競馬等には勝負の後に之を奏す源氏物語(螢)にはらんぞうといへり

○使左右、原本使を便に作る狩谷校本に據て改む

(八月)有勅、有は原本右に作る諸本及類史七十五に據て改む

○或起愉儛、或は類史七十五或に作る是なるが如し

○丁未、十九日なり丁酉(九日)の誤かと思へど類史紀略亦同じ

○從五位下鴨川合神、下は原本上に作る紀略及貞

前、盛奏亂聲、卽使左右相撲、○甲申、小雨、○丙戌、大雨、白鷺集太政官廳版位間、記異也、○丁亥、陰霧、○八月己丑朔、早旦陰霧、須臾天晴、是日有勅、親王公卿及侍從、令陪於東釣臺飮宴、左近衞府間奏音樂、酣暢之後、或起愉儛、賜祿有差、○壬辰、若狹國言、兵庫鳴如振鈴、○丙申、勅賜二品賀陽親王帶劔、○丁未、右大臣從二位藤原朝臣良相侍、言議於帳中、良久賜御衣罷出、是日釋奠、殊有勅、令大學助外從五位下御船宿禰佐世爲座主、在山城國從五位下鴨川合神預名神、是夜有雲竟天、自艮至坤、人謂之旗雲、○戊戌、內供奉十禪師傳灯大法師位光定卒、光定者俗姓贇氏、伊豫國風早郡人也、及至弱冠、遭父母喪、服闋離俗、隱居山林、大同初向京輦、于時有聞、叡山最澄大師、心持慈悲、傳止觀宗、三年攀陟、仕止觀院、値徒衆屈義眞和尙、以爲座主、令講摩訶止觀、幸得預聽、最澄大師相悲慰勞、五年春正月十四日、宮中齋會、蒙制得度、天台之度者、從此爲濫觴、弘仁三年夏四月十八日、東大寺戒壇受持具足戒、其後敬問大師、學習宗義、五年至興福寺、與義延法師共論本宗義、頗有優美之

觀元年正月甲申紀に據て改む川合神は神名式に山城國愛宕郡鴨川合坐小社宅神社（名神大月次相嘗新嘗）とあり
○預名神、月令に八月七日預名神とあり七日は乙未なり之に據れば上に丁未とあるは乙未の誤か
○旗雲、六月庚子紀に見ゆ
○光定、釋書三にも傳見ゆ
○光定者、者は藤本に據て補ふ
○賛氏、明匠略傳に光定和尙俗姓熱見氏豫州風早縣人也其先武內宿禰六男葛木襲津彥之後焉と見ゆ之に據れば賛は熱見の誤寫なるべし
○京輦、京師をいふ陳琳爲袁紹上書に見ゆ
○心持慈悲、法界次第に能與他之樂心名之爲慈能拔他之苦心名之爲悲と見ゆ
○住止觀院、住は原本位に作る諸本及類史に據て改む止觀院は延曆寺九院の一なる一乘止觀院卽ち是なり
○義眞和尙、釋書二に傳見ゆ

稱、帝屢令光定、與散位從五位下眞苑宿禰雜物、對論經義、彼此相難、頗致俳優、帝時以爲戲弄之事、初寂澄上建大乘戒壇之奏、僧綱相共難論、仍付光定返却、十三年六月四日寂澄卒、後殊被許傳戒、此光定內供奉之力也、帝聞光定在山、資用絕乏、別賜乞食袋、濟山中之急、承和五年四月二日、叙傳灯大法師位、四年奉制、起四王院、天安二年秋七月、帝聞年滿八十、恩賞殊異、施度者八人、縑八十疋、調布、商布、交易布各八十段、綿八十斤、錢八万貫、米八十石、病卒、時年八十、臈卌七、光定爲人質直、不事服餝、帝悅其質素、殊加憐遇、○庚戌、眞言宗始准諸宗、補任諸國講讀師、○辛亥、今宵天皇倉卒有不豫之事、近侍男女、騷動失精、○壬子、帝病劇彌加、言語不通、皇太子侍於嘗藥、公卿大夫候于陣頭、入夜召文章博士從四位下菅原朝臣是善、令草詔書、太政大臣從一位藤原朝臣良房奉勅、召左右撿非違使、除常赦所不免之外、大辟已下罪人咸從赦免、雖事觸强竊、而非分明者、同從赦例、是夜歲星守牽牛、○癸丑、親王公卿候東釣臺、有護夜之事、○甲寅、詔、皇天無親、惟德是輔、人心有隣、惟惠是懷、

○摩訶止觀、天台三大部の一、智者大師之を說き、十卷弟子章安之を記す、十卷あり開て二十卷とす天台宗の觀心をとける書にして、その第二・三・四の章に於て止觀の釋名、止觀の體相を釋し、止觀が一切諸法を攝持することを述ぶ
○齋會、齋は原本齊に作る前本堀本に據て改む
○受持、持は原本授に作る諸本に據て改む
○本宗義、原本本の上に大字あり諸本に據て削る
○頗有、有字は諸本に據て補ふ
○頗致俳優、漢書嚴助傳に東方朔枚皐不根持論、上頗俳優畜之とあるに出づ
○乞食袋、明匠略傳光定傳に乞食袋此人始之山上稻粒之事依大師奏聞皇帝令下給光定乞食袋ト書付給云々と見ゆ
○四年、原本傍注に四年の上に仁壽の二字あり
○四王院、天台座主記(續類從所載)に仁壽四年四月三日官牒云々今年有勅建四王院とあり釋書光定傳には嘉祥四年奉

朕以寡薄、忝臨太階、豈將巖廊爲逸、恒以億兆爲念、而人澆俗薄、誠淺僞深、故知方者尠、趣辟者繁、不能以仁義浸漉、禮讓甄陶、秋典日闓於帷幄、弊罪相係于圜室、觸網履挍、既可矜傷、宥過崇恩、彌切心慮、宜洽此愷澤、暢彼吒鬱、可大赦天下、天安二年八月廿六日昧爽以前、大辟已下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、咸從免除、但八虐、故殺、謀殺、强竊二盜、私鑄錢、常赦所不免者、不在赦限、布告遐邇、俾知朕意、是日薦藥無驗、騷動殊切、諸公卿侍殿上行事、屈名僧五十人於冷然院、令讀大般若經、限以五箇日、入夜遣諸國固關使、賜勅符木契、卽遣勅使於左右兵庫、左右馬寮、令衞固甚嚴、○(廿七)乙卯、帝崩於新成殿、左右近衞少將率近衞等、陣於東宮直曹西方、大納言安倍朝臣安仁、率少納言近衞少將主鈴等、令賷璽印櫃等、奉入直曹、公卿於藏人所、議御葬事、○(廿九)丁巳、大納言安倍朝臣安仁於左近衞陣、仰左右近衞左右兵衞、令著鎧甲、皇太子與皇后同輦、移幸於東宮、儀同行幸、但無警蹕、○(九月二日)庚申、大納言安倍朝臣安仁率陰陽權助滋岳朝臣川人、助笠朝臣名高等、至山城國葛野

郡田邑鄕眞原岳一、點二定山陵一、○(同三日)辛酉、夜月蝕、○(同四日)壬戌、始著二素服一、○(同六日)甲子、夜葬二大行皇帝於田邑山陵一、殯葬之禮、一如二仁明天皇故事一、但有二方相氏一、帝初自レ登二宸極一、垂二心政事一、性甚明察、能知二人姧一、專思二天下昇平之化一、不レ好二巡幸遊覽之事一、仁壽齊衡之間、頻得二嘉瑞一、以薦二陵廟一、至二于禁網漸密一、憲法頗峻、天下以爲二明帝察々一、官署屢聞二補替遷除之事一、吏人還懷二廢罷解散之憂一、又聖體羸病、頻廢二万機一、撫運不レ長、在レ位已短、天之降レ命、蓋有レ數歟、于レ時春秋卅有二、

レ詔建二四王院一とあり是非を決し難し
○卅七、谷本卅七に作る
○憐遇、憐は原本隣に作る諸本に據て改む
○候于陣頭、原本陣を陳に作る諸本に據て改む紀略于を於に作る
○牽牛、牽は原本率に作る諸本及紀略に據て改む
○皇天無親、此句尙書蔡仲之命に見ゆ
○將廢廊、元年二月己丑紀(一四二頁)に注せり
○人澆、原本澆を洗に作る諸本に據て改む
○趣辟者繁、辟は邪なり
○禮讓甄陶、漢書董仲舒傳夫上之化レ下下之從レ上猶二泥之在レ鈞唯甄者之所一レ爲注に甄作瓦人也とあり禮上に以字あるべきか
○秋典、禮記月令孟秋に是月也命二有司一脩二法制一繕二囹圄一具二桎梏一禁二止姦一愼罪邪云々戮二有罪一嚴二斷刑一とあり獄令にも從二立春一至二秋分一不レ得レ奏二決死刑一と見え秋典は斷獄を云
○相係于圜室、圜土に同しかるべし釋名に獄又謂二之圜土一築二其表牆一其形圜也とあり

○履掖、易噬嗑卦象傳に屨校滅趾注に校者以木絞校者也卽械也とあり字書に屨履也とあり原本掖を授に作る諸本に據て改む　○宜洽、原本洽を給に作る狩谷校本に給恐洽とあるに據て改む　○甿黌、甿は民なり　○侍殿上、侍は原本待に作る諸本に據て改む　○遣諸國問關使、淸和紀天安二年八月乙卯紀を參看すべし　○帝崩於新成殿、於字は紀略に據て補ふ　○庚申、九月二日なり此上に恐くは九月己未朔の五字を脫す　○眞原岳、三代實錄岳を岡に作る　○田邑山陵、諸陵式に田邑陵平安御宇文德天皇在山城國葛野郡今同郡太秦村中野にあり　○方相氏、喪葬令義解に方相者蒙熊皮黃金四目玄衣朱裳執矛揚盾所以導轜車者也とあり朝鮮の葬儀には今も之を用ふ　○知人姧、原本姧を奸に作る諸本及紀略に據て改む　○昇平、昇は諸本及紀略升に作る　○天下以爲明帝察々、大鏡に御心明らかに能人を知しめせりとあり

日本文德天皇實錄卷第十

昭和十五年八月二十二日印刷
昭和十五年八月二十八日發行

不許複製

増補六國史 卷八（文德實錄）

豫約頒價 金二圓

編纂者 東京市淀橋區西大久保一丁目三七三番地 佐伯有義
發行者 東京市麴町區有樂町二丁目三番地朝日新聞社 櫻木俊晃
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 小坂孟
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

發行所 東京 大阪 朝日新聞社